芥川龍之介全集

第四巻

芥川龍之介全集

第四巻

大正十四年三月頃撮影

机

第四巻目録

將軍

一　白襷隊

明治三十七年十一月二十六日の未明だつた。第×師團第×聯隊の白襷隊は、松樹山の補備砲臺を奪取する爲に、九十三高地の北麓を出發した。

路は山蔭に沿うてゐたから、隊形も今日は特別に、四列側面の行進だつた。その草もない薄闇の路に、銃身を並べた一隊の兵が、白襷ばかり仄かせながら、靜かに靴を鳴らして行くのは、悲壯な光景に違ひなかつた。現に指揮官のM大尉なぞは、この隊の先頭に立つた時から、別人のやうに口數の少い、沈んだ顏色をしてゐるのだつた。が、兵は皆思ひの外、平生の元氣を失はなかつた。それは一つには日本魂の力、二つには酒の力だつた。

少時行進を續けた後、隊は石の多い山陰から、風當りの強い河原へ出た。

「おい、後を見ろ。」

紙屋だつたと云ふ田口一等卒は、同じ中隊から選拔された、これは大工だつたと云ふ、堀尾一

等卒に話しかけた。

「みんなこつちへ敬禮してゐるぜ。」

堀尾一等卒は振り返つた。成程さう云はれて見ると、黒黒と盛り上つた高地の上には、聯隊長始め何人かの將校たちが、やや赤らんだ空を後に、この死地に向ふ一隊の士卒へ、最後の敬禮を送つてゐた。

「どうだい？　大したものぢやないか？　白襷隊になるのも名譽だな。」

「何が名譽だ？」

堀尾一等卒は苦苦しさうに、肩の上の銃を揺り上げた。

「こちとらはみんな死に行くのだぜ。して見ればあれは××××××××××××さうつて云ふのだ。こんな安上りな事はなからうぢやねえか？」

「それはいけない。そんな事を云つては×××すまない。」

「べらぼうめ！　すむもすまねえもあるものか！　酒保の酒を一合買ふのでも、敬禮だけでは賣りはしめえ。」

田口一等卒は口を噤んだ。それは酒氣さへ帶びてゐれば、皮肉な事ばかり並べたがる、相手の癖に慣れてゐるからだつた。しかし堀尾一等卒は、執拗にまだ話し續けた。

「それは敬禮で買ふとは云はねえ。やれ××××とか、やれ××××だとか、いろんな勿體をつけやがるだらう。だがそんな事は嘘つ八だ。なあ、兄弟。さうぢやねえか？」

堀尾一等卒にかう云はれたのは、これも同じ中隊にゐた、小學校の教師だつたと云ふ、おとなしい江木上等兵だつた。が、そのおとなしい上等兵が、この時だけはどう云ふ訣か、急に嚙みつきさうな權幕を見せた。さうして酒臭い相手の顔へ、惡辣な返答を拋りつけた。

「莫迦野郎！　おれたちは死ぬのが役目ぢやないか？」

　その時もう白襷隊は、河原の向うへ上つてゐた。其處には泥を塗り固めた、支那人の民家が七八軒、ひつそりと曉を迎へてゐる、――その家家の屋根の上には、石油色に襞をなぞつた、寒い茶褐色の松樹山が、目の前に迫つて見えるのだつた。隊はこの村を離れると、四列側面の隊形を解いた。のみならずいづれも武裝した儘、幾條かの交通路に腹這ひながら、じりじり敵前へ向ふ事になつた。

勿論江木上等兵も、その中に四つ這ひを續けて行つた。「酒保の酒を一合買ふのでも、敬禮だけでは賣りはしめえ。」——さう云ふ堀尾一等卒の言葉は、同時に又彼の腹の底だつた。しかし口數の少い彼は、ぢつとその考へを持ちこたへてゐた。それだけに、一層戰友の言葉は、丁度傷痕にでも觸れられたやうな、腹立たしい悲しみを與へたのだつた。彼は凍えついた交通路を、獸のやうに這ひ續けながら、戰爭と云ふ事を考へたり、死と云ふ事を考へたりした。が、さう云ふ考へからは、寸毫の光明も得られなかつた。死は××××にしても、所詮は呪ふべき怪物だつた。戰爭は、——彼は殆戰爭は、罪惡と云ふ氣さへしなかつた。罪惡は戰爭に比べると、個人の情熱に根ざしてゐるだけ、××××××出來る點があつた。しかし×××××××××××外ならなかつた。しかも彼は、——いや、彼ばかりでもない。各師團から選拔された、二千人餘りの白襷隊は、その大なる×××にも、厭でも死なければならないのだつた。……

「來た。來た。お前は何處の聯隊だ？」

江木上等兵はあたりを見た。隊は何時か松樹山の麓の、集合地へ着いてゐるのだつた。其處にはもうカアキイ服に、古めかしい襷をあやどつた、各師團の兵が集まつてゐる、——彼に聲をか

けたのも、さう云ふ連中の一人だつた。その兵は石に腰をかけながら、うつすり流れ出した朝日の光に、片頰の面皰をつぶしてゐた。

「第×聯隊だ。」

「パン聯隊だな。」

江木上等兵は暗い顏をした儘、何ともその冗談に答へなかつた。

何時間かの後、この步兵陣地の上には、もう彼我の砲彈が、凄まじい唸りを飛ばせてゐた。目の前に聳えた松樹山の山腹にも、李家屯の我海軍砲は、幾たびか黃色い土煙を揚げた。その土煙の舞ひ上る合間に、薄紫の光が迸るのも、晝だけに、一層悲壯だつた。しかし二千人の白襷隊は、かう云ふ砲擊の中に機を待ちながら、やはり平生の元氣を失はなかつた。又恐怖に挫がれない爲には、出來るだけ陽氣に振舞ふ外、仕樣のない事も事實だつた。

「べらぼうに擊ちやがるな。」

堀尾一等卒は空を見上げた。その拍子に長い叫び聲が、もう一度頭上の空氣を裂いた。彼は思はず首を縮めながら、砂埃の立つのを避ける爲か、手巾に鼻を掩つてゐた、田口一等卒に聲をか

けた。

「今のは二十八珊だぜ。」

田口一等卒は笑つて見せた。さうして相手が氣のつかないやうに、そつとポケットへ手巾ををさめた。それは彼が出征する時、馴染の藝者に貰つて來た、縁に繡のある手巾だつた。

「音が違ふな、二十八珊は。——」

田口一等卒はかう云ふと、狼狽したやうに姿勢を正した。同時に大勢の兵たちも、聲のない號令でもかかつたやうに、次から次へと立ち直り始めた。それはこの時彼等の間へ、軍司令官のN將軍が、何人かの幕僚を從へながら、嚴然と歩いて來たからだつた。

「こら、騷いではいかん。騷ぐではない。」

將軍は陣地を見渡しながら、やや銹のある聲を傳へた。

「かう云ふ狹隘な所だから、敬禮も何もせなくとも好い。お前達は何聯隊の白襷隊ぢや？」

田口一等卒は將軍の眼が、彼の顏へぢつと注がれるのを感じた。その眼は殆處女のやうに、彼をはにかませるのに足るものだつた。

「はい。歩兵第×聯隊であります。」
「さうか。大元氣にやつてくれ。」
将軍は彼の手を握つた。それから堀尾一等卒へ、じろりとその眼を轉ずると、やはり右手をさし伸べながら、もう一度同じ事を繰返した。
「お前も大元氣にやつてくれ。」
かう云はれた堀尾一等卒は、全身の筋肉が硬化したやうに、直立不動の姿勢になつた。幅の廣い肩、大きな手、頬骨の高い赭ら顔。――さう云ふ彼の特色は、少くともこの老將軍には、帝國軍人の模範らしい、好印象を與へた容子だつた。將軍は其處に立ち止まつた儘、熱心になほ話し續けた。
「今打つてゐる砲臺があるな。今夜お前たちはあの砲臺を、こつちの物にしてしまふのぢや。さうすると豫備隊は、お前たちの行つた跡から、あの界隈の砲臺をみんな手に入れてしまふのぢや。何でも一遍にあの砲臺へ、飛びつく心にならなければいかん。――」
さう云ふ内に將軍の聲には、何時か多少戲曲的な、感激の調子がはひつて來た。

「好いか？　決して途中に立ち止まつて、射撃なぞをするぢやないぞ。五尺の體を砲彈だと思つて、いきなりあれへ飛びこむのぢや、頼んだぞ。どうか、しつかりやつてくれ。」

將軍は「しつかり」の意味を傳へるやうに、堀尾一等卒の手を握つた。さうして其處を通り過ぎた。

「嬉しくもねえな。——」

堀尾一等卒は狡猾さうに、將軍の跡を見送りながら、田口一等卒へ目交せをした。

「え、おい。あんな爺さんに手を握られたのぢや。」

田口一等卒は苦笑した。それを見るとどう云ふ訣か、堀尾一等卒の心の中には、何かに濟まない氣が起つた。と同時に相手の苦笑が、面憎いやうな心もちにもなつた。其處へ江木上等兵が、突然横合ひから聲をかけた。

「どうだい、握手で×××のは？」

「いけねえ。いけねえ。人眞似をしちや。」

今度は堀尾一等卒が、苦笑せずにはゐられなかつた。

「××れると思ふから腹が立つのだ。おれは捨ててやると思つてゐる。」
江木上等兵がかう云ふと、田口一等卒も口を出した。
「さうだ。みんな御國の爲に捨てる命だ。」
「おれは何の爲だか知らないが、唯捨ててやるつもりなのだ。××××××でも向けられて見ろ。何でも持つて行けと云ふ氣になるだらう。」
江木上等兵の眉の間には、薄暗い興奮が動いてゐた。
「丁度あんな心もちだ。强盜は金さへ卷き上げれば、×××××云ひはしまい。が、おれたちはどつち道死ぬのだ。××××××××××××××たのだ。どうせ死なずにすまないのなら、綺麗に×××やつた方が好いぢやないか？」
かう云ふ言葉を聞いてゐる内に、まだ酒氣が消えてゐない、堀尾一等卒の眼の中には、この溫厚な戰友に對する、侮蔑の光が加はつて來た。「何だ、命を捨てる位？」——彼は内心さう思ひながら、うつとり空へ眼をあげた。さうして今夜は人後に落ちず、將軍の握手に報いる爲、肉彈にならうと決心した。……

その夜の八時何分か過ぎ、手擲彈に中つた江木上等兵は、全身黑焦になつた儘、松樹山の山腹に倒れてゐた。其處へ白襷の兵が一人、何か切れ切れに叫びながら、鐵條網の中を走つて來た。彼は戰友の屍骸を見ると、その胸に片足かけるが早いか、突然大聲に笑ひ出した。大聲に、――實際その哄笑の聲は、烈しい敵味方の銃火の中に、氣味の惡い反響を喚び起した。

「萬歲！　日本萬歲！　惡魔降伏。怨敵退散。第×聯隊萬歲！　萬歲！　萬萬歲！」

彼は片手に銃を振り振り、彼の目の前に闇を破つた、手擲彈の爆發にも頓着せず、續けざまにかう絕叫してゐた。その光に透かして見れば、これは頭部銃創の爲に、突擊の最中發狂したらしい、堀尾一等卒その人だつた。

二　間牒

明治三十八年三月五日の午前、當時全勝集に駐屯してゐた、A騎兵旅團の參謀は、薄暗い司令部の一室に、二人の支那人を取り調べて居た。彼等は間牒の嫌疑の爲、臨時この旅團に加はつてゐた、第×聯隊の步哨の一人に、今し方捉へられて來たのだつた。

この棟の低い支那家の中には、勿論今日も坎の火つ氣が、快い溫みを漂はせてゐた。が、物悲しい戰爭の空氣は、敷瓦に觸れる拍車の音にも、卓の上に脫いだ外套の色にも、至る所に窺はれるのであつた。殊に紅唐紙の聯を貼つた、埃臭い白壁の上に、束髮に結つた藝者の寫眞が、ちやんと鋲で止めてあるのは、滑稽でもあれば悲慘でもあつた。

其處には旅團參謀の外にも、副官が一人、通譯が一人、二人の支那人を圍んでゐた。支那人は通譯の質問通り、何でも明瞭に返事をした。のみならずやや年嵩らしい、顏に短い髯のある男は、通譯がまだ尋ねない事さへ、進んで說明する風があつた。が、その答辯は參謀の心に、明瞭ならば明瞭なだけ、一層彼等を間諜にしたい、反感に似たものを與へるらしかつた。

「おい步兵！」

旅團參謀は鼻聲に、この支那人を捉へて來た、戶口にゐる步哨を喚びかけた。步兵、——それは白襷隊に加はつてゐた、田口一等卒に外ならなかつた。——彼は戶の卍字格子を後に、藝者の寫眞へ目をやつてゐたが、參謀の聲に驚かされると、思ひ切り大きい答をした。

「はい。」

「お前だな、こいつらを掴まへたのは？　掴まへた時どんなだつたか？」

人の好い田口一等卒は、朗讀的にしやべり出した。

「私が歩哨に立つてゐたのは、この村の土塀の北端、奉天に通ずる街道であります。その支那人は二人とも、奉天の方向から歩いて來ました。すると木の上の中隊長が、——」

「何、木の上の中隊長？」

參謀はちよいと目蓋を擧げた。

「はい。中隊長は展望の爲、木の上に登つてゐられたのであります。——その中隊長が木の上から、掴まへろと私に命令されました。」

「所が私が捉へようとすると、そちらの男が、——はい。その髯のない男であります。その男が急に逃げようとしました。……」

「それだけか？」

「はい。それだけであります。」

「よし。」

旅團參謀は血肥りの顏に、多少の失望を浮べた儘、通譯に質問の意を傳へた。通譯は退屈を露さない爲、わざと聲に力を入れた。

「間諜でなければ何故逃げたか？」

「それは逃げるのが當然です。何しろいきなり日本兵が、躍りかかつてきたのですから。」

もう一人の支那人、――鴉片の中毒に罹つてゐるらしい、鉛色の皮膚をした男は、少しも怯まずに返答した。

「しかしお前たちが通つて來たのは、今にも戰場になる街道ぢやないか？　良民ならば用もないのに、――」

支那語の出來る副官は、血色の悪い支那人の顏へ、ちらりと意地の悪い眼を送つた。

「いや、用はあるのです。今も申し上げた通り、私たちは新民屯へ、紙幣を取り換へに出かけて來たのです。御覽下さい。此處に紙幣もあります。」

髯のある男は平然と、將校たちの顏を眺め廻した。參謀はちよいと鼻を鳴らした。彼は副官のたじろいだのが、内心好い氣味に思はれたのだ。……

「紙幣を取り換へる？　命がけでか？」

副官は負惜みの冷笑を洩らした。

「兎に角裸にして見よう。」

參謀の言葉が通譯されると、彼等はやはり惡びれずに、早速赤裸になつて見せた。

「まだ腹卷をしてゐるぢやないか？　それをこつちへとつて見せろ。」

通譯が腹卷を受けとる時、その白木綿に體溫のあるのが、何だか不潔に感じられた。腹卷の中には三寸ばかりの、太い針がはひつてゐた。旅團參謀は窓明りに、何度もその針を檢べて見た。が、それも平たい頭に、梅花の模樣がついてゐる外、何も變つた所はなかつた。

「何か、これは？」

「私は鍼醫です。」

髯のある男はためらはずに、悠然と參謀の問に答へた。

「次手に靴も脫いで見ろ。」

彼等は殆無表情に、隱すべき所も隱さうとせず、檢査の結果を眺めてゐた。が、ズボンや上

着は勿論、靴や靴下を檢べて見ても、證據になる品は見當らなかつた。この上は靴を壞して見るより外はない。――さう思つた副官は、參謀にその旨を話さうとした。

その時突然次の部屋から、軍司令官を先頭に、軍司令部の幕僚や、旅團長などがはひつて來た。將軍は副官や軍參謀と、丁度何かの打ち合せの爲、旅團長を尋ねて來てゐたのだつた。

「露探か？」

將軍はかう尋ねた儘、支那人の前に足を止めた。さうして彼等の裸姿へ、ぢつと鋭い眼を注いだ。後に或亞米利加人が、この有名な將軍の眼には、Monomania じみた所があると、無遠慮な批評を下した事がある。――そのモノメニアックな眼の色が、殊にかう云ふ場合には、氣味の惡い輝きを加へるのだつた。

旅團參謀は將軍に、ざつと事件の顚末を話した。が、將軍は思ひ出したやうに、時時頷いて見せるばかりだつた。

「この上はもうぶん擲つてでも、白狀させる外はないのですが、――」

參謀がかう云ひかけた時、將軍は地圖を持つた手に、床の上にある支那靴を指した。

「あの靴を壞して見給へ。」

靴は見る見る底をまくられた。すると其處に縫ひこまれた、四五枚の地圖と祕密書類が、忽ちばらばらと床の上に落ちた。二人の支那人はそれを見ると、さすがに顏の色を失つてしまつた。が、やはり押し默つた儘、剛情に敷瓦を見つめてゐた。

「そんな事だらうと思つてゐた。」

將軍は旅團長を顧みながら、得意さうに微笑を洩した。

「しかし靴とは又考へたものですね。——おい、もうその連中には着物を着せてやれ。——こんな間諜は始めてです。」

「軍司令官閣下の烱眼には驚きました。」

旅團副官は旅團長へ、間諜の證據品を渡しながら、愛嬌の好い笑顏を見せた。——恰も靴に目をつけたのは、將軍よりも彼自身が、先だつた事も忘れたやうに。

「だが裸にしてもないとすれば、靴より外に隱せないぢやないか？」

將軍はまだ上機嫌だつた。

「わしはすぐに靴と睨んだ。」
「どうもこの邊の住民はいけません。我我が此處へ來た時も、日の丸の旗を出したですが、その癖家の中を檢べて見れば、大抵露西亞の旗を持つてゐるのです。」
旅團長も何か浮き浮きしてゐた。
「つまり奸佞邪智なのぢやね。」
「さうです。煮ても燒いても食へないのです。」
こんな會話が續いてゐる內、旅團參謀はまだ通譯と、二人の支那人を檢べてゐた。それが急に田口一等卒へ、機嫌の惡い顏を向けると、吐き出すやうにかう命じた。
「おい步兵！この間諜はお前が摑まへて來たのだから、次手にお前が殺して來い。」
二十分の後、村の南端の路ばたには、この二人の支那人が、互に辮髮を結ばれた儘、枯柳の根がたに坐つてゐた。
田口一等卒は銃劍をつけると、まづ辮髮を解き放した。それから銃を構へた儘、年下の男の後に立つた。が、彼等を突殺す前に、殺すと云ふ事だけは告げたいと思つた。

「儞、――」

彼はさう云つて見たが、「殺す」と云ふ支那語を知らなかつた。

「儞、殺すぞ！」

二人の支那人は云ひ合せたやうに、じろりと彼を振り返つた。しかし驚いたけはひも見せず、それぎり別別の方角へ、何度も叩頭を續け出した。「故鄉へ別れを告げてゐるのだ。」――田口一等卒は身構へながら、かうその叩頭を解釋した。

叩頭が一通り濟んでしまふと、彼等は覺悟をきめたやうに、冷然と首をさし伸した。田口一等卒は銃をかざした。が、神妙な彼等を見ると、どうしても銃劍が突き刺せなかつた。

「儞、殺すぞ！」

彼はやむを得ず繰返した。するとそこへ村の方から、馬に跨つた騎兵が一人、蹄に砂埃を卷き揚げて來た。

「步兵！」

騎兵は――近づいたのを見れば曹長だつた。それが二人の支那人を見ると、馬の步みを緩めな

がら、傲然と彼に聲をかけた。

「露探か？　露探だらう。おれにも、一人斬らせてくれ。」

田口一等卒は苦笑した。

「何、二人とも上げます。」

「さうか？　それは氣前が好いな。」

騎兵は身輕に馬を下りた。さうして支那人の後にまはると、腰の日本刀を拔き放した。その時又村の方から、勇しい馬蹄の響と共に、三人の將校が近づいて來た。騎兵はそれに頓着せず、まつ向に刀を振り上げた。が、まだその刀を下さない內に、三人の將校は悠悠と、彼等の側へ通りかかつた。軍司令官！　騎兵は田口一等卒と一しよに、馬上の將軍を見上げながら、正しい擧手の禮をした。

「露探だな。」

將軍の眼には一瞬間、モノマニアの光が輝いた。

「斬れ！　斬れ！」

騎兵は言下に刀をかざすと、一打に若い支那人を斬つた。支那人の頭は躍るやうに、枯柳の根もとに轉げ落ちた。血は見る見る黄ばんだ土に、大きい斑點を擴げ出した。

「よし。見事だ。」

將軍は愉快さうに頷きながら、それなり馬を歩ませて行つた。

騎兵は將軍を見送ると、血に染んだ刀を提げた儘、もう一人の支那人の後に立つた。その態度は將軍以上に、殺戮を喜ぶ氣色があつた。「この×××らばおれにも殺せる。」——田口一等卒はさう思ひながら、枯柳の根もとに腰を下した。騎兵は又刀を振り上げた。が、髯のある支那人は、默然と首を伸ばしたぎり、睫毛一つ動かさなかつた。……

將軍に從つた軍參謀の一人、——穗積中佐は鞍の上に、春寒の曠野を眺めて行つた。が、遠い枯木立や、路ばたに倒れた石敢當も、中佐の眼には映らなかつた。それは彼の頭には、一時愛讀したスタンダアルの言葉が、絶えず漂つて來るからだつた。

「私は勳章に埋つた人間を見ると、あれだけの勳章を手に入れるには、どの位××な事ばかりしたか、それが氣になつて仕方がない。……」

――ふと氣がつけば彼の馬は、ずつと將軍に遲れてゐた。中佐は輕い身震をすると、すぐに馬を急がせ出した。丁度當り出した薄日の光に、飾緒の金をきらめかせながら。

三　陣中の芝居

明治三十八年五月四日の午後、阿吉牛堡に駐つてゐた、第×軍司令部では、午前に招魂祭を行つた後、餘興の演藝會を催す事になつた。會場は支那の村落に多い、野天の戯臺を應用した、急拵の舞臺の前に、天幕を張り渡したに過ぎなかつた。が、その蓆敷の會場には、もう一時の定刻前に、大勢の兵卒が集つてゐた。この薄汚いカアキイ服に、銃劍を下げた兵卒の群は、殆看客と呼ぶのさへも、皮肉な感じを起させる程、みじめな看客に違ひなかつた。が、それだけ又彼等の顏に、晴れ晴れした微笑が漂つてゐるのは、一層可憐な氣がするのだつた。

將軍を始め軍司令部や、兵站監部の將校たちは、外國の從軍武官たちと、その後の小高い土地に、ずらりと椅子を並べてゐた。此處には參謀肩章だの、副官の襷だのが見えるだけでも、一般兵卒の看客席より、遙かに空氣が花やかだつた。殊に外國の從軍武官は、愚物の名の高い一人で

さへも、この花やかさを扶ける爲には、軍司令官以上の效果があつた。——將軍は今日も上機嫌だつた。何か副官の一人と話しながら、時時番付を開いて見てゐる、その眼にも始終日光のやうに、人懷こい微笑が浮んでゐた。

その内に定刻の一時になつた。櫻の花や日の出をとり合せた、手際の好い幕の後では、何度か鳴りの惡い拍子木が響いた。と思ふとその幕は、餘興掛の少尉の手に、するすると一方へ引かれて行つた。

舞臺は日本の室内だつた。それが米屋の店だと云ふ事は、一隅に積まれた米俵が、僅かに暗示を與へてゐた。其處へ前垂掛けの米屋の主人が、「お鍋や、お鍋や」と手を打ちながら、彼自身よりも脊の高い、銀杏返しの下女を呼び出して來た。それから、——筋は話すにも足りない、一場の俄が始まつた。

舞臺の惡ふざけが加はる度に、蓆敷の上の看客からは、何度も笑聲が立ち昇つた。いや、その後の將校たちも、大部分は笑を浮べてゐた。が、俄はその笑と競ふやうに、益滑稽を重ねて行つた。さうしてとうとうしまひには、越中褌一つの主人が、赤い湯もじ一つの下女と相撲をと

り始める所になつた。

笑聲は更に高まつた。兵站監部の或大尉なぞは、この滑稽を迎へる爲、殆拍手さへしようとした。丁度その途端だつた。突然烈しい叱咤の聲は、湧き返つてゐる笑の上へ、鞭を加へるやうに響き渡つた。

「何だ、その醜態は？　幕を引け！　幕を！」

聲の主は將軍だつた。將軍は太い軍刀の欛に、手袋の兩手を重ねた儘、嚴然と舞臺を睨んで居た。

幕引きの少尉は命令通り、呆氣にとられた役者たちの前へ、倉皇とさつきの幕を引いた。同時に蓆敷の看客も、かすかなどよめきの聲の外は、ひつそりと靜まり返つてしまつた。

外國の從軍武官たちと、一つ席にゐた穗積中佐は、この沈默を氣の毒に思つた。俄は勿論彼の顏には、微笑さへも浮ばせなかつた。しかし彼は看客の興味に、同情を持つだけの餘裕はあつた。では外國武官たちに、裸の相撲を見せても好いか？――さう云ふ體面を重ずるには、何年か歐洲に留學した彼は、餘りに外國人を知り過ぎてゐた。

「どうしたのですか？」

佛蘭西の將校は驚いたやうに、穗積中佐をふりかへつた。

「將軍が中止を命じたのです。」

「なぜ？」

「下品ですから、——將軍は下品な事は嫌ひなのです。」

さう云ふ内にもう一度、舞臺の拍子木が鳴り始めた。靜まり返つてゐた兵卒たちは、この音に元氣を取り直したのか、其處此處から拍手を送り出した。穗積中佐もほつとしながら、彼の周圍を眺め廻した。周圍にゐ並んだ將校たちは、いづれも幾分か氣兼さうに、舞臺を見たり見なかつたりしてゐる、——その中にたつた一人、やはり軍刀へ手をのせた儘、丁度幕の開き出した舞臺へ、ぢつと眼を注いでゐた。

次の幕は前と反對に、人情がかつた舊劇だつた。舞臺には唯屏風の外に、火のともつた行燈が置いてあつた。其處に顴骨の高い年增が一人、猪首の町人と酒を飲んでゐた。年增は時時金切聲に、「若旦那」と相手の町人を呼んだ。さうして、——穗積中佐は舞臺を見ずに、彼自身の記憶に浸

り出した。柳盛座の二階の手すりには、十二三の少年が倚りかかつてゐる。舞臺には櫻の釣り枝がある。火影の多い町の書割がある。その中に二錢の團洲と呼ばれた、和光の不破伴左衛門が、編笠を片手に見得をしてゐる。少年は舞臺に見入つた儘、殆息さへもつかうとしない。彼にもそんな時代があつた。……

「餘興やめ！　幕を引かんか？　幕！　幕！」

將軍の聲は爆彈のやうに、中佐の追憶を打ち碎いた。中佐は舞臺へ眼を返した。舞臺には既に狼狽した少尉が、幕と共に走つてゐた。その間にちらりと屏風の上へ、男女の帶の懸かつてゐるのが見えた。

中佐は思はず苦笑した。「餘興掛も氣が利かなすぎる。男女の相撲さへ禁じてゐる將軍が、濡れ場を默つて見てゐる筈がない。」――そんな事を考へながら、叱聲の起つた席を見ると、將軍はまだ不機嫌さうに、餘興掛の一等主計と、何か問答を重ねてゐた。

その時ふと中佐の耳は、口の惡い亞米利加の武官が、隣に坐つた佛蘭西の武官へ、かう話しかける聲を捉へた。

「將軍Nも樂ぢやない。軍司令官兼檢閲官だから、――」

やつと三幕目が始まつたのは、それから十分の後だつた。今度は木がはひつても、兵卒たちは拍手を送らなかつた。

「可哀さうに。監視されながら、芝居を見てゐるやうだ。」――穗積中佐は憐むやうに、殆大きな話聲も立てない、カアキイ服の群を見渡した。

三幕目の舞臺は黑幕の前に、柳の木が二三本立ててあつた。それは何處から伐つて來たか、生生しい實際の葉柳だつた。其處に警部らしい髯だらけの男が、年の若い巡査をいぢめてゐた。穗積中佐は番附の上へ、不審さうに眼を落した。すると番附には「ピストル强盗淸水定吉、大川端捕物の場」と書いてあつた。

年の若い巡査は警部が去ると、大仰に天を仰ぎながら、長長と浩歎の獨白を述べた。何でもその意味は長い間、ピストル强盗をつけ廻してゐるが、逮捕出來ないとか云ふのだつた。それから人影でも認めたのか、彼は相手に見つからない爲、一まづ大川の水の中へ姿を隱さうと決心した。さうして後の黑幕の外へ、頭からさきに這ひこんでしまつた。その恰好は贔屓眼に見ても、大川

の水へ沒するよりは、蚊帳へはひるのに適當してゐた。

空虛の舞臺には少時の間、波の音を思はせるらしい、大太鼓の音がするだけだつた。と、忽ち一方から、盲人が一人歩いて來た。盲人は杖をつき立てながら、その儘向うへはひらうとする、——その途端に黑幕の外から、さつきの巡査が飛び出して來た。「ピストル强盜、淸水定吉、御用だ！」——彼はさう叫ぶが早いか、いきなり盲人へ躍りかかつた。盲人は咄嗟に身構へをした。と思ふと眼がぱつちりあいた。「憾むらくは眼が小さ過ぎる。」——中佐は微笑を浮べながら、內心大人氣ない批評を下した。

舞臺では立ち廻りが始まつてゐた。ピストル强盜は渾名通り、ちやんとピストルを用意してゐた。二發、三發、——ピストルは續けさまに火を吐いた。しかし巡査は勇敢に、とうとう僞目くらに繩をかけた。兵卒たちはさすがにどよめいた。が、彼等の間からは、やはり聲一つかからなかつた。

中佐は將軍へ眼をやつた。將軍は今度も熱心に、ぢつと舞臺を眺めてゐた。しかしその顏は以前よりも、遙かに柔しみを湛へてゐた。

其處へ舞臺には一方から、署長とその部下とが駈けつけて來た。が、僞目くらと格闘中、ピストルの彈丸に中つた巡査は、もう昏昏と倒れてゐた。署長はすぐに活を入れた。その間に部下はいち早く、ピストル強盗の繩尻を捉へた。その後は署長と巡査との、舊劇めいた愁歎場になつた。署長は昔の名奉行のやうに、何か云ひ遺す事はないかと云ふ。巡査は故鄕に母がある、と云ふ。署長は又母の事は心配するな。何かその外にも末期の際に、心遺りはないかと云ふ。巡査は何も云ふ事はない、ピストル強盗を捉へたのは、この上もない滿足だと云ふ。

――その時ひつそりした場内に、三度將軍の聲が響いた。が、今度は叱聲の代りに、深い感激の嘆聲だつた。

「偉い奴ぢや。それでこそ日本男兒ぢや。」

穗積中佐はもう一度、そつと將軍へ眼を注いだ。すると日に燒けた將軍の頰には、淚の痕が光つてゐた。「將軍は善人だ。」――中佐は輕い侮蔑の中に、明るい好意をも感じ出した。

その時幕は悠悠と、盛んな喝采を浴びながら、舞臺の前に引かれて行つた。穗積中佐はその機會に、ひとり椅子から立ち上ると、會場の外へ步み去つた。

ゐた。
三十分の後、中佐は紙巻を啣へながら、やはり同參謀の中村少佐と、村はづれの空地を歩いてゐた。
「第×師團の餘興は大成功だね。N閣下は非常に喜んでゐられた。」
中村少佐はかう云ふ間も、カイゼル髭の端をひねつてゐた。
「第×師團の餘興？　ああ、あのピストル强盜か？」
「ピストル强盜ばかりぢやない。閣下はあれから餘興掛を呼んで、もう一幕臨時にやれと云はれた。今度は赤垣源藏だつたがね。何と云ふのかな、あれは？　德利の別れか？」
穗積中佐は微笑した眼に、廣い野原を眺めまはした。もう高粱の靑んだ土には、かすかに陽炎が動いてゐた。
「それも亦大成功さ。――」
中村少佐は話し續けた。
「閣下は今夜も七時から、第×師團の餘興掛に、寄席的な事をやらせるさうだぜ。」
「寄席的？　落語でもやらせるのかね？」

「何、講談ださうだ。水戸黄門諸國めぐり――」

穗積中佐は苦笑した。が、相手は無頓着に、元氣のよい口調を續けて行つた。

「閣下は水戸黄門が好きなのださうだ。わしは人臣としては、水戸黄門と加藤清正とに、最も敬意を拂つてゐる。――そんな事を云つてゐられた。」

穗積中佐は返事をせずに、頭の上の空を見上げた。空には柳の枝の間に、細い雲母雲が吹かれてゐた。中佐はほつと息を吐いた。

「春だね、いくら滿洲でも。」

「內地はもう袷を着てゐるだらう。」

中村少佐は東京を思つた。料理の上手な細君を思つた。小學校へ行つてゐる子供を思つた。さうして――かすかに憂鬱になつた。

「向うに杏が咲いてゐる。」

穗積中佐は嬉しさうに、遠い土塀に簇つた、赤い花の塊りを指した。Ecoute-moi, Madeline…

……――中佐の心には何時の間にか、ユウゴオの歌が浮んでゐた。

四　父と子と

大正七年十月の或夜、中村少將、――當時の軍參謀中村少佐は、西洋風の應接室に、火のついたハヴァナを啣へながら、ぼんやり安樂椅子によりかかつてゐた。

二十年餘りの閑日月は、少將を愛すべき老人にしてゐた。殊に今夜は和服のせゐか、禿げ上つた額のあたりや、肉のたるんだ口のまはりには、一層好人物じみた氣色があつた。少將は椅子の背に凭れた儘、ゆつくり周圍を眺め廻した。それから、――急にため息を洩らした。

室の壁には何處を見ても、西洋の畫の複製らしい、寫眞版の額が懸けてあつた。その或物は窓に倚つた、寂しい少女の肖像だつた。又或物は糸杉の間に、太陽の見える風景だつた。それらは皆電燈の光に、この古めかしい應接室へ、何か妙に薄ら寒い、嚴肅な空氣を與へてゐた。が、その空氣はどう云ふ訣か、少將には愉快でないらしかつた。

無言の何分かが過ぎ去つた後、突然少將は室外に、かすかなノックの音を聞いた。

「おはひり。」

その聲と同時に室の中へは、大學の制服を着た青年が一人、脊の高い姿を現した。青年は少將の前に立つと、其處にあつた椅子に手をやりながら、ぶつきらぼうにから云つた。

「何か御用ですか？　お父さん。」

「うん。まあ、其處におかけ。」

青年は素直に腰を下した。

「何です？」

少將は返事をする爲に、青年の胸の金鈕へ、不審らしい眼をやつた。

「今日は？」

「今日は河合の——お父さんは御存知ないでせう。——僕と同じ文科の學生です。——河合の追悼會があつたものですから、今歸つたばかりなのです。」

少將はちよいと頷いた後、濃いハヴァナの煙を吐いた。それからやつと大儀さうに、肝腎の用向きを話し始めた。

「この壁にある畫だね、これはお前が懸け換へたのかい？」

「ええ、まだ申し上げませんでしたが、今朝僕が懸け換へたのです。いけませんか？」
「いけなくはない。いけなくはないがね、N閣下の額だけは懸けて置きたい、と思ふ。」
「この中へですか？」
青年は思はず微笑した。
「この中へ懸けてはいけないかね？」
「いけないと云ふ事もありませんが、——しかしそれは可笑しいでせう。」
「肖像畫はあすこにもあるやうぢやないか？」
少將は爐の上の壁を指した。その壁には額縁の中に、五十何歳かのレムブラントが、悠悠と少將を見下してゐた。
「あれは別です。N將軍と一しよにはなりません。」
「さうか？　ぢや仕方がない。」
少將は容易に斷念した。が、又葉卷の煙を吐きながら、靜かにかう話を續けた。
「お前は、——と云ふよりもお前の年輩のものは、閣下をどう思つてゐるね？」

「別にどうも思つてはゐません。まあ、偉い軍人でせう。」
青年は老いた父の眼に、晩酌の醉を感じてゐた。
「それは偉い軍人だがね、閣下は又實に長者らしい、人懷こい性格も持つてゐられた。……」
少將は殆、感傷的に、將軍の逸話を話し出した。それは日露戰役後、少將が那須野の別莊に、將軍を訪れた時の事だつた。其の日別莊へ行つて見ると、將軍夫妻は今し方、裏山へ散歩にお出かけになつた、――さう云ふ別莊番の話だつた。少將は案內を知つてゐたから、早速裏山へ出かける事にした。すると二三町行つた所に、綿服を纏つた將軍が、夫人と一しよに佇んでゐた。少將はこの老夫妻と、少時の間立ち話をした。が、將軍は何時までたつても、其處を立ち去らうとしなかつた。「何か此處に用でもおありですか？」――かう少將が尋ねると、將軍は急に笑ひ出した。「實はね、今妻が憚りへ行きたいと云ふものだから、わしたちについて來た學生たちが、場所を探しに行つてくれた所ぢや。」丁度今頃、――もう路ばたに毬栗などが、轉がつてゐる時分だつた。
少將は眼を細くした儘、嬉しさうに獨り微笑した。――其處へ色づいた林の中から、勢の好い

中學生が、四五人同時に飛び出して來た。彼等は少將に頓着せず、將軍夫妻をとり圍むと、口口に彼等が夫人の爲に、見つけて來た場所を報告した。その上それぞれ自分の場所へ、夫人に來て貰ふやうに、無邪氣な競爭さへ始めるのだつた。「ぢやあなた方に籤を引いて貰はう。」――將軍はかう云つてから、もう一度少將に笑顏を見せた。……

「それは罪のない話ですね。だが西洋人には聞かされないな。」

青年も笑はずにはゐられなかつた。

「まあそんな調子でね、十二三の中學生でも、N閣下と云ひさへすれば、叔父さんのやうに懷いてゐたものだ。閣下はお前がたの思ふやうに、決して一介の武弁ぢやない。」

少將は樂しさうに話し終ると、又爐の上のレムブラントを眺めた。

「あれもやはり人格者かい？」

「ええ、偉い畫描きです。」

「N閣下などとはどうだらう？」

青年の顏には當惑の色が浮んだ。

「どうと云つても困りますが、——まあ、N將軍などよりも、僕等に近い氣もちのある人です。」

「閣下のお前がたに遠いと云ふのは？」

「何と云へば好いですか？——まあ、こんな點ですね、たとへば今日追悼會のあつた、河合と云ふ男などは、やはり自殺してゐるのです。が、自殺する前に——」

青年は眞面目に父の顏を見た。

「寫眞をとる餘裕はなかつたやうです。」

今度は機嫌の好い少將の眼に、ちらりと當惑の色が浮んだ。

「寫眞をとつても好いぢやないか？　最後の記念と云ふ意味もあるし、——」

「誰の爲にですか？」

「誰と云ふ事もないが、——我我始めN閣下の最後の顏は見たいぢやないか？」

「それは少くともN將軍は、考ふべき事ではないと思ふのです。僕は將軍の自殺した氣もちは、幾分かわかるやうな氣がします。しかし寫眞をとつたのはわかりません。まさか死後その寫眞が、何處の店頭にも飾られる事を、——」

少將は殆、憤然と、青年の言葉を遮つた。

「それは酷だ。閣下はそんな俗人ぢやない。徹頭徹尾至誠の人だ。」

しかし青年は不相變、顏色も聲も落着いてゐた。

「無論俗人ぢやなかつたでせう。至誠の人だつた事も想像出來ます。唯その至誠が僕等には、どうもはつきりのみこめないのです。僕等より後の人間には、猶更通じるとは思はれません。……」

父と子とは少時の間、氣まづい沈默を續けてゐた。

「時代の違ひだね。」

少將はやつとつけ加へた。

「ええ、まあ、——」

青年はかう云ひかけたなり、ちよいと窓の外のけはひに、耳を傾けるやうな眼つきになつた。

「雨ですね。お父さん。」

「雨？」

少將は足を伸ばした儘、嬉しさうに話頭を轉換した。

「又榲桲が落ちなければ好いが、……」

（大正十年十二月）

神神の微笑

或春の夕、Padre Organtino はたつた一人、長いアビト(法衣)の裾を引きながら、南蠻寺の庭を歩いてゐた。

庭には松や檜の間に、薔薇だの、橄欖だの、月桂だの、西洋の植物が植ゑてあつた。殊に咲き始めた薔薇の花は、木木を幽かにする夕明りの中に、薄甘い匂を漂はせてゐた。それはこの庭の靜寂に、何か日本とは思はれない、不可思議な魅力を添へるやうだつた。

オルガンティノは寂しさうに、砂の赤い小徑を步きながら、ぼんやり追憶に耽つてゐた。羅馬の大本山、リスポアの港、羅面琴の音、巴旦杏の味、「御主、わがアニマ(靈魂)の鏡」の歌——さう云ふ思ひ出は何時の間にか、この紅毛の沙門の心へ、懷鄕の悲しみを運んで來た。彼はその悲しみを拂ふ爲に、そつと泥烏須(神)の御名を唱へた。が、悲しみは消えないばかりか、前よりは一層彼の胸へ、重苦しい空氣を擴げ出した。

「この國の風景は美しい。──」

オルガンテイノは反省した。

「この國の風景は美しい。氣候もまづ溫和である。土人は、──あの黃面の小人よりも、まだしも黑ん坊がましかも知れない。しかしこれも大體の氣質は、親しみ易い處がある。のみならず信徒も近頃では、何萬かを數へる程になつた。現にこの首府のまん中にも、かう云ふ寺院が聳えてゐる。して見れば此處に住んでゐるのは、たとひ愉快ではないにしても、不快にはならない筈ではないか？　が、自分はどうかすると、憂鬱の底に沈む事がある。リスポアの市へ歸りたい、この國を去りたいと思ふ事がある。これは懷鄕の悲しみだけであらうか？　いや、自分はリスポアでなくとも、この國を去る事が出來さへすれば、どんな土地へでも行きたいと思ふ。支那でも、沙室でも、印度でも、──つまり懷鄕の悲しみは、自分の憂鬱の全部ではない。自分は唯この國から、一日も早く逃れたい氣がする。しかし──しかしこの國の風景は美しい。氣候もまづ溫和である。……」

オルガンテイノは吐息をした。この時偶然彼の眼は、點點と木かげの苔に落ちた、仄白い櫻の

花を捉へた。櫻！　オルガンティノは驚いたやうに、薄暗い木立ちの間を見つめた。其處には四五本の棕櫚の中に、枝を垂らした糸櫻が一本、夢のやうに花を煙らせてゐた。

「御主守らせ給へ！」

　オルガンティノは一瞬間、降魔の十字を切らうとした。實際その瞬間彼の眼には、この夕闇に咲いた枝垂櫻が、それ程無氣味に見えたのだつた。無氣味に、――と云ふよりも寧ろこの櫻が、何故か彼を不安にする、日本そのもののやうに見えたのだつた。が、彼は刹那の後、それが不思議でも何でもない、唯の櫻だつた事を發見すると、恥しさうに苦笑しながら、靜かに又もと來た小徑へ、力のない歩みを返して行つた。

×

　三十分の後、彼は南蠻寺の内陣に、泥烏須へ祈禱を捧げてゐた。其處には唯圓天井から吊るされたランプがあるだけだつた。そのランプの光の中に、内陣を圍んだフレスコの壁には、サン・ミグエルが地獄の惡魔と、モオゼの屍骸を爭つてゐた。が、勇ましい大天使は勿論、吼り立つた

悪魔さへも、今夜は朧げな光の加減か、妙にふだんよりは優美に見えた。それは又事によると、祭壇の前に捧げられた、水水しい薔薇や金雀花が、匂つてゐるせゐかも知れなかつた。彼はその祭壇の後に、ぢつと頭を垂れた儘、熱心にかう云ふ祈禱を凝らした。

「南無大慈大悲の泥烏須如來！　私はリスポアを船出した時から、一命はあなたに奉つて居ります。ですから、どんな難儀に遇つても、十字架の御威光を輝かせる爲には、一歩も怯まずに進んで參りました。これは勿論私一人の、能くする所ではございません。皆天地の御主、あなたの御惠でございます。が、この日本に住んでゐる内に、私はおひおひ私の使命が、どの位難いかを知り始めました。この國には山にも森にも、或は家家の並んだ町にも、何か不思議な力が潜んで居ります。さうしてそれが冥冥の中に、私の使命を妨げて居ります。さもなければ私はこの頃のやうに、何の理由もない憂鬱の底へ、沈んでしまふ筈はございますまい。ではその力とは何であるか、それは私にはわかりません。が、兎に角その力は、丁度地下の泉のやうに、この國全體へ行き渡つて居ります。まづこの力を破らなければ、おお、南無大慈大悲の泥烏須如來！　邪宗に惑溺した日本人は波羅葦僧（天界）の莊嚴を拜する事も、永久にないかも存じません。私はその爲

にこの何日か、煩悶に煩悶を重ねて參りました。どうかあなたの下部、オルガンティノに、勇氣と忍耐とを御授け下さい。――」

その時ふとオルガンティノは、鷄の鳴き聲を聞いたやうに思つた。が、それには注意もせず、更にかう祈禱の言葉を續けた。

「私は使命を果す爲には、この國の山川に潜んでゐる力と、――多分は人間に見えない靈と、戰はなければなりません。あなたは昔紅海の底に、埃及の軍勢を御沈めになりました。この國の靈の力強い事は、埃及の軍勢に劣りますまい。どうか古の豫言者のやうに、私もこの靈との戰に、……………」

祈禱の言葉は何時の間にか、彼の脣から消えてしまつた。今度は突然祭壇のあたりに、けたたましい鷄鳴が聞えたのだつた。オルガンティノは不審さうに、彼の周圍を眺めまはした。すると彼の眞後には、白白と尾を垂れた鷄が一羽、祭壇の上に胸を張つた儘、もう一度、夜でも明けたやうに鬨をつくつてゐるではないか？

オルガンティノは飛び上るが早いか、アビトの兩腕を擴げながら、倉皇とこの鳥を逐ひ出さう

とした。が、二足三足踏み出したと思ふと、「御主」と、切れ切れに叫んだなり、茫然と其處へ立ちすくんでしまつた。この薄暗い内陣の中には、何時何處からはひつて來たか、無數の鷄が充滿してゐる、――それが或は空を飛んだり、或は其處此處を駈けまはつたり、殆ど彼の眼に見える限りは、鷄冠の海にしてゐるのだつた。

「御主、守らせ給へ！」

彼は又十字を切らうとした。が、彼の手は不思議にも、萬力か何かに挾まれたやうに、一寸とは自由に動かなかつた。その内にだんだん内陣の中には、榾火の明りに似た赤光が、何處からとも知れず流れ出した。オルガンテイノは喘ぎ喘ぎ、この光がさし始めると同時に、朦朧とあたりへ浮んで來た、人影があるのを發見した。

人影は見る間に鮮かになつた。それはいづれも見慣れない、素朴な男女の一群だつた。彼等は皆頸のまはりに、緒にぬいた玉を飾りながら、愉快さうに笑ひ興じてゐた。内陣に群がつた無數の鷄は、彼等の姿がはつきりすると、今までよりは一層高らかに、何羽も鬨をつくり合つた。同時に内陣の壁は、――サン・ミグエルの畫を描いた壁は、霧のやうに夜へ呑まれてしまつた。そ

の跡には、——

日本の Bacchanalia は、呆氣にとられたオルガンテイノの前へ、蜃氣樓のやうに漂つて來た。彼は赤い篝の火影に、古代の服裝をした日本人たちが、互ひに酒を酌み交しながら、車座をつくつてゐるのを見た。そのまん中には女が一人、——日本ではまだ見た事のない、堂堂とした體格の女が一人、大きな桶を伏せた上に、踊り狂つてゐるのを見た。桶の後ろには小山のやうに、これもまた逞しい男が一人、根こぎにしたらしい榊の枝に、玉だの鏡だのが下つたのを、悠然と押し立ててゐるのを見た。彼等のまはりには數百の鷄が、尾羽根や鷄冠をすり合せながら、絶えず嬉しさうに鳴いてゐるのを見た。そのまた向うには、——オルガンテイノは、今更のやうに、彼の眼を疑はずにはゐられなかつた。——そのまた向うには夜霧の中に、岩屋の戸らしい一枚岩が、どつしりと聳えてゐるのだつた。

桶の上にのつた女は、何時までも踊をやめなかつた。彼女の髮を卷いた蔓は、ひらひらと空に飜つた。彼女の頸に垂れた玉は、何度も霰のやうに響き合つた。彼女の手にとつた小笹の枝は、縱横に風を打ちまはつた。しかもその露はにした胸！　赤い篝火の光の中に、艶艶と浮び出た二

つの乳房は、殆どオルガンテイノの眼には、情慾そのものとしか思はれなかつた。彼は泥烏須を念じながら、一心に顔をそむけようとした。が、やはり彼の體は、どう云ふ神祕な呪の力か、身動きさへ樂には出來なかつた。

その内に突然沈默が、幻の男女たちの上へ降つた。桶の上に乘つた女も、もう一度正氣に返つたやうに、やつと狂はしい踊をやめた。いや、鳴き競つてゐた鷄さへ、この瞬間は頸を伸ばした儘、一度にひつそりとなつてしまつた。するとその沈默の中に、永久に美しい女の聲が、何處からか嚴かに傳はつて來た。

「私が此處に隱つてゐれば、世界は暗闇になつた筈ではないか？　それを神神は樂しさうに、笑ひ興じてゐると見える。」

その聲が夜空に消えた時、桶の上にのつた女は、ちらりと一同を見渡しながら、意外な程しとやかに返事をした。

「それはあなたにも立ち勝つた、新しい神がをられますから、喜び合つてをるのでございます。」

その新しい神と云ふのは、泥烏須を指してゐるのかも知れない。――オルガンテイノはちよい

との間、さう云ふ氣もちに勵まされながら、この怪しい幻の變化に、やや興味のある目を注いだ。沈默は少時破れなかつた。が、忽ち鷄の群が、一齊に鬨をつくつたと思ふと、向うに夜霧を堰き止めてゐた、岩屋の戸らしい一枚岩が、徐ろに左右へ開き出した。さうして其裂け目からは、言句に絕した萬道の霞光が、洪水のやうに漲り出した。

オルガンティノは叫ばうとした。が、舌は動かなかつた。オルガンティノは逃げようとした。が、足も動かなかつた。彼は唯大光明の爲に、烈しく眩暈が起るのを感じた。さうしてその光の中に、大勢の男女の歡喜する聲が、澎湃と天に昇るのを聞いた。

「大日孁貴！　大日孁貴！　大日孁貴！」

「新しい神なぞはをりません。新しい神なぞはをりません。」

「あなたに逆ふものは亡びます。」

「御覽なさい。闇が消え失せるのを。」

「見渡す限り、あなたの山、あなたの森、あなたの川、あなたの町、あなたの海です。」

「新しい神なぞはをりません。誰も皆あなたの召使です。」

「大日孁貴！　大日孁貴！　大日孁貴！」

さう云ふ聲の湧き上る中に、冷汗になつたオルガンティノは、何か苦しさうに叫んだきりとうとう其處へ倒れてしまつた。……

その夜も三更に近づいた頃、オルガンティノは失心の底から、やつと意識を恢復した。彼の耳には神神の聲が、未だに鳴り響いてゐるやうだつた。が、あたりを見廻すと、人音も聞えない内陣には、圓天井のランプの光が、さつきの通り朦朧と壁畫を照らしてゐるばかりだつた。オルガンティノは呻き呻き、そろそろ祭壇の後を離れた。あの幻にどんな意味があるか、それは彼にはのみこめなかつた。しかしあの幻を見せたものが、泥烏須でない事だけは確かだつた。

「この國の靈と戰ふのは、……」

オルガンティノは歩きながら、思はずそつと獨り語を洩らした。

「この國の靈と戰ふのは、思つたよりもつと困難らしい。勝つか、それとも又負けるか、――」

するとその時彼の耳に、かう云ふ囁きを送るものがあつた。

「負けですよ！」

オルガンティノは氣味惡さうに、聲のした方を透かして見た。が、其處には不相變、仄暗い薔薇や金雀花の外に、人影らしいものも見えなかつた。

×

オルガンティノは翌日の夕も、南蠻寺の庭を歩いてゐた。しかし彼の碧眼には、何處か嬉しさうな色があつた。それは今日一日の内に、日本の侍が三四人、奉教人の列にはひつたからだつた。庭の橄欖や月桂は、ひつそりと夕闇に聳えてゐた。唯その沈默が擾されるのは、寺の鳩が軒へ歸るらしい、中空の羽音より外はなかつた。薔薇の匂、砂の濕り、――一切は翼のある天使たちが、「人の女子の美しきを見て、」妻を求めに降つて來た、古代の日の暮のやうに平和だつた。

「やはり十字架の御威光の前には、穢らはしい日本の靈の力も、勝利を占める事はむづかしいと見える。しかし昨夜見た幻は？――いや、あれは幻に過ぎない。惡魔はアントニオ上人にも、ああ云ふ幻を見せたではないか？　その證據には今日になると、一度に何人かの信徒さへ出來た。やがてはこの國も至る所に、天主の御寺が建てられるであらう。」

オルガンティノはさう思ひながら、砂の赤い小徑を歩いて行つた。すると誰か後から、そつと肩を打つものがあつた。彼はすぐに振り返つた。しかし後には夕明りが、徑を挾んだ篠懸の若葉に、うつすりと漂つてゐるだけだつた。

「御主。守らせ給へ！」

彼はかう呟いてから、徐ろに頭をもとへ返した。と、彼の傍には、何時の間に其處へ忍び寄つたか、昨夜の幻に見えた通り、頸に玉を卷いた老人が一人、ぼんやり姿を煙らせた儘、徐ろに歩みを運んでゐた。

「誰だ、お前は？」

不意を打たれたオルガンティノは、思はず其處へ立ち止まつた。

「私は、――誰でもかまひません。この國の靈の一人です。」

老人は微笑を浮べながら、親切さうに返事をした。

「まあ、御一緒に歩きませう。私はあなたと少時の間、御話しする爲に出て來たのです。」

オルガンティノは十字を切つた。が、老人はその印に、少しも恐怖を示さなかつた。

「私は惡魔ではないのです。御覽なさい、この玉やこの劍を。地獄の炎に燒かれた物なら、こんなに淸淨ではゐない筈です。さあ、もう呪文なぞを唱へるのはおやめなさい。」

オルガンテイノはやむを得ず、不愉快さうに腕組をした儘、老人と一しよに步き出した。

「あなたは天主敎を弘めに來てゐますね、――」

老人は靜かに話し出した。

「それも惡い事ではないかも知れません。しかし泥烏須もこの國へ來ては、きつと最後には負けてしまひますよ。」

「泥烏須は全能の御主だから、泥烏須に、――」

オルガンテイノはかう云ひかけてから、ふと思ひついたやうに、何時もこの國の信徒に對する、叮嚀な口調を使ひ出した。

「泥烏須に勝つものはない筈です。」

「所が實際はあるのです。まあ、御聞きなさい。はるばるこの國へ渡つて來たのは、泥烏須ばかりではありません。孔子、孟子、莊子、――その外支那からは哲人たちが、何人もこの國へ渡つ

て來ました。しかも當時はこの國が、まだ生まれたばかりだつたのです。支那の哲人たちは道の外にも、呉の國の絹だの、秦の國の玉だの、いろいろな物を持つて來ました。いや、さう云ふ寶よりも尊い、靈妙な文字さへ持つて來たのです。が、支那はその爲に、我我を征服出來たでせうか？　たとへば文字を御覽なさい。文字は我我を征服する代りに、我我の爲に征服されました。私が昔知つてゐた土人に、柿の本の人麻呂と云ふ詩人があります。その男の作つた七夕の歌は、今でもこの國に殘つてゐますが、あれを讀んで御覽なさい。牽牛織女はあの中に見出す事は出來ません。あそこに歌はれた戀人同士は飽くまでも彥星と棚機津女とです。彼等の枕に響いたのは、丁度この國の川のやうに、淸い天の川の瀨音でした。支那の黃河や揚子江に似た、銀河の浪音ではなかつたのです。しかし私は歌の事より、文字の事を話さなければなりません。人麻呂はあの歌を記す爲に、支那の文字を使ひました。が、それは意味の爲より、發音の爲の文字だつたのです。舟と云ふ文字がはひつた後も、「ふね」は常に「ふね」だつたのです。さもなければ我我の言葉は、支那語になつてゐたかも知れません。これは勿論人麻呂よりも、人麻呂の心を守つてゐた、我我この國の神の力です。のみならず支那の哲人たちは、書道をもこの國に傳へました。空海、

道風、佐理、行成――私は彼等のゐる所に、何時も人知れず行つてゐました。彼等が手本にしてゐたのは、皆支那人の墨蹟です。しかし彼等の筆先からは、次第に新しい美が生れました。彼等の文字は何時の間にか、王羲之でもなければ褚遂良でもない、日本人の文字になり出したのです。しかし我我が勝つたのは、文字ばかりではありません。我我の息吹きは潮風のやうに、老儒の道さへも和げました。この國の土人に尋ねて御覽なさい。彼等は皆孟子の著書は、我我の怒に觸れ易い爲に、それを積んだ船があれば、必ず覆ると信じてゐます。科戸の神はまだ一度も、そんな惡戲はしてゐません。が、さう云ふ信仰の中にも、この國に住んでゐる我我の力は、朧げながら感じられる筈です。あなたはさう思ひませんか？」

オルガンテイノは茫然と、老人の顏を眺め返した。この國の歷史に疎い彼には、折角の相手の雄辯も、半分はわからずにしまつたのだつた。

「支那の哲人たちの後に來たのは、印度の王子悉達多です。――」

老人は言葉を續けながら、徑ばたの薔薇の花をむしると、嬉しさうにその匂を嗅いだ。が、薔薇はむしられた跡にも、ちやんとその花が殘つてゐた。唯老人の手にある花は色や形は同じに見

えても、何處か霧のやうに煙つてゐた。

「佛陀の運命も同様です。が、こんな事を一一御話しするのは、御退屈を増すだけかも知れません。唯氣をつけて頂きたいのは、本地垂跡の教の事です。あの教はこの國の土人に、大日孁貴は大日如來と同じものだと思はせました。これは大日孁貴の勝でせうか？　それとも大日如來の勝でせうか？　假りに現在この國の土人に、大日孁貴は知らないにしても、大日如來は知つてゐるものが、大勢あるとして御覽なさい。それでも彼等の夢に見える、大日如來の姿の中には、印度佛の面影よりも、大日孁貴が窺はれはしないでせうか？　私は親鸞や日蓮と一しよに、沙羅雙樹の花の陰も歩いてゐます。彼等が隨喜渇仰した佛は、圓光のある黑人ではありません。優しい威嚴に充ち滿ちた上宮太子などの兄弟です。——が、そんな事を長長と御話しするのは、御約束の通りやめにしませう。つまり私が申上げたいのは、泥烏須のやうにこの國に來ても、勝つものはないと云ふ事なのです。」

「まあ、御待ちさない。御前さんはさう云はれるが、——」

オルガンテイノは口を挾んだ。

「今日などは侍が二三人、一度に御教に歸依しましたよ。」

「それは何人でも歸依するでせう。唯歸依したと云ふ事だけならば、この國の土人は大部分悉達多の教へに歸依してゐます。しかし我我の力と云ふのは、破壞する力ではありません。造り變へる力なのです。」

老人は薔薇の花を投げた。花は手を離れたと思ふと、忽ち夕明りに消えてしまつた。

「成程造り變へる力ですか？　しかしそれはお前さんたちに、限つた事ではないでせう。何處の國でも、――たとへば希臘の神神と云はれた、あの國にゐる惡魔でも、――」

「大いなるパンは死にました。いや、パンも何時かは又よみ返るかも知れません。しかし我我はこの通り、未だに生きてゐるのです。」

オルガンテイノは珍しさうに、老人の顏へ横眼を使つた。

「お前さんはパンを知つてゐるのですか？」

「何、西國の大名の子たちが、西洋から持つて歸つたと云ふ、横文字の本にあつたのです。――それも今の話ですが、たとひこの造り變へる力が、我我だけに限らないでも、やはり油斷はなり

ませんよ。いや、寧ろ、それだけに、御氣をつけなさいと云ひたいのです。我我は古い神ですからね。あの希臘の神神のやうに、世界の夜明けを見た神ですからね。」

「しかし泥烏須は勝つ筈です。」

オルガンティノは剛情に、もう一度同じ事を云ひ放つた。が、老人はそれが聞えないやうに、かうゆつくり話し續けた。

「私はつい四五日前、西國の海邊に上陸した、希臘の船乘りに遇ひました。その男は神ではありません。唯の人間に過ぎないのです。私はその船乘と、月夜の岩の上に坐りながら、いろいろの話を聞いて來ました。目一つの神につかまつた話だの、人を豕にする女神の話だの、聲の美しい人魚の話だの、——あなたはその男の名を知つてゐますか？　その男は私に遇つた時から、この國の土人に變りました。今では百合若と名乘つてゐるさうです。ですからあなたも御氣をつけなさい。泥烏須も必勝つとは云はれません。天主教はいくら弘まつても、必勝つとは云はれません。」

老人はだんだん小聲になつた。

「事によると泥烏須自身も、此の國の土人に變るでせう。支那や印度も變つたのです。西洋も變らなければなりません。我我は木木の中にもゐます。淺い水の流れにもゐます。薔薇の花を渡る風にもゐます。寺の壁に殘る夕明りにもゐます。何處にでも、又何時でもゐます。御氣をつけなさい。御氣をつけなさい。……」

その聲がとうとう絶えたと思ふと、老人の姿も夕闇の中へ、影が消えるやうに消えてしまつた。と同時に寺の塔からは、眉をひそめたオルガンティノの上へ、アヴエ・マリアの鐘が響き始めた。

×

南蠻寺のパアドレ・オルガンティノは、――いや、オルガンティノに限つた事ではない。悠悠とアビトの裾を引いた、鼻の高い紅毛人は、黄昏の光の漂つた、架空の月桂や薔薇の中から、一雙の屏風へ歸つて行つた。南蠻船入津の圖を描いた、三世紀以前の古屏風へ。

さやうなら。パアドレ・オルガンティノ！　君は今君の仲間と、日本の海邊を歩きながら、金泥の霞に旗を擧げた、大きい南蠻船を眺めてゐる。泥烏須が勝つか、大日孁貴が勝つか――それ

はまだ現在でも、容易に斷定は出來ないかも知れない。が、やがては我我の事業が、斷定を與ふべき問題である。君はその過去の海邊から、靜かに我我を見てゐ給へ。たとひ君は同じ屛風の、犬を曳いた甲比丹や、日傘をさしかけた黑ん坊の子供と、忘却の眠に沈んでゐても、新たに水平へ現れた、我我の黑船の石火矢の音は、必古めかしい君等の夢を破る時があるに違ひない。それまでは、——さやうなら。パアドレ・オルガンティノ！ さやうなら。南蠻寺のウルガン伴天連！

（大正十年十二月）

トロッコ

小田原熱海間に、輕便鐵道敷設の工事が始まつたのは、良平の八つの年だつた。良平は毎日村外れへ、その工事を見物に行つた。工事を——といつた所が、唯トロツコで土を運搬する——それが面白さに見に行つたのである。

トロツコの上には土工が二人、土を積んだ後に佇んでゐる。トロツコは山を下るのだから、人手を借りずに走つて來る。煽るやうに車臺が動いたり、土工の袢纏の裾がひらついたり、細い線路がしなつたり——良平はそんなけしきを眺めながら、土工になりたいと思ふ事がある。せめては一度でも土工と一しよに、トロツコへ乘りたいと思ふ事もある。トロツコは村外れの平地へ來ると、自然と其處に止まつてしまふ。と同時に土工たちは、身輕にトロツコを飛び降りるが早いか、その線路の終點へ車の土をぶちまける。それから今度はトロツコを押し押し、もと來た山の方へ登り始める。良平はその時乘れないまでも、押す事さへ出來たらと思ふのである。

或夕方、――それは二月の初旬だつた。良平は二つ下の弟や、弟と同じ年の隣の子供と、トロツコの置いてある村外れへ行つた。トロツコは泥だらけになつた儘、薄明るい中に並んでゐる。が、その外は何處を見ても、土工たちの姿は見えなかつた。三人の子供は恐る恐る、一番端にあるトロツコを押した。トロツコは三人の力が揃ふと、突然ごろりと車輪をまはした。良平はこの音にひやりとした。しかし二度目の車輪の音は、もう彼を驚かさなかつた。ごろり、ごろり、――――トロツコはさう云ふ音と共に、三人の手に押されながら、そろそろ線路を登つて行つた。

その内に彼是十間程來ると、線路の勾配が急になり出した。トロツコも三人の力では、いくら押しても動かなくなつた。どうかすれば車と一しよに、押し戻されさうにもなる事がある。良平はもう好いと思つたから、年下の二人に合圖をした。

「さあ、乘らう？」

彼等は一度に手をはなすと、トロツコの上へ飛び乘つた。トロツコは最初徐ろに、それから見る見る勢よく、一息に線路を下り出した。その途端につき當りの風景は、忽ち兩側へ分かれるやうに、ずんずん目の前へ展開して來る。――良平は顏に吹きつける日の暮の風を感じながら、殆ど

有頂天になつてしまつた。

しかしトロツコは二三分の後、もうもとの終點に止まつてゐた。

「さあ、もう一度押すぢやあ。」

良平は年下の二人と一しよに、又トロツコを押し上げにかかつた。が、まだ車輪も動かない内に、突然彼等の後には、誰かの足音が聞え出した。のみならずそれは聞え出したと思ふと、急にかう云ふ怒鳴り聲に變つた。

「この野郎！　誰に斷つてトロに觸つた？」

其處には古い印袢纏に、季節外れの麥藁帽をかぶつた、脊の高い土工が佇んでゐる。――さう云ふ姿が目にはひつた時、良平は年下の二人と一しよに、もう五六間逃げ出してゐた。――それぎり良平は使の歸りに、人氣のない工事場のトロツコを見ても、二度と乘つて見ようと思つた事はない。唯その時の土工の姿は、今でも良平の頭の何處かに、はつきりした記憶を殘してゐる。薄明りの中に仄めいた、小さい黄色の麥藁帽、――しかしその記憶さへも、年毎に色彩は薄れるらしい。

その後十日餘りたつてから、良平は又たつた一人、午過ぎの工事場に佇みながら、トロツコの來るのを眺めてゐた。すると土を積んだトロツコの外に、枕木を積んだトロツコが一輛、これは本線になる筈の、太い線路を登つて來た。このトロツコを押してゐるのは、二人とも若い男だつた。良平は彼等を見た時から、何だか親しみ易いやうな氣がした。「この人たちならば叱られない。」――彼はさう思ひながら、トロツコの側へ駈けて行つた。

「おぢさん。押してやらうか？」

その中の一人、――縞のシャツを着てゐる男は、俯向きにトロツコを押した儘、思つた通り快い返事をした。

「おお、押してくよう。」

良平は二人の間にはひると、力一杯押し始めた。

「われは中中力があるな。」

他の一人、――耳に卷煙草を挾んだ男も、かう良平を褒めてくれた。

その内に線路の勾配は、だんだん樂になり始めた。「もう押さなくとも好い。」――良平は今に

も云はれるかと内心氣がかりでならなかつた。が、若い二人の土工は、前よりも腰を起したぎり、默默と車を押し續けてゐた。良平はたうとうこらへ切れずに、怯づ怯づこんな事を尋ねて見た。

「何時までも押してゐて好い？」

「好いとも。」

二人は同時に返事をした。良平は「優しい人たちだ」と思つた。

五六町餘り押し續けたら、線路はもう一度急勾配になつた。其處には兩側の蜜柑畑に、黃色い實がいくつも日を受けてゐる。

「登り路の方が好い、何時までも押させてくれるから。」——良平はそんな事を考へながら、全身でトロツコを押すやうにした。

蜜柑畑の間を登りつめると、急に線路は下りになつた。縞のシャツを着てゐる男は、良平に「やい、乘れ」と云つた。良平は直に飛び乘つた。トロツコは三人が乘り移ると同時に、蜜柑畑の匂を煽りながら、ひた辷りに線路を走り出した。「押すよりも乘る方がずつと好い。」——良平は羽織に風を孕ませながら、當り前の事を考へた。「行きに押す所が多ければ、歸りに又乘る所が多

い。」――さうも亦考へたりした。
竹藪のある所へ來ると、トロツコは靜かに走るのを止めた。三人は又前のやうに、重いトロツコを押始めた。竹藪は何時か雜木林になつた。爪先上りの所所には、赤錆の線路も見えない程、落葉のたまつてゐる場所もあつた。その路をやつと登り切つたら、今度は高い崖の向うに、廣廣と薄ら寒い海が開けた。と同時に良平の頭には、餘り遠く來過ぎた事が、急にはつきりと感じられた。

三人は又トロツコへ乘つた。車は海を右にしながら、雜木の枝の下を走つて行つた。しかし良平はさつきのやうに、面白い氣もちにはなれなかつた。「もう歸つてくれれば好い。」――彼はさうも念じて見た。が、行く所まで行きつかなければ、トロツコも彼等も歸れない事は、勿論彼にもわかり切つてゐた。

その次に車の止まつたのは、切崩した山を背負つてゐる、藁屋根の茶店の前だつた。二人の土工はその店へはひると、乳吞兒をおぶつた上さんを相手に、悠悠と茶などを飲み始めた。良平は獨りいらいらしながら、トロツコのまはりをまはつて見た。トロツコには頑丈な車臺の板に、跳

ねかへつた泥が乾いてゐた。

少時の後茶店を出て來しなに、巻煙草を耳に挾んだ男は、(その時はもう挾んでゐなかつたが)トロツコの側にゐる良平に新聞紙に包んだ駄菓子をくれた。良平は冷淡に「難有う」と云つた。が、直に冷淡にしては、相手にすまないと思ひ直した。彼はその冷淡さを取り繕ふやうに、包み菓子の一つを口へ入れた。菓子には新聞紙にあつたらしい、石油の匂がしみついてゐた。

三人はトロツコを押しながら緩い傾斜を登つて行つた。良平は車に手をかけてゐても、心は外の事を考へてゐた。

その坂を向うへ下り切ると、又同じやうな茶店があつた。土工たちがその中へはひつた後、良平はトロツコに腰をかけながら、歸る事ばかり氣にしてゐた。茶店の前には花のさいた梅に、西日の光が消えかかつてゐる。「もう日が暮れる。」――彼はさう考へると、ぼんやり腰かけてもゐられなかつた。トロツコの車輪を蹴つて見たり、一人では動かないのを承知しながらうんうんそれを押して見たり、――そんな事に氣もちを紛らせてゐた。

所が土工たちは出て來ると、車の上の枕木に手をかけながら、無造作に彼にかう云つた。

「われはもう歸んな。おれたちは今日は向う泊りだから。」

「あんまり歸りが遲くなるとわれの家でも心配するずら。」

良平は一瞬間呆氣にとられた。もう彼是暗くなる事、去年の暮母と岩村まで來たが、今日の途はその三四倍ある事、それを今からたつた一人、歩いて歸らなければならない事、――さう云ふ事が一時にわかつたのである。良平は殆ど泣きさうになつた。が、泣いても仕方がないと思つた。泣いてゐる場合ではないとも思つた。彼は若い二人の土工に、取つて附けたやうな御時宜をすると、どんどん線路傳ひに走り出した。

良平は少時無我夢中に線路の側を走り續けた。その内に懷の菓子包みが、邪魔になる事に氣がついたから、それを路側へ拋り出す次手に、板草履も其處へ脫ぎ捨ててしまつた。すると薄い足袋の裏へじかに小石が食ひこんだが、足だけは遙かに輕くなつた。彼は左に海を感じながら、急な坂路を駈け登つた。時時淚がこみ上げて來ると、自然に顏が歪んで來る。――それは無理に我慢しても、鼻だけは絕えずくうくう鳴つた。

竹藪の側を駈け拔けると、夕燒けのした日金山の空も、もう火照りが消えかかつてゐた。良平は

は愈氣が氣でなかつた。往きと返りと變るせゐか、景色の違ふのも不安だつた。すると今度は着物までも、汗の濡れ通つたのが氣になつたから、やはり必死に驅け續けたなり、羽織を路側へ脱いで捨てた。

蜜柑畑へ來る頃には、あたりは暗くなる一方だつた。「命さへ助かれば——」良平はさう思ひながら、辷つてもつまづいても走つて行つた。

やつと遠い夕闇の中に、村外れの工事場が見えた時、良平は一思ひに泣きたくなつた。しかしその時もべそはかいたが、たうとう泣かずに驅け續けた。

彼の村へはひつて見ると、もう兩側の家家には、電燈の光がさし合つてゐた。良平はその電燈の光に頭から汗の湯氣の立つのが、彼自身にもはつきりわかつた。井戸端に水を汲んでゐる女衆や、畑から歸つて來る男衆は、良平が喘ぎ喘ぎ走るのを見ては、「おいどうしたね？」などと聲をかけた。が、彼は無言の儘、雜貨屋だの床屋だの、明るい家の前を走り過ぎた。

彼の家の門口へ驅けこんだ時、良平はたうとう大聲に、わつと泣き出さずにはゐられなかつた。その泣き聲は彼の周圍へ、一時に父や母を集まらせた。殊に母は何とか云ひながら、良平の體を

抱へるやうにした。が、良平は手足をもがきながら、啜り上げ啜り上げ泣き續けた。その聲が餘り激しかつたせゐか、近所の女衆も三四人、薄暗い門口へ集つて來た。父母は勿論その人たちは、口口に彼の泣く訣を尋ねた。しかし彼は何と云はれても泣き立てるより外に仕方がなかつた。あの遠い路を驅け通して來た、今までの心細さをふり返ると、いくら大聲に泣き續けても、足りない氣もちに迫られながら、……

良平は二十六の年、妻子と一しよに東京へ出て來た。今では或雜誌社の二階に、校正の朱筆を握つてゐる。が、彼はどうかすると、全然何の理由もないのに、その時の彼を思ひ出す事がある。全然何の理由もないのに？――塵勞に疲れた彼の前には今でもやはりその時のやうに、薄暗い藪や坂のある路が、細細と一すぢ斷續してゐる。……

（大正十一年二月）

報恩記

わたしは甚内と云ふものです。苗字は――さあ、世間ではずつと前から、阿媽港甚内と云つてゐるやうです。阿媽港甚内、――あなたもこの名は知つてゐますか？　いや、驚くには及びません。わたしはあなたの知つてゐる通り、評判の高い盗人です。しかし今夜參つたのは、盗みにはひつたのではありません。どうかそれだけは安心して下さい。

あなたは日本にゐる伴天連の中でも、道徳の高い人だと聞いてゐます。して見れば盗人と名のついたものと、少時でも一しよにゐると云ふ事は、愉快ではないかも知れません。が、わたしも思ひの外、盗みばかりしてもゐないのです。何時ぞや聚樂の御殿へ召された呂宋助左衞門の手代の一人も、確か甚内と名乘つてゐました。又利休居士の珍重してゐた「赤がしら」と稱へる水さしも、それを贈つた連歌師の本名は、甚内とか云つたと聞いてゐます。さう云へばつい二三年以前、

阿媽港日記と云ふ本を書いた、大村あたりの通辭の名前も、甚内と云ふのではなかつたでせうか？ その外三條河原の喧嘩に、甲比丹「まるどなど」を救つた虚無僧、堺の妙國寺門前に、南蠻の藥を賣つてゐた商人、……さう云ふものも名前を明かせば、何がし甚内だつたのに違ひありません。いや、それよりも大事なのは、去年この「さん・ふらんしすこ」の御寺へ、おん母「まりや」の爪を收めた、黄金の舍利塔を獻じてゐるのも、やはり甚内と云ふ信徒だつた筈です。

しかし今夜は殘念ながら、一々さう云ふ行狀を話してゐる暇はありません。唯どうか阿媽港甚内は、世間一般の人間と餘り變りのない事を信じて下さい。さうですか？ では出來るだけ手短かに、わたしの用向きを述べる事にしませう。わたしは或男の魂の爲に、「みさ」の御祈りを願ひに來たのです。いや、わたしの血緣のものではありません。と云つても亦わたしの刃金に、血を塗つたものでもないのです。名前ですか？ 名前は、——さあ、それは明かして好いかどうか、わたしにも判斷はつきません。或男の魂の爲に、——或は「ぽうろ」と云ふ日本人の爲に、冥福を祈つてやりたいのです。いけませんか？——成程阿媽港甚内に、かう云ふ事を賴まれたのでは、手輕に受合ふ氣にもなれますまい。では兎に角一通り、事情だけは話して見る事にしませう。し

かしそれには生死を問はず、他言しない約束が必要です。あなたはその胸の十字架に懸けても、きつと約束を守りますか？　いや――、失禮は赦して下さい。(微笑)伴天連のあなたを疑ふのは、盗人のわたしには僭上でせう。しかしこの約束を守らなければ、(突然眞面目に)「いんへるの」の猛火に燒かれずとも、現世に罰が下る筈です。

もう二年あまり以前の話ですが、丁度或凩の眞夜中です。わたしは雲水に姿を變へながら、京の町中をうろついてゐました。京の町中をうろついたのは、その夜に始まつたのではありません。もう彼是五日ばかり、何時も初更を過ぎさへすれば、必人目に立たないやうに、そつと家家を窺つたのです。勿論何の爲だつたかは、註を入れるにも及びますまい。殊にその頃は摩利伽へでも、一時渡つてゐるつもりでしたから、餘計に金の入用もあつたのです。

町は勿論とうの昔に人通りを絶つてゐましたが、星ばかりきらめいた空中には、小やみもない風の音がどよめいてゐます。わたしは暗い軒通ひに、小川通りを下つて來ると、ふと辻を一つ曲つた所に、大きい角屋敷のあるのを見つけました。これは京でも名を知られた、北條屋彌三右衞門の本宅です。同じ渡海を渡世にしてゐても、北條屋は到底角倉などと肩を並べる事は出來ます

まい。しかし兎に角沙室や呂宋へ、船の一二艘も出してゐるのですから、一かどの分限者には違ひありません。わたしは何もこの家を目當に、うろついてゐたのではないのですが、丁度其處へ來合はせたのを幸ひ、一稼ぎする氣を起しました。その上前にも云つた通り、夜は深いし風も出てゐる、――わたしの商賣にとりかかるのには、萬事持つて來いの寸法です。わたしは路ばたの天水桶の後に、網代の笠や杖を隱した上、忽ち高塀を乘り越えました。

世間の噂を聞いて御覽なさい。阿媽港甚内は、忍術を使ふ、――誰でも皆さう云つてゐます。しかしあなたは俗人のやうに、そんな事は本當と思ひますまい。わたしは忍術も使はなければ、惡魔も味方にはしてゐないのです。唯阿媽港にゐた時分、葡萄牙の船の醫者に、究理の學問を教はりました。それを實地に役立てさへすれば、大きい錠前を捩ぢ切つたり、重い閂を外したりするのは、格別むづかしい事ではありません。(微笑)今までにない盜みの仕方、――それも日本と云ふ未開の土地は、十字架や鐵砲の渡來と同樣、やはり西洋に敎はつたのです。

わたしは一ときとたたない内に、北條屋の家の中にはひつてゐました。が、暗い廊下をつき當ると、驚いた事にはこの夜更けにも、まだ火影のさしてゐるばかりか、話し聲のする小座敷があ

ります。それがあたりの容子では、どうしても茶室に違ひありません。「凩の茶か」――わたしはさう苦笑しながら、そつと其處へ忍び寄りました。實際その時は人聲のするのに、仕事の邪魔を思ふよりも、數寄を凝らした圍ひの中に、この家の主人や客に來た仲間が、どんな風流を樂しんでゐるか？――そんな事に心が惹かれたのです。

襖の外に身を寄せるが早いか、わたしの耳には思つた通り、釜のたぎりがはひりました。が、その音がすると同時に、意外にも誰か話をしては、泣いてゐる聲が聞えるのです。誰か、――と云ふよりもそれは二度と聞かずに、女だと云ふ事さへわかりました。かう云ふ大家の茶座敷に、眞夜中女の泣いてゐると云ふのは、どうせ唯事ではありません。わたしは息をひそめた儘、幸ひ明いてゐた襖の隙から、茶室の中を覗きこみました。

行燈の光に照された、古色紙らしい床の懸け物、懸け花入の霜菊の花。――圍ひの中には御約束通り、物寂びた趣が漂つてゐました。その床の前、――丁度わたしの眞正面に坐つた老人は、主人の彌三右衛門でせう、何か細かい唐草の羽織に、ぢつと兩腕を組んだ儘、殆よそ眼に見たのでは、釜の煮え音でも聞いてゐるやうです。彌三右衛門の下座には、品の好い笄髷の老女が一人、

これは横顔を見せた儘、時時涙を拭つてゐました。

「いくら不自由がないやうでも、やはり苦勞だけはあると見える。」——わたしはさう思ひながら、自然と微笑を洩らしたものです。微笑を、——かう云つてもそれは北條屋夫婦に、惡意があつたのではありません。わたしのやうに四十年間、惡名ばかり負つてゐるものには、他人の、——殊に幸福らしい他人の不幸は、自然と微笑を浮ばせるのです。（殘酷な表情）その時もわたしは夫婦の歎きが、歌舞伎を見るやうに愉快だつたのです。（皮肉な微笑）しかしこれはわたし一人に、限つた事ではありますまい。誰にも好まれる草紙と云へば、悲しい話にきまつてゐるやうです。

彌三右衞門は少時の後、吐息をするやうにかう云ひました。

「もうこの羽目になつた上は、泣いても喚いても取返しはつかない。わたしは明日にも店のものに、暇をやる事に決心をした。」

その時又烈しい風が、どつと茶室を搖すぶりました。それに聲が紛れたのでせう。彌三右衞門の內儀の言葉は、何と云つたのだかわかりません。が、主人は頷きながら、兩手を膝の上に組み合せると、網代の天井へ眼を上げました。太い眉、尖つた頰骨、殊に切れの長い目尻、——これ

は確かに見れば見る程、何時か一度は會つてゐる顏です。

「おん主、「えす・きりすと」樣。何とぞ我我夫婦の心に、あなた樣の御力を御惠み下さい。……」

彌三右衛門は眼を閉ぢた儘、御祈りの言葉を呟き始めました。老女もやはり夫のやうに天帝の加護を乞うてゐるやうです。わたしはその間瞬きもせず、彌三右衛門の顏を見續けました。すると又凩の渡つた時、わたしの心に閃いたのは、二十年以前の記憶です、わたしはこの記憶の中に、はつきり彌三右衛門の姿を捉へました。

その二十年以前の記憶と云ふのは、——いや、それは話すには及びますまい。唯手短に事實だけ云へば、わたしは阿媽港に渡つてゐた時、或日本の船頭に危い命を助けて貰ひました。その時は互に名乘りもせず、それなり別れてしまひましたが、今わたしの見た彌三右衛門は、當年の船頭に違ひないのです。わたしは奇遇に驚きながら、やはりこの老人の顏を見守つてゐました。さう云へば威かつい肩のあたりや、指節の太い手の恰好には、未に珊瑚礁の潮けむりや、白檀山の匂ひがしみてゐるやうです。

彌三右衛門は長い御祈りを終ると、靜かに老女へかう云ひました。

「跡は唯何事も、天主の御意次第と思うたが好い。――では釜のたぎつてゐるのを幸ひ、茶でも一つ立てて貰はうか?」

しかし老女は今更のやうに、こみ上げる涙を堪へるやうに、消え入りさうな返事をしました。

「はい。――それでもまだ悔やしいのは、――」

「さあ、それが愚痴と云ふものぢや。北條丸の沈んだのも、抛げ銀の皆倒れたのも、――」

「いえ、そんな事ではございません。せめては倅の彌三郎でも、ゐてくれればと思ふのでございますが、……」

わたしはこの話を聞いてゐる内に、もう一度微笑が浮んで來ました。が、今度は北條屋の不運に、愉快を感じたのではありません。「昔の恩を返す時が來た」――さう思ふ事が嬉しかつたのです。わたしにも、御尋ね者の阿媽港甚内にも、立派に恩返しが出來る愉快さは、――いや、この愉快さを知るものは、わたしの外にはありますまい。(皮肉に)世間の善人は可哀さうです。何一つ惡事を働かない代りに、どの位善行を施した時には、嬉しい心もちになるものか、――そんな事も碌には知らないのですから。

「何、ああ云ふ人でなしは、居らぬだけにまだしも仕合せな位ぢや。……」
彌三右衛門は苦苦しさうに、行燈へ眼を外らせました。
「あいつが使ひをつた金でもあれば、今度も急場だけは凌げたかも知れぬ。それを思へば勘當したのは、……」
彌三右衛門はかう云つたなり、驚いたやうにわたしを眺めました。これは驚いたのも無理はありません。わたしはその時聲もかけずに、堺の襖を明けたのですから。――しかもわたしの身なりと云へば、雲水に姿をやつした上、網代の笠を脱いだ代りに、南蠻頭巾をかぶつてゐたのですから。
「誰だ、おぬしは?」
彌三右衛門は年はとつてゐても、咄嗟に膝を起しました。
「いや、御驚きになるには及びません。わたしは阿媽港甚内と云ふものです。――まあ、御靜かになすつて下さい。阿媽港甚内は盜人ですが、今夜突然參上したのは、少し外にも訣があるのです。――」

わたしは頭巾を脱ぎながら、彌三右衛門の前に坐りました。

その後の事は話さずとも、あなたには推察出來るでせう。わたしは北條屋の危急を救ふ爲に、三日と云ふ日限を一日も違へず、六千貫の金を調達する、恩返しの約束を結んだのです。——おや、誰か戸の外に、足音が聞えるではありませんか？　では今夜は御免下さい。いづれ明日か明後日の夜、もう一度此處へ忍んで來ます。あの大十字架の星の光は阿媽港の空には輝いてゐても、日本の空には見られません。わたしも丁度ああ云ふやうに日本では姿を晦ませてゐないと、今夜「みさ」を願ひに來た、「ぽうろ」の魂の爲にもすまないのです。

何、わたしの逃げ途ですか？　そんな事は心配に及びません。この高い天窓からでも、あの大きい煖爐からでも、自由自在に出て行かれます。就いてはどうか呉呉も、恩人「ぽうろ」の魂の爲に、一切他言は愼んで下さい。

北條屋彌三右衛門の話

伴天連様。どうかわたしの懺悔を御聞き下さい。御承知でも御座いませうが、この頃世上に噂

の高い、阿媽港甚内と云ふ盗人がございます。根來寺の塔に住んでゐたのも、殺生關白の太刀を盗んだのも、又遠い海の外では、呂宋の太守を襲つたのも、皆あの男だとか聞き及びました。それがたうとう搦めとられた上、今度一條戻り橋のほとりに、曝し首になつたと云ふ事も、或は御耳にはひつて居りませう。わたしはあの阿媽港甚内に一方ならぬ大恩を蒙りました。が、又大恩を蒙つただけに、唯今では何とも申しやうのない、悲しい目にも遇つたのでございます。どうかその仔細を御聞きの上、罪びと北條屋彌三右衛門にも、天帝の御愛憐を御祈り下さい。

丁度今から二年ばかり以前の、冬の事でございます。ずつとしけばかり續いた爲に、持ち船の北條丸は沈みますし、抛げ銀は皆倒れますし、――それやこれやの重なつた揚句、北條屋一家は分散の外に、仕方のない羽目になつてしまひました。御承知の通り町人には取引き先はございましても、友だちと申すものはございません。かうなればもう我我の家業は、うづ潮に吸はれた大船も同様、まつ逆様に奈落の底へ、落ちこむばかりなのでございます。すると或夜、――今でもこの夜の事は忘れません。或凩の烈しい夜でございましたが、わたし共夫婦は御存知の圍ひに、夜の更けるのも知らず話して居りました。其處へ突然はひつて參つたのは、雲水の姿に南蠻頭巾

をかぶつた、あの阿媽港甚内でございます。わたしは勿論驚きもすれば、又怒りも致しました。が、甚内の話を聞いて見ますと、あの男はやはり盗みを働きに、わたしの宅へ忍びこみましたが、茶室には未に火影ばかりか、人の話し聲が聞えてゐる、そこで襖越しに、覗いて見ると、この北條屋彌三右衛門は、甚内の命を助けた事のある、二十年以前の恩人だつたと、かう云ふ次第ではございませんか？

成程さう云はれて見れば、彼是二十年にもなりませうか、まだわたしが阿媽港通ひの「ふすた」船の船頭を致してゐた頃、あそこへ船がかりをしてゐる内に、髭さへ碌にない日本人を一人、助けてやつた事がございます。何でもその時の話では、ふとした酒の上の喧嘩から、唐人を一人殺した爲に、追手がかかつたとか申して居りました。して見ればそれが今日では、あの阿媽港甚内と云ふ、名代の盗人になつたのでございませう。わたしは兎に角甚内の言葉も嘘ではない事がわかりましたから、一家のものの寢てゐるのを幸ひ、まづその用向きを尋ねて見ました。

すると甚内の申しますには、あの男の力に及ぶ事なら、二十年以前の恩返しに、北條屋の危急を救つてやりたい、差當り入用の金子の高は、どの位だと尋ねるのでございます。わたしは思は

ず苦笑致しました。盗人に金を調達して貰ふ、――それが可笑しいばかりではございません。如何に阿媽港甚内でも、さう云ふ金がある位ならば、何もわざわざわたしの宅へ、盗みにはひるにも當りますまい。しかしその金高を申しますと、甚内は小首を傾けながら、今夜の内にはむづかしいが、三日も待てば調達しようと、無造作に引き受けたのでございます。が、何しろ入用なのは、六千貫と云ふ大金でございますから、きつと調達出來るかどうか、當てになるものではございません。いや、わたしの量見では、まづ賽の目をたのむよりも、覺束ないと覺悟をきめてゐました。

甚内はその夜わたしの家内に、悠悠と茶なぞ立てさせた上、凩の中を歸つて行きました。が、その翌日になつて見ても、約束の金は屆きません。二日目も同樣でございました。三日目は、――この日は雪になりましたが、やはり夜に入つてしまつた後も、何一つ便りはありません。わたしは前に甚内の約束は、當にして居らぬと申し上げました。が、店のものにも暇を出さず、成行きに任せてゐた所を見ると、それでも幾分か心待ちには、待つてゐたのでございませう。又實際三日目の夜には、圍ひの行燈に向つてゐても、雪折れの音のする度毎に、聞き耳ばかり立てて居

りました。

所が三更も過ぎた時分、突然茶室の外の庭に、何か人の組み合ふらしい物音が聞えるではございませんか？　わたしの心に閃いたのは、勿論甚内の身の上でございます。もしや捕り手でもかかつたのではないか？——わたしは咄嗟にかう思ひましたから、庭に向いた障子を明けるが早いか、行燈の火を掲げて見ました。雪の深い茶室の前には、大明竹の垂れ伏したあたりに、誰か二人摑み合つてゐる——と思ふとその一人は、飛びかかる相手を突き放したなり、庭木の陰をくぐるやうに、忽ち塀の方へ逃げ出しました。雪のはだれる音、塀に攀ぢ登る音、——それぎりひつそりしてしまつたのは、もう何處か塀の外へ、無事に落ち延びたのでございませう。が、突き放された相手の一人は、格別跡を追はうともせず、體の雪を拂ひながら、靜かにわたしの前へ歩み寄りました。

「わたしです。阿媽港甚内ですよ。」

わたしは呆氣にとられた儘、甚内の姿を見守りました。甚内は今夜も南蠻頭巾に、袈裟法衣を着てゐるのでございます。

「いや、とんだ騒ぎをしました。誰もあの組打ちの音に、眼を覺さねば仕合せですが。」

甚内は圍ひへはひると同時に、ちらりと苦笑を洩らしました。

「何、わたしが忍んで來ると、丁度誰かこの床の下へ、這ひこまうとするものがあるのです。そこで一つ手捕りにした上、顏を見てやらうと思つたのですが、たうとう逃げられてしまひました。」

わたしはまださつきの通り、捕り手の心配がございましたから、役人ではないかと尋ねて見ました。が、甚内は役人所か、盗人だと申すのでございます。盗人が盗人を捉へようとした、——この位珍しい事はございますまい。今度は甚内よりもわたしの顏に、自然と苦笑が浮びました。しかしそれは兎も角も、調達の成否を聞かない内は、わたしの心も安まりません。すると甚内は云はない先に、わたしの心を讀んだのでございませう、悠悠と胴卷きをほどきながら、爐の前へ金包みを並べました。

「御安心なさい、六千貫の工面はつきましたから。——實はもう昨日の内に、大抵調達したのですが、まだ二百貫程不足でしたから、今夜はそれを持つて來ました。どうかこの包みを受け取つて下さい。又昨日までに集めた金は、あなた方御夫婦も知らない内に、この茶室の床下へ隱して

置きました。大方今夜の盜人のやつも、その金を嗅ぎつけて來たのでせう。」

わたしは夢でも見てゐるやうに、さう云ふ言葉を聞いてゐました。盜人に金を施して貰ふ、――それはあなたに伺はないでも、確かに善い事ではございますまい。しかし調達が出來るかどうか、半信半疑の境にゐた時は、善惡も考へずに居りましたし、又今となつて見れば、むげに受け取らぬとも申されません。しかもその金を受け取らないとなれば、わたしばかりか一家のものも、路頭に迷ふのでございます。どうかこの心もちに、せめては御憐憫を御加へ下さい。わたしは何時か甚内の前に、恭しく兩手をついた儘、何も申さずに泣いて居りました。……

その後わたしは二年の間、甚内の噂を聞かずに居りました。が、たうとう分散もせずに恙ないその日を送られるのは、皆甚内の御蔭でございますから、何時でもあの男の仕合せの爲に、人知れずおん母「まりや」樣へも、祈願をこめてゐたのでございます。所がどうでございませう、この頃往來の話を聞けば、阿媽港甚内は御召捕りの上、戻り橋に首を曝してゐると、かう申すではございませんか？　わたくしは驚きも致しました。人知れず涙も落しました。しかし積惡の報と思へば、これも致し方はございますまい。いや、寧ろこの永年、天罰も受けずに居りましたのは、

不思議だつた位でございます。が、せめてもの恩返しに、陰ながら回向をしてやりたい。——かう思つたものでございますから、わたしは今日件もつれずに、早速一條戻り橋へ、その曝し首を見に參りました。

戻り橋のほとりへ參りますと、もうその首を曝した前には、大勢人がたかつて居ります。罪狀を記した白木の札、首の番をする下役人——それは何時もと變りません。が、三本組み合せた、青竹の上に載せてある首は、——ああ、そのむごたらしい血まみれの首は、どうしたと云ふのでございませう? わたしは騷騷しい人だかりの中に、蒼ざめた首を見るが早いか、思はず立ちすくんでしまひました。この首はあの男ではございません。阿媽港甚内の首ではございません。この太い眉、この突き出た頰、この眉間の刀創、——何一つ甚内には似て居りません。しかし、——わたしは突然日の光も、わたしのまはりの人だかりも、竹の上に載せた曝し首も、皆何處か遠い世界へ、流れてしまつたかと思ふ位、烈しい驚きに襲はれました。この首は甚内ではございません。わたしの首でございます。二十年以前のわたし、——丁度甚内の命を助けた、その頃のわたしでございます。「彌三郎!」——わたしは舌さへ動かせたなら、かう叫んでゐたかも知れません。

ん。が、聲を揚げる所かわたしの體は瘧を病んだやうに、震へてゐるばかりでございました。彌三郎！　わたしは唯幻のやうに、倅の曝し首を眺めました。首はやや仰向いた儘半ば開いた瞼の下から、ぢつとわたしを見守つて居ります。これはどうした訣でございませう？　倅は何かの間違ひから、甚内と思はれたのでございませうか？　しかし御吟味も受けたとすれば、さう云ふ間違ひは起りますまい。それとも阿媽港甚内といふのは、倅だつたのでございませうか？　わたしの宅へ來た贋雲水は、誰か甚内の名前を假りた、別人だつたのでございませうか？　いや、そんな筈はございません。三日と云ふ日限を一日も違へず、六千貫の金を工面するものは、この廣い日本の國にも、甚内の外に誰が居りませう？　して見ると、――その時わたしの心の中には、二年以前雪の降つた夜、甚内と庭に爭つてゐた、誰とも知らぬ男の姿が、急にはつきり浮んで參りました。あの男は誰だつたのでございませう？　もしや倅ではございますまいか？　さう云へばあの男の姿かたちは、ちらりと一目見ただけでも、どうやら倅の彌三郎に、似てゐたやうでもございます。しかしこれはわたし一人の、心の迷ひでございませうか？　もし倅だつたとすれば、――わたしは夢の覺めたやうに、しけじけ首を眺めました。するとその紫ばんだ、妙に緊りのな

い脣には、何か微笑に近い物が、ほんのり殘つてゐるのでございます。曝し首に微笑が殘つてゐる、――あなたはそんな事を御聞きになると、御嗤ひになるかも知れません。わたしさへそれに氣のついた時には、眼のせゐかとも思ひました。が、何度見直しても、その干からびた脣には、確かに微笑らしい明みが、漂つてゐるのでございます。わたしはこの不思議な微笑に、永い間見入つて居りました。と、何時かわたしの顏にも、やはり微笑が浮んで參りました。しかし微笑が浮ぶと同時に、眼には自然と熱い涙も、にじみ出して來たのでございます。

「お父さん、勘忍して下さい。――」

その微笑は無言の内に、かう申してゐたのでございます。

「お父さん。不孝の罪は勘忍して下さい。わたしは二年以前の雪の夜、勘當の御詫びがしたいばかりに、そつと家へ忍んで行きました。晝間は店のものに見られるのさへ、恥しいなりをしてゐましたから、わざわざ夜の更けるのを待つた上、お父さんの寢間の戸を叩いても、御眼にかかるつもりでゐたのです。所がふと圍ひの障子に、火影のさしてゐるのを幸ひ、其處へ怯づ怯づ行き

かけると、いきなり誰か後から、言葉もかけずに組つきました。

「お父さん。それから先はどうなつたか、あなたの知つてゐる通りです。わたしは餘り不意だつた爲、お父さんの姿を見るが早いか、相手の曲者を突き放したなり、高塀の外へ逃げてしまひました。が、雪明りに見た相手の姿は、不思議にも雲水のやうでしたから、誰も追ふ者のないのを確めた後、もう一度あの茶室の外へ、大膽にも忍んで行つたのです。わたしは圍ひの障子越しに、一切の話を立ち聞きました。

「お父さん。北條屋を救つた甚内は、わたしたち一家の恩人です。わたしは甚内の身に危急があれば、たとへ命は抛つても、恩に報いたいと決心しました。又この恩を返す事は、勘當を受けた浮浪人のわたしでなければ出來ますまい。わたしはこの二年間、さう云ふ機會を待つてゐました。さうして、――その機會が來たのです。どうか不孝の罪は勘忍して下さい。わたしは極道に生れましたが、一家の大恩だけは返しました。それがせめてもの心やりです。……」

わたしは宅へ歸る途中も、同時に泣いたり笑つたりしながら、倅のけなげさを褒めてやりました。あなたは御存知になりますまいが、倅の彌三郎もわたしと同樣、御宗門に歸依して居りまし

たから、もとは「ぽうろ」と云ふ名前さへも、頂いて居つたものでございます。しかし、――しかし倅も不運なやつでございました。いや、倅ばかりではございません。わたしもあの阿媽港甚内に一家の沒落さへ救はれなければ、こんな嘆きは致しますまいに。いくら未練だと思ひましても、これぱかりは切なうございます。分散せずにゐた方が好いか、倅を殺さずに置いた方が好いか、――(突然苦しさうに)どうかわたしを御救ひ下さい。わたしはこの儘生きてゐれば、大恩人の甚内を憎むやうになるかも知れません。……(永い間の歔欷)

「ぽうろ」彌三郎の話

ああ、おん母「まりや」様！　わたしは夜が明け次第、首を打たれる事になつてゐます。わたしの首は地に落ちても、わたしの魂は小鳥のやうに、あなたの御側へ飛んで行くでせう。いや、悪事ばかり働いたわたしは、「はらいそ」(天國)の莊嚴を拜する代りに、恐しい「いんへるの」(地獄)の猛火の底へ、逆落しになるかも知れません。しかしわたしは滿足です。わたしの心には二十年來、この位嬉しい心もちは、宿つた事がないのです。

わたしは北條屋彌三郎です。が、わたしの曝し首は、阿媽港甚内と呼ばれるでせう。わたしがあの阿媽港甚内、——これ程愉快な事があるでせうか？　阿媽港甚内、——どうです？　好い名前ではありませんか？　わたしはその名前を口にするだけでも、この暗い牢の中さへ、天上の薔薇や百合の花に、滿ち渡るやうな心もちがします。

忘れもしない二年前の冬、丁度或大雪の夜です。わたしは博奕の元手が欲しさに、父の本宅へ忍びこみました。所がまだ圍ひの障子に、火影がさしてゐましたから、そつと其處を窺はうとすると、いきなり誰か言葉もかけず、わたしの襟上を捉へたものがあります。振り拂ふ、又摑みかかる、——相手は誰だか知らないのですが、その力の逞しい事は、到底唯ものとは思はれません。のみならず二三度揉み合ふ内に、茶室の障子が明いたと思ふと、庭へ行燈をさし出したのは、紛れもない父の彌三右衛門です。わたしは一生懸命に、摑まれた胸倉を振り切りながら、高塀の外へ逃げ出しました。

しかし半町程逃げ延びると、わたしは或軒下に隱れながら、往來の前後を見廻しました。往來には夜目にも白白と、時時雪煙りが揚る外には、何處にも動いてゐるものは見えません。相手は

諦めてしまつたのか、もう追ひかけても來ないやうです。が、あの男は何ものでせう？　咄嗟の間に見た所では、確かに僧形をしてゐました。が、さつきの腕の強さを見れば、――殊に兵法にも精しいのを見れば、世の常の坊主ではありますまい。第一から云ふ大雪の夜に、庭先へ誰か坊主が來てゐる、――それが不思議ではありませんか？　わたしは少時思案した後、たとひ危い藝當にしても、兎に角もう一度茶室の外へ、忍び寄る事に決心しました。

それから一時ばかりたつた頃です。あの怪しい行脚の坊主は、丁度雪の止んだのを幸ひ、小川通りを下つて行きました。これが阿媽港甚内なのです。侍、連歌師、町人、虚無僧、――何にでも姿を變へると云ふ、洛中に名高い盜人なのです。わたしは後から見え隱れに甚内の跡をつけて行きました。その時程妙に嬉しかつた事は、一度もなかつたのに違ひありません。阿媽港甚内！　阿媽港甚内！　わたしはどの位夢の中にも、あの男の姿を慕つてゐたでせう。殺生關白の太刀を盜んだのも甚内です。沙室屋の珊瑚樹を詐つたのも甚内です。備前宰相の伽羅を切つたのも、甲比丹「ぺれいら」の時計を奪つたのも、一夜に五つの土藏を破つたのも、八人の參河侍を斬り倒したのも、――その外末代にも傳はるやうな、稀有の惡事を働いたのは、何時でも阿媽港甚内です。

その甚内は今わたしの前に、網代の笠を傾けながら、薄明るい雪路を歩いてゐる。――かう云ふ姿を眺められるのは、それだけでも仕合せではありませんか？　が、わたしはこの上にも、もつと仕合せになりたかつたのです。

わたしは淨嚴寺の裏へ來ると、一散に甚内へ追ひつきました。此處はずつと町家のない土塀續きになつてゐますから、たとひ晝でも人目を避けるには、一番御誂への場所なのですが、甚内はわたしを見ても、格別驚いた氣色は見せず、靜かに其處へ足を止めました。しかも杖をついたなり、わたしの言葉を待つやうに、一言も口を利かないのです。わたしは實際恐る恐る、甚内の前に手をつきました。しかしその落着いた顏を見ると、思ふやうに聲さへ出て來ません。

「どうか失禮は御免下さい。わたしは北條屋彌三右衞門の倅彌三郎と申すものです。――」

わたしは顏を火照らせながら、やつとかう口を切りました。

「實は少し御願ひがあつて、あなたの跡を慕つて來たのですが、……」

甚内は唯頷きました。それだけでも氣の小さいわたしには、どの位難有い氣がしたでせう。わたしは勇氣も出て來ましたから、やはり雪の中に手をついたなり、父の勘當を受けてゐる事、今

はあぶれものの仲間にはひつてゐる事、今夜父の家へ盜みにはひつた所が、計らず甚内にめぐり合つた事、なほ又父と甚内との密談も一つ殘らず聞いた事、――そんな事を手短に話しました。が、甚内は不相變、默然と口を噤んだ儘、冷やかにわたしを見てゐるのです。わたしはその話をしてしまふと、一層膝を進ませながら、甚内の顏を覗きこみました。

「北條一家の蒙つた恩は、わたしにも亦かかつてゐます。わたしはその恩を忘れないしるしに、あなたの手下になる決心をしました。どうかわたしを使つて下さい。わたしは盜みも知つてゐます。火をつける術も知つてゐます。その外一通りの惡事だけは、人に劣らず知つてゐます。――」

しかし甚内は默つてゐます。わたしは胸を躍らせながら、愈熱心に說き立てました。

「どうかわたしを使つて下さい。わたしは必働きます。京、伏見、堺、大阪、――わたしの知らない土地はありません。わたしは一日に十五里歩きます。力も四斗俵は片手に擧ります。人も二三人は殺して見ました。どうかわたしを使つて下さい。わたしはあなたの爲ならば、どんな仕事でもして見せます。伏見の城の白孔雀も、盜めと云へば、盜んで來ます。『さん・ふらんしすこ』の寺の鐘樓も、燒けと云へば燒いて來ます。右大臣家の姬君も、拐せと云へば拐して來ます。奉

行の首も取れと云へば、――」

　わたしはかう云ひかけた時、いきなり雪の中へ蹴倒されました。

「莫迦め！」

　甚内は一聲叱つた儘、元の通り歩いて行きさうにします。わたしは殆氣違ひのやうに法衣の裾へ縋りつきました。

「どうかわたしを使つて下さい。わたしはどんな場合にも、きつとあなたを離れません。あなたの爲には水火にも入ります。あの『えそぽ』の話の獅子王さへ、鼠に救はれるではありませんか？　わたしはその鼠になります。わたしは、――」

「默れ。甚内は貴樣なぞの恩は受けぬ。」

　甚内はわたしを振り放すと、もう一度其處へ蹴倒しました。

「白癩めが！　親孝行でもしろ！」

　わたしは二度目に蹴倒された時、急に口惜しさがこみ上げて來ました。

「よし！　きつと恩になるな！」

しかし甚内は見返りもせず、さつさと雪路を急いで行きます。何時かさし始めた月の光に網代の笠を仄めかせながら、……それぎりわたしは二年の間、ずつと甚内を見ずにゐるのです。(突然笑ふ)「甚内は貴様なぞの恩は受けぬ」……あの男はかう云ひました。しかしわたしは夜の明け次第、甚内の代りに殺されるのです。

ああ、おん母「まりや」様! わたしはこの二年間、甚内の恩を返したさに、どの位苦しんだか知れません。恩を返したさに?――いや、恩と云ふよりも、寧ろ恨を返したさにです。しかし甚内は何處にゐるか? 甚内は何をしてゐるか?――誰にそれがわかりませう? 第一甚内はどんな男か?――それさへ知つてゐるものはありません。わたしが遇つた贋雲水は四十前後の小男です。が、柳町の廓にゐたのは、まだ三十を越えてゐない、赧ら顔に鬚の生えた、浪人だと云ふではありませんか? 歌舞伎の小屋を擾がしたと云ふ、腰の曲つた紅毛人、妙國寺の財寶を掠めたと云ふ、前髮の垂れた若侍、――さう云ふのを皆甚内とすれば、あの男の正體を見分ける事さへ、到底人力には及ばない筈です。其處へわたしは去年の末から、吐血の病に罹つてしまひました。

どうか恨みを返してやりたい、――わたしは日毎に痩せ細りながら、その事ばかりを考へてゐ

ました。すると或夜わたしの心に、突然閃いた一策があります。「まりや」様！「まりや」様！この一策を御教へ下すつたのは、あなたの御恵みに違ひありません。唯わたしの體を捨てる、吐血の病に衰へ果てた、骨と皮ばかりの體を捨てる、――それだけの覺悟をしさへすれば、わたしの本望は遂げられるのです。わたしはその夜嬉しさの餘り、何時までも獨り笑ひながら、同じ言葉を繰返してゐました。――「甚内の身代りに首を打たれる。甚内の身代りに首を打たれる。…………」

甚内の身代りに首を打たれる――何とすばらしい事ではありませんか？　さうすれば勿論わたしと一しよに、甚内の罪も亡んでしまふ。――甚内は廣い日本國中、何處でも大威張に歩けるのです。その代り（再び笑ふ）――その代りわたしは一夜の内に、稀代の大賊になれるのです。呂宋助左衞門の手代だつたのも、備前宰相の伽羅を切つたのも、利休居士の友だちになつたのも、沙室屋の珊瑚樹を詐つたのも、伏見の城の金藏を破つたのも、八人の參河侍を斬り倒したのも、――ありとあらゆる甚内の名譽は、悉わたしに奪はれるのです。（三度笑ふ）云はば甚内を助けると同時に、甚内の名前を殺してしまふ、一家の恩を返すと同時に、わたしの恨みも返してしまふ、

――この位愉快な返報はありません。わたしがその夜嬉しさの餘り、笑ひ續けたのも當然です。今でも、――この牢の中でも、これが笑はずにゐられるでせうか？

わたしはこの策を思ひついた後、内裏へ盜みにはひりました。宵闇の夜の淺い内ですから、御簾越しに火影がちらついたり、松の中に花だけ仄めいたり、――そんな事も見たやうに覺えてゐます。が、長い廻廊の屋根から、人氣のない庭へ飛び下りると、忽ち四五人の警護の侍に、望みの通り搦められました。その時です。わたしを組み伏せた鬚侍は、一生懸命に繩をかけながら、「今度こそは甚内を手捕りにしたぞ」と、呟いてゐたではありませんか？　さうです。阿媽港甚内の外に、誰が内裏なぞへ忍びこみませう？　わたしはこの言葉を聞くと、必死にもがいてゐる間でも、思はず微笑を洩らしたものです。

「甚内は貴樣なぞの恩にはならぬ。」――あの男はかう云ひました。しかしわたしは夜の明け次第、甚内の代りに殺されるのです。何と云ふ氣味の好い面當てでせう。わたしは首を曝された儘、あの男の來るのを待つてやります。甚内はきつとわたしの首に、聲のない哄笑を感ずるでせう。「どうだ、彌三郎の恩返しは？」――その哄笑はかう云ふのです。「お前はもう甚内では無い。阿媽港

甚内はこの首なのだ、あの天下に噂の高い、日本第一の大盗人は！」（笑ふ）ああ、わたしは愉快です。この位愉快に思つた事は、一生に唯一度です。が、もし父の彌三右衛門に、わたしの曝し首を見られた時には、――（苦しさうに）勘忍して下さい。お父さん！　吐血の病に罹つたわたしは、たとひ首を打たれずとも、三年とは命は續かないのです。どうか不孝は勘忍して下さい、わたしは極道に生まれましたが、兎に角一家の恩だけは返す事が出來たのですから、………

（大正十一年三月）

仙人

皆さん。

私は今大阪にゐます、ですから大阪の話をしませう。

昔、大阪の町へ奉公に來た男がありました。名は何と云つたかわかりません。唯飯炊奉公に來た男ですから、權助とだけ傳はつてゐます。

權助は口入れ屋の暖簾をくぐると、煙管を啣へてゐた番頭に、かう口の世話を頼みました。

「番頭さん。私は仙人になりたいのだから、さう云ふ所へ住みこませて下さい。」

番頭は呆氣にとられたやうに、少時は口も利かずにゐました。

「番頭さん。聞えませんか？　私は仙人になりたいのだから、さう云ふ所へ住みこませて下さい。」

「まことに御氣の毒樣ですが、――」

番頭はやつと何時もの通り、煙草をすぱすぱ吸ひ始めました。
「手前の店ではまだ一度も、仙人なぞの口入れは引き受けた事はありませんから、どうか外へ御出でなすつて下さい。」
すると權助は不服さうに、千草の股引の膝をすすめながら、こんな理窟を云ひ出しました。
「それはちと話が違ふでせう。御前さんの店の暖簾には、何と書いてあると御思ひなさる？　萬口入れ所と書いてあるぢやありませんか？　萬と云ふからは何事でも、口入れをするのがほんたうです。それともお前さんの店では暖簾の上に、噓を書いて置いたつもりなのですか？」
成程から云はれて見ると、權助が怒るのも尤もです。
「いえ、暖簾に噓がある次第ではありません。何でも仙人になれるやうな奉公口を探せと仰有るのなら、明日又御出で下さい。今日中に心當りを尋ねて置いて見ますから。」
番頭は兎に角一時逃れに、權助の賴みを引き受けてやりました。が、何處へ奉公させたら、仙人になる修業が出來るか、もとよりそんな事なぞはわかる筈がありません。ですから一まづ權助を返すと、早速番頭は近所にある醫者の所へ出かけて行きました。さうして權助の事を話してか

ら、
「如何でせう？　先生。仙人になる修業をするには、何處へ奉公するのが近路でせう？」と、心配さうに尋ねました。
　これには醫者も困つたのでせう。少時はぼんやり腕組みをしながら、庭の松ばかり眺めてゐました。が番頭の話を聞くと、直ぐに横から口を出したのは、古狐と云ふ渾名のある、狡猾な醫者の女房です。
「それはうちへおよこしよ。うちにゐれば二三年中には、きつと仙人にして見せるから。」
「左樣ですか？　それは善い事を伺ひました。では何分願ひます。どうも仙人と御醫者樣とは、何處か縁が近いやうな心もちが致して居りましたよ。」
　何も知らない番頭は、頻に御時宜を重ねながら、大喜びで歸りました。
　醫者は苦い顏をした儘、その後を見送つてゐましたが、やがて女房に向ひながら、
「お前は何と云ふ莫迦な事を云ふのだ？　もしその田舍者が何年ゐても、一向仙術を教へてくれぬなぞと、不平でも云ひ出したら、どうする氣だ？」と忌忌しさうに小言を云ひました。

しかし女房はあやまる所か、鼻の先でふふんと笑ひながら、

「まあ、あなたは默つていらつしやい。あなたのやうに莫迦正直では、このせち辛い世の中に、御飯を食べる事も出來はしません。」と、あべこべに醫者をやりこめるのです。

さて明くる日になると約束通り、田舍者の權助は番頭と一しよにやつて來ました。今日はさすがに權助も、初の御目見えだと思つたせゐか、紋附の羽織を着てゐますが、見た所は唯の百姓と少しも違つた容子はありません。それが返つて案外だつたのでせう。醫者はまるで天竺から來た麝香獸でも見る時のやうに、じろじろその顏を眺めながら、

「お前は仙人になりたいのださうだが、一體どう云ふ所から、そんな望みを起したのだ？」と、不審さうに尋ねました。すると權助が答へるには、

「別にこれと云ふ訣もございませんが、唯あの大阪の御城を見たら、太閤樣のやうに偉い人でも、何時か一度は死んでしまふ。して見れば人間と云ふものは、いくら榮耀榮華をしても、果ないものだと思つたのです。」

「では仙人になれさへすれば、どんな仕事でもするだらうね？」

狡猾な醫者の女房は、隙かさず口を入れました。
「はい。仙人になれさへすれば、どんな仕事でも致します。」
「それでは今日から私の所に、二十年の間奉公おし。さうすればきつと二十年目に、仙人になる術を教へてやるから。」
「左樣でございますか？　それは何より難有うございます。」
「その代り向う二十年の間は、一文も御給金はやらないからね。」
「はい。はい。承知致しました。」
それから權助は二十年間、その醫者の家に使はれてゐました。水を汲む。薪を割る。飯を炊く。拭き掃除をする。おまけに醫者が外へ出る時は、薬箱を背負つて伴をする。――その上給金は一文でも、くれと云つた事がないのですから、この位重寶な奉公人は、日本中探してもありますまい。
が、とうとう二十年たつと、權助は又來た時のやうに、紋附の羽織をひつかけながら、主人夫婦の前へ出ました。さうして慇懃に二十年間、世話になつた禮を述べました。

「就いては兼ね兼ね御約速の通り、今日は一つ私にも、不老不死になる仙人の術を教へて貰ひたいと思ひますが。」

権助にかう云はれると、閉口したのは主人の醫者です。何しろ一文も給金をやらずに、二十年間も使つた後ですから、今更仙術は知らぬなぞとは、云へた義理ではありません。醫者はそこで仕方なしに、

「仙人になる術を知つてゐるのは、おれの女房の方だから、女房に敎へて貰ふが好い。」と、素つ氣なく横を向いてしまひました。

しかし女房は平氣なものです。

「では仙術を敎へてやるから、その代りどんなむづかしい事でも、私の云ふ通りにするのだよ。さもないと仙人になれないばかりか、又向う二十年の間、御給金なしに奉公しないと、すぐに罰が當つて死んでしまふからね。」

「はい。どんなむづかしい事でも、きつと仕遂げて御覧に入れます。」

権助はほくほく喜びながら、女房の云ひつけを待つてゐました。

「それではあの庭の松に御登り。」

女房はかう云ひつけました。もとより仙人になる術なぞは、知つてゐる筈がありませんから、何でも權助に出來さうもない、むづかしい事を云ひつけて、もしそれが出來ない時には、又向う二十年の間、唯で使はうと思つたのでせう。しかし權助はその言葉を聞くとすぐに庭の松へ登りました。

「もつと高く。もつとずつと高く御登り。」

女房は縁先に佇みながら、松の上の權助を見上げました。權助の着た紋附の羽織は、もうその大きな庭の松でも、一番高い梢にひらめいてゐます。

「今度は右の手を御放し。」

權助は左手にしつかりと、松の太枝をおさへながら、そろそろ右の手を放しました。

「それから左の手も放しておしまひ。」

「おい。おい。左の手を放さうものなら、あの田舍者は落ちてしまふぜ。落ちれば下には石があるし、とても命はありやしない。」

醫者もとうとう緣先へ、心配さうな顏を出しました。

「あなたの出る幕ではありませんよ。まあ、私に任せて御置きなさい。――さあ、左の手を放すのだよ。」

權助はその言葉が終らない内に、思ひ切つて左手も放しました。何しろ木の上に登つた儘、兩手とも放してしまつたのですから、落ちずにゐる訣はありません。あつと云ふ間に權助の體は、權助の着てゐた紋附の羽織は、松の梢から離れました。が、離れたと思ふと落ちもせずに、不思議にも晝間の中空へ、まるで操り人形のやうに、ちやんと立止つたではありませんか？

「どうも難有うございます。おかげ樣で私も一人前の仙人になれました。」

權助は叮嚀に御時宜をすると、靜かに靑空を踏みながら、だんだん高い雲の中へ昇つて行つてしまひました。

醫者夫婦はどうしたか、それは誰も知つてゐません。唯その醫者の庭の松は、ずつと後までも殘つてゐました。何でも淀屋辰五郎は、この松の雪景色を眺める爲に、四抱へにも餘る大木をわざわざ庭へ引かせたさうです。

（大正十一年三月）

庭

上

それはこの宿の本陣に當る、中村と云ふ舊家の庭だつた。

庭は御維新後十年ばかりの間は、どうにか舊態を保つてゐた。瓢箪なりの池も澄んでゐれば、築山の松の枝もしだれてゐた。栖鶴軒、洗心亭、――さう云ふ四阿も殘つてゐた。池の窮まる裏山の崖には、白白と瀧も落ち續けてゐた。和の宮様御下向の時、名を賜はつたと云ふ石燈籠も、やはり年年に擴がり勝ちな山吹の中に立つてゐた。しかしその何處かにある荒廢の感じは隱せなかつた。殊に春さき、――庭の内外の木木の梢に、一度に若芽の萌え立つ頃には、この明媚な人工の景色の背後に、何か人間を不安にする、野蠻な力の迫つて來た事が、一層露骨に感ぜられるのだつた。

中村家の隱居、――傳法肌の老人は、その庭に面した母屋の炬燵に、頭瘡を病んだ老妻と、碁

を打つたり花合せをしたり、屈託のない日を暮してゐた。それでも時時は立て續けに、五六番老妻に勝ち越されると、むきになつて怒り出す事もあつた。家督を繼いだ長男は、從兄妹同志の新妻と、廊下續きになつてゐる、手狹い離れに住んでゐた。長男は表徳を文室と云ふ、癇癖の強い男だつた。病身な妻や弟たちは勿論、隱居さへ彼には憚かつてゐた。唯その頃この宿にゐた、乞食宗匠の井月ばかりは、度度彼の所へ遊びに來た。長男も不思議に井月にだけは、酒を飲ませたり字を書かせたり、機嫌の好い顏を見せてゐた。「山はまだ花の香もあり時鳥、井月。ところどころに瀧のほのめく、文室」――そんな附合も殘つてゐる。その外にまだ弟が二人、――次男は緣家の穀屋へ養子に行き、三男は五六里離れた町の、大きい造り酒屋に勤めてゐた。彼等は二人とも云ひ合せたやうに、滅多に本家には近づかなかつた。三男は居どころが遠い上に、もともと當主とは氣が合はなかつたから。次男は放蕩に身を持ち崩した結果、養家にも殆歸らなかつたから。

　庭は二年三年と、だんだん荒廢を加へて行つた。池には南京藻が浮び始め、植込みには枯木が交るやうになつた。その内に隱居の老人は、或旱りの烈しい夏、腦溢血の爲に頓死した。頓死す

る四五日前、彼が燒酎を飮んでゐると、池の向うにある洗心亭へ、白い裝束をした公卿が一人、何度も出たりはひつたりしてゐた。少くとも彼には晝日なか、そんな幻が見えたのだつた。翌年は次男が春の末に、養家の金をさらつたなり、酌婦と一しよに駈落ちをした。その又秋には長男の妻が、月足らずの男子を產み落した。

長男は父の死んだ後、母と母屋に住まつてゐた。その跡の離れを借りたのは、土地の小學校の校長だつた。校長は福澤諭吉翁の實利の說を奉じてゐたから、庭にも果樹を植ゑるやうに、何時か長男を說き伏せてゐた。爾來庭は春になると、見慣れた松や柳の間に、桃だの杏だの李だの、雜色の花を盛るやうになつた。校長は時時長男と、新しい果樹園を步きながら、「この通り立派に花見も出來る。一擧兩得ですね」と批評したりした。しかし築山や池や四阿は、それだけに又以前よりは、一層影が薄れ出した。云はば自然の荒廢の外に、人工の荒廢も加はつたのだつた。

その秋は又裏の山に、近年にない山火事があつた。それ以來池に落ちてゐた瀧は、ぱつたり水が絕えてしまつた。と思ふと雪の降る頃から、今度は當主が煩ひ出した。醫者の見立てでは昔の癆症、今の肺病とか云ふ事だつた。彼は寢たり起きたりしながら、だんだん癇ばかり昂らせて行

つた。現に翌年の正月には、年始に來た三男と激論の末、手炙りを投げつけた事さへあつた。三男はその時歸つたぎり、兄の死に目にも會はずにしまつた。當主はそれから一年餘り後、夜伽の妻に守られながら、蚊帳の中に息をひきとつた。「蛙が啼いてゐるな。井月はどうしつら？」――これが最期の言葉だつた。が、もう井月はとうの昔、この邊の風景にも飽きたのか、さつぱり乞食にも來なくなつてゐた。

三男は當主の一週忌をすますと、主人の末娘と結婚した。さうして離れを借りてゐた小學校長の轉任を幸ひ、新妻と共處へ移つて來た。離れには黑塗の簞笥が來たり、紅白の綿が飾られたりした。しかし母屋ではその間に、當主の妻が煩ひ出した。病名は夫と同じだつた。父に別れた一粒種の子供、――廉一も母が血を吐いてからは、毎晩祖母と寢かせられた。祖母は床へはひる前に、必頭に手拭をかぶつた。それでも頭瘡の臭氣をたよりに、夜更には鼠が近寄つて來た。勿論手拭を忘れでもすれば、鼠に頭を嚙まれる事もあつた。同じ年の暮に當主の妻は、油火の消えるやうに死んで行つた。その又野邊送りの翌日には、築山の陰の棲鶴軒が、大雪の爲につぶされてしまつた。

もう一度春がめぐつて來た時、庭は唯濁つた池のほとりに、洗心亭の茅屋根を殘した、雜木原の木の芽に變つたのである。

中

或雪曇りの日の暮方、駈落ちをしてから十年目に、次男は父の家へ歸つて來た。父の家――と云つてもそれは事實上、三男の家と同樣だつた。三男は格別嫌な顏もせず、しかし又格別喜びもせず、云はば何事もなかつたやうに、道樂者の兄を迎へ入れた。

爾來次男は母屋の佛間に、惡疾のある體を橫たへたなり、ぢつと炬燵を守つてゐた。佛間には大きい佛壇に、父や兄の位牌が並んでゐた。彼はその位牌の見えないやうに、佛壇の障子をしめ切つて置いた。まして母や弟夫婦とは、三度の食事を共にする外は、殆顏も合せなかつた。唯みなし兒の廉一だけは、時時彼の居間へ遊びに行つた。彼は廉一の紙石板へ、山や船を描いてやつた。「向島花ざかり、お茶屋の姐さんちよいとお出で。」――どうかするとそんな昔の唄が、覺束ない筆蹟を見せる事もあつた。

その内に又春になつた。庭には生ひ伸びた草木の中に、乏しい桃や杏が花咲き、どんより水光りをさせた池にも、洗心亭の影が映り出した。しかし次男は相不變、たつた一人佛間に閉ぢこもつたぎり、晝でも大抵はうとうとしてゐた。すると或日彼の耳には、かすかな三味線の音が傳はつて來た。と同時に唄の聲も、とぎれとぎれに聞え始めた。「この度諏訪の戰ひに、松本身内の吉江樣、大砲固めにおはします。……」次男は横になつた儘、心もち首を擡げて見た。と、唄も三味線も、茶の間にゐる母に違ひなかつた。「その日の出で立ち花やかに、勇み進みし働きは、天つ晴勇士と見えにける。……」母は孫にでも聞かせてゐるのか、大津繪の替へ唄を唄ひ續けた。しかしそれは傳法肌の隱居が、何處かの花魁に習つたと云ふ、二三十年以前の流行唄だつた。「敵の大玉身に受けて、是非もなや、惜しき命を豐橋に、草葉の露と消えぬとも、末世末代名は殘る。……」次男は無精髭の伸びた顏に、何時か妙な眼を輝かせてゐた。

それから二三日たつた後、三男は蕗の多い築山の陰に、土を掘つてゐる兄を發見した。次男は息を切らせながら、不自由さうに鍬を揮つてゐた。その姿は何處か滑稽な中に、眞劍な意氣組みもあるものだつた。「あに樣、何をしてゐるだ?」——三男は卷煙草を啣へたなり、後から兄へ聲

をかけた。「おれか？」――次男は眩しさうに弟を見上げた。「こけへ今せんげ（小流れ）を造らうと思ふ。」「せんげを造つて何しるだ？」「庭をもとのやうにしつと思ふだ。」――三男はにやにや笑つたぎり、何ともその先は尋ねなかつた。

次男は毎日鍬を持つては、熱心にせんげを造り續けた。が、病に弱つた彼には、それだけでも容易な仕事ではなかつた。彼は第一に疲れ易かつた。その上慣れない仕事だけに、豆を拵へたり、生爪を剝いだり、何かと不自由も起り勝ちだつた。彼は時時鍬を捨てると、死んだやうに其處へ橫になつた。彼のまはりには何時になつても、庭をこめた陽炎の中に、花や若葉が煙つてゐた。しかし靜かな何分かの後、彼は又蹌踉と立ち上ると、執拗に鍬を使ひ出すのだつた。

しかし庭は幾日たつても、捗捗しい變化を示さなかつた。池には相不變草が茂り、植込みにも雜木が枝を張つてゐた。殊に果樹の花の散つた後は、前よりも荒れたかと思ふ位だつた。のみならず一家の老若も、次男の仕事には同情がなかつた。山氣に富んだ三男は、米相場や蠶に沒頭してゐた。三男の妻は次男の病に、女らしい嫌惡を感じてゐた。母も、――母は彼の體の爲に、土いぢりの過ぎるのを惧れてゐた。次男はそれでも剛情に、人間と自然とへ背を向けながら、少し

づつ庭を造り變へて行つた。
その內に或雨上りの朝、彼は庭へ出かけて見ると、蕗の垂れかかつたせんげの緣に、石を並べてゐる廉一を見つけた。「叔父さん。」――廉一は嬉しさうに彼を見上げた。「おれにも今日から手傳はせておくりや。」「うん、手傳つてくりや。」次男もこの時は久しぶりに、晴れ晴れした微笑を浮べてゐた。それ以來廉一は、外へも出ずにせつせと叔父の手傳ひをし出した。――次男は又甥を慰める爲に、木かげに息を入れる時には、海とか東京とか鐵道とか、廉一の知らない話をして聞かせた。廉一は靑梅を嚙じりながら、まるで催眠術にでもかかつたやうに、ぢつとその話に聞き入つてゐた。
その年の梅雨は空梅雨だつた。彼等、――年とつた癈人と童子とは、烈しい日光や草いきれにもめげず、池を掘つたり木を伐つたり、だんだん仕事を擴げて行つた。が、外界の障害にはどうにかかうにか打ち克つて行つても、內面の障害だけは仕方がなかつた。次男は殆幻のやうに昔の庭を見る事が出來た。しかし庭木の配りとか、或は徑のつけ方とか、細かい部分の記憶になると、はつきりした事はわからなかつた。彼は時時仕事の最中、突然鍬を杖にした儘、ぼんやりあ

たりを見廻す事があつた。「何しただい？」――廉一は必叔父の顔へ、不安らしい目付きを擧げるのだつた。「此處はもとどうなつてゐつらなあ？」――汗になつた叔父はうろうろしながら、何時も亦獨り語しか云はなかつた。「この楓は此處になかつらと思ふがなあ。」廉一は唯泥まみれの手に、蟻でも殺すより外はなかつた。

内面の障害はそればかりではなかつた。次第に夏も深まつて來ると、次男は絶え間ない過勞の爲か頭も何時か混亂して來た。一度掘つた池を埋めたり、松を拔いた跡へ松を植ゑたり、――さう云ふ事も度度あつた。殊に廉一を怒らせたのは、池の杭を造る爲めに、水際の柳を伐つた事だつた。「この柳はこの間植ゑたばつかだに。」――廉一は叔父を睨みつけた。「さうだつたかなあ。おれには何だかわからなくなつてしまつた。」――叔父は憂鬱な目をしながら、日盛りの池を見つめてゐた。

それでも秋が來た時には、草や木の簇がつた中から、朧げに庭も浮き上つて來た。勿論昔に比べれば、栖鶴軒も見えなかつたし、瀧の水も落ちてはゐなかつた。いや、名高い庭師の造つた、優美な昔の趣は、殆ど何處にも見えなかつた。しかし「庭」は其處にあつた。池はもう一度澄んだ

水に、圓い築山を映してゐた。松ももう一度洗心亭の前に、悠悠と枝をさしのべてゐた。が、庭が出來ると同時に、次男は床につき切りになつた。熱も毎日下らなければ、體の節節も痛むのだつた。「あんまり無理ばつかしるせゐぢや。」——枕もとに坐つた母は、何度も同じ愚痴を繰り返した。しかし次男は幸福だつた。庭には勿論何箇所でも、直したい所が殘つてゐた。が、それは仕方がなかつた。兎に角骨を折つた甲斐だけはある。——其處に彼は滿足してゐた。十年の苦勞は諦めを教へ、諦めは彼を救つたのだつた。

その秋の末、次男は誰も氣づかない内に、何時か息を引きとつてゐた。それを見つけたのは廉一だつた。彼は大聲を擧げながら、緣續きの離れへ走つて行つた。一家は直に死人のまはりへ、驚いた顏を集めてゐた。「見ましよ。兄樣は笑つてゐるやうだに。」——三男は母をふり返つた。「おや、今日は佛樣の障子が明いてゐる。」——三男の妻は死人を見ずに、大きい佛壇を氣にしてゐた。

次男の野邊送りをすませた後、廉一はひとり洗心亭に、坐つてゐる事が多くなつた。何時も途方に暮れたやうに、晚秋の水や木を見ながら、…………

下

それはこの宿の本陣に當る、中村と云ふ舊家の庭だつた。それが舊に復した後、まだ十年とたたない内に、今度は家ぐるみ破壞された。破壞された跡には停車場が建ち、停車場の前には小料理屋が出來た。

中村の本家はもうその頃、誰も殘つてゐなかつた。母は勿論とうの昔、亡い人の數にはひつてゐた。三男も事業に失敗した揚句、大阪へ行つたとか云ふ事だつた。

汽車は毎日停車場へ來ては、又停車場を去つて行つた。停車場には若い驛長が一人、大きい机に向つてゐた。彼は閑散な事務の合ひ間に、青い山山を眺めやつたり、土地ものの驛員と話したりした。しかしその話の中にも、中村家の噂は上らなかつた。況や彼等のゐる所に、築山や四阿のあつた事は、誰一人考へもしないのだつた。

が、その間に廉一は、東京赤坂の或洋畫研究所に、油畫の畫架に向つてゐた。天窓の光、油繪の具の匂、桃割に結つたモデルの娘、――研究所の空氣は故郷の家庭と、何の連絡もないものだ

つた。しかしブラッシュを動かしてゐると、時時彼の心に浮ぶ、寂しい老人の顔があつた。その顔は又微笑しながら、不斷の制作に疲れた彼へ、きつとかう聲をかけるのだつた。「お前はまだ子供の時に、おれの仕事を手傳つてくれた。今度はおれに手傳はせてくれ。」……

廉一は今でも貧しい中に、毎日油畫を描き續けてゐる。三男の噂は誰も聞かない。

（大正十一年六月）

一夕話

「何しろこの頃は油斷がならない。和田さへ藝者を知つてゐるんだから。」

藤井といふ辯護士は、老酒の盃を干してから、大仰に一同の顏を見まはした。圓卓のまはりを圍んでゐるのは同じ學校の寄宿舍にゐた、我我六人の中年者である。場所は日比谷の陶陶亭の二階、時は六月の或雨の夜、――勿論藤井のかういつたのは、もうそろそろ我我の顏にも、醉色の見え出した時分である。

「僕はそいつを見せつけられた時には、實際今昔の感に堪へなかつたね。――」

藤井は面白さうに辯じ續けた。

「醫科の和田といつた日には、柔道の選手で、賄征伐の大將で、リヴィングストンの崇拜家で、寒中一重物で通した男で、――一言にいへば豪傑だつたぢやないか？　それが君、藝者を知つてゐるんだ。しかも柳橋の小ゑんといふ、――」

「君はこの頃河岸を變へたのかい？」

突然横槍を入れたのは、飯沼といふ銀行の支店長だつた。

「河岸を變へた？　なぜ？」

「君がつれて行つた時なんだらう、和田がその藝者に遇つたといふのは？」

「早まつちやいけない。誰が和田なんぞをつれて行くもんか。――」

藤井は昂然と眉を擧げた。

「あれは先月の幾日だつたかな？　何でも月曜か火曜だつたがね。久しぶりに和田と顏を合せると、淺草へ行かうといふぢやないか？　淺草はあんまりぞつとしないが、親愛なる舊友のいふ事だから、僕も素直に贊成してさ。眞つ晝間六區へ出かけたんだ。――」

「すると活動寫眞の中にでもゐ合せたのか？」

今度はわたしが先くぐりをした。

「活動寫眞ならばまだ好いが、メリイ・ゴオ・ラウンドと來てゐるんだ。おまけに二人とも木馬の上へ、ちやんと跨つてゐたんだからな。今考へても莫迦莫迦しい次第さ。しかしそれも僕の發

議ぢやない。あんまり和田が乘りたがるから、おつき合ひにちよいと乘つて見たんだ。——だがあいつは樂ぢやないぜ。野口のやうな胃弱は乘らないが好い。」
「子供ぢやあるまいし。木馬になんぞ乘るやつがあるもんか？」
野口といふ大學教授は、靑黑い松花を頰張つたなり、蔑むやうな笑ひ方をした。が、藤井は無頓着に、時時和田へ目をやつては、得得と話を續けて行つた。
「和田の乘つたのは白い木馬、僕の乘つたのは赤い木馬なんだが、樂隊と一しよにまはり出された時には、どうなる事かと思つたね。尻は躍るし、目はまはるし、振り落されないだけが見つけものなんだ。が、その中でも目についたのは、欄干の外の見物の間に、藝者らしい女が交つてゐる。色の蒼白い、目の沾んだ、何處か妙に憂鬱な、——」
「それだけわかつてゐれば大丈夫だ。目がまはつたも怪しいもんだぜ。」
飯沼はもう一度口を挾んだ。
「だからその中でもといつてゐるぢやないか？　髮は勿論銀杏返し、なりは薄靑い縞のセルに、何か更紗の帶だつたかと思ふ。兎に角花柳小說の插畫のやうな、楚楚たる女が立つてゐるんだ。

するとその女が、――どうしたと思ふ？　僕の顏をちらりと見るなり、正に嫣然と一笑したんだ。おやと思つたが間に合はない。こつちは木馬に乘つてゐるんだから、忽ち女の前は通りすぎてしまふ。誰だつたかなと思ふ時には、もうわが赤い木馬の前へ、樂隊の連中が現れてゐる。――」

我我は皆笑ひ出した。

「二度目もやはり同じ事さ。又女がにつこりする。と思ふと見えなくなる。跡は唯前後左右に、木馬が跳ねたり、馬車が躍つたり、然らずんば喇叭がぶかぶかいつたり、太鼓がどんどん鳴つてゐるだけなんだ。――僕はつらつらさう思つたね。これは人生の象徵だ。我我は皆同じやうに實生活の木馬に乘せられてゐるから、時たま『幸福』にめぐり遇つても、摑まへない内にすれ違つてしまふ。もし『幸福』を摑まへる氣ならば、一思ひに木馬を飛び下りるが好い。――」

「まさかほんたうに飛び下りはしまいな？」

からかふやうにかういつたのは、木村といふ電氣會社の技師長だつた。

「冗談いつちやいけない。哲學は哲學、人生は人生さ。――所がそんな事を考へてゐる内に、三度目になつたと思ひ給へ。その時ふと氣がついて見ると、――これには僕も驚いたね。あの女が

笑顔を見せてゐたのは、殘念ながら僕にぢやない。賄征伐の大將、リヴイングストンの崇拜家、ETC. ETC. ……ドクタア和田良平にだつたんだ。」

「しかしまあ哲學通りに、飛び下りなかつただけ仕合せだつたよ。」

無口な野口も冗談をいつた。しかし藤井は相不變話を續けるのに熱中してゐた。

「和田のやつも女の前へ來ると、きつと嬉しさうに御時宜をしてゐる。それが又から及び腰に、白い木馬に跨つた儘、ネクタイだけ前へぶらさげてね。——」

「嘘をつけ。」

和田もとうとう沈默を破つた。彼はさつきから苦笑をしては、老酒ばかりひつかけてゐたのである。

「何、嘘なんぞつくもんか。——が、その時はまだ好いんだ。愈メリイ・ゴオ・ラウンドを出たとなると、和田は僕も忘れたやうに、女とばかりしやべつてゐるぢやないか？　女も先生先生といつてゐる。埋まらない役まはりは僕一人さ。——」

「成程、これは珍談だな。——おい、君、かうなればもう今夜の會費は、そつくり君に持つて貰

ふせ。」

飯沼は大きい魚翅の鉢へ、銀の匙を突きこみながら、隣にゐる和田をふり返つた。

「莫迦な。あの女は友だちの圍ひものなんだ。」

和田は兩肘をついた儘、ぶつきらぼうにいひ放つた。彼の顏は見渡した所、一座の誰よりも日に燒けてゐる。目鼻立ちも甚だ都會じみてゐない。其上五分刈りに刈りこんだ頭は、殆ど岩石のやうに丈夫さうである。彼は昔或對校試合に、左の臂を挫きながら、五人までも敵を投げた事があつた。——さういふ往年の豪傑ぶりは、黑い背廣に縞のズボンといふ、當世流行のなりはしてゐても、何處かにありありと殘つてゐる。

「飯沼！　君の圍ひ者ぢやないか？」

藤井は額越しに相手を見ると、にやりと醉つた人の微笑を洩らした。

「さうかも知れない。」

飯沼は冷然と受け流してから、もう一度和田をふり返つた。

「誰だい、その友だちといふのは？」

「若槻といふ實業家だが、――この中でも誰か知つてゐはしないか？　慶應か何か卒業してから、今ぢや自分の銀行へ出てゐる、年配も我我と同じ位の男だ。色の白い、優しい目をした、短い髭を生やしてゐる、――さうさな、まあ一言にいへば、風流愛すべき好男子だらう。」

「若槻峯太郎、俳號は青蓋ぢやないか？」

わたしは横合ひから口を挾んだ。その若槻といふ實業家とは、わたしもつい四五日前、一しよに芝居を見てゐたからである。

「さうだ。青蓋句集といふのを出してゐる、――あの男が小ゑんの檀那なんだ。いや、二月程前までは檀那だつたんだ。今ぢや全然手を切つてゐるが、――」

「へえ、ぢやあの若槻といふ人は、――」

「僕の中學時代の同窓なんだ。」

「これは愈穩かぢやない。」

藤井は又陽氣な聲を出した。

「君は我我が知らない間に、その中學時代の同窓なるものと、花を折り柳に攀ぢ、――」

「莫迦をいへ。僕があの女に會つたのは、大學病院へやつて來た時に、若槻にもちよいと頼まれてゐたから、便宜を圖つてやつただけなんだ。蓄膿症か何かの手術だつたが、——」

和田は老酒をぐいとやつてから、妙に考へ深い目つきになつた。

「しかしあの女は面白いやつだ。」

「惚れたかね？」

木村は靜かにひやかした。

「それは或は惚れたかも知れない。或は又ちつとも惚れなかつたかも知れない。が、そんな事よりも話したいのは、あの女と若槻との關係なんだ。——」

和田はかう前置きをしてから、何時にない雄辯を振ひ出した。

「僕は藤井の話した通り、この間偶然小ゑんに逢つた。所が遇つて話して見ると、小ゑんはもう二月程前に、若槻と別れたといふぢやないか？　なぜ別れたと訊いて見ても、返事らしい返事は何もしない。唯寂しさうに笑ひながら、もともとわたしはあの人のやうに、風流人ぢやないんですといふんだ。

「僕も其時は立入つても訊かず、夫なり別れてしまつたんだが、つい昨日、――昨日も午過ぎは雨が降つてゐたらう。あの雨の最中に若槻から、飯を食ひに來ないかといふ手紙なんだ。丁度僕も暇だつたし、早めに若槻の家へ行つて見ると、先生は氣の利いた六疊の書齋に、相不變悠悠と讀書をしてゐる。僕はこの通り野蠻人だから、風流の何たるかは全然知らない。しかし若槻の書齋へはひると、藝術的とか何とかいふのは、かういふ暮しだらうといふ氣がするんだ。まづ床の間には何時行つても、古い懸物が懸つてゐる。花も始終絶やした事はない。書物も和書の本箱の外に、洋書の書棚も並べてある。おまけに華奢な机の側には、三味線も時時は出してあるんだし。その上其處にゐる若槻自身も、何處か當世の浮世畫じみた、通人らしいなりをしてゐる。昨日も妙な着物を着てゐるから、それは何だねと訊いて見ると、占城といふ物だと答へるぢやないか？僕の友だち多しと雖も、占城なぞといふ着物を着てゐるものは、若槻を除いては一人もあるまい。――まづあの男の暮しぶりといへば、萬事かういつた調子なんだ。

「僕はその日膳を前に、若槻と獻酬を重ねながら、小ゑんとのいきさつを聞かされたんだ。小ゑんには外に男がある。それはまあ格別驚かずとも好い。が、その相手は何かと思へば、浪花節語

りの下つ端なんださうだ。君たちもこんな話を聞いたら、小ゑんの愚を晒はずにはゐられないだらう。僕も實際その時には、苦笑さへ出來ない位だつた。

「君たちは勿論知らないが、小ゑんは若槻に三年この方、隨分盡して貰つてゐる。若槻は小ゑんの母親ばかりか、妹の面倒も見てやつてゐた。その又小ゑん自身にも、讀み書きといはず藝事といはず、何でも好きな事を仕込ませてゐた。小ゑんは踊りも名を取つてゐる。長唄も柳橋では指折りださうだ。その外發句も出來るといふし、千蔭流とかの假名も上手だといふ。それも皆若槻のおかげなんだ。さういふ消息を知つてゐる僕は、君たちさへ笑止に思ふ以上、呆れ返らざるを得ないぢやないか？

「若槻は僕にかういふんだ。何、あの女と別れる位は、別に何とも思つてはゐません。が、わたしは出來る限り、あの女の教育に盡して來ました。どうか何事にも理解の屆いた、趣味の廣い女に仕立ててやりたい、――さういふ希望を持つてゐたのです。それだけに今度はがつかりしました。何も男を拵へるのなら、浪花節語りには限らないものを。あんなに藝事には身を入れてゐても、根性の卑しさは直らないかと思ふと、實際苦苦しい氣がするのです。……

「若槻は又かういふんだ。あの女はこの半年ばかり、多少ヒステリツクにもなつてゐたのでせう。一時は殆毎日のやうに、今日限り三味線を持たないとかいつては、子供のやうに泣いてゐました。それが又なぜだと訊ねて見ると、わたしはあの女を好いてゐない、遊藝を習はせるのもその爲だなぞと、妙な理窟をいひ出すのです。そんな時はわたしが何といつても、耳にかける氣色さへありません。唯もうわたしは薄情だと、それぱかり口惜しさうに繰返すのです。尤も發作さへすんでしまへば、何時も笑ひ話になるのですが、……

「若槻は又かういふんだ。何でも相手の浪花節語りは、始末に終へない亂暴者ださうです。前に馴染だつた鳥屋の女中に、男か何か出來た時には、その女中と立ち廻りの喧嘩をした上、大怪我をさせたといふぢやありませんか？　この外にもまだあの男には、無理心中をしかけた事だの、師匠の娘と駈落ちをした事だの、いろいろ惡い噂も聞いてゐます。そんな男に引懸かるといふのは、一體どういふ量見なのでせう。……

「僕は小ゑんの不しだらには、呆れ返らざるを得ないといつた。しかし若槻の話を聞いてゐる内に、だんだん僕を動かして來たのは、小ゑんに對する同情なんだ。成程若槻は檀那としては、當

世稀に見る通人かも知れない。が、あの女と別れる位は、何でもありませんといつてゐるぢやないか？ たとひそれは辭令にしても、猛烈な執着はないに違ひない。猛烈な、――たとへばその浪花節語りは、女の薄情を憎む餘り、大怪我をさせたといふ事だらう。僕は小ゑんの身になつて見れば、上品でも冷淡な若槻よりも、下品でも猛烈な浪花節語りに、打ち込むのが自然だと考へるんだ。小ゑんは諸藝を仕込ませるのも、若槻に愛のない證據だといつた。僕はこの言葉の中にも、ヒステリイばかりを見ようとはしない。小ゑんはやはり若槻との間に、ギヤツプのある事を知つてゐたんだ。

「しかし僕も小ゑんの爲に、浪花節語りと出來た事を祝福しようとは思つてゐない。幸福になるか不幸になるか、それはどちらともいはれないだらう。――が、もし不幸になるとすれば、呪はるべきものは男ぢやない。小ゑんを其處に至らしめた、通人若槻青蓋だと思ふ。若槻は――いや、當世の通人はいづれも個人として考へれば、愛すべき人間に相違あるまい。彼等は芭蕉を理解してゐる。レオ・トルストイを理解してゐる。池大雅を理解してゐる。武者小路實篤を理解してゐる。カアル・マルクスを理解してゐる。しかしそれが何になるんだ？ 彼等は猛烈な戀愛を知ら

ない。猛烈な創造の歡喜を知らない。猛烈な道德的情熱を知らない。猛烈な、――凡そこの地球を壯嚴にすべき、猛烈な何物も知らずにゐるんだ。其處に彼等の致命傷もあれば、彼等の害毒も潜んでゐると思ふ。害毒の一つは能動的に、他人をも通人に變らせてしまふ。害毒の二つは反動的に、一層他人を俗にする事だ。小ゑんの如きはその例ぢやないか？　昔から喉の渇いてゐるものは、泥水でも飲むときまつてゐる。小ゑんも若槻に圍はれてゐなければ、浪花節語りとは出來なかつたかも知れない。

「もし又幸福になるとすれば、――いや、或は若槻の代りに、浪花節語りを得た事だけでも、幸福は確に幸福だらう。さつき藤井がいつたぢやないか？　我我は皆同じやうに、實生活の木馬に乘せられてゐるから、時たま『幸福』にめぐり遇つても、摑まへない内にすれ違つてしまふ。もし『幸福』を摑まへる氣ならば、一思ひに木馬を飛び下りるが好い。――いはば小ゑんも一思ひに、實生活の木馬を飛び下りたんだ。この猛烈な歡喜や苦痛は、若槻如き通人の知る所ぢやない。僕は人生の價値を思ふと、百の若槻には唾を吐いても、一の小ゑんを尊びたいんだ。

「君たちはさう思はないか？」

和田は醉眼を輝かせながら、聲のない一座を見まはした。が、藤井は何時の間にか、圓卓に首を垂らしたなり、氣樂さうにぐつすり眠こんでゐた。

（大正十一年六月）

六の宮の姫君

一

六の宮の姫君の父は、古い宮腹の生れだつた。が、時勢にも遅れ勝ちな、昔氣質の人だつたから、官も兵部大輔より昇らなかつた。姫君はさう云ふ父母と一しよに、六の宮のほとりにある、木高い屋形に住まつてゐた。六の宮の姫君と云ふのは、その土地の名前に據つたのだつた。

父母は姫君を寵愛した。しかしやはり昔風に、進んでは誰にもめあはせなかつた。誰か云ひ寄る人があればと、心待ちに待つばかりだつた。姫君も父母の教へ通り、つつましい朝夕を送つてゐた。それは悲しみも知らないと同時に、喜びも知らない生涯だつた。が、世間見ずの姫君は、格別不滿も感じなかつた。「父母さへ達者でゐてくれれば好い。」――姫君はさう思つてゐた。

古い池に枝垂れた櫻は、年毎に乏しい花を開いた。その内に姫君も何時の間にか、大人寂びた美しさを具へ出した。が、頼みに思つた父は、年頃酒を過ごした爲に、突然故人になつてしまつ

た。のみならず母も半年ほどの内に、返らない歎きを重ねた揚句、とうとう父の跡を追つて行つた。姫君は悲しいと云ふよりも、途方に暮れずにはゐられなかつた。實際ふところ子の姫君には、たつた一人の乳母の外に、たよるものは何もないのだつた。

乳母はけなげにも姫君の爲に、骨身を惜まず働き續けた。が、家に持ち傳へた螺鈿の手筥や白がねの香爐は、何時か一つづつ失はれて行つた。と同時に召使ひの男女も、誰からか暇をとり始めた。姫君にも暮らしの辛い事は、だんだんはつきりわかるやうになつた。しかしそれをどうする事も、姫君の力には及ばなかつた。姫君は寂しい屋形の對に、やはり昔と少しも變らず、琴を引いたり歌を詠んだり、單調な遊びを繰返してゐた。

すると或秋の夕ぐれ、乳母は姫君の前へ出ると、考へ考へこんな事を云つた。

「甥の法師の頼みますには、丹波の前司なにがしの殿が、あなた樣に會はせて頂きたいとか申して居るさうでございます。前司はかたちも美しい上、心ばへも善いさうでございますし、前司の父も受領とは申せ、近い上達部の子でもございますから、お會ひになつては如何でございませう？　かやうに心細い暮しをなさいますよりも、少しは益しかと存じますが。……」

姫君は忍び音に泣き初めた。その男に肌身を任せるのは、不如意な暮しを扶ける爲に、體を賣るのも同様だつた。勿論それも世の中には多いと云ふ事は承知してゐた。が、現在さうなつて見ると、悲しさは又格別だつた。姫君は乳母と向き合つた儘、葛の葉を吹き返す風の中に、何時までも袖を顏にしてゐた。……

二

しかし姫君は何時の間にか、夜毎に男と會ふやうになつた。男は乳母の言葉通りやさしい心の持ち主だつた。顏かたちもさすがにみやびてゐた。その上姫君の美しさに、何も彼も忘れてゐる事は、殆誰の目にも明らかだつた。姫君も勿論この男に、惡い心は持たなかつた。時には頼もしいと思ふ事もあつた。が、蝶鳥の几帳を立てた陰に、燈臺の光を眩しがりながら、男と二人むつびあふ時にも、嬉しいとは一夜も思はなかつた。

その内に屋形は少しづつ、花やかな空氣を加へ初めた。黑棚や簾も新たになり、召使ひの數も殖えたのだつた。乳母は勿論以前よりも、活き活きと暮しを取り賄つた。しかし姫君はさう云ふ

變化も、寂しさうに見てゐるばかりだつた。

或時雨の渡つた夜、男は姫君と酒を酌みながら、丹波の國にあつたと云ふ、氣味の惡い話をした。出雲路へ下る旅人が大江山の麓に宿を借りた。宿の妻は丁度その夜、無事に女の子を產み落した。すると旅人は生家の中から、何とも知れぬ大男が、急ぎ足に外へ出て來るのを見た。大男は唯「年は八歲、命は自害」と云ひ捨てたなり、忽ち何處かへ消えてしまつた。旅人はそれから九年目に、今度は京へ上る途中、同じ家に宿つて見た。所が實際女の子は、八つの年に變死してゐた。しかも木から落ちた拍子に、鎌を喉へ突き立ててゐた。――話は大體かう云ふのだつた。姫君はそれを聞いた時に、宿命のせんなさに脅された。その女の子に比べれば、この男を賴みに暮してゐるのは、まだしも仕合せに違ひなかつた。「なりゆきに任せる外はない。」――姫君はさう思ひながら、顏だけはあでやかにほほ笑んでゐた。

屋形の軒に當つた松は、何度も雪に枝を折られた。姫君は晝は昔のやうに、琴を引いたり双六を打つたりした。夜は男と一つ褥に、水鳥の池に下りる音を聞いた。それは悲しみも少いと同時に、喜びも少い朝夕だつた。が、姫君は相不變、この懶い安らかさの中に、はかない滿足を見出

してゐた。

しかしその安らかさも、思ひの外急に盡きる時が來た。やつと春の返つた或夜、男は姫君と二人になると、「そなたに會ふのも今宵ぎりぢや」と、云ひ惡くさうに口を切つた。男の父は今度の除目に、陸奥の守に任ぜられた。男もその爲に雪の深い奥へ、一しよに下らねばならなかつた。勿論姫君と別れるのは、何よりも男には悲しかつた。が、姫君を妻にしたのは、父にも隱してゐたのだから、今更打ち明ける事は出來惡かつた。男はため息をつきながら、長長とさう云ふ事情を話した。

「しかし五年たてば任終ぢや。その時を樂しみに待つてたもれ。」

姫君はもう泣き伏してゐた。たとひ戀しいとは思はぬまでも、頼みにした男と別れるのは、言葉には盡せない悲しさだつた。男は姫君の背を撫でては、いろいろ慰めたり勵ましたりした。が、これも二言目には、涙に聲を曇らせるのだつた。

其處へ何も知らない乳母は、年の若い女房たちと、銚子や高坏を運んで來た。古い池に枝垂れた櫻も、蕾を持つた事を話しながら。……

三

六年目の春は返つて來た。が、奥へ下つた男は、遂に都へは歸らなかつた。その間に召使ひは一人も殘らず、ちりぢりに何處かへ立ち退いてしまふし、姫君の住んでゐた東の對も或年の大風に倒れてしまつた。姫君はそれ以來乳母と一しよに侍の廊を住居にしてゐた。其處は住居とは云ふものの、手狹でもあれば住み荒してもあり、僅に雨露の凌げるだけだつた。乳母はこの廊へ移つた當座、いたはしい姫君の姿を見ると、涙を落さずにはゐられなかつた。が、又或時は理由もないのに、腹ばかり立ててゐる事があつた。

暮しのつらいのは勿論だつた。棚の廚子はとうの昔、米や青菜に變つてゐた。今では姫君の袿や袴も身についてゐる外は殘らなかつた。乳母は焚き物に事を缺けば、立ち腐れになつた寢殿へ、板を剝ぎに出かける位だつた。しかし姫君は昔の通り、琴や歌に氣を晴らしながら、ぢつと男を待ち續けてゐた。

するとその年の秋の月夜、乳母は姫君の前へ出ると、考へ考へこんな事を云つた。

「殿はもう御歸りにはなりますまい。あなた様も殿の事は、お忘れになつては如何でございませう。就てはこの頃或典藥之助が、あなた様にお會はせ申せと、責め立てて居るのでございますが、……」

姫君はその話を聞きながら、六年以前の事を思ひ出した。六年以前には、いくら泣いても、泣き足りない程悲しかつた。が、今は體も心も餘りにそれには疲れてゐた。「唯靜かに老い朽ちたい。」……その外は何も考へなかつた。姫君は話を聞き終ると、白い月を眺めたなり、懶げにやつれた顏を振つた。

「わたしはもう何も入らぬ。生きようとも死なうとも一つ事ぢや。……」

× × × × ×

丁度これと同じ時刻、男は遠い常陸の國の屋形に、新しい妻と酒を斟んでゐた。妻は父の目がねにかなつた、この國の守の娘だつた。

「あの音は何ぢや？」

男はふと驚いたやうに、靜かな月明りの軒を見上げた。その時なぜか男の胸には、はつきり姫君の姿が浮んでゐた。

「栗の實が落ちたのでございませう。」

常陸の妻はさう答へながら、ふつつかに銚子の酒をさした。

四

男が京へ歸つたのは、丁度九年目の晩秋だつた。男と常陸の妻の族と、――彼等は京へはひる途中、日がらの惡いのを避ける爲に、三四日粟津に滯在した。それから京へはひる時も、晝の人目に立たないやうに、わざと日の暮を選ぶ事にした。男は鄙にゐる間も、二三度京の妻のもとへ、懇ろな消息をことづけてやつた。が、使が歸らなかつたり、幸ひ歸つて來たと思へば、姫君の屋形がわからなかつたり、一度も返事は手に入らなかつた。それだけに京へはひつたとなると、戀しさも亦一層だつた。男は妻の父の屋形へ無事に妻を送りこむが早いか、旅仕度も解かずに六の宮へ行つた。

六の宮へ行つて見ると、昔あつた四足の門も、檜皮葺きの寢殿や對も、悉今はなくなつてゐた。その中に唯殘つてゐるのは、崩れ殘りの築土だけだつた。男は草の中に佇んだ儘、茫然と庭の跡を眺めまはした。其處には半ば埋もれた池に、水葱が少し作つてあつた。水葱はかすかな新月の光に、ひつそりと葉を簇らせてゐた。

男は政所と覺しいあたりに、傾いた板屋のあるのを見つけた。板屋の中には近寄つて見ると、誰か人影もあるらしかつた。男は闇を透かしながら、そつとその人影に聲をかけた。すると月明りによろぼひ出たのは、何處か見覺えのある老尼だつた。

尼は男に名のられると、何も云はずに泣き續けた。その後やつと途切れ途切れに、姫君の身の上を話し出した。

「御見忘れでもございませうが、手前は御内に仕へて居つた、はした女の母でございます。殿がお下りになつてからも、娘はまだ五年ばかり、御奉公致して居りました。が、その内に夫と共共、但馬へ下る事になりましたから、手前もその節娘と一しよに、御暇を頂いたのでございます。所がこの頃姫君の事が、何かと心にかかりますので、手前一人京へ上つて見ますと、御覽の通り御

屋形も何もなくなつて居るのでございませんか？　姫君も何處へいらつしやつた事やら、――實は手前もさき頃から、途方に暮れて居るのでございます。殿は御存知もございますまいが、娘が御奉公申して居つた間も、姫君のお暮しのおいたはしさは、申しやうもない位でございました。……」

男は一部始終を聞いた後、この腰の曲つた尼に、下の衣を一枚脱いで渡した。それから頭を垂れた儘、默然と草の中を歩み去つた。

五

男は翌日から姫君を探しに、洛中を方方歩きまはつた。が、何處へどうしたのか、容易に行き方はわからなかつた。

すると何日か後の夕ぐれ、男はむら雨を避ける爲に、朱雀門の前にある、西の曲殿の軒下に立つた。其處にはまだ男の外にも、物乞ひらしい法師が一人、やはり雨止みを待ちわびてゐた。雨は丹塗りの門の空に、寂しい音を立て續けた。男は法師を尻目にしながら、苛立たしい思ひを紛

らせたさに、あちこち石疊みを歩いてゐた。その内にふと男の耳は、薄暗い窓の櫺子の中に、人のゐるらしいけはひを捉へた。男は殆何の氣なしに、ちらりと窓を覗いて見た。

窓の中には尼が一人、破れた筵をまとひながら、病人らしい女を介抱してゐた。女は夕ぐれの薄明りにも、無氣味な程痩せ枯れてゐるらしかつた。しかしその姫君に違ひない事は、一目見ただけでも十分だつた。男は聲をかけようとした。が、淺ましい姫君の姿を見ると、なぜかその聲が出せなかつた。姫君は男のゐるのも知らず、破れ筵の上に寢反りを打つと、苦しさうにこんな歌を詠んだ。

「たまくらのすきまの風もさむかりき、身はならはしのものにざりける。」

男はこの聲を聞いた時、思はず姫君の名前を呼んだ。姫君はさすがに枕を起した。が、男を見るが早いか、何かかすかに叫んだきり、又筵の上に俯伏してしまつた。尼は、――あの忠實な乳母は、其處へ飛びこんだ男と一しよに、慌てて姫君を抱き起した。しかし抱き起した顏を見ると、乳母は勿論男さへも、一層慌てずにはゐられなかつた。

乳母はまるで氣の狂つたやうに、乞食法師のもとへ走り寄つた。さうして、臨終の姫君の爲に、

何なりとも經を讀んでくれと云つた。法師は乳母の望み通り、姫君の枕もとへ座を占めた。が、經文を讀誦する代りに、姫君へかう言葉をかけた。

「往生は人手に出來るものではござらぬ。唯御自身怠らずに、阿彌陀佛の御名をお唱へなされ。」

姫君は男に抱かれた儘、細ぼそと佛名を唱へ出した。と思ふと恐しさうに、ぢつと門の天井を見つめた。

「あれ、あそこに火の燃える車が。……」

「そのやうな物にお恐れなさるな。御佛さへ念ずればよろしうござる。」

法師はやや聲を勵ました。すると姫君は少時の後、又夢うつつのやうに呟き出した。

「金色の蓮華が見えまする。天蓋のやうに大きい蓮華が。……」

法師は何か云はうとした。が、今度はそれよりもさきに、姫君が切れ切れに口を開いた。

「蓮華はもう見えませぬ。跡には唯暗い中に、風ばかり吹いて居りまする。」

「一心に佛名を御唱へなされ。なぜ一心に御唱へなさらぬ？」

法師は殆ど叱るやうに云つた。が、姫君は絶え入りさうに、同じ事を繰り返すばかりだつた。

「何も、——何も見えませぬ。暗い中に風ばかり、——冷たい風ばかり吹いて參りまする。」
男や乳母は涙を呑みながら、口の内に彌陀を念じ續けた。法師も勿論合掌した儘、姫君の念佛を扶けてゐた。さう云ふ聲の雨に交る中に、破れ筵を敷いた姫君は、だんだん死に顏に變つて行つた。……

六

それから何日か後の月夜、姫君に念佛を勸めた法師は、やはり朱雀門の前の曲殿に、破れ衣の膝を抱へてゐた。すると其處へ侍が一人、悠悠と何か歌ひながら、月明りの大路を歩いて來た。侍は法師の姿を見ると、草履の足を止めたなり、さりげないやうに聲をかけた。
「この頃この朱雀門のほとりに、女の泣き聲がするさうではないか？」
法師は石疊みに蹲まつた儘、たつた一言返事をした。
「お聞きなされ。」
侍はちよつと耳を澄ませた。が、かすかな蟲の音の外は、何一つ聞えるものもなかつた。あ

たりには唯松の匂が、夜氣に漂つてゐるだけだつた。侍は口を動かさうとした。しかしまだ何も云はない内に、突然何處からか女の聲が、細そぼそと歎きを送つて來た。

侍は太刀に手をかけた。が、聲は曲殿の空に、一しきり長い尾を引いた後、だんだん又何處かへ消えて行つた。

「御佛を念じておやりなされ。——」

法師は月光に顏を擡げた。

「あれは極樂も地獄も知らぬ、腑甲斐ない女の魂でござる。御佛を念じておやりなされ。」

しかし侍は返事もせずに、法師の顏を覗きこんだ。と思ふと驚いたやうに、その前へいきなり兩手をついた。

「内記の上人ではございませんか？　どうして又このやうな所に——」

在俗の名は慶滋の保胤、世に内記の上人と云ふのは、空也上人の弟子の中にも、やん事ない高德の沙門だつた。

（大正十一年七月）

魚河岸

去年の春の夜、――と云つてもまだ風の寒い、月の冴えた夜の九時ごろ、保吉は三人の友だちと、魚河岸の往來を歩いてゐた。三人の友だちとは、俳人の露柴、洋畫家の風中、蒔畫師の如丹、――三人とも本名は明さないが、その道では知られた腕つ扱きである。殊に露柴は年かさでもあり、新傾向の俳人としては、夙に名を馳せた男だつた。

我我は皆醉つてゐた。尤も風中と保吉とは下戸、如丹は名代の酒豪だつたから、三人はふだんと變らなかつた。唯露柴はどうかすると、足もとも少少あぶなかつた。我我は露柴を中にしながら、腥い月明りの吹かれる通りを、日本橋の方へ歩いて行つた。

露柴は生つ粋の江戸つ兒だつた。曾祖父は蜀山や文晁と交遊の厚かつた人である。家も河岸の丸清と云へば、あの界隈では知らぬものはない。それを露柴はずつと前から、家業は殆ど人任せにしたなり、自分は山谷の露路の奥に、句と書と篆刻とを樂しんでゐた。だから露柴には我我に

ない、何處かいなせな風格があつた。下町氣質よりは傳法な、山の手には勿論縁の遠い、――云はば河岸の鮪の鮨と、一味相通ずる何物かがあつた。……

露柴はさも邪魔さうに、時時外套の袖をはねながら、快活に我我と話し續けた。如丹は靜かに笑ひ笑ひ、話の相槌を打つてゐた。その内に我我は何時の間にか、河岸の取つきへ來てしまつた。この儘河岸を出抜けるのはみんな妙に物足りなかつた。すると其處に洋食屋が一軒、片側を照らした月明りに白い暖簾を垂らしてゐた。この店の噂は保吉さへも何度か聞かされた事があつた。「はひらうか？」「はひつても好いな。」――そんな事を云ひ合ふ内に、我我はもう風中を先に、狹い店の中へなだれこんでゐた。

店の中には客が二人、細長い卓に向つてゐた。客の一人は河岸の若い衆、もう一人は何處かの職工らしかつた。我我は二人づつ向ひ合ひに、同じ卓に割りこませて貰つた。それから平貝のフライを肴に、ちびちび正宗を嘗め始めた。勿論下戸の風中や保吉は二つと猪口は重ねなかつた。その代り料理を平げさすと、二人とも中中健啖だつた。

この店は卓も腰掛けも、ニスを塗らない白木だつた。おまけに店を圍ふ物は、江戸傳來の葭簀

だつた。だから洋食は食つてゐても、殆ど洋食屋とは思はれなかつた。風中は誂へたビフテキが來ると、これは切り味ぢやないかと云つたりした。如丹はナイフの切れるのに、大いに敬意を表してゐた。保吉は又電燈の明るいのがかう云ふ場所だけに難有かつた。露柴も、――露柴は土地つ子だから、何も珍らしくはないらしかつた。が、鳥打帽を阿彌陀にした儘、如丹と獻酬を重ねては、不相變快活にしやべつてゐた。

するとその最中に、中折帽をかぶつた客が一人、ぬつと暖簾をくぐつて來た。客は外套の毛皮の襟に肥つた頰を埋めながら、見ると云ふよりは睨むやうに、狹い店の中へ眼をやつた。それから一言の挨拶もせず、如丹と若い衆との間の席へ、大きい體を割りこませた。保吉はライスカレエを掬ひながら、嫌な奴だなと思つてゐた。これが泉鏡花の小說だと、任俠欣ぶべき藝者か何かに、退治られる奴だがと思つてゐた。しかし又現代の日本橋は、到底鏡花の小說のやうに、動きつこはないとも思つてゐた。

客は註文を通した後、橫柄に煙草をふかし始めた。その姿は見れば見る程、敵役の寸法に嵌つてゐた。脂ぎつた赭ら顏は勿論、大島の羽織、認めになる指環、――悉く型を出でなかつた。保

吉は愈中てられたから、この客の存在を忘れたさに、隣にゐる露柴へ話しかけた。が、露柴はうんとか、ええとか、好い加減な返事しかしてくれなかつた。のみならず彼も中てられたのか、電燈の光に背きながら、わざと鳥打帽も目深にしてゐた。

保吉はやむを得ず風中や如丹と、食物の事などを話し合つた。しかし話ははずまなかつた。この肥つた客の出現以來、我我三人の心もちに、妙な狂ひの出來た事は、どうにも仕方のない事實だつた。

客は註文のフライが來ると、正宗の罎を取り上げた。さうして猪口へつがうとした。その時誰か横合ひから、「幸さん」とはつきり呼んだものがあつた。客は明らかにびつくりした。しかもその驚いた顏は、聲の主を見たと思ふと、忽ち當惑の色に變り出した。「やあ、こりや檀那でしたか。」――客は中折帽を脫ぎながら、何度も聲の主に御時儀をした。聲の主は俳人の露柴、河岸の丸淸の檀那だつた。

「少時だね。」――露柴は涼しい顏をしながら、猪口を口へ持つて行つた。その猪口が空になると、客は隙かさず露柴の猪口へ客自身の罎の酒をついだ。それから側目には可笑しい程、露柴の機嫌

を窺ひ出した。………

鏡花の小說は死んではゐない。少くとも東京の魚河岸には、未にあの通りの事件も起るのである。

しかし洋食屋の外へ出た時、保吉の心は沈んでゐた。保吉は勿論「幸さん」には、何の同情も持たなかつた。その上露柴の話によると、客は人格も惡いらしかつた。が、それにも關らず妙に陽氣にはなれなかつた。保吉の書齋の机の上には、讀みかけたロシュフウコオの語錄がある。——保吉は月明りを履みながら、何時かそんな事を考へてゐた。

（大正十一年七月）

お富の貞操

一

明治元年五月十四日の午過ぎだつた。「官軍は明日夜の明け次第、東叡山彰義隊を攻撃する。上野界隈の町家のものは匆匆何處へでも立ち退いてしまへ。」——さう云ふ達しのあつた午過ぎだつた。下谷町二丁目の小間物店、古河屋政兵衛の立ち退いた跡には、臺所の隅の蚫貝の前に大きい牡の三毛猫が一匹靜かに香箱をつくつてゐた。

戸をしめ切つた家の中は勿論午過ぎでもまつ暗だつた。人音も全然聞えなかつた。唯耳にはひるものは連日の雨の音ばかりだつた。雨は見えない屋根の上へ時時急に降り注いでは、何時か又中空へ遠のいて行つた。猫はその音の高まる度に、琥珀色の眼をまん圓にした。竈さへわからない臺所にも、この時だけは無氣味な燐光が見えた。が、ざあつと云ふ雨音以外に何も變化のない事を知ると、猫はやはり身動きもせずもう一度眼を絲のやうにした。

そんな事が何度か繰り返される内に、猫はとうとう眠つたのか、眼を明ける事もしなくなつた。しかし雨は相不變急になつたり靜まつたりした。八つ、八つ半、――時はこの雨音の中にだんだん日の暮へ移つて行つた。

すると七つに迫つた時、猫は何かに驚いたやうに突然眼を大きくした。同時に耳も立てたらしかつた。が、雨は今までよりも遙かに小降りになつてゐた。往來を馳せ過ぎる駕籠舁きの聲、――その外には何も聞えなかつた。しかし數秒の沈默の後、まつ暗だつた臺所は何時の間にかぼんやり明るみ始めた。狹い板の間を塞いだ竈、蓋のない水瓶の水光り、荒神の松、引き窓の綱、――そんな物も順順に見えるやうになつた。猫は愈不安さうに、戸の明いた水口を睨みながら、のそりと大きい體を起した。

この時この水口の戸を開いたのは、――いや戸を開いたばかりではない、腰障子もしまひに明けたのは、濡れ鼠になつた乞食だつた。彼は古い手拭をかぶつた首だけ前へ伸ばしたなり、少時は靜かな家のけはひにぢつと耳を澄ませてゐた。が、人音のないのを見定めると、これだけは眞新しい酒筵に鮮かな濡れ色を見せた儘、そつと臺所へ上つて來た。猫は耳を平めながら、二足三

足跡ずさりをした。しかし乞食は驚きもせず後手に障子をしめてから、徐ろに顔の手拭をとつた。顔は髭に埋まつた上、膏藥も二三個所貼つてあつた。しかし垢にはまみれてゐても、眼鼻立ちは寧ろ尋常だつた。

「三毛。三毛。」

乞食は髮の水を切つたり、顏の滴を拭つたりしながら、小聲に猫の名前を呼んだ。猫はその聲に聞き覺えがあるのか、平めてゐた耳をもとに戻した。が、まだ其處に佇んだなり、時時はじろじろ彼の顏へ疑深い眼を注いでゐた。その間に酒筵を脱いだ乞食は脛の色も見えない泥足の儘、猫の前へどつかりあぐらをかいた。

「三毛公。どうした？——誰もゐない所を見ると、貴樣だけ置き去りを食はされたな。」

乞食は獨り笑ひながら、大きい手に猫の頭を撫でた。猫はちよいと逃げ腰になつた。が、それぎり飛び退きもせず、反つて其處へ坐つたなり、だんだん眼さへ細め出した。乞食は猫を撫でやめると、今度は古湯帷子の懷から、油光りのする短銃を出した。さうして覺束ない薄明りの中に、引き金の具合を檢べ出した。「いくさ」の空氣の漂つた、人氣のない家の臺所に短銃をいぢつてゐ

る一人の乞食――それは確かに小說じみた、物珍らしい光景に違ひなかつた。しかし薄眼になつた猫はやはり背中を圓くした儘、一切の祕密を知つてゐるやうに、冷然と坐つてゐるばかりだつた。

「明日になるとな、三毛公、この界隈へも雨のやうに鐵砲の玉が降つて來るぞ。そいつに中ると死んじまふから、明日はどんな騷ぎがあつても、一日緣の下に隱れてゐろよ。……」

乞食は短銃を檢べながら、時時猫に話しかけた。

「お前とも永い御馴染だな。が、今日が御別れだぞ。明日はお前にも大厄日だ。おれも明日は死ぬかも知れない。よし又死なずにすんだ所が、この先二度とお前と一しよに掃溜めあさりはしないつもりだ。さうすればお前は大喜びだらう。」

その内に雨は又一しきり、騷がしい音を立て始めた。雲も棟瓦を煙らせる程、近近に屋根に押し迫つたのであらう。臺所に漂つた薄明りは、前よりも一層かすかになつた。が、乞食は顏も擧げず、やつと檢べ終つた短銃へ、丹念に彈藥を裝塡してゐた。

「それとも名殘りだけは惜しんでくれるか？　いや、猫と云ふやつは三年の恩も忘れると云ふか

ら、お前も當てにはならなさうだな。――が、まあ、そんな事はどうでも好いや。唯おれもゐないとすると、――」

乞食は急に口を噤んだ。途端に誰か水口の外へ歩み寄つたらしいけはひがした。短銃をしまふのと振り返るのと、乞食にはそれが同時だつた。いや、その外に水口の障子ががらりと明けられたのも同時だつた。乞食は咄嗟に身構へながら、まともに闖入者と眼を合せた。

すると障子を明けた誰かは乞食の姿を見るが早いか、反つて不意を打れたやうに、「あつ」とかすかな叫び聲を洩らした。それは素裸足に大黑傘を下げた、まだ年の若い女だつた。彼女は殆ど衝動的に、もと來た雨の中へ飛び出さうとした。が、最初の驚きから、やつと勇氣を恢復すると、臺所の薄明りに透かしながら、ぢつと乞食の顔を覗きこんだ。

乞食は呆氣にとられたのか、古湯帷子の片膝を立てた儘、まじまじ相手を見守つてゐた。もうその眼にもさつきのやうに、油斷のない氣色は見えなかつた。二人は默然と少時の間、互に眼と眼を見合せてゐた。

「何だい、お前は新公ぢやないか？」

彼女は少し落ち着いたやうに、かう乞食へ聲をかけた。乞食はにやにや笑ひながら、二三度彼女へ頭を下げた。

「どうも相濟みません。あんまり降りが強いもんだから、つい御留守へはひこみましたが――何、格別明き巣狙ひに宗旨を變へた訣でもないんです。」

「驚かせるよ、ほんたうに――いくら明き巣狙ひぢやないと云つたつて、圖圖しいにも程があるぢやないか？」

彼女は傘の滴を切り切り、腹立たしさうにつけ加へた。

「さあ、こつちへ出ておくれよ。わたしは家へはひるんだから。」

「へえ、出ます。出ろと仰有らないでも出ますがね。姐さんはまだ立ち退かなかつたんですかい？」

「立ち退いたのさ。立ち退いたんだけれども、――そんな事はどうでも好いぢやないか？」

「すると何か忘れ物でもしたんですね。――まあ、こつちへおはひんなさい。其處では雨がかかりますぜ。」

彼女はまだ業腹さうに、乞食の言葉には返事もせず、水口の板の間へ腰を下した。それから流しへ泥足を伸ばすと、ざあざあ水をかけ始めた。平然とあぐらをかいた乞食は髭だらけの顋をさすりながら、じろじろその姿を眺めてゐた。彼女は色の淺黑い、鼻のあたりに雀斑のある、田舍者らしい小女だつた。なりも召使ひに相應な手織木綿の一重物に、小倉の帶しかしてゐなかつた。が、活き活きした眼鼻立ちや、堅肥りの體つきには、何處か新しい桃や梨を聯想させる美しさがあつた。

「この騷ぎの中を取りに返るのぢや、何か大事の物を忘れたんですね。何です、その忘れ物は？　え、姐さん。――お富さん。」

新公は又尋ね續けた。

「何だつて好いぢやないか？　それよりさつさと出て行つておくれよ。」

お富の返事は突慳貪だつた。が、ふと何か思ひついたやうに、新公の顏を見上げると、眞面目にこんな事を尋ね出した。

「新公、お前、家の三毛を知らないかい？」

「三毛？　三毛は今此處に、――おや、何處へ行きやがつたらう？」
乞食はあたりを見廻した。すると猫は何時の間にか、棚の擂鉢や鐵鍋の間に、ちやんと香箱をつくつてゐた。その姿は新公と同時に、忽ちお富にも見つかつたのであらう。彼女は柄杓を捨てるが早いか、乞食の存在も忘れたやうに、板の間の上に立ち上つた。さうして晴れ晴れと微笑しながら、棚の上の猫を呼ぶやうにした。
新公は薄暗い棚の上の猫から、不思議さうにお富へ眼を移した。
「猫ですかい、姐さん、忘れ物と云ふのは？」
「猫ぢや惡いのかい？――三毛、三毛、さあ、下りて御出で。」
新公は突然笑ひ出した。その聲は雨音の鳴り渡る中に殆氣味の惡い反響を起した。と、お富はもう一度、腹立たしさに頬を火照らせながら、いきなり新公に怒鳴りつけた。
「何が可笑しんだい？　家のお上さんは三毛を忘れて來たつて、氣違ひの樣になつてゐるんぢやないか？　三毛が殺されたらどうしようつて、泣き通しに泣いてゐるんぢやないか？　わたしもそれが可哀さうだから、雨の中をわざわざ歸つて來たんぢやないか？――」

「ようござんすよ。もう笑ひはしませんよ。」

新公はそれでも笑ひ笑ひ、お富の言葉を遮つた。

「もう笑ひはしませんがね。まあ、考へて御覧なさい。明日にも『いくさ』が始まらうと云ふのに、高が猫の一匹や二匹――これはどう考へたつて、可笑しいのに違ひありませんや。お前さんの前だけれども、一體此處のお上さん位、わからずやのしみつたれはありませんぜ。第一あの三毛公を探しに、……」

「お默りよ！　お上さんの讒訴なぞは聞きたくないよ！」

お富は殆どぢだんだを踏んだ。が、乞食は思ひの外彼女の權幕には驚かなかつた。のみならずしげしげ彼女の姿に無遠慮な視線を注いでゐた。實際その時の彼女の姿は野蠻な美しさそのものだつた。雨に濡れた着物や湯卷、――それらは何處を眺めても、ぴつたり肌についてゐるだけ、露はに肉體を語つてゐた。しかも一目に處女を感ずる、若若しい肉體を語つてゐた。新公は彼女に目を据ゑたなり、やはり笑ひ聲に話し續けた。

「第一あの三毛公を探しに、お前さんをよこすのでもわかつてゐまさあ。ねえ、さうぢやありま

せんか？　今ぢやもう上野界隈、立ち退かない家はありませんや。して見れば町家は並んでゐても、人のゐない町原と同じ事だ。まさか狼も出まいけれども、どんな危い目に遇ふかも知れない。――と、まづ云つたものぢやありませんか？」

「そんな餘計な心配をするより、さつさと猫をとつておくれよ。――これが『いくさ』でも始まりやしまいし、何が危い事があるものかね。」

「冗談云つちやいけません。若い女の一人歩きが、かう云ふ時に危くなけりや、危いと云ふ事はありませんや。早い話が此處にゐるのは、お前さんとわたしと二人つきりだ。萬一わたしが妙な氣でも出したら、姐さん、お前さんはどうしなさるね？」

新公はだんだん冗談だか、眞面目だか、わからない口調になつた。しかし澄んだお富の目には、恐怖らしい影さへ見えなかつた。唯その頰には、さつきよりも、一層血の色がさしたらしかつた。

「何だい、新公、――お前はわたしを嚇かさうつて云ふのかい？」

お富は彼女自身嚇かすやうに、一足新公の側へ寄つた。

「嚇かすえ？　嚇かすだけならば好いぢやありませんか？　肩に金切れなんぞくつけてゐたつて、風の悪いやつらも多い世の中だ。ましてわたしは乞食ですぜ。嚇かすばかりとは限りませんや。もしほんたうに妙な氣を出したら、……」

新公は殘らず云はない内に、したたか頭を打ちのめされた。お富は何時か彼の前に、大黑傘をふり上げてゐたのだつた。

「生意氣な事をお云ひでない。」

お富は又新公の頭へ、力一ぱい傘を打ち下した。新公は咄嗟に身を躱さうとした。が、傘はその途端に、古湯帷子の肩を打ち据ゑてゐた。この騷ぎに驚いた猫は、鐵鍋を一つ蹴落しながら、荒神の棚へ飛び移つた。と同時に荒神の松や油光りのする燈明皿も、新公の上へ轉げ落ちた。新公はやつと飛び起きる前に、まだ何度もお富の傘に、打ちのめされずにはすまなかつた。

「こん畜生！　こん畜生！」

お富は傘を揮ひ續けた。が、新公は打たれながらも、とうとう傘を引つたくつた。のみならず傘を投げ出すが早いか猛然とお富に飛びかかつた。二人は狹い板の間の上に、少時の間摑み合つ

た。この立ち廻りの最中に、雨は又臺所の屋根へ、凄まじい音を湊め出した。光も雨音の高まるのと一しよに、見る見る薄暗さを加へて行つた。新公は打たれても、引つ掻かれても、遮二無二お富を扭ぢ伏せようとした。しかし何度か仕損じた後、やつと彼女に組み付いたと思ふと、突然又彈かれたやうに、水口の方へ飛びすさつた。

「この阿魔あ！……」

新公は障子を後ろにしたなり、ぢつとお富を睨みつけた。何時か髮も壞れたお富は、べつたり板の間に坐りながら、帶の間に挾んで來たらしい剃刀を逆手に握つてゐた。それは殺氣を帶びてもゐれば、同時に又妙に艷めかしい、云はば荒神の棚の上に、脊を高めた猫と似たものだつた。二人はちよいと無言の儘、相手の目の中を窺ひ合つた。が、新公は一瞬の後、わざとらしい冷笑を見せると、懷からさつきの短銃を出した。

「さあ、いくらでもぢたばたして見ろ。」

短銃の先は徐ろに、お富の胸のあたりへ向つた。それでも彼女は口惜しさうに、新公の顏を見つめたきり、何とも口を開かなかつた。新公は彼女が騷がないのを見ると、今度は何か思ひつい

たやうに、短銃の先を上に向けた。その先には薄暗い中に、琥珀色の猫の目が仄めいてゐた。

「好いかい？　お富さん。――」

新公は相手をじらすやうに、笑ひを含んだ聲を出した。

「この短銃がどんと云ふと、あの猫が逆様に轉げ落ちるんだ。お前さんにしても同じ事だぜ。そら好いかい？」

引き金はすんでに落ちようとした。

「新公！」

突然お富は聲を立てた。

「いけないよ。打つちやいけない。」

新公はお富へ目を移した。しかしまだ短銃の先は、三毛猫に狙ひを定めてゐた。

「いけないのは知れた事だ。」

「打つちや可哀さうだよ。三毛だけは助けておくれ。」

お富は今までとは打つて變つた、心配さうな目つきをしながら、心もち震へる脣の間に、細か

い歯並みを覗かせてゐた。新公は半ば嘲るやうに、又半ば訝るやうに、彼女の顔を眺めたなり、やつと短銃の先を下げた。と同時にお富の顔には、ほつとした色が浮んで來た。

「ぢや猫は助けてやらう。その代り。――」

新公は横柄に云ひ放つた。

「その代りお前さんの體を借りるぜ。」

お富はちよいと目を外らせた。一瞬間彼女の心の中には、憎しみ、怒り、嫌惡、悲哀、その外いろいろの感情がごつたに燃え立つて來たらしかつた。新公はさう云ふ彼女の變化に注意深い目を配りながら、横歩きに彼女の後ろへ廻ると茶の間の障子を明け放つた。茶の間は臺所に比べれば、勿論一層薄暗かつた。が、立ち退いた跡と云ふ條、取り殘した茶箪笥や長火鉢は、その中にもはつきり見る事が出來た。新公は其處に佇んだ儘、かすかに汗ばんでゐるらしい、お富の襟もとへ目を落した。するとそれを感じたのか、お富は體を捻るやうに、後ろにゐる新公の顔を見上げた。彼女の顔にはもう何時の間にか、さつきと少しも變らない、活き活きした色が返つてゐた。しかし新公は狼狽したやうに、妙な瞬きを一つしながら、いきなり又猫へ短銃を向けた。

「いけないよ。いけないつてば。――」
お富は彼を止めると同時に、手の中の剃刀を板の間へ落した。
「いけなけりやあすこへお行きなさいな。」
新公は薄笑ひを浮べてゐた。
「いけ好かない！」
お富は忌忌しさうに呟いた。が、突然立ち上ると、ふて腐れた女のするやうに、さつさと茶の間へはひつて行つた。新公は彼女の諦めの好いのに、多少驚いた容子だつた。雨はもうその時には、ずつと音をかすめてゐた。おまけに雲の間には、夕日の光でもさし出したのか、薄暗かつた臺所も、だんだん明るさを加へて行つた。新公はその中に佇みながら、茶の間のけはひに聞き入つてゐた。小倉の帯の解かれる音、疊の上へ寢たらしい音。――それぎり茶の間はしんとしてしまつた。
新公はちよいとためらつた後、薄明るい茶の間へ足を入れた。茶の間のまん中にはお富が一人、袖に顔を蔽つた儘、ぢつと仰向けに横たはつてゐた。新公はその姿を見るが早いか、逃げるやう

に臺所へ引き返した。彼の顏には形容の出來ない、妙な表情が漲つてゐた。それは嫌惡のやうにも見えれば、恥ぢたやうにも見える色だつた。彼は板の間へ出たと思ふと、まだ茶の間へ背を向けたなり、突然苦しさうに笑ひ出した。

「冗談だ。お富さん。冗談だよ。もうこつちへ出て來ておくんなさい。……」

——何分かの後、懷に猫を入れたお富は、もう傘を片手にしながら、破れ筵を敷いた新公と、氣輕に何か話してゐた。

「姐さん。わたしは少しお前さんに、訊きたい事があるんですがね。——」

新公はまだ間が惡さうに、お富の顏を見ないやうにしてゐた。

「何をさ！」

「何をつて事もないんですがね。——まあ肌身を任せると云へば、女の一生ぢや大變な事だ。それをお富さん、お前さんは、その猫の命と懸け替に、——こいつはどうもお前さんにしちや、亂暴すぎるぢやありませんか？」

新公はちよいと口を噤んだ。がお富は頰笑んだぎり、懷の猫を劬つてゐた。

「そんなにその猫が可愛いんですかい？」

「そりや三毛も可愛いしね。――」

お富は煮え切らない返事をした。

「それとも又お前さんは、近所でも評判の主人思ひだ。三毛が殺されたとなつた日にや、この家の上さんに申し訣がない。――と云ふ心配でもあつたんですかい？」

「ああ、三毛も可愛いしね。お上さんも大事にや違ひないんだよ。けれどもただわたしはね。――」

お富は小首を傾けながら、遠い所でも見るやうな目をした。

「何と云へば好いんだらう？　唯あの時はああしないと、何だかすまない氣がしたのさ。」

――更に又何分かの後、一人になつた新公は、古湯帷子の膝を抱いた儘、ぼんやり臺所に坐つてゐた。暮色は疎らな雨の音の中に、だんだん此處へも迫つて來た。引き窓の綱、流し元の水瓶、――そんな物も一つづつ見えなくなつた。と思ふと上野の鐘が、一杵づつ雨雲にこもりながら、重苦しい音を擴げ始めた。新公はその音に驚いたやうに、ひつそりしたあたりを見廻した。それ

から手さぐりに流し元へ下りると、柄杓になみなみと水を酌んだ。
「村上新三郎源の繁光、今日だけは一本やられたな。」
彼はさう呟きざま、うまさうに黄昏の水を飲んだ。……

× × × × × ×

明治二十三年三月二十六日、お富は夫や三人の子供と、上野の廣小路を歩いてゐた。
その日は丁度竹の臺に、第三回内國博覧會の開會式が催される當日だつた。おまけに櫻も黒門のあたりは、もう大抵開いてゐた。だから廣小路の人通りは、殆ど押し返さないばかりだつた。其處へ上野の方からは、開會式の歸りらしい馬車や人力車の行列が、しつきりなしに流れて來た。前田正名、田口卯吉、澁澤榮一、辻新次、岡倉覺三、下條正雄——その馬車や人力車の客には、さう云ふ人人も交つてゐた。
五つになる次男を抱いた夫は、袂に長男を縋らせた儘、目まぐるしい往來の人通りをよけよけ、時時ちよいと心配さうに、後ろのお富を振り返つた。お富は長女の手をひきながら、その度に晴

れやかな微笑を見せた。勿論二十年の歳月は、彼女にも老を齎してゐた。しかし目の中に冴えた光は昔と餘り變らなかつた。彼女は明治四五年頃に、古河屋政兵衛の甥に當る、今の夫と結婚した。夫はその頃は横濱に、今は銀座の何丁目かに、小さい時計屋の店を出してゐた。……

お富はふと目を擧げた。その時丁度さしかかつた、二頭立ちの馬車の中には、新公が悠悠と坐つてゐた。新公が、――尤も今の新公の體は、駝鳥の羽根の前立だの、嚴めしい金モオルの飾緒だの、大小幾つかの勲章だの、いろいろの名譽の標章に埋まつてゐるやうなものだつた。しかし半白の髯の間に、こちらを見てゐる赭ら顔は、往年の乞食に違ひなかつた。お富は思はず足を緩めた。が、不思議にも驚かなかつた。新公は唯の乞食ではない。――そんな事はなぜかわかつてゐた。顔のせゐか、言葉のせゐか、それとも持つてゐた短銃のせゐか、兎に角わかつてはゐたのだつた。お富は眉も動かさずに、ぢつと新公の顔を眺めた。新公も故意か偶然か、彼女の顔を見守つてゐた。二十年以前の雨の日の記憶は、この瞬間お富の心に、切ない程はつきり浮んで來た。彼女はあの日無分別にも、一匹の猫を救ふ爲に、新公に體を任さうとした。その動機は何だつたか、――彼女はそれを知らなかつた。新公は亦さう云ふ羽目にも、彼女が投げ出した體には、指

さへ觸れる事を肯じなかつた。その動機は何だつたか、――それも彼女は知らなかつた。が、知らないのにも關らず、それらは皆お富には、當然すぎる程當然だつた。彼女は馬車とすれ違ひながら、何か心の伸びるやうな氣がした。

新公の馬車の通り過ぎた時、夫は人ごみの間から、又お富を振り返つた。彼女はやはりその顏を見ると、何事もないやうに頰笑んで見せた。活き活きと、嬉しさうに。……

（大正十一年八月）

おぎん

元和か、寛永か、兎に角遠い昔である。

天主のおん教を奉ずるものは、その頃でももう見つかり次第、火炙りや磔に遇はされてゐた。しかし迫害が烈しいだけに、「萬事にかなひ給ふおん主」も、その頃は一層この國の宗徒に、あらたかな御加護を加へられたらしい。長崎あたりの村村には、時時日の暮の光と一しよに、天使や聖徒の見舞ふ事があつた。現にあのさん・じよあん・ばちすたさへ、一度などは浦上の宗徒みげる彌兵衛の水車小屋に、姿を現したと傳へられてゐる。と同時に惡魔も亦宗徒の精進を妨げる爲、或は見慣れぬ黑人となり、或は舶來の草花となり、或は網代の乘物となり、屢同じ村村に出沒した。夜晝さへ分たぬ土の牢に、みげる彌兵衛を苦しめた鼠も、實は惡魔の變化だつたさうである。彌兵衛は元和八年の秋、十一人の宗徒と火炙りになつた。——その元和か、寛永か、兎に角遠い昔である。

やはり浦上の山里村に、おぎんと云ふ童女が住んでゐた。おぎんの父母は大阪から、はるばる

長崎へ流浪して來た。が、何もし出さない内に、おぎん一人を殘した儘、二人とも故人になつてしまつた。勿論彼等他國ものは、天主のおん教を知る筈はない。彼等の信じたのは佛教である。禪か、法華か、それとも又淨土か、何にもせよ釋迦の教である。或佛蘭西のジエスウイツトによれば、天性奸智に富んだ釋迦は、支那各地を遊歷しながら、阿彌陀と稱する佛の道を說いた。その後又日本の國へも、やはり同じ道を教に來た。釋迦の說いた教によれば、我我人間の靈魂は、その罪の輕重深淺に從ひ、或は小鳥となり、或は牛となり、或は又樹木となるさうである。のみならず釋迦は生まれる時、彼の母を殺したと云ふ。釋迦の教の荒誕なのは勿論、釋迦の大惡も亦明白である。(ジアン・クラツセ)しかしおぎんの母親は、前にもちよいと書いた通り、さう云ふ眞實を知る筈はない。彼等は息を引きとつた後も、釋迦の教を信じてゐる。寂しい墓原の松のかげに、末は「いんへるの」に墮ちるのも知らず、はかない極樂を夢見てゐる。

　しかしおぎんは幸ひにも、兩親の無知に染まつてゐない。これは山里村居つきの農夫、憐みの深いじよあん孫七は、とうにこの童女の額へ、ばぷちずものおん水を注いだ上、まりやと云ふ名を與へてゐた。おぎんは釋迦が生まれた時、天と地とを指さしながら、「天上天下唯我獨尊」と獅

子叱した事などは信じてゐない。その代りに、「深く御柔軟、深く御哀憐、勝れて甘くまします童女さんた・まりあ様」が、自然と身ごもつた事を信じてゐる。「十字架に懸り死し給ひ、石の御棺に納められ給ひ、」大地の底に埋められたぜすすが、三日の後よみ返つた事を信じてゐる。御糺明の喇叭さへ響き渡れば「おん主、大いなる御威光、大いなる御威勢を以て天下り給ひ、土埃になりたる人人の色身を、もとの靈魂に併せてよみ返し給ひ、善人は天上の快樂を受け、又惡人は天狗と共に、地獄に墮ち」る事を信じてゐる。殊に「御言葉の御聖徳により、ぱんと酒の色形は變らずと雖も、その正體はおん主の御血肉となり變る」尊いさがらめんとを信じてゐる。おぎんの心は兩親のやうに、熱風に吹かれた沙漠ではない。素朴な野薔薇の花を交へた、實りの豐かな麥畠である。おぎんは兩親を失つた後、じよあん孫七の養女になつた。孫七の妻、じよあんなおすみも、やはり心の優しい女である。おぎんはこの夫婦と一しよに、牛を追つたり麥を刈つたり、幸福にその日を送つてゐた。勿論さう云ふ暮しの中にも、村人の目に立たない限りは、斷食や祈禱も怠つた事はない。おぎんは井戸端の無花果のかげに、大きい三日月を仰ぎながら、屢熱心に祈禱を凝らした。この垂れ髪の童女の祈禱は、かう云ふ簡單なものなのである。

「憐みのおん母、おん身におん禮をなし奉る。流人となれるえわの子供、おん身に叫びをなし奉る。あはれこの涙の谷に、柔軟のおん眼をめぐらさせ給へ。あんめい。」

すると或年のなたら(降誕祭)の夜、惡魔は何人かの役人と一しよに、突然孫七の家へはひつて來た。孫七の家には大きな囲爐裡に「お伽の焚き物」の火が燃えさかつてゐる。それから煤びた壁の上にも、今夜だけは十字架が祭つてある。最後に後ろの牛小屋へ行けば、ぜすす様の産湯の爲に、飼桶に水が湛へられてゐる。役人は互に頷き合ひながら、孫七夫婦に繩をかけた。おぎんも同時に括り上げられた。しかし彼等は三人とも、全然惡びれる氣色はなかつた。靈魂の助かりの爲ならば、如何なる責苦も覺悟である。おん主は必ず我等の爲に、御加護を賜はるのに違ひない。第一なたらの夜に捕はれたと云ふのは、天寵の厚い證據ではないか？　彼等は皆云ひ合せたやうに、かう確信してゐたのである。役人は彼等を縛めた後、代官の屋敷へ引き立てて行つた。が、彼等はその途中も、暗夜の風に吹かれながら、御降誕の祈禱を誦しつづけた。

「べれんの國にお生まれなされたおん若君様、今はいづこにましますか？　おん讃め尊め給へ。」

惡魔は彼等の捕はれたのを見ると、手を拍つて喜び笑つた。しかし彼等のけなげなさまには、

少からず腹を立てたらしい。悪魔は一人になつた後、忌忌しさうに唾をするが早いか、忽ち大きい石臼になつた。さうしてごろごろ轉がりながら闇の中に消え失せてしまつた。

じよあん孫七、じよあんなおすみ、まりやおぎんの三人は、土の牢に投げこまれた上、天主のおん教を捨てるやうに、いろいろの責苦に遇はされた。しかし水責や火責に遇つても、彼等の決心は動かなかつた。たとひ皮肉は爛れるにしても、はらいそ（天國）の門へはひるのは、もう一息の辛抱である。いや、天主の大恩を思へば、この暗い土の牢さへ、その儘「はらいそ」の莊嚴と變りはない。のみならず尊い天使や聖徒は、夢ともうつつともつかない中に、屢彼等を慰めに來た。殊にさういふ幸福は、一番おぎんに惠まれたらしい。おぎんはさん・じよあん・ばちすたが、大きい兩手の手のひらに、蝗を澤山掬ひ上げながら、食へと云ふ所を見た事がある。又大天使がぶりえるが、白い翼を疊んだ儘、美しい金色の杯に、水をくれる所を見た事もある。

代官は天主のおん教は勿論、釋迦の教も知らなかつたから、なぜ彼等が剛情を張るのかさつぱり理解が出來なかつた。時には三人が三人とも、氣違ひではないかと思ふ事もあつた。しかし氣違ひでもない事がわかると、今度は大蛇とか一角獸とか、兎に角人倫には緣のない動物のやうな

氣がし出した。さう云ふ動物を生かして置いては、今日の法律に違ふばかりか、一國の安危にも關る訣である。そこで代官は一月ばかり、土の牢に彼等を入れて置いた後、とうとう三人とも燒き殺す事にした。(實を云へばこの代官も、世間一般の人人のやうに、一國の安危に關るかどうか、そんな事は殆ど考へなかつた。これは第一に法律があり、第二に人民の道德があり、わざわざ考へて見ないでも、格別不自由はしなかつたからである。)

じよあん孫七を始め三人の宗徒は、村はづれの刑場へ引かれる途中も、恐れる氣色は見えなかつた。刑場は丁度墓原に隣つた、石ころの多い空き地である。彼等は其處へ到着すると、一一罪狀を讀み聞かされた後、太い角柱に括りつけられた。それから右にじよあんなおすみ、中央にじよあん孫七、左にまりやおぎんと云ふ順に、刑場のまん中へ押し立てられた。おすみは連日の責苦の爲、急に年をとつたやうに見える。孫七も髭の伸びた頰には、殆ど血の氣が通つてゐない。おぎんも——おぎんは二人に比べると、まだしもふだんと變らなかつた。が、彼等は三人とも、堆い薪を踏まへた儘、同じやうに靜かな顏をしてゐる。

刑場のまはりにはずつと前から、大勢の見物が取り卷いてゐる。その又見物の向うの空には、

墓原の松が五六本、天蓋のやうに枝を張つてゐる。

　一切の準備の終つた時、役人の一人は物物しげに、三人の前へ進みよると、天主のおん教を捨てるか捨てぬか、少時猶豫を與へるから、もう一度よく考へて見ろ、もしおん教を捨てると云へば、直にも繩目は赦してやると云つた。しかし彼等は答へない。皆遠い空を見守つた儘、口もとには微笑さへ湛へてゐる。

　役人は勿論見物すら、この數分の間位ひつそりとなつたためしはない。無數の眼はぢつと瞬きもせず、三人の顏に注がれてゐる。が、これは傷しさの餘り、誰も息を呑んだのではない。見物は大抵火のかかるのを、今か今かと待つてゐたのである。役人は又處刑の手間どるのに、すつかり退屈し切つてゐたから、話をする勇氣も出なかつたのである。

　すると突然一同の耳は、はつきりと意外な言葉を捉へた。

「わたしはおん教を捨てる事に致しました。」

　聲の主はおぎんである。見物は一度に騷ぎ立つた。が、一度どよめいた後、忽ち又靜かになつてしまつた。それは孫七が悲しさうに、おぎんの方を振り向きながら、力のない聲を出したから、

である。

「おぎん！　お前は悪魔にたぶらかされたのか？　もう一辛抱しさへすれば、おん主の御顔も拜めるのだぞ。」

その言葉が終らない内に、おすみも遙かにおぎんの方へ、一生懸命な聲をかけた。

「おぎん！　おぎん！　お前には悪魔がついたのだよ。祈つておくれ。祈つておくれ。」

しかしおぎんは返事をしない。唯眼は大勢の見物の向うの、天蓋のやうに枝を張つた、墓原の松を眺めてゐる。その内にもう役人の一人は、おぎんの繩目を赦すやうに命じた。

じよあん孫七はそれを見るなり、あきらめたやうに眼をつぶつた。

「萬事にかなひ給ふおん主、おん計らひに任せ奉る。」

やつと繩を離れたおぎんは、茫然と少時佇んでゐた。が、孫七やおすみを見ると、急にその前へ跪きながら、何も云はずに涙を流した。孫七はやはり眼を閉ぢてゐる。おすみも顔をそむけた儘、おぎんの方は見ようともしない。

「お父樣、お母樣、どうか勘忍して下さいまし。」

おぎんはやつと口を開いた。

「わたしはおん教を捨てました。その訣はふと向うに見える、天蓋のやうな松の梢に、氣のついたせゐでございます。あの墓原の松のかげに、眠つていらつしやる御兩親は、天主のおん教も御存知なし、きつと今頃はいんへるのに、お墮ちになつていらつしやいませう。それを今わたし一人、はらいその門にはひつたのでは、どうしても申し訣がありません。わたしはやはり地獄の底へ、御兩親の跡を追つて參りませう。どうかお父様やお母様は、ぜすす様やまりや様の御側へお出でなすつて下さいまし。その代りおん教を捨てた上は、わたしも生きては居られません。………」

おぎんは切れ切れにさう云つてから、後は啜り泣きに沈んでしまつた。すると今度はじよあんなおすみも、足に踏んだ薪の上へ、ほろほろ涙を落し出した。これからはらいそへはひらうとするのに、用もない歎きに耽つてゐるのは、勿論宗徒のすべき事ではない。じよあん孫七は、苦苦しさうに隣の妻を振り返りながら、癇高い聲に叱りつけた。

「お前も惡魔に見入られたのか？　天主のおん教を捨てたければ、勝手にお前だけ捨てるが好い。

おれは一人でも焼け死んで見せるぞ。」

「いえ、わたしもお供を致します。けれどもそれは――それは――」

　おすみは涙を呑みこんでから、半ば叫ぶやうに言葉を投げた。

「けれどもそれははらいそへ參りたいからではございません。唯あなたの、――あなたのお供を致すのでございます。」

　孫七は長い間默つてゐた。しかしその顏は蒼ざめたり、又血の色を漲らせたりした。と同時に汗の玉も、つぶつぶ顏にたまり出した。孫七は今心の眼に、彼の靈魂を見てゐるのである。彼の靈魂を奪ひ合ふ天使と惡魔とを見てゐるのである。もしその時足もとのおぎんが泣き伏した顏を擧げずにゐたら、――いや、もうおぎんは顏を擧げた。しかも涙に溢れた眼には、不思議な光を宿しながら、ぢつと彼を見守つてゐる。この眼の奥に閃いてゐるのは、無邪氣な童女の心ばかりではない。「流人となれるえわの子供」、あらゆる人間の心である。

「お父樣！　いんへるのへ參りませう。お母樣も、わたしも、あちらのお父樣やお母樣も、――みんな惡魔にさらはれませう。」

孫七はとうとう墮落した。

この話は我國に多かつた奉教人の受難の中でも、最も恥づべき躓きとして、後代に傳へられた物語である。何でも彼等が三人ながら、おん教を捨てるとなつた時には、天主の何たるかをわきまへない見物の老若男女さへも、悉彼等を憎んだと云ふ。これは折角の火炙りも何も、見そこなつた遺恨だつたかも知れない。更に又傳ふる所によれば、惡魔はその時大歡喜のあまり、大きい書物に化けながら、夜中刑場に飛んでゐたと云ふ。これもさう無性に喜ぶ程、惡魔の成功だつたかどうか、作者は甚だ懷疑的である。

（大正十一年八月）

百合

良平は或雜誌社に校正の朱筆を握つてゐる。しかしそれは本意ではない。彼は少しの暇さへあれば、飜譯のマルクスを耽讀してゐる。或は太い指の先に一本のバットを樂しみながら、薄暗いロシアを夢みてゐる。百合の話もさう云ふ時にふと彼の心を掠めた、切れ切れな思ひ出の一片に過ぎない。………

今年七才の良平は生まれた家の臺所に早い午飯を掻きこんでゐた。すると隣の金三が汗ばんだ顏を光らせながら、何か大事件でも起つたやうにいきなり流し元へ飛びこんで來た。

「今ね、良ちやん。今ね、二本芽の百合を見つけて來たぜ。」

金三は二本芽を表はす爲に、上を向いた鼻の先へ兩手の人さし指を揃へて見せた。

「二本芽のね？」

良平は思はず目を見張つた。一つの根から芽の二本出た、その二本芽の百合と云ふやつは容易に見つからない物だつたのである。

「ああ、うんと太い二本芽のね、ちんぼ芽のね、赤芽のね、……」

金三は解けかかつた帯の端に顔の汗を拭きながら、殆ど夢中にしやべり續けた。それに釣りこまれた良平も何時か膳を置きざりにした儘、流し元の框にしやがんでゐた。

「御飯を食べてしまへよ。二本芽でも赤芽でも好いぢやないか。」

母はだだ廣い次の間に蠶の桑を刻み刻み、二三度良平へ聲をかけた。しかし彼はそんな事も全然耳へはひらないやうに、芽はどの位太いかとか、二本とも同じ長さかとか、矢つぎ早に問を發してゐた。金三は勿論雄辯だつた。芽は二本とも親指より太い。丈も同じやうに揃つてゐる。ああ云ふ百合は世界中にもあるまい。……

「ね、おい、良ちやん。今直見にあゆびよう。」

金三は狡るさうに母の方を見てから、そつと良平の裾を引いた。二本芽の赤芽のちんぼ芽の百合を見る、――この位大きい誘惑はなかつた。良平は返事もしない内に、母の藁草履へ足をかけ

た。藁草履はじつとり濕つた上、鼻緒も好い加減緩んでゐた。
「良平！　これ！　御飯を食べかけて、――」
母は驚いた聲を出した。が、もう良平はその時には、先に立つて裏庭を驅け抜けてゐた。裏庭の外には小路の向うに、木の芽の煙つた雜木林があつた。良平はそちらへ驅けて行かうとした。すると金三は「こつちだよう」と一生懸命に喚きながら、畑のある右手へ走つて行つた。良平は一足踏み出したなり、大仰にぐるりと頭を廻すと、前こごみにばたばた駈け戻つて來た。なぜか彼にはさうしないと、勇ましい氣もちがしないのだつた。
「なあんだね、畑の土手にあるのかね？」
「ううん、畑の中にあるんだよ。この向うの麥畑の……」
金三はかう云ひかけたなり、桑畑の畔へもぐりこんだ。桑畑の中生十文字はもう縱横に伸ばした枝に、二錢銅貨程の葉をつけてゐた。良平もその枝をくぐりくぐり、金三の跡を追つて行つた。彼の直鼻の先には繼の當つた金三の尻に、ほどけかかつた帶が飛び廻つてゐた。
桑畑を向うへ抜けた所はやつと節立つた麥畑だつた。金三は先に立つた儘、麥と桑とに挾まれ

た畔をもう一度右へ曲りかけた。素早い良平はその途端に金三の脇を走り抜けた。が、三間と走らない内に、腹を立てたらしい金三の聲は、忽ち彼を立止らせてしまつた。

「何だい、何處にあるか知つてもしない癖に!」

悄氣返つた良平はしぶしぶ又金三を先に立てた。二人はもう駈けなかつた。互にむつつり默つた儘、麥とすれすれに歩いて行つた。しかしその麥畑の隅の、土手の築いてある側へ來ると、金三は急に良平の方へ笑ひ顏を振り向けながら、足もとの畦を指して見せた。

「かう、此處だよ。」

良平もさう云はれた時にはすつかり不機嫌を忘れてゐた。

「どうね? どうね?」

彼はその畦を覗きこんだ。其處には金三の云つた通り、赤い葉を卷いた百合の芽が二本、光澤の好い頭を尖らせてゐた。彼は話には聞いてゐても、現在この立派さを見ると、聲も出ない程びつくりしてしまつた。

「ね、太からう。」

金三はさも得意さうに良平の顔へ目をやつた。が、良平は頷いたぎり、百合の芽ばかり見守つてゐた。

「ね、太からう。」

金三はもう一度繰返してから、右の方の芽にさはらうとした。すると良平は目のさめたやうに、慌ててその手を拂ひのけた。

「あつ、さはんなさんなよう、折れるから。」

「好いぢやあ、さはつたつて。お前さんの百合ぢやないに！」

金三は又怒り出した。良平も今度は引きこまなかつた。

「お前さんのでもないぢやあ。」

「わしのでないつて、さはつても好いぢやあ。」

「よしなさいつてば。折れちまふよう。」

「折れるもんぢやよう。わしはさつきさんざさはつたよう。」

「さつきさんざさはつた」となれば、良平も默るより外はなかつた。金三は其處へしやがんだ儘、

前よりも手荒に百合の芽をいぢつた。しかし三寸に足りない芽は動きさうな氣色も見せなかつた。

「ぢやわしもさはらうか?」

やつと安心した良平は金三の顏色を窺ひながら、そつと左の芽にさはつて見た。赤い芽は良平の指のさきに、妙にしつかりした觸覺を與へた。彼はその觸覺の中に何とも云はれない嬉しさを感じた。

「おおなあ!」

良平は獨り微笑してゐた。すると金三は少時の後、突然又こんな事を云ひ始めた。

「こんなに好いちんぼ芽ぢや球根はうんと大きからうねえ。——え、良ちやん掘つて見ようか?」

彼はもうさう云つた時には、畦の土に指を突こんでゐた。良平のびつくりした事はさつきより烈しい位だつた。彼は百合の芽も忘れたやうに、いきなりその手を抑へつけた。

「よしなさいよう。よしなさいつてば。——」

それから良平は小聲になつた。

「見つかると、お前さん、叱られるよ。」

畑の中に生えてゐる百合は野原や山にあるやつと違ふ。この畑の持ち主以外に誰も取る事は許されてゐない。——それは金三にもわかつてゐた。彼はちよいと未練さうに、まはりの土へ輪を描いた後、素直に良平の云ふ事を聞いた。

晴れた空の何處かには雲雀の聲が續いてゐた。二人の子供はその聲の下に二本芽の百合を愛しながら、大眞面目にかう云ふ約束を結んだ。——第一、この百合の事はどんな友だちにも話さない事。第二、毎朝學校へ出る前、二人一しよに見に來る事。……

翌朝二人は約束通り、一しよに百合のある麥畑へ來た。百合は赤い芽の先に露の玉を保つてゐた。金三は右のちんぼ芽を、良平は左のちんぼ芽を、それぞれ爪で彈きながら、露の玉を落してやつた。

「太いねえ！——」

良平はその朝も今更のやうに、百合の芽の立派さに見惚れてゐた。
「これぢや五年經つただね。」
「五年ねえ？——」
金三はちよいと良平の顏へ、蔑すみに滿ちた目を送つた。
「五年ねえ？　十年位ずらぢや。」
「十年！　十年つてわしより年上かね？」
「さうさ。お前さんより年上ずらぢや。」
「ぢや花が十咲くかね？」
五年の百合には五つ花が出來、十年の百合には十花が出來る、——彼等は何時か年上のものにさう云ふ事を教へられてゐた。
「咲くさあ、十位！」
金三は嚴かに云ひ切つた。良平は內心たじろぎながら、云ひ訣のやうに獨り言を云つた。
「早く咲くと好いな。」

「咲くもんぢやあ、夏でなけりや。」
金三は又嘲笑つた。
「夏ねえ？　夏なもんか。雨の降る時分だよう。」
「雨の降る時分は夏だよう。」
「夏は白い着物を着る時だよう。――」
良平も容易に負けなかつた。
「雨の降る時分は夏なもんか。」
「莫迦！　白い着物を着るのは土用だい。」
「嘘だい。うちのお母さんに訊いて見ろ。白い着物を着るのは夏だい！」
良平はさう云ふか云はない内に、ぴしやり左の横鬢を打たれた。が、打たれたと思つた時には
もう又相手を打ち返してゐた。
「生意氣！」
顔色を變へた金三は力一ぱい彼を突き飛ばした。良平は仰向けに麥の畦へ倒れた。畦には露か

下りてゐたから、顏や着物はその拍子にすつかり泥になつてしまつた。それでも彼は飛び起きるが早いか、いきなり金三へむしやぶりついた。金三も不意を食つたせゐか、何時もは滅多に負けた事のないのが、この時はべたりと尻餅をついた。しかもその尻餅の跡は百合の芽の直に近所だつた。

「喧嘩ならこつちへ來い。百合の芽を傷めるからこつちへ來い。」

金三は顋をしやくひながら、桑畑の畔へ飛び出した。良平もべそをかいたなり、やむを得ず其處へ出て行つた。二人は忽ち取組み合ひを始めた。顏を眞赤にした金三は良平の胸ぐらを摑まへた儘、無茶苦茶に前後へこづき廻した。良平はふだんかうやられると、大抵泣き出してしまふのだつた。しかしその朝は泣き出さなかつた。のみならず頭がふらついて來ても、剛情に相手へしがみついてゐた。

すると桑の間から、突然誰かが顏を出した。

「はえ、まあ、お前さんたちは喧嘩かよう。」

二人はやつと摑み合ひをやめた。彼等の前には薄痘痕のある百姓の女房が立つてゐた。それは

やはり惣吉と云ふ學校友だちの母親だつた。彼女は桑を摘みに來たのか、寢間着に手拭をかぶつたなり、大きい笊を抱へてゐた。さうして何か迂散さうに、じろじろ二人を見比べてゐた。

「相撲だよう。叔母さん。」

金三はわざと元氣さうに云つた。が、良平は震へながら、相手の言葉を打ち切るやうに云つた。

「嘘つき！　喧嘩だ癖に！」

「手前こそ嘘つきぢやあ。」

金三は良平の、耳朶を摑んだ。が、まだ仕合せと引張らない内に、怖い顏をした惣吉の母は樂樂とその手を捲ぎ離した。

「お前さんは何時も亂暴だよう。この間うちの惣吉の額に疵をつけたのもお前さんずら。」

良平は金三の叱られるのを見ると、「ざまを見ろ」と云ひたかつた。しかしさう云つてやるより前に、なぜか淚がこみ上げて來た。その途端に又金三は惣吉の母の手を振り離しながら、片足づつ躍るやうに桑の中を向うへ逃げて行つた。

「日金山が曇つた！　良平の目から雨が降る！」

その翌日は夜明け前から、春には珍らしい大雨だつた。良平の家では蠶に食はせる桑の貯へが足りなかつたから、父や母は午頃になると、蓑の埃を拂つたり、古い麥藁帽を探し出したり、畑へ出る仕度を急ぎ始めた。が、良平はさう云ふ中にも肉桂の皮を嚙みながら、百合の事ばかり考へてゐた。この降りでは事によると、百合の芽も折られてしまつたかも知れない。それとも畑の土と一しよに、球根ごとそつくり流されはしないか？……

「金三のやつも心配ずら。」

良平は又さうも思つた。すると少し可笑しい氣がした。金三の家は隣だから、軒傳ひに行きさへすれば、傘をさす必要もないのだつた。しかし昨日の喧嘩の手前、こちらからは遊びに行きたくなかつた。たとひ向うから遊びに來ても、始は口一つ利かずにゐてやる。さうすればあいつも悄氣るのに違ひない。………（未完）

（大正十一年九月）

三つの寶

森の中。三人の盗人が寶を爭つてゐる。寶とは一飛びに千里飛ぶ長靴、着れば姿の隱れるマントル、鐵でもまつ二つに切れる劍――但しいづれも見た處は、古道具らしい物ばかりである。

第一の盗人　そのマントルをこつちへよこせ。

第二の盗人　餘計な事を云ふな。その劍こそこつちへよこせ。――おや、おれの長靴を盗んだな。

第三の盗人　この長靴はおれの物ぢやないか？　貴樣こそおれの物を盗んだのだ。

第一の盗人　よしよし、ではこのマントルはおれが貰つて置かう。

第二の盗人　こん畜生！　貴樣なぞに渡してたまるものか！

第一の盗人　よくもおれを撲つたな。――おや、又おれの劍も盗んだな？

第三の盗人　何だ、このマントル泥坊め！

三人の者が大喧嘩になる。其處へ馬に跨つた王子が一人、森の中の路を通りかかる。

王子　おいおい、お前たちは何をしてゐるのだ？（馬から下りる）

第一の盗人　何、こいつが悪いのです。わたしの劍を盗んだ上、マントルさへよこせと云ふものですから、——

第三の盗人　いえ、そいつが悪いのです。マントルはわたしのを盗んだのです。

第二の盗人　いえ、こいつ等は二人とも大泥坊です。これは皆わたしのものなのですから、——

第一の盗人　嘘をつけ！

第二の盗人　この大法螺吹きめ！

三人又喧嘩をしようとする。

王子　待て待て。たかが古いマントルや、穴のあいた長靴位、誰がとつても好いぢやないか？

第二の盗人　いえ、さうは行きません。このマントルは着たと思ふと、姿の隱れるマントルなのです。

第一の盗人　どんな又鐵の兜でも、この劍で切れば切れるのです。

第三の盗人　この長靴もはきさへすれば、一飛びに千里飛べるのです。

王子　成程、さう云ふ寶なら、喧嘩をするのも尤もな話だ。が、それならば慾張らずに、一つづつ分ければ好いぢやないか？

第二の盜人　そんな事をしてごらんなさい。わたしの首はいつ何時、あの劍に切られるかわかりはしません。

第一の盜人　いえ、それよりも困るのは、あのマントルを着られれば、何を盜まれるか知れますまい。

第二の盜人　いえ、何を盜んだ所が、あの長靴をはかなければ、思ふやうには逃げられない訣です。

王子　それも成程一理窟だな。では物は相談だが、わたしにみんな賣つてくれないか？　さうすれば心配も入らない筈だから。

第一の盜人　どうだい、この殿樣に賣つてしまふのは？

第三の盜人　成程、それも好いかも知れない。

第二の盜人　唯値段次第だな。

王子　値段は――さうだ。そのマントルの代りには、この赤いマントルをやらう、これには刺繍の縁もついてゐる。それからその長靴の代りには、この寶石のはひつた靴をやらう。この黄金細工の劍をやれば、その劍をくれても損はあるまい。どうだ、この値段では？

第二の盜人　わたしはこのマントルの代りに、そのマントルを頂きませう。

第一の盜人と第三の盜人　わたしたちも申し分はありません。

王子　さうか。では取り換へて貰はう。

王子はマントル、劍、長靴等を取り換へた後、又馬の上に跨りながら、森の中の路を行きかける。

王子　この先に宿屋はないか？

第一の盜人　森の外へ出さへすれば、「黄金の角笛」といふ宿屋があります。では御大事にいらつしやい。

王子　さうか。ではさやうなら。（去る）

第三の盜人　うまい商賣をしたな。おれはあの長靴が、こんな靴にならうとは思はなかつた。見

ろ。止め金には金剛石がついてゐる。

第二の盗人　おれのマントルも立派な物ぢやないか？　これをかう着た所は、殿様のやうに見えるだらう。

第一の盗人　この劍も大した物だぜ。何しろ柄も鞘も黄金だからな。――しかしああ安安欺されるとは、あの王子も大莫迦ぢやないか？

第二の盗人　しつ！　壁に耳あり、徳利にも口だ。まあ、何處かへ行つて一杯やらう。

三人の盗人は嘲笑ひながら、王子とは反對の路へ行つてしまふ。

二

「黄金の角笛」と云ふ宿屋の酒場。酒場の隅には王子がパンを噛ぢつてゐる。王子の外にも客が七八人、――これは皆村の農夫らしい。

宿屋の主人　愈王女の御婚禮があるさうだね。

第一の農夫　さう云ふ話だ。なんでも御壻になる人は、黑ん坊の王様だと云ふぢやないか？

第二の農夫　しかし王女はあの王樣が大嫌ひだと云ふ噂だぜ。
第一の農夫　嫌ひなればお止しなされば好いのに。
主人　所がその黑ん坊の王樣は、三つの寶ものを持つてゐる。第一が千里飛べる長靴、第二が鐵さへ切れる劍、第三が姿の隱れるマントル、——それを皆獻上すると云ふものだから、慾の深いこの國の王樣は、王女をやると仰有つたのださうだ。
第二の農夫　御可哀さうなのは王女御一人だな。
第一の農夫　誰か王女をお助け申すものはないだらうか？
主人　いや、いろいろの國の王子の中には、さう云ふ人もあるさうだが、何分あの黑ん坊の王樣にはかなはないから、みんな指を啣へてゐるのだとさ。
第二の農夫　おまけに慾の深い王樣は、王女を人に盜まれないやうに、龍の番人を置いてあるさうだ。
主人　何、龍ぢやない、兵隊ださうだ。
第一の農夫　わたしが魔法でも知つてゐれば、まつ先に御助け申すのだが、——

主人　當り前さ。わたしも魔法を知つてゐれば、お前さんなどに任せて置きはしない。(一同笑ひ出す)
王子　(突然一同の中へ飛び出しながら)よし心配するな！　きつとわたしが助けて見せる。
一同　(驚いたやうに)あなたが?!
王子　さうだ、黑ん坊の王などは何人でも來い。(腕組をした儘、一同を見まはす)わたしは片つ端から退治して見せる。
主人　ですがあの王樣には、三つの寶があるさうです。第一には千里飛ぶ長靴、第二には、——
王子　鐵でも切れる劍か？　そんな物はわたしも持つてゐる。この長靴を見ろ。この劍を見ろ。この古いマントルを見ろ。黑ん坊の王が持つてゐるのと、寸分も違はない寶ばかりだ。
一同　(再び驚いたやうに)その靴が?!　その劍が?!　そのマントルが?!
主人　(疑はしさうに)しかしその長靴には、穴があいてゐるぢやありませんか？
王子　それは穴があいてゐる。が、穴はあいてゐても、一飛びに千里飛ばれるのだ。
主人　ほんたうですか？

王子 （憐むやうに）お前には嘘だと思はれるかも知れない。よし、それならば飛んで見せる。入口の戸をあけて置いてくれ。好いか。飛び上つたと思ふと見えなくなるぞ。

主人 その前に御勘定を頂きませうか？

王子 何、すぐに歸つて來る。土産には何を持つて來てやらう。イタリアの柘榴か、イスパニアの眞桑瓜か、それともずつと遠いアラビアの無花果か？

主人 御土産ならば何でも結構です。まあ飛んで見せて下さい。

王子 では飛ぶぞ。一、二、三！

王子は勢好く飛び上る。が、戸口へも屆かない内に、どたりと尻餅をついてしまふ。一同どつと笑ひ立てる。

主人 こんな事だらうと思つたよ。

第一の農夫 千里所か、二三間も飛ばなかつたぜ。

第二の農夫 何、千里飛んだのさ。一度千里飛んで置いて、又千里飛び返つたから、もとの所へ來てしまつたのだらう。

第一の農夫　冗談ぢやない。そんな莫迦な事があるものか。
一同大笑ひになる。王子はすごすご起き上りながら、酒場の外へ行かうとする。
主人　もしもし、御勘定を置いて行つて下さい。
王子無言の儘、金を投げる。
第二の農夫　御土産は？
王子　（劍の柄へ手をかける）何だと？
第二の農夫　（尻ごみしながら）いえ、何とも云ひはしません。（獨り語のやうに）劍だけは首位斬れるかも知れない。
主人　（なだめるやうに）まあ、あなたなどは御年若なのですから、一先御父樣の御國へお歸りなさい。いくらあなたが騷いで見た所が、とても黑ん坊の王樣にはかなひはしません。兎角人間と云ふ者は、何でも身の程を忘れないやうに愼み深くするのが上分別です。
一同　さうなさい。さうなさい。惡い事は云ひはしません。
王子　わたしは何でも、――何でも出來ると思つたのに、（突然涙を落す）お前たちにも恥づかし

い。(顏を隱しながら)ああ、この儘消えてもしまひたいやうだ。

第一の農夫　そのマントルを着て御覽さない。さうすれば消えるかも知れません。

王子　畜生！(ぢだんだを踏む)よし、いくらでも莫迦にしろ。わたしはきつと黑ん坊の王から可哀さうな王女を助けて見せる。長靴は千里飛ばれなかつたが、まだ劍もある。マントルも、——(一生懸命に)いや、空手でも助けて見せる。その時に後悔しないやうにしろ。(氣違ひのやうに酒場を飛び出してしまふ。)

主人　困つたものだ。黑ん坊の王樣に殺されなければ好いが、——

三

王城の庭。薔薇の花の中に噴水が上つてゐる。始は誰もゐない。少時の後、マントルを着た王子が出て來る。

王子　やはりこのマントルは着たと思ふと、忽ち姿が隱れると見える。わたしは城の門をはひつてから、兵卒にも遇へば腰元にも遇つた。が、誰も咎めたものはない。このマントルさへ着て

ゐれば、あの薔薇を吹いてゐる風のやうに、王女の部屋へもはひれるだらう。——おや、あそこへ歩いて來たのは、噂に聞いた王女ぢやないか？　何處かへ一時身を隱してから、——何、そんな必要はない、わたしは此處に立つてゐても、王女の眼には見えない筈だ。

王女は噴水の緣へ來ると、悲しさうにため息をする。

王女　わたしは何と云ふ不仕合せなのだらう。もう一週間もたたない内に、あの憎らしい黑ん坊の王は、わたしをアフリカへつれて行つてしまふ。獅子や鰐のゐるアフリカへ、——(其處の芝の上に坐りながら)わたしは何時までもこの城にゐたい。この薔薇の花の中に、噴水の音を聞いてゐたい。……

王子　何と云ふ美しい王女だらう。わたしはたとひ命を捨てても、この王女を助けて見せる。

王女　(驚いたやうに王子を見ながら)誰です、あなたは？

王子　(獨り語のやうに)しまつた！　聲を出したのは惡かつたのだ！

王女　聲を出したのが惡い？　氣違ひかしら？　あんな可愛い顏をしてゐるけれども、——

王子　顏？　あなたにはわたしの顏が見えるのですか？

王女　見えますわ。まあ、何を不思議さうに考へていらつしやるの？
王子　このマントルも見えますか？
王女　ええ、ずゐぶん古いマントルぢやありませんか？
王子　（落膽したやうに）わたしの姿は見えない筈なのですがね。
王女　（驚いたやうに）どうして？
王子　これは一度着さへすれば、姿が隱れるマントルなのです。
王女　それはあの黑ん坊の王のマントルでせう。
王子　いえ、これもさうなのです。
王女　だつて姿が隱れないぢやありませんか？
王子　兵卒や腰元に遇つた時は、確に姿が隱れたのですがね。その證據には誰に遇つても、咎められた事がなかつたのですから。
王女　（笑ひ出す）それはその筈ですわ。そんな古いマントルを着ていらつしやれば、下男か何かと思はれますもの。

王子　下男！（落膽したやうに坐つてしまふ）やはりこの長靴と同じ事だ。
王女　その長靴もどうかしましたの？
王子　これも千里飛ぶ長靴なのです。
王女　黑ん坊の王の長靴のやうに？
王子　ええ、――所がこの間飛んで見たら、たつた二三間も飛べないのです。御覽なさい。まだ劍もあります。これは鐵でも切れる筈なのですが、――
王女　何か切つて御覽になつて？
王子　いえ、黑ん坊の王の首を斬るまでは、何も斬らないつもりなのです。
王女　あら、あなたは黑ん坊の王と、腕競べをなさりにいらしつたの？
王子　いえ、腕競べなどに來たのぢやありません。あなたを助けに來たのです。
王女　ほんたうに？
王子　ほんたうにです。
王女　まあ、嬉しい！

突然黑ん坊の王が現れる。王子と王女とはびつくりする。

黑ん坊の王　今日は。わたしは今アフリカから、一飛びに飛んで來たのです。どうです、わたしの長靴の力は？

王女　（冷淡に）ではもう一度アフリカへ行つていらつしやい。

王　いや、今日はあなたと一しよに、ゆつくり御話がしたいのです。（王子を見る）誰ですか、その下男は？

王子　下男？　（腹立たしさうに立ち上る）わたしは王子です。王女を助けに來た王子です。わたしが此處にゐる限りは、指一本も王女にはささせません。

王　（わざと叮嚀に）わたしは三つの寶を持つてゐます。あなたはそれを知つてゐますか？

王子　劍と長靴とマントルですか？　成程わたしの長靴は一町も飛ぶ事は出來ません。しかし王女と一しよならば、この長靴をはいてゐても、千里や二千里は驚きません。又このマントルを御覽なさい。わたしが下男と思はれた爲、王女の前へも來られたのは、やはりマントルのおかげです。これでも王子の姿だけは、隱す事が出來たぢやありませんか？

王　（嘲笑ふ）生意氣な！　わたしのマントルの力を見るが好い。（マントルを着る。同時に消え失せる）

王女　（手を打ちながら）ああ、もう消えてしまひました。わたしはあの人が消えてしまふと、ほんたうに嬉しくつてたまりませんわ。

王子　ああ云ふマントルも便利ですね。丁度わたしたちの爲に出來てゐるやうです。

王　（突然又現はれる。忌忌しさうに）さうです。あなた方の爲に出來てゐるやうなものです。わたしには役にも何にもたたない。（マントルを投げ捨てる）しかしわたしは劍を持つてゐる。（急に王子を睨みながら）あなたはわたしの幸福を奪ふものだ。さあ尋常に勝負をしよう。わたしの劍は鐵でも切れる。あなたの首位は何でもない。（劍を拔く）

王女　（立ち上るが早いか、王子をかばふ）鐵でも切れる劍ならば、わたしの胸も突けるでせう。さあ、一突きに突いて御覽なさい。

王　（尻ごみをしながら）いや、あなたは斬れません。

王女　（嘲るやうに）まあ、この胸も突けないのですか？　鐵でも斬れるとおつしやつた癖に！

王子　お待ちなさい。（王女を押し止めながら）王の云ふ事は尤もです。王の敵はわたしですから、尋常に勝負をしなければなりません。（王に）さあ、すぐに勝負をしよう。（劍を拔く）

王　年の若いのに感心な男だ。好いか？　わたしの劍にさはれば命はないぞ。

王と王子と劍を打ち合せる。すると忽ち王の劍は、杖か何か切るやうに、王子の劍を切つてしまふ。

王　どうだ？

王子　劍は切られたのに違ひない。が、わたしはこの通り、あなたの前でも笑つてゐる。

王　ではまだ勝負を續ける氣か？

王子　あたり前だ。さあ、來い。

王　もう勝負などはしないでも好い。（急に劍を投げ捨てる）勝つたのはあなただ。わたしの劍などは何にもならない。

王子　（不思議さうに王を見る）なぜ？

王　なぜ！　わたしはあなたを殺した所が、王女には愈憎まれるだけだ。あなたにはそれがわ

からないのか?

王子　いや、わたしにはわかつてゐる。唯あなたにはそんな事も、わかつてゐなさうな氣がしたから。

王　(考へに沈みながら)わたしには三つの寶があれば、王女も貰へると思つてゐた。が、それは間違ひだつたらしい。

王子　(王の肩に手をかけながら)わたしも三つの寶があれば、王女を助けられると思つてゐた。が、それも間違ひだつたらしい。

王　さうだ。我我は二人とも間違つてゐたのだ。(王子の手を取る)さあ、綺麗に仲直りをしませう。わたしの失禮は赦して下さい。

王子　わたしの失禮も赦して下さい。今になつて見ればわたしが勝つたか、あなたが勝つたかわからないやうです。

王　いや、あなたはわたしに勝つた。わたしはわたし自身に勝つたのです。(王女に)わたしはアフリカへ歸ります。どうか御安心なすつて下さい。王子の劍は鐵を切る代りに、鐵よりももつ

と堅い、わたしの心を刺したのです。わたしはあなた方の御婚禮の爲に、この劍と長靴と、それからあのマントルと、三つの寶をさし上げませう。もうこの三つの寶があれば、あなた方二人を苦しめる敵は、世界にないと思ひますが、もし又何か惡いやつがあつたら、わたしの國へ知らせて下さい。わたしはいつでもアフリカから、百萬の黑ん坊の騎兵と一しよに、あなた方の敵を征伐に行きます。(悲しさうに)わたしはあなたを迎へる爲に、アフリカの都のまん中に、大理石の御殿を建てて置きました。その御殿のまはりには、一面に蓮の花が咲いてゐるのです。(王子に)どうかあなたはこの長靴をはいたら、時時遊びに來て下さい。

王子　きつと御馳走になりに行きます。

王女　(黑ん坊の王の胸に、薔薇の花をさしてやりながら)わたしはあなたにすまない事をしました。あなたがこんな優しい方だとは、夢にも知らずにゐたのです。どうかかんにんして下さい。ほんたうにわたしはすまない事をしました。(王の胸にすがりながら、子供のやうに泣き始める)

王　(王女の髮を撫でながら)難有う。よくさう云つてくれました。わたしも惡魔ではありません。

惡魔も同様な黑ん坊の王は御伽噺にあるだけです。（王子に）さうぢやありませんか？

王子　さうです。（見物に向ひながら）皆さん！　我我三人は目がさめました。惡魔のやうな黑ん坊の王や、三つの寶を持つてゐる王子は、御伽噺にあるだけなのです。我我はもう目がさめた以上、御伽噺の中の國には、住んでゐる訣には行きません。我我の前には霧の奧から、もつと廣い世界が浮んで來ます。我我はこの薔薇と噴水との世界から、一しよにその世界へ出て行きませう。もつと廣い世界！　もつと醜い、もつと美しい、――もつと大きい御伽噺の世界！　その世界に我我を待つてゐるものは、苦しみか又は樂しみか、我我は何も知りません。唯我我はその世界へ、勇ましい一隊の兵卒のやうに、進んで行く事を知つてゐるだけです。

（大正十二年十二月）

雛

箱を出る顔忘れめや雛二對

蕪村

これは或老女の話である。

……横濱の或亞米利加人へ雛を賣る約束の出來たのは十一月頃のことでございます。紀の國屋と申したわたしの家は親代代諸大名のお金御用を勤めて居りましたし、殊に紫竹とか申した祖父は大通の一人にもなつて居りましたから、雛もわたしのではございますが、中中見事に出來て居りました。まあ、申さば、内裏雛は女雛の冠の瓔珞にも珊瑚がはひつて居りますとか、男雛の鹽瀨の石帶にも定紋と替へ紋とが互違ひに繡ひになつて居りますとか、――さう云ふ雛だつたのでございます。

それさへ賣らうと申すのでございますから、わたしの父、――十二代目の紀の國屋伊兵衞はどの位手もとが苦しかつたか、大抵御推量にもなれるでございませう。何しろ德川家の御瓦解以來、

御用金を下げて下すつたのは加州様ばかりでございます。それも三千兩の御用金の中、百兩しか下げては下さいません。因州様などになりますと、四百兩ばかりの御用金のかたに赤間が石の硯を一つ下すつただけでございました。その上火事には二三度も遇ひますし、蝙蝠傘屋などをやりましたのも皆手違ひになりますし、當時はもう目ぼしい道具もあらかた一家の口すごしに賣り拂つてゐたのでございます。

其處へ雛でも賣つたらと父へ勸めてくれましたのは丸佐と云ふ骨董屋の、……もう故人になりましたが、禿げ頭の主人でございます。この丸佐の禿げ頭位、可笑しかつたものはございません。と申すのは頭のまん中に丁度按摩膏を貼つた位、入れ墨がしてあるのでございます。これは何でも若い時分、ちよいと禿げを隱す爲に彫らせたのださうでございますが、生憎その後頭の方は遠慮なしに禿げてしまひましたから、この腦天の入れ墨だけ取り殘されることになつたのだとか、當人自身申して居りました。……さう云ふことは兎も角も、父はまだ十五のわたしを可哀さうに思つたのでございませう、度度丸佐に勸められても、雛を手放すことだけはためらつてゐたやうでございます。

それをとうとう賣らせたのは英吉と申すわたしの兄、……やはり故人になりましたが、その頃まだ十八だつた、癇の強い兄でございます。兄は開化人とでも申しませうか、英語の讀本を離したことのない政治好きの青年でございました。これが雛の話になると、雛祭などは舊弊だとか、あんな實用にならない物は取つて置いても仕方がないとか、いろいろけなすのでございます。その爲に兄は昔風の母とも何度口論をしたかわかりません。しかし雛を手放しさへすれば、この大歳の凌ぎだけはつけられるのに違ひございませんから、母も苦しい父の手前、さうは強いことばかりも申されなかつたのでございませう。雛は前にも申しました通り、十一月の中旬にはとうとう横濱の亞米利加人へ賣り渡すことになつてしまひました。何、わたしでございますか？　それは駄駄もこねましたが、お轉婆だつたせゐでございませう。その割にはあまり悲しいとも思はなかつたものでございます。父は雛を賣りさへすれば、紫繻子の帶を一本買つてやると申して居りましたから。……

その約束の出來た翌晩、丸佐は横濱へ行つた歸りに、わたしの家へ參りました。

わたしの家と申しましても、三度目の火事に遇つた後は普請もほんたうには參りません。燒け

殘つた土藏を一家の住居に、それへさしかけて假普請を見世にしてゐたのでございます。尤も當時は俄仕込みの藥屋をやつて居りましたから、正德丸とか安經湯とか或は又胎毒散とか、――さう云ふ藥の金看板だけは藥箪笥の上に竝んで居りました。其處に又無盡燈がともつてゐる、……と申したばかりでは多分おわかりになりますまい。無盡燈と申しますのは石油の代りに種油を使ふ舊式のランプでございます。可笑しい話でございますが、わたしは未に藥種の匂、――陳皮や大黃の匂がすると、必この無盡燈を思ひ出さずには居られません。現にその晩も無盡燈は藥種の匂の漂つた中に、薄暗い光を放つて居りました。

頭の禿げた丸佐の主人はやつと散切りになつた父と、無盡燈を中に坐りました。

「では確かに半金だけ、……どうかちよいとお檢め下さい。」

時候の挨拶をすませて後、丸佐の主人がとり出したのは紙包みのお金でございます。その日に手つけを貰ふことも約束だつたのでございませう。父は火鉢へ手をやつたなり、何も云はずに時儀をしました。丁度この時でございます。わたしは母の云ひつけ通り、お茶のお給仕に參りました。ところがお茶を出さうとすると、丸佐の主人は大聲で、「そりやあいけません。それだけはい

けません。」と、突然かう申すではございませんか？　わたしはお茶がいけないのかと、ちよいと呆氣にもとられましたが、丸佐の主人の前を見ると、もう一つ紙に包んだお金がちやんと出てゐるのでございます。

「これやあほんの輕少だが、志はまあ志だから、……」

「いえ、もうお志は確かに頂きました。が、こりやあどうかお手もとへ、……」

「まあさ、……そんなに又恥をかかせるもんぢやあない。」

「冗談仰有つちやあいけません。檀那こそ恥をおかかせなさる。何も赤の他人ぢやあなし、大檀那以來お世話になつた丸佐のしたことぢやあごわせんか？　まあ、そんな水つ臭いことを仰有らずに、これだけはそちらへおしまひなすつて下さい。……おや、お孃さん。今晩は、おうおう、今日は蝶蝶髷が大へん綺麗にお出來なすつた！」

わたしは別段何の氣なしに、かう云ふ押し問答を聞きながら、土藏の中へ歸つて來ました。

土藏は十二疊も敷かりませうか？　可也廣うございましたが、簞笥もあれば長火鉢もある、長持もあれば置戸棚もある、――と云ふ體裁でございましたから、すつと手狹な氣がしました。さ

う云ふ家財道具の中にも、一番人目につき易いのは都合三十幾つかの總桐の箱でございます。もとより雛の箱と申すことは申し上げるまでもございますまい。これが何時でも引き渡せるやうに、窓したの壁に積んでございました。かう云ふ土藏のまん中に、無盡燈は見世へとられましたから、ぼんやり行燈がともつてゐる、――その昔じみた行燈の光に、母は振り出しの袋を縫ひ、兄は小さい古机に例の英語の讀本か何か調べてゐるのでございます。それには變つたこともございません。が、ふと母の顏を見ると、母は針を動かしながら、伏し眼になつた睫毛の裏に淚を一ぱいためて居ります。

お茶のお給仕をすませたわたしは母に褒めて貰ふことを樂しみに……と云ふのは大袈裟にしろ、待ち設ける氣もちはございました。其處へこの淚でございませう？ わたしは悲しいと思ふよりも、取りつき端に困つてしまひましたから、出來るだけ母を見ないやうに、兄のゐる側へ坐りました。すると急に眼を擧げたのは兄の英吉でございます。兄はちよいとけげんさうに母とわたしとを見比べましたが、忽ち妙な笑ひ方をすると、又橫文字を讀み始めました。わたしはまだこの時位、開化を鼻にかける兄を憎んだことはございません。お母さんを莫迦にしてゐる、――一圖

にさう思つたのでございます。わたしはいきなり力一ぱい、兄の背中をぶつてやりました。
「何をする？」
兄はわたしを睨みつけました。
「ぶつてやる！　ぶつてやる！」
わたしは泣き聲を出しながら、もう一度兄をぶたうとしました。その時はもう何時の間にか、兄の癇癖の強いことも忘れてしまつたのでございます。が、まだ擧げた手を下さない中に、兄はわたしの横鬢へぴしやりと平手を飛ばせました。
「わからず屋！」
わたしは勿論泣き出しました。と同時に兄の上にも物差しが降つたのでございませう。兄は直と威丈高に母へ食つてかかりました。母もかうなれば承知しません。低い聲を震はせながら、さんざん兄と云ひ合ひました。
さう云ふ口論の間中、わたしは唯悔やし泣きに泣き續けてゐたのでございます。丸佐の主人を送り出した父が無盡燈を持つた儘、見世からこちらへはひつて來る迄は。……いえ、わたしばか

りではございません。兄も父の顏を見ると、急に默つてしまひました。口數を利かない父位、わたしはもとより當時の兄にも、恐しかつたものはございませんから。……

その晩雛は今月の末、殘りの半金を受け取ると同時に、あの横濱の亞米利加人へ渡してしまふことにきまりました。何、賣り價でございますか？　今になつて考へますと、莫迦莫迦しいやうでございますが、確か三十圓とか申して居りました。それでも當時の諸式にすると、ずゐぶん高價には違ひございません。

その内に雛を手放す日はだんだん近づいて參りました。わたしは前にも申しました通り、格別それを悲しいとは思はなかつたものでございます。ところが一日一日と約束の日が迫つて來ると、何時か雛と別れるのはつらいやうに思ひ出しました。しかし如何に子供とは申せ、一旦手放すときまつた雛を手放さずにすまうとは思ひません。唯人手に渡す前に、もう一度よく見て置きたい。內裏雛、五人囃し、左近の櫻、右近の橘、雪洞、屛風、蒔繪の道具、――もう一度この土藏の中にさう云ふ物を飾つて見たい、――と申すのが心願でございました。が、性來一徹な父は何度わたしにせがまれても、これだけのことを許しません。「一度手附けをとつたとなりやあ、何處に

あらうが人様のものだ。人様のものはいぢるもんぢやあない。」――から申すのでございます。

するともう月末に近い、大風の吹いた日でございます。母は風邪に罹つたせゐか、それとも父下脣に出來た粟粒程の腫物のせゐか、氣持が惡いと申したぎり、朝の御飯も頂きません。わたしと臺所を片づけた後は片手に額を抑へながら、唯ぢつと長火鉢の前に俯向いてゐるのでございます。ところが彼是お午時分、ふと顏を擡げたのを見ると、腫物のあつた下脣だけ、丁度赤いおいのやうに脹れ上つてゐるではございませんか？　しかも熱の高いことは妙に輝いた眼の色だけでも、直とわかるのでございます。これを見たわたしの驚きは申す迄もございません。わたしは殆ど無我夢中に、父のゐる見世へ飛んで行きました。

「お父さん！　お父さん！　お母さんが大變ですよ。」

父は、……それから其處にゐた兄も父と一しよに奧へ來ました。が、恐しい母の顏には呆氣にとられたのでございませう。ふだんは物に騷がぬ父さへ、この時だけは茫然としたなり、口も少時は利かずに居りました。しかし母はさう云ふ中にも、一生懸命に微笑しながら、こんなことを申すのでございます。

「何、大したことはありますまい。唯ちよいとこのお出來に爪をかけただけなのですから、……今御飯の支度をします。」

「無理をしちやあいけない。御飯の支度なんぞはお鶴にも出來る。」

父は半ば叱るやうに、母の言葉を遮りました。

「英吉！　本間さんを呼んで來い！」

兄はもうさう云はれた時には、一散に大風の見世の外へ飛び出して居つたのでございます。

本間さんと申す漢法醫、――兄は始終藪醫者などと莫迦にした人でございますが、その醫者も母を見た時には、當惑さうに、腕組みをしました。聞けば母の腫物は面疔だと申すのでございますから。……もとより面疔も手術さへ出來れば、恐しい病氣ではございますまい。が、當時の悲しさには手術どころの騷ぎではございません。唯煎藥を飲ませたり、蛭に血を吸はせたり、――そんなことをするだけでございます。父は毎日枕もとに、本間さんの藥を煎じました。兄も毎日十五錢づつ、蛭を買ひに出かけました。わたしも、……わたしは兄に知れないやうに、つい近所のお稻荷様へお百度を踏みに通ひました。――さう云ふ始末でございますから、雛のことも申し

ては居られません。いえ、一時わたしを始め、誰もあの壁側に積んだ三十ばかりの總桐の箱には眼もやらなかつたのでございます。

ところが十一月の二十九日、——愈雛と別れると申す一日前のことでございます。わたしは雛と一しよにゐるのも、今日が最後だと考へると、殆ど矢も楯もたまらない位、もう一度箱が明けたくなりました。が、どんなにせがんだにしろ、父は不承知に違ひありません。すると母に話して貰ふ、——わたしは直にさう思ひましたが、何しろその後母の病氣は前よりも一層重つて居ります。食べ物もおも湯を啜る外は一切喉を通りません。殊にこの頃は口中へも、絶えず血の色を交へた膿がたまるやうになつたのでございます。かう云ふ母の姿を見ると、如何に十五の小娘にもせよ、わざわざ雛を飾りたいなぞとは口へ出す勇氣も起りません。わたしは朝から枕もとに、母の機嫌を伺ひ伺ひ、とうとうお八つになる頃迄は何も云ひ出さずにしまひました。

しかしわたしの眼の前には金網を張つた窓の下に、例の總桐の雛の箱が積み上げてあるのでございます。さうしてその雛の箱は今夜一晩過ごしたが最後、遠い横濱の異人屋敷へ、……ことによれば亞米利加へも行つてしまふのでございます。そんなことを考へると、愈我慢は出來ます

まい。わたしは母の眠つたのを幸ひ、そつと見世へ出かけました。見世は日當りこそ惡いものの、土藏の中に比べれば、往來の人通りが見えるだけでも、まだしも陽氣でございます。其處に父は帳合ひを檢べ、兄はせつせつと片隅の藥研に甘草か何かを下して居りました。

「ねえ、お父さん。後生一生のお願ひだから、……」

わたしは父の顏を覗きこみながら、毎時もの賴みを持ちかけました。が、父は承知するどころか、相手になる氣色もございません。

「そんなことはこの間も云つたぢやあないか？……おい、英吉！　お前は今日は明るい内に、ちよいと丸佐へ行つて來てくれ。」

「丸佐へ？……來てくれと云ふんですか？」

「何、ランプを一つ持つて來て貰ふんだが、……お前、歸りに貰つて來ても好い。」

「だつて丸佐にランプはないでせう？」

父はわたしをそつちのけに、珍しい笑ひ顏を見せました。

「燭臺か何かぢやああるまいし、……ランプは買つてくれつて賴んであるんだ。わたしが買ふよ

りやあ確だから。」

「ぢやあもう無盡燈はお廢止ですか？」

「あれももうお暇の出し時だらう。」

「古いものはどしどし止めることです。第一お母さんもランプになりやあ、ちつとは氣も晴れるでせうから。」

父はそれぎり亢のやうに、又算盤を彈き出しました。が、わたしの念願は相手にされなければされないだけ、強くなるばかりでございます。わたしはもう一度後ろから父の肩を搖すぶりました。

「よう。お父さんつてば。よう。」

「うるさい！」

父は後ろを振り向きもせずに、いきなりわたしを叱りつけました。のみならず兄も意地惡さうに、わたしの顏を睨めて居ります。わたしはすつかり悄氣返つた儘、そつと又奧へ歸つて來ました。すると母は何時の間にか、熱のある眼を擧げながら、顏の上にかざした手の平を眺めてゐる

のでございます。それがわたしの姿を見ると、思ひの外はつきりかう申しました。
「お前、何をお父さんに叱られたのだえ？」
わたしは返事に困りましたから、枕もとの羽根楊枝をいぢつて居りました。
「又何か無理を云つたのだらう？……」
母はぢつとわたしを見たなり、今度は苦しさうに言葉を繼ぎました。
「わたしはこの通りの體だしね、何も彼もお父さんがなさるのだから、おとなしくしなけりやあいけませんよ。そりやあお隣の娘さんは芝居へも始終お出でなさるさ。……」
「芝居なんぞ見たくはないんだけれど……」
「いえ、芝居に限らずさ。簪だとか半襟だとか、お前にやあ欲しいものだらけでもね、……」
わたしはそれを聞いてゐる中に、悔やしいのだか悲しいのだか、とうとう淚をこぼしてしまひました。
「あのねえ、お母さん。……わたしはねえ、……何も欲しいものはないんだけれどねえ、唯あのお雛樣を賣る前にねえ、……」

「お雛様かえ？　お雛様を賣る前に？」

母は一層大きい眼にわたしの顔を見つめました。

「お雛様を賣る前にねえ、……」

わたしはちよいと云ひ澁りました。その途端にふと氣がついて見ると、何時の間にか後ろに立つてゐるのは兄の英吉でございます。兄はわたしを見下しながら、不相變慳貪にかう申しました。

「わからず屋！　又お雛様のことだらう？　お父さんに叱られたのを忘れたのか？」

「まあ、好いぢやあないか？　そんなにがみがみ云はないでも。」

母はうるささうに眼を閉ぢました。が、兄はそれも聞えぬやうに叱り續けるのでございます。

「十五にもなつてゐる癖に、ちつとは理窟もわかりさうなもんだ？　高があんなお雛様位！　惜しがりなんぞするやつがあるもんか？」

「お世話燒きぢや！　兄さんのお雛様ぢやあないぢやあないか？」

わたしも負けずに云ひ返しました。その先は何時も同じでございます。二言三言云ひ合ふ中に、兄はわたしの襟上を摑むと、いきなり其處へ引き倒しました。

「お轉婆！」

兄は母さへ止めなければ、この時もきつと二つ三つは折檻して居つたでございませう。が、母は枕の上に半ば頭を擡げながら、喘ぎ喘ぎ兄を叱りました。

「お鶴が何をしやあしまいし、そんな目に遇はせるにやあ當らないぢやあないか。」

「だつてこいつはいくら云つても、あんまり聞き分けがないんですもの。」

「いいえ、お鶴ばかり憎いのぢやあないだらう？　お前は……お前は……」

母は涙をためた儘、悔やしさうに何度も口ごもりました。

「お前はわたしが憎いのだらう？　さもなけりやあわたしが病氣だと云ふのに、お雛様を……お雛様を賣りたがつたり、罪もないお鶴をいぢめたり、……そんなことをする筈はないぢやあないか？　さうだらう？　それならなぜ憎いのだか、……」

「お母さん！」

兄は突然かう叫ぶと、母の枕もとに突立つたなり、肘に顏を隱しました。その後父母の死んだ時にも、涙一つ落さなかつた兄、――永年政治に奔走してから、癲狂院へ送られる迄、一度も弱

みを見せなかつた兄、――さう云ふ兄がこの時だけは啜り泣きを始めたのでございます。これは興奮し切つた母にも、意外だつたのでございませう。母は長い溜息をしたぎり、申しかけた言葉も申さずに、もう一度枕をしてしまひました。………

かう云ふ騷ぎがあつてから、一時間程後でございませう。久しぶりに見世へ顔を出したのは肴屋の德藏でございます。いえ、肴屋ではございません。以前は肴屋でございましたが、今は人力車の車夫になつた、出入りの若いものでございます。この德藏には可笑しい話が幾つあつたかわかりません。その中でも未に思ひ出すのは苗字の話でございます。德藏もやはり御一新以後、苗字をつけることになりましたが、どうせつける位ならばと大束をきめたのでございませう、德川と申すのをつけることにしました。ところがお役所へ屆けに出ると、叱られたの叱られないのではございません。何でも德藏の申しますには、今にも斬罪にされ兼ねない權幕だつたさうでございます。……その德藏が氣樂さうに、牡丹に唐獅子の畫を描いた當時の人力車を引張りながら、ぶらりと見世先へやつて來ました。それが又何しに來たのかと思ふと、今日は客のないのを幸ひ、お嬢さんを人力車にお乘せ申して、會津つ原から煉瓦通りへでもお伴をさせて頂きたい、――か

う申すのでございます。
「どうする？　お鶴。」
　父はわざと眞面目さうに、人力車を見に見世へ出てゐたわたしの顏を眺めました。今日では人力車に乘ることなどはさ程子供も喜びますまい。しかし當時のわたしたちには丁度自働車に乘せて貰ふ位、嬉しいことだつたのでございます。が、母の病氣と申し、殊にああ云ふ大騷ぎのあつた直あとのことでございますから、一概に行きたいとも申されません。わたしはまだ悄氣切つたなり、「行きたい」と小聲に答へました。
「ぢやあお母さんに聞いて來い。折角德藏もさう云ふものだし。」
　母はわたしの考へ通り、眼も明かずにほほ笑みながら、「上等だね」と申しました。意地の惡い兄は好い鹽梅に、丸佐へ出かけた留守でございます。わたしは泣いたのも忘れたやうに、早速人力車に飛び乘りました。赤毛布を膝掛けにした、輪のがらがらと鳴る人力車に。
　その時見て歩いた景色などは申し上げる必要もございますまい。唯今でも話に出るのは德藏の不平でございます。德藏はわたしを乘せた儘、煉瓦の大通りにさしかかるが早いか、西洋の婦人

を乘せた馬車とまともに衝突しかかりました。それはやつと助かりましたが、忌忌しさうに舌打ちをすると、こんなことを申すのでございます。
「どうもいけねえ。お孃さんはあんまり輕過ぎるから、肝腎の足が踏ん止らねえ。……お孃さん。乘せる車屋が可哀さうだから、二十前にやあ車へお乘んなさんなよ。」
人力車は煉瓦の大通りから、家の方へ横町を曲りました。すると忽ち出遇つたのは兄の英吉でございます。兄は煤竹の柄のついた置きランプを一臺さげた儘、急ぎ足に其處を歩いて居りました。それがわたしの姿を見ると、「待て」と申す相圖でございませう、ランプをさし擧げるのでございます。が、もうその前に德藏はぐるりと梶棒をまはしながら、兄の方へ車を寄せて居りました。
「御苦勞たね。德さん。何處へ行つたんだい？」
「へえ、何、今日はお孃さんの江戸見物です。」
兄は苦笑を洩らしながら、人力車の側へ歩み寄りました。
「お鶴。お前、先へこのランプを持つて行つてくれ。わたしは油屋へ寄つて行くから。」

わたしはさつきの喧嘩の手前、わざと何とも返事をせずに、唯ランプだけ受け取りました。兄はそれなり歩きかけましたが、急に又こちらへ向き變へると、人力車の泥除けに手をかけながら、「お鶴」と申すのでございます。

「お鶴、お前、又お父さんにお雛様のことなんぞ云ふんぢやあないぞ。」

わたしはそれでも默つて居りました。あんなにわたしをいぢめた癖に、又かと思つたのでございます。しかし兄は頓着せずに、小聲の言葉を續けました。

「お父さんが見ちやあいけないと云ふのは手附けをとつたからばかりぢやあないぞ。見りやあみんなに未練が出る、――其處も考へてゐるんだぞ。好いか？　わかつたか？　わかつたら、もうさつきのやうに見たいの何のと云ふんぢやあないぞ。」

わたしは兄の聲の中に何時にない情あひを感じました。が、兄の英吉位、妙な人間はございません。優しい聲を出したかと思ふと、今度は又ふだんの通り、突然わたしを嚇すやうにから申すのでございます。

「そりやあ云ひたけりやあ云つても好い。その代り痛い目に遇はされると思へ。」

兄は憎體に云ひ放つたなり、德藏にも挨拶も何もせずに、さつさと何處かへ行つてしまひました。

その晩のことでございます。わたしたち四人は土藏の中に、夕飯の膳を圍みました。尤も母は枕の上に顏を擧げただけでございますから、圍んだものの數にははひりません。しかしその晩の夕飯は何時もより花やかな氣がしました。それは申す迄もございません。あの薄暗い無盡燈の代りに、今夜は新しいランプの光が輝いてゐるからでございます。兄やわたしは食事のあひ間も、時時ランプを眺めました。石油を透かした硝子の壺、動かない焰を守つた火屋、――さう云ふものの美しさに滿ちた珍しいランプを眺めました。

「明るいな。晝のやうだな。」

父も母をかへり見ながら、滿足さうに申しました。

「眩し過ぎる位ですね。」

かう申した母の顏には、殆ど不安に近い色が浮んでゐたものでございます。

「そりやあ無盡燈に慣れてゐたから……だが一度ランプをつけちやあ、もう無盡燈はつけられな

い。」

「何でも始は眩し過ぎるんですよ。ランプでも、西洋の學問でも、……」

兄は誰よりもはしやいで居りました。

「それでも慣れりやあ同じことですよ。今にきつとこのランプも暗いと云ふ時が來るんです。」

「大きにそんなものかも知れない。……お鶴。お前、お母さんのおも湯はどうしたんだ？」

「お母さんは今夜は澤山なんですつて。」

わたしは母の云つた通り、何の氣もなしに返事をしました。

「困つたな。ちつとも食氣がないのかい？」

母は父に尋ねられると、仕方がなささうに溜息をしました。

「ええ、何だかこの石油の匂が、……舊弊人の證據ですね。」

それぎりわたしたちは言葉少なに、箸ばかり動かし續けました。しかし母は思ひ出したやうに、時時ランプの明るいことを褒めてゐたやうでございます。あの腫れ上つた脣の上にも微笑らしいものさへ浮べながら。

その晩も皆休んだのは十一時過ぎでございます。しかしわたしは眼をつぶつても、容易に寐つくことが出來ません。兄はわたしに雛のことは二度と云ふなと申しました。わたしも雛を出して見るのは出來ない相談とあきらめて居ります。が、出して見たいことはさつきと少しも纔りません。雛は明日になつたが最後、遠いところへ行つてしまふ、――さう思へばつぶつた眼の中にも、自然と涙がたまつて來ます。一そみんなの寐てゐる中に、そつと一人出して見ようか？――さうもわたしは考へて見ました。それともあの中の一つだけ、何處か外へ隱して置かうか？――さうも亦わたしは考へて見ました。しかしどちらも見つかつたら、――と思ふとさすがにひるんでしまひます。わたしは正直にその晩位、いろいろ恐しいことばかり考へた覺えはございません。今夜もう一度火事があれば好い。さうすれば人手に渡らぬ前に、すつかり雛も燒けてしまふ。さもなければ亞米利加人も頭の禿げた丸佐の主人もコレラになつてしまへば好い。さうすれば雛は何處へもやらずに、この儘大事にすることが出來る。――そんな空想も浮んで參ります。が、まだ何と申しても、其處は子供でございますから、一時間たつかたたない中に、何時かうとうと眠つてしまひました。

それからどの位たちましたか、ふと眠りがさめて見ますと、薄暗い行燈をともした土藏に誰か人の起きてゐるらしい物音が聞えるのでございます。鼠かしら、泥坊かしら、又はもう夜明けになつたのかしら？――わたしはどちらかと迷ひながら、怯づ怯づ細眼を明いて見ました。するとわたしの枕もとには、寢間着の儘の父が一人、こちらへ横顏を向けながら、坐つてゐるのでございます。父が！……しかしわたしを驚かせたのは父ばかりではございません。父の前にはわたしの雛が、――お節句以來見なかつた雛が竝べ立ててあるのでございます。

夢かと思ふと申すのはああ云ふ時でございませう。わたしは殆ど息もつかずに、この不思議を見守りました。覺束ない行燈の光の中に、象牙の笏をかまへた男雛を、冠の瓔珞を垂れた女雛を、右近の橘を、左近の櫻を、柄の長い日傘を擔いだ仕丁を、眼八分に高坏を捧げた官女を、小さい蒔繪の鏡臺や簞笥を、貝殼盡しの雛屛風を、膳椀を、畫雪洞を、色絲の手鞠を、さうして又父の横顏を、……………

夢かと思ふと申すのは、……ああ、それはもう前に申し上げました。が、ほんたうにあの晩の雛は夢だつたのでございませうか？　一圖に雛を見たがつた餘り、知らず識らず造り出した幻で

はなかつたのでございませうか？　わたしは未にどうかすると、わたし自身にもほんたうかどうか、返答に困るのでございます。

しかしわたしはあの夜更けに、獨り雛を眺めてゐる、年とつた父を見かけました。これだけは確かでございます。さうすればたとひ夢にしても、別段悔やしいとは思ひません。兎に角わたしは眼のあたりに、わたしと少しも變らない父を見たのでございますから、女女しい、……その癖おごそかな父を見たのでございますから。

「雛」の話を書きかけたのは何年か前のことである。それを今書き上げたのは瀧田氏の勸めによるのみではない。同時に又四五日前、横濱の或英吉利人の客間に、古雛の首を玩具にしてゐる紅毛の童女に遇つたからである。今はこの話に出て來る雛も、鉛の兵隊やゴムの人形と一つ玩具箱に投げこまれながら、同じ憂きめを見てゐるのかも知れない。

（大正十二年二月）

猿蟹合戰

蟹の握り飯を奪つた猿はとよとう蟹に仇を取られた。蟹は臼、蜂、卵と共に、怨敵の猿を殺したのである。——その話は今更しないでも好い。唯猿を仕止めた後、蟹を始め同志のものはどう云ふ運命に逢着したか、それを話すことは必要である。なぜと云へばお伽噺は全然このことは話してゐない。いや、話してゐないどころか、恰も蟹は穴の中に、臼は臺所の土間の隅に、蜂は軒先の蜂の巣に、卵は籾殻の箱の中に、太平無事な生涯でも送つたかのやうに装つてゐる。

しかしそれは僞である。彼等は仇を取つた後、警官の捕縛するところとなり、悉監獄に投ぜられた。しかも裁判を重ねた結果、主犯蟹は死刑になり、臼、蜂、卵等の共犯は無期徒刑の宣告を受けたのである。お伽噺のみしか知らない讀者はかう云ふ彼等の運命に、怪訝の念を持つかも知れない。が、これは事實である。寸毫も疑ひのない事實である。

蟹は蟹自身の言によれば、握り飯と柿と交換した。が、猿は熟柿を與へず、青柿ばかり與へた

のみか、蟹に傷害を加へるやうに、さんざんその柿を投げつけたと云ふ。しかし蟹は猿との間に、一通の證書も取り換はしてゐない。よし又それは不問に附しても、握り飯と柿と交換したと云ひ、熟柿とは特に斷つてゐない。最後に靑柿を投げつけられたと云ふのも、猿に惡意があつたかどうか、その邊の證據は不十分である。だから蟹の辯護に立つた、雄辯の名の高い某辯護士も、裁判官の同情を乞ふより外に、策の出づるところを知らなかつたらしい。その辯護士は氣の毒さうに、蟹の泡を拭つてやりながら、「あきらめ給へ」と云つたさうである。尤もこの「あきらめ給へ」は、死刑の宣告を下されたことをあきらめ給へと云つたのだか、辯護士に大金をとられたことをあきらめ給へと云つたのだか、それは誰にも決定出來ない。

その上新聞雜誌の輿論も、蟹に同情を寄せたものは殆ど一つもなかつたやうである。蟹の猿を殺したのは私憤の結果に外ならない。しかもその私憤たるや、己の無知と輕率とから猿に利益を占められたのを忌忌しがつただけではないか？　優勝劣敗の世の中にかう云ふ私憤を洩らすとすれば、愚者にあらずんば狂者である。——と云ふ非難が多かつたらしい。現に商業會議所會頭某男爵の如きは大體上のやうな意見と共に、蟹の猿を殺したのも多少は流行の危險思想にかぶれ

たのであらうと論斷した。そのせゐか蟹の仇打ち以來、某男爵は壯士の外にも、ブルドッグを十頭飼つたさうである。

且又蟹の仇打ちは所謂識者の間にも、一向好評を博さなかつた。大學教授某博士は倫理學上の見地から、蟹の猿を殺したのは復讐の意志に出たものである、復讐は善と稱し難いと云つた。それから社會主義の某首領は蟹は柿とか握り飯とか云ふ私有財産を難有がつてゐたから、臼や蜂や卵なども反動的思想を持つてゐたのであらう、事によると尻押しをしたのは國粹會かも知れないと云つた。それから某宗の管長某師は蟹は佛慈悲を知らなかつたらしい、たとひ青柿を投げつけられたとしても、佛慈悲を知つてゐさへすれば、猿の所業を憎む代りに、反つてそれを憐んだであらう。ああ、思へば一度でも好いから、わたしの説教を聽かせたかつたと云つた。それから——まだ各方面にいろいろ批評する名士はあつたが、いづれも蟹の仇打ちには不贊成の聲ばかりだつた。さう云ふ中にたつた一人、蟹の爲に氣を吐いたのは酒豪兼詩人の某代議士である。代議士は蟹の仇打ちは武士道の精神と一致すると云つた。しかしこんな時代遲れの議論は誰の耳にも止る筈はない。のみならず新聞のゴシツプによると、その代議士は數年以前、動物園を見物中、

猿に尿をかけられたことを遺恨に思つてゐたさうである。

お伽噺しか知らない讀者は、悲しい蟹の運命に同情の涙を落すかも知れない。しかし蟹の死は當然である。それを氣の毒に思ひなどするのは、婦女童幼のセンティメンタリズムに過ぎない。天下は蟹の死を是なりとした。現に死刑の行はれた夜、判事、檢事、辯護士、看守、死刑執行人、敎誨師等は四十八時間熟睡したさうである。その上皆夢の中に、天國の門を見たさうである。天國は彼等の話によると、封建時代の城に似たデパアトメント・ストアらしい。

次手に蟹の死んだ後、蟹の家庭はどうしたか、それも少し書いて置きたい。蟹の妻は賣笑婦になつた。なつた動機は貧困の爲か、彼女自身の性情の爲か、どちらか未に判然しない。蟹の長男は父の沒後、新聞雜誌の用語を使ふと、「飜然と心を改めた。」今は何でも或株屋の番頭か何かしてゐると云ふ。この蟹は或時自分の穴へ、同類の肉を食ふ爲に、怪我をした仲間を引きずりこんだ。クロポトキンが相互扶助論の中に、蟹も同類を劬ると云ふ實例を引いたのはこの蟹である。次男の蟹は小說家になつた。勿論小說家のことだから、女に惚れる外は何もしない。唯父蟹の一生を例に、善は惡の異名であるなどと、好い加減な皮肉を並べてゐる。三男の蟹は愚物だつたから、

蟹より外のものになれなかつた。それが横這ひに歩いてゐると、握り飯が一つ落ちてゐた。握り飯は彼の好物だつた。彼は大きい鋏の先にこの獲物を拾ひ上げた。すると高い柿の木の梢に虱を取つてゐた猿が一匹、――その先は話す必要はあるまい。

兎に角猿と戰つたが最後、蟹は必天下の爲に殺されることだけは事實である。語を天下の讀者に寄す。君たちも大抵蟹なんですよ。

（大正十二年二月）

二人小町

小野の小町、几帳の陰に草紙を讀んでゐる。其處へ突然黄泉の使が現れる。黄泉の使は色の黒い若者。しかも耳は兎の耳である。

小町　（驚きながら）誰です、あなたは？

使　黄泉の使です。

小町　黄泉の使！　ではもうわたしは死ぬのですか？　もうこの世にはゐられないのですか？　まあ、少し待つて下さい。わたしはまだ二十一です。まだ美しい盛りなのです。どうか命は助けて下さい。

使　いけません。わたしは一天萬乘の君でも容赦しない使なのです。

小町　あなたは情を知らないのですか？　わたしが今死んで御覧なさい。深草の少將はどうするでせう？　わたしは少將と約束しました。天に在つては比翼の鳥、地に在つては連理の枝、——

――ああ、あの約束を思ふだけでも、わたしの胸は張り裂けるやうです。少將はわたしの死んだことを聞けば、きつと歎き死に死んでしまふでせう。

使　（つまらなさうに）歎き死が出來れば仕合せです。兎に角一度は戀されたのですから、……しかしそんなことはどうでもよろしい。さあ地獄へお伴しませう。

小町　いけません。いけません。あなたはまだ知らないのですか？　わたしは唯の體ではありません。もう少將の胤を宿してゐるのです。わたしが今死ぬとすれば、子供も、――可愛いわたしの子供も一しよに死ななければなりません。（泣きながら）あなたはそれでも好いと云ふのですか？　闇から闇へ子供をやつても、かまはないと云ふのですか？

使　（ひるみながら）それはお子さんにはお氣の毒です。しかし閻魔王の命令ですから、どうか一しよに來て下さい。何、地獄も考へる程、惡いところではありません。昔から名高い美人やお子は大抵地獄へ行つてゐます。

小町　あなたは鬼です。羅刹です。わたしが死ねば少將も死にます。少將の胤の子供も死にます。三人ともみんな死んでしまひます。いえ、それぱかりではありません。年とつたわたしの父

や母もきつと一しよに死んでしまひます。（一層泣き聲を立てながら）わたしは黃泉の使でも、もう少し優しいと思つてゐました。

使（迷惑さうに）わたしはお助け申したいのですが、……

小町（生き返つたやうに顏を上げながら）ではどうか助けて下さい。五年でも十年でもかまひません。どうかわたしの壽命を延ばして下さい。たつた五年、たつた十年、――子供さへ成人すれば好いのです。それでもいけないと云ふのですか？

使　さあ、年限はかまはないのですが、――しかしあなたをつれて行かなければ代りが一人入るのです。あなたと同じ年頃の、……

小町（興奮しながら）では誰でもつれて行つて下さい。わたしの召使ひの女の中にも、同じ年の女は二三人ゐます。阿漕でも小松でもかまひません。あなたの氣に入つたのをつれて行つて下さい。

使　いや、名前もあなたのやうに小町と云はなければいけないのです。

小町　小町！　誰か小町と云ふ人はゐなかつたかしら。ああ、ゐます。ゐます。（發作的に笑ひ

出しながら）玉造の小町と云ふ人がゐます。あの人を代りにつれて行つて下さい。

使　年もあなたと同じ位ですか？

小町　ええ、丁度同じ位です。唯綺麗ではありませんが、――器量などはどうでもかまはないのでせう？

使　（愛想よく）悪い方が好いのです。同情しずにすみますから。

小町　（生き生きと）ではあの人に行つて貰つて下さい。あの人はこの世にゐるよりも、地獄に住みたいと云つてゐます。誰も逢ふ人がゐないものですから。

使　よろしい。その人をつれて行きませう。ではお子さんを大事にして下さい。（得得と）黄泉の使も情だけは心得てゐるつもりなのです。

使、突然又消え失せる。

小町　ああ、やつと助かつた！　これも日頃信心する神や佛のお計らひであらう。（手を合せる）八百萬の神神、十方の諸菩薩、どうかこの嘘の剝げませぬやうに。

二

黄泉の使、玉造の小町を背負ひながら、闇穴道を歩いて來る。

小町　（金切聲を出しながら）何處へ行くのです？　何處へ行くのです？

使　地獄へ行くのです。

小町　地獄へ！　そんな筈はありません。現に昨日安倍の晴明も壽命は八十六と云つてゐました。

使　それは陰陽師の嘘でせう。

小町　いいえ、嘘ではありません。安倍の晴明の云ふことは何でもちやんと當るのです。あなたこそ嘘をついてゐるのでせう。そら、返事に困つてゐるではありませんか？

使　（獨白）どうもおれは正直すぎるやうだ。

小町　まだ強情を張るつもりなのですか？　さあ、正直に白狀しておしまひなさい。

使　實はあなたにはお氣の毒ですが、……

小町　そんなことだらうと思つてゐました。「お氣の毒ですが、」どうしたのです？

使　あなたは小野の小町の代りに地獄へ墮ちることになつたのです。

小町　小野の小町の代りに！　それは又一體どうしたんです？

使　あの人は今身持ちださうです。深草の少將の胤とかを、……

小町　（憤然と）それをほんたうだと思つたのですか？　噓ですよ。あなた！　少將は今でもあの人のところへ百夜通ひをしてゐる位ですもの。少將の胤を宿すのはおろか、逢つたことさへ一度もありはしません。噓も、噓も、眞赤な噓ですよ！

使　眞赤な噓？　そんなことはまさかないでせう。

小町　では誰にでも聞いて御覽なさい。深草の少將の百夜通ひと云へば、下司の子供でも知つてゐる筈です。それをあなたは噓とも思はずに、……あの人の代りにわたしの命を、……ひどい。ひどい。ひどい。（泣き始める）

使　泣いてはいけません。泣くことは何もないのですよ。（背中から玉造の小町を下す）あなたは始終この世よりも、地獄に住みたがつてゐたでせう。して見ればわたしの欺されたのは、反つ

て仕合せではありませんか？

小町　（嚙みつきさうに）誰がそんなことを云つたのです？

使　（怯づ怯づ）やつぱりさつき小野の小町が、……

小町　まあ、何と云ふ圖圖しい人だ！　嘘つき！　九尾の狐！　男たらし！　騙り！　尼天狗！　おひきずり！　もうもう、今度顏を合せたが最後、きつと喉笛に嚙みついてやるから。口惜しい。口惜しい。口惜しい。

使　（黄泉の使をこづきまはす）まあ、待つて下さい。わたしは何も知らなかつたのですから、——まあ、この手をゆるめて下さい。

小町　一體あなたが莫迦ではありませんか？　そんな嘘を眞に受けるとは、……

使　しかし誰でも眞に受けますよ。……あなたは何か小野の小町に恨まれることでもあるのですか？

小町　（妙に微笑する）あるやうな、ないやうな、……まあ、あるのかも知れません。

使　するとその恨まれることと云ふのは？

小町　（輕蔑するやうに）お互に女ではありませんか？

使　成程、美しい同士でしたつけ。

小町　あら、お世辭などはおよしなさい。

使　お世辭ではありませんよ。ほんたうに美しいと思つてゐるのです。いや、口には云はれない位美しいと思つてゐるのです。

小町　まあ、あんな嬉しがらせばつかり！　あなたこそ黄泉には似合はない、美しいかたではありませんか？

使　こんな色の黑い男がですか？

小町　黑い方が立派ですよ。男らしい氣がしますもの。

使　しかしこの耳は氣味が惡いでせう。

小町　あら、可愛いではありませんか？　ちよいとわたしに觸らして下さい。わたしは兎が大好きなのですから。（使の兎の耳を玩弄にする）もつとこつちへいらつしやい。何だかわたしはあなたの爲なら、死んでも好いやうな氣がしますよ。

使　（小町を抱きながら）ほんたうですか？
小町　（半ば眼を閉ぢた儘）ほんたうならば？
使　かうするのです。（接吻しようとする）
小町　（突きのける）いけません。
使　では、……では嘘なのですか？
小町　いいえ、嘘ではありません。唯あなたが本氣かどうか、それさへわかれば好いのです。
使　では何でも云ひつけて下さい。あなたの欲しいものは何ですか？　火鼠の裘ですか、蓬萊の玉の枝ですか、それとも燕の子安貝ですか？
小町　まあ、お待ちなさい。わたしのお願はこれだけです。――どうかわたしを生かして下さい。その代りに小野の小町を、――あの憎らしい小野の小町を、わたしの代りにつれて行つて下さい。
使　そんなことだけで好いのですか？　よろしい。あなたの云ふ通りにします。
小町　きつとですね？　まあ、嬉しい。きつとならば、……（使を引き寄せる）

使　ああ、わたしこそ死んでしまひさうです。

三

大勢の神將、或は戟を執り、或は劍を提げ、小野の小町の屋根を護つてゐる。其處へ黄泉の使、蹌踉と空へ現れる。

神將　誰だ、貴樣は？

使　わたしは黄泉の使です。どうか其處を通して下さい。

神將　通すことはならぬ。

使　わたしは小町をつれに來たのです。

神將　小町を渡すことはなほ更ならぬ。

使　なほ更ならぬ？　あなたがたは一體何ものです？

神將　我我は天が下の陰陽師、安倍の晴明の加持により、小町を守護する三十番神ぢや。

使　三十番神！　あなたがたはあの噓つきを、——あの男たらしを守護するのですか？

神将　黙れ！　か弱い女をいぢめるばかりか、悪名を着せるとは怪しからぬやつぢや。

使　何が悪名です？　小町はほんたうに、嘘つきの男たらしではありませんか？

神将　まだ云ふな。よしよし、云ふならば云つて見ろ。その耳を二つとも削いでしまふぞ。

使　しかし小町は現にわたしを……

神将　（憤然と）この戟を食らつて往生しろ！（使に飛びかかる）

使　助けてくれえ！（消え失せる）

四

数十年後、老いたる女乞食二人、枯芒の原に話してゐる。一人は小野の小町、他の一人は玉造の小町。

小野の小町　苦しい日ばかり續きますね。

玉造の小町　こんな苦しい思ひをするより、死んだ方がましかも知れません。

小野の小町　（獨り語のやうに）あの時に死ねば好かつたのです。黄泉の使に會つた時に、……

玉造の小町　おや、あなたもお會ひになつたのですか？

小野の小町　(疑深さうに)あなたもと仰有るのは？　あなたこそお會ひになつたのですか？

玉造の小町　(冷やかに)いいえ、わたしは會ひません。

小野の小町　わたしの會つたのも唐の使です。

少時の間沈默。黄泉の使、忙しさうに通りかかる。

玉造の小町
小野の小町　黄泉の使！　黄泉の使！

黄泉の使　誰です、わたしを呼びとめたのは？

玉造の小町　(小野の小町に)あなたは黄泉の使を御存知ではありませんか？

小野の小町　(玉造の小町に)あなたも知らないとは仰有れますまい。(黄泉の使に)このかたは玉造の小町です。あなたはとうに御存知でせう。

玉造の小町　このかたは小野の小町です。やつぱりあなたのお馴染でせう。

使　何、玉造の小町に小野の小町！　あなたがたが、――骨と皮ばかりの女乞食が！

小野の小町　どうせ骨と皮ばかりの女乞食ですよ。

玉造の小町　わたしに抱きついたのを忘れたのですか？

使　まあ、さう腹を立てずに下さい。あんまり變つてゐたものですから、つい口を辷らせたのです。……時にわたしを呼びとめたのは、何か用でもあるのですか？

小野の小町　ありますとも。ありますとも。どうか黄泉へつれて行つて下さい。

玉造の小町　わたしも一しよにつれて行つて下さい。

使　黄泉へつれて行け？　冗談を云つてはいけません。又わたしを欺すのでせう。

玉造の小町　あら、欺しなどするものですか！

小野の小町　ほんたうにどうかつれて行つて下さい。

使　あなたがたを！（首を振りながら）どうもわたしには受け合はれません。又ひどい目に會ふのは嫌ですから、誰か外のものにお頼みなさい。

小野の小町　どうかわたしを憐れんで下さい。あなたも情は知つてゐる筈です。

玉造の小町　そんなことを云はずに、つれて行つて下さい。きつとあなたの妻になりますから。

使　駄目です。駄目です。あなたがたにかかり合ふと――いや、あなたがたばかりではない、女と云ふやつにかかり合ふと、どんな目に會ふかわかりません。あなたがたは虎よりも強い。內心如夜叉の譬通りです。第一あなたがたの淚の前には、誰でも意氣地がなくなつてしまふ。（小野の小町に）あなたの淚などは凄いものですよ。

小野の小町　噓です。噓です。あなたはわたしの淚などに動かされたことはありません。

使　（耳にもかけずに）第二にあなたがたは肌身さへ任せば、どんなことでも出來ないことはない。（玉造の小町に）あなたはその手を使つたのです。

玉造の小町　卑しいことを云ふのはおよしなさい。あなたこそ戀を知らないのです。

使　（やはり無頓着に）第三に、――これが一番恐ろしいのですが、第三に世の中は神代以來、すつかり女に欺されてゐる。女と云へばか弱いもの、優しいものと思ひこんでゐる。ひどい目に會はすのは何時も男、會はされるのは何時も女、――さうより外に考へない。その癖ほんたうは女の爲に、始終男が惱まされてゐる。（小野の小町に）三十番神を御覽なさい。わたしばかり惡ものにしてゐたでせう。

小野の小町　神佛の惡口はおよしなさい。

使　いや、わたしには神佛よりも、もつとあなたがたが恐ろしいのです。あなたがたは男の心も體も、自由自在に弄ぶことが出來る。その上萬一手に餘れば、世の中の加勢も借りることが出來る。この位強いものはありますまい。又ほんたうにあなたがたは日本國中至るところに、あなたがたの餌食になつた男の屍骸をまき散らしてゐます。わたしはまづ何よりも先へ、あなたがたの爪にかからないやうに、用心しなければなりません。

小野の小町　(玉造の小町に)まあ、何と云ふ人聞きの惡い、手前勝手な理窟でせう。

玉造の小町　(小野の小町に)ほんたうに男の我儘には呆れ返つてしまひます。(黄泉の使に)女こそ男の餌食です。いいえ、あなたが何と云つても、男の餌食に違ひありません。昔も男の餌食でした。今も男の餌食です。將來も男の、……

使　(急に晴れ晴れと)將來は男に有望です。女の太政大臣、女の檢非違使、女の閻魔王、女の三十番神、——さういふものが出來るとすれば、男は少し助かるでせう。第一に女は男狩りの外にも、仕榮えのある仕事が出來ますから。第二に女の世の中は今の男の世の中程、女に甘い筈は

ありませんから。
小野の小町　あなたはそんなにわたしたちを憎いと思つてゐるのですか？
玉造の小町　お憎みなさい。お憎みなさい。思ひ切つてお憎みなさい。
使　（憂鬱に）ところが憎み切れないのです。もし憎み切れるとすれば、もつと仕合せになつてゐるでせう。（突然又凱歌を擧げるやうに）しかし今は大丈夫です。あなたがたは昔のあなたがたではない。骨と皮ばかりの女乞食です。あなたがたの爪にはかかりません。
玉造の小町　ええ、もう、何處へでも行つてしまへ！
小野の小町　まあ、そんなことを云はずに、……これ、この通り拜みますから。
使　いけません。ではさやうなら。（枯芒の中に消える）
小野の小町　どうしませう？
玉造の小町　どうしませう？
二人とも其處へ泣き伏してしまふ。

（大正十二年二月）

おしの

此處は南蠻寺の堂内である。ふだんならばまだ硝子畫の窓に日の光の當つてゐる時分であらう。が、今日は梅雨曇りだけに、日の暮の暗さと變りはない。その中に唯ゴティック風の柱がぼんやり木の肌を光らせながら、高だかとレクトリウムを守つてゐる。それからずつと堂の奥に常燈明の油火が一つ、龕の中に佇んだ聖者の像を照らしてゐる。參詣人はもう一人もゐない。

さう云ふ薄暗い堂内に紅毛人の神父が一人、祈禱の頭を垂れてゐる。年は四十五六であらう。額の狹い、顴骨の突き出た、頰鬚の深い男である。床の上に引きずつた着物は「あびと」と稱へる僧衣らしい。さう云へば「こんたつ」と稱へる念珠も手頸を一巻き巻いた後、かすかに靑珠を垂らしてゐる。

堂内は勿論ひつそりしてゐる。神父は何時までも身動きをしない。

共處へ日本人の女が一人、靜かに堂内へはひつて來た。紋を染めた古帷子に何か黑い帶をしめ

た、武家の女房らしい女である。これはまだ三十代であらう。が、ちよいと見たところは年よりはずつとふけて見える。第一妙に顔色が惡い。目のまはりも黒い暈をとつてゐる。しかし大體の目鼻だちは美しいと言つても差支へない。いや、端正に過ぎる結果、寧ろ險のある位である。

女はさも珍らしさうに聖水盤や祈禱机を見ながら、怯づ怯づ堂の奧へ步み寄つた。すると薄暗い聖壇の前に神父が一人跪いてゐる。女はやや驚いたやうに、ぴたりと其處へ足を止めた。が、相手の祈禱してゐることは直にそれと察せられたらしい。女は神父を眺めた儘、默然と其處に佇んでゐる。

堂内は不相變ひつそりしてゐる。神父も身動きをしなければ、女も眉一つ動かさない。それが可也長い間であつた。

その内に神父は祈禱をやめると、やつと床から身を起した。見れば前には女が一人、何か云ひたげに佇んでゐる。南蠻寺の堂内へは唯見慣れぬ磔佛を見物に來るものも稀ではない。しかしこの女の此處へ來たのは物好きだけではなささうである。神父はわざと微笑しながら、片言に近い日本語を使つた。

「何か御用ですか？」

「はい、少少お願ひの筋がございまして。」

女は慇懃に會釋をした。貧しい身なりにも關らず、これだけはちやんと結ひ上げた笄髷の頭を下げたのである。神父は頰笑んだ眼に目禮した。手は青珠の「こんたつ」に指をからめたり離したりしてゐる。

「わたくしは一番ケ瀨半兵衞の後家、しのと申すものでございます。實はわたくしの伜、新之丞と申すものが大病なのでございますが……」

女はちよいと云ひ澱んだ後、今度は朗讀でもするやうにすらすら用向きを話し出した。新之丞は今年十五歳になる。それが今年の春頃から、何ともつかずに煩ひ出した。咳が出る、食慾が進まない、熱が高まると言ふ始末である。しのは力の及ぶ限り、醫者にも見せたり、買ひ藥もしたり、いろいろ養生に手を盡した。しかし少しも效驗は見えない。のみならず次第に衰弱する。その上この頃は不如意の爲、思ふやうに療治をさせることも出來ない。聞けば南蠻寺の神父の醫方は白癩さへ直すと云ふことである。どうか新之丞の命も助けて頂きたい。……

「お見舞下さいますか？　如何でございませう？」

女はかう云ふ言葉の間も、ぢつと神父を見守つてゐる。その眼には憐みを乞ふ色もなければ、氣づかはしさに堪へぬけはひもない。唯殆ど頑なに近い靜かさを示してゐるばかりである。

「よろしい。見て上げませう。」

神父は顋鬚を引張りながら、考深さうに頷いて見せた。女は靈魂の助かりを求めに來たのではない。肉體の助かりを求めに來たのである。しかしそれは咎めずとも好い。肉體は靈魂の家である。家の修覆さへ全ければ、主人の病も亦退き易い。現にカテキスタのフヮビアンなどはその爲に十字架を拜するやうになつた。この女を此處へ遣はされたのも或はさう云ふ神意かも知れない。

「お子さんは此處へ來られますか。」

「それはちと無理かと存じますが……」

「では其處へ案内して下さい。」

女の眼に一瞬間の喜びの輝いたのはこの時である。

「さやうでございますか？　さうして頂ければ何よりの仕合せでございます。」

神父は優しい感動を感じた。やはりその一瞬間、能面に近い女の顏に爭はれぬ母を見たからである。もう前に立つてゐるのは物堅い武家の女房ではない。いや日本人の女でもない。むかし飼槽の中の基督に美しい乳房を含ませた「すぐれて御愛憐、すぐれて御柔輭、すぐれて甘くましす天上の妃」と同じ母になつたのである。神父は胸を反らせながら、快活に女へ話しかけた。

「御安心なさい。病も大抵わかつてゐます。お子さんの命は預りました。兎に角出來るだけのことはして見ませう。もし又人力に及ばなければ、……」

女は穩かに言葉を挾んだ。

「いえ、あなた樣さへ一度お見舞ひ下されば、あとはもうどうなりましても、さらさら心殘りはございません。その上は唯淸水寺の觀世音菩薩の御冥護にお縋り申すばかりでございます。」

觀世音菩薩! この言葉は忽ち神父の顏に腹立たしい色を漲らせた。神父は何も知らぬ女の顏へ銳い眼を見据ゑると、首を振り振りたしなめ出した。

「お氣をつけなさい。觀音、釋迦、八幡、天神、――あなたがたの崇めるのは皆木や石の偶像です。まことの神、まことの天主は唯一人しか居られません。お子さんを殺すのも助けるのもデウ

スの御思召し一つです。偶像の知ることではありません。もしお子さんが大事ならば、偶像に祈るのはおやめなさい。」

　しかし女は古帷子の襟を心もち顋に抑へたなり、驚いたやうに神父を見てゐる。神聖な怒に滿ちた言葉もわかつたのかどうかはつきりしない。神父は殆どのしかかるやうに鬚だらけの顏を突き出しながら、一生懸命にかう戒め續けた。

「まことの神をお信じなさい。まことの神はジュデアの國、ベレンの里にお生まれになつたジェズス・キリストスばかりです。その外に神はありません。あると思ふのは惡魔です。墮落した天使の變化です。ジェズスは我我を救ふ爲に、磔木にさへおん身をおかけになりました。御覽なさい、あのおん姿を？」

　神父は嚴かに手を伸べると、後ろにある窓の硝子畫を指した。丁度薄日に照らされた窓は堂内を罩めた仄暗がりの中に、受難の基督を浮き上らせてゐる。十字架の下に泣き惑つたマリヤや弟子たちも浮き上らせてゐる。女は日本風に合掌しながら、静かにこの窓をふり仰いだ。

「あれが噂に承つた南蠻の如來でございますか？　倅の命さへ助かりますれば、わたくしはあ

の磔佛に一生仕へるのもかまひません。どうか冥護を賜るやうに御祈禱をお捧げ下さいまし。」
女の聲は落着いた中に、深い感動を藏してゐる。神父は愈勝ち誇つたやうにうなじを少し反らせた儘、前よりも雄辯に話し出した。
「ジェズスは我我の罪を淨め、我我の魂を救ふ爲に地上へ御降誕なすつたのです。お聞きなさい、御一生の御艱難辛苦を！」
神聖な感動に充ち滿ちた神父はそちらこちらと歩きながら、口早に基督の生涯を話した。衆德備り給ふ處女マリヤに御受胎を告げに來た天使のことを、廐の中の御降誕のことを、御降誕を告げる星を便りに乳香や沒藥を捧げに來た、賢い東方の博士たちのことを、メシアの出現を惧れる爲に、ヘロデ王の殺した童子たちのことを、ヨハネの洗禮を受けられたことを、山上の教へを說かれたことを、水を葡萄酒に化せられたことを、盲人の眼を開かれたことを、マグダラのマリヤに憑きまとつた七つの惡鬼を逐はれたことを、死んだラザルを活かされたことを、水の上を步かれたことを、驢馬の背にジェルサレムへ入られたことを、悲しい最後の夕餉のことを、橄欖の園のおん祈りのことを、……

神父の聲は神の言葉のやうに、薄暗い堂内に響き渡つた。女は眼を輝かせた儘、默然とその聲に聞き入つてゐる。

「考へても御覽なさい。ジエズスは二人の盜人と一しよに、磔木におかかりなすつたのです。その時のおん悲しみ、その時のおん苦しみ、――我我は今想ひやるさへ、肉が震へずにはゐられません。殊に勿體ない氣のするのは磔木の上からお叫びになつたジエズスの最後のおん言葉です。エリ、エリ、ラマサバクタニ、――これを解けばわが神、わが神、何ぞ我を捨て給ふや？……」

神父は思はず口をとざした。見ればまつ蒼になつた女は下脣を嚙んだなり、神父の顏を見つめてゐる。しかもその眼に閃いてゐるのは神聖な感動でも何でもない。唯冷やかな輕蔑と骨にも徹りさうな憎惡とである。神父は惘氣にとられたなり、少時は唯啞のやうに瞬きをするばかりだつた。

「まことの天主、南蠻の如來とはさう云ふものでございますか？」

女は今迄のつつましさにも似ず、止めを刺すやうに云ひ放つた。

「わたくしの夫、一番ケ瀨半兵衞は佐佐木家の浪人でございます。しかしまだ一度も敵の前に後

ろを見せたことはございません。去んぬる長光寺の城攻めの折も、夫は博奕に負けました爲に、馬はもとより鎧兜さへ奪はれて居つたさうでございます。それでも合戰と云ふ日には、南無阿彌陀佛と大文字に書いた紙の羽織を素肌に纏ひ、枝つきの竹を差し物に代へ、右手に三尺五寸の太刀を拔き、左手に赤紙の扇を開き、『人の若衆を盜むよりしては首を取らりよと覺悟した』と、大聲に歌をうたひながら、織田殿の身内に鬼と聞えた柴田の軍勢を斬り靡けました。それを何ぞや天主ともあらうに、たとひ磔木にかけられたにせよ、かごとがましい聲を出すとは見下げ果てたやつでございます。さう云ふ臆病ものを崇める宗旨に何の取柄がございませう？　又さう云ふ臆病ものの流れを汲んだあなたとなれば、世にない夫の位牌の手前も倅の病は見せられません。新之丞も首取りの半兵衞と云はれた夫の倅でございます。臆病ものの藥を飲まされるよりは腹を切ると云ふでございませう。このやうなことを知つてゐれば、わざわざ此處迄は來まいものを、――それだけは口惜しうございます。」

女は淚を呑みながら、くるりと神父に背を向けたと思ふと、毒風を避ける人のやうにさつさと堂外へ去つてしまつた。瞠目した神父を殘した儘。………

（大正十二年三月）

保吉の手帳から

わん

或冬の日の暮、保吉は薄汚いレストランの二階に脂臭い燒パンを齧つてゐた。彼のテエブルの前にあるのは龜裂の入つた白壁だつた。其處には又斜かひに、「ホット(あたたかい)サンドウキッチもあります」と書いた、細長い紙が貼りつけてあつた。(これを彼の同僚の一人は「ほつと暖いサンドウヰッチ」と讀み、眞面目に不思議がつたものである。)それから左は下へ降りる階段、右は直に硝子窓だつた。彼は燒パンを齧りながら、時時ぼんやり窓の外を眺めた。窓の外には往來の向うに亞鉛屋根の古着屋が一軒、職工用の靑服だのカアキ色のマントだのをぶら下げてゐた。

その夜學校には六時半から、英語會が開かれる筈になつてゐた。それへ出席する義務のあつた彼はこの町に住んでゐない關係上、厭でも放課後六時半迄はこんなところにゐるより仕かたはなかつた。確か土岐哀果氏の歌に、――間違つたならば御免なさい。――「遠く來てこの糞のよな

ビフテキをかじらねばならず妻よ妻よ戀し」と云ふのがある。彼は此處へ來る度に、必ずこの歌を思ひ出した。尤も戀しがる筈の妻はまだ貰つてはゐなかつた。しかし古着屋の店を眺め、脂臭い燒パンをかじり、「ホット（あたたかい）サンドウヰッチ」を見ると、「妻よ妻よ戀し」と云ふ言葉はおのづから脣に上つて來るのだつた。

保吉はこの間も彼の後ろに、若い海軍の武官が二人、麥酒を飲んでゐるのに氣がついてゐた。その中の一人は見覺えのある同じ學校の主計官だつた。武官に馴染みの薄い彼はこの人の名前を知らなかつた。いや、名前ばかりではない。少尉級か中尉級かも知らなかつた。唯彼の知つてゐるのは月月の給金を貰ふ時に、この人の手を經ると云ふことだけだつた。もう一人は全然知らなかつた。二人は麥酒の代りをする度に、「こら」とか「おい」とか云ふ言葉を使つた。女中はそれでも厭な顔をせずに、兩手にコツプを持ちながら、まめに階段を上り下りした。その癖保吉のテエブルへは紅茶を一杯頼んでも容易に持つて來てはくれなかつた。これは此處に限つたことではない。この町のカフエやレストランは何處へ行つても同じことだつた。

二人は麥酒を飲みながら、何か大聲に話してゐた。保吉は勿論その話に耳を貸してゐた訣では

なかつた。が、ふと彼を驚かしたのは「わんと云へ」と云ふ言葉だつた。彼は犬を好まなかつた。犬を好まない文學者にゲエテとストリントベルグとを數へることを愉快に思つてゐる一人だつた。だからこの言葉を耳にした時、彼はこんなところに飼つてゐ勝ちな、大きい西洋犬を想像した。同時にそれが彼の後ろにうろついてゐさうな無氣味さを感じた。

彼はそつと後ろを見た。が、其處には仕合せと犬らしいものは見えなかつた。唯あの主計官が窓の外を見ながら、にやにや笑つてゐるばかりだつた。保吉は多分犬のゐるのは窓の下だらうと推察した。しかし何だか變な氣がした。すると主計官はもう一度、「わんと云へ。おい、わんと云へ」と云つた。保吉は少し體を捻ぢ曲げ、向うの窓の下を覗いて見た。まづ彼の目にはひつたのは何とか正宗の廣告を兼ねた、まだ火のともらない軒燈だつた。それから卷いてある日除けだつた。それから麥酒樽の天水桶の上に乾し忘れた儘の爪革だつた。それから、往來の水たまりだつた。それから、――あとは何だつたにせよ、何處にも犬の影は見なかつた。その代りに十二三の乞食が一人、二階の窓を見上げながら、寒さうに立つてゐる姿が見えた。

「わんと云へ。わんと云はんか！」

主計官は又から呼びかけた。その言葉には何か乞食の心を支配する力があるらしかつた。乞食は殆ど夢遊病者のやうに、目はやはり上を見た儘、一二歩窓の下へ歩み寄つた。保吉はやつと人の悪い主計官の悪戯を發見した。悪戯？――或は悪戯ではなかつたかも知れない。なかつたとすれば實驗である。人間は何處迄口腹の爲に、自己の尊嚴を犠牲にするか？――と云ふことに關する實驗である。保吉自身の考へによると、これは何も今更のやうに實驗などすべき問題ではない。エサウは燒肉の爲に長子權を抛ち、保吉はパンの爲に教師になつた。かう云ふ事實を見れば足りることである。が、あの實驗心理學者は中中こんなこと位では研究心の滿足を感ぜぬのであらう。それならば今日生徒に教へた、De gustibus non est disputandum である。蓼食ふ蟲も好き好きである。實驗したければして見るが好い。――保吉はさう思ひながら、窓の下の乞食を眺めてゐた。

主計官は少時默つてゐた。すると乞食は落着かなさうに、往來の前後を見まはし始めた。犬の眞似をすることには格別異存はないにしても、さすがにあたりの人目だけは憚つてゐるのに違ひなかつた。が、その目の定まらない内に、主計官は窓の外へ赤い顔を出しながら、今度は何か振

つて見せた。

「わんと云へ。わんと云へばこれをやるぞ。」

乞食の顔は一瞬間、物欲しさに燃え立つたやうだつた。保吉は時時乞食と云ふものにロマンティツクな興味を感じてゐた。が、憐憫とか同情とかは一度も感じたことはなかつた。もし感じたと云ふものがあれば、莫迦か譃つきかだとも信じてゐた。しかし今その子供の乞食が頸を少し反らせた儘、目を輝かせてゐるのを見ると、ちよいといぢらしい心もちがした。但しこの「ちよいと」と云ふのは懸け値のないちよいとである。保吉はいぢらしいと思ふよりも、寧ろさう云ふ乞食の姿にレムブラント風の效果を愛してゐた。

「云はんか？　おい、わんと云ふんだ。」

乞食は顔をしかめるやうにした。

「わん。」

聲は如何にもかすかだつた。

「もつと大きく。」

「わん。わん。」
乞食はとうとう二聲鳴いた。と思ふと窓の外へネエベル・オレンヂが一つ落ちた。――その先はもう書かずとも好い。乞食は勿論オレンヂに飛びつき、主計官は勿論笑つたのである。

それから一週間ばかりたつた後、保吉は又月給日に主計部へ月給を貰ひに行つた。あの主計官は忙しさうにあちらの帳簿を開いたり、こちらの書類を擴げたりしてゐた。それが彼の顏を見ると、「俸給ですね」と一言云つた。彼も「さうです」と一言答へた。が、主計官は用が多いのか、容易に月給を渡さなかつた。のみならずしまひには彼の前へ軍服の尻を向けた儘、何時までも算盤を彈いてゐた。

「主計官。」
保吉は少時待たされた後、懇願するやうにかう云つた。主計官は肩越しにこちらを向いた。その脣には明らかに「直です」と云ふ言葉が出かかつてゐた。しかし彼はそれよりも先に、ちやんと仕上げをした言葉を繼いだ。
「主計官。わんと云ひませうか？　え、主計官。」

保吉の信ずるところによれば、さう云つた時の彼の聲は天使よりも優しい位だつた。

西洋人

この學校へは西洋人が二人、會話や英作文を教へに來てゐた。一人はタウンゼンドと云ふ英吉利人、もう一人はスタアレットと云ふ亞米利加人だつた。

タウンゼンド氏は頭の禿げた、日本語の旨い好好爺だつた。由來西洋人の教師と云ふものは如何なる俗物にも關らずシエクスピイアとかゲエテとかを喋喋してやまないものである。しかし幸ひにタウンゼンド氏は文藝の文の字もわかつたとは云はない。何時かウワアズワアスの話が出たら、「詩と云ふものは全然わからぬ。ウワアズワアスなども何處が好いのだらう」と云つた。

保吉はこのタウンゼンド氏と同じ避暑地に住んでゐたから、學校の往復にも同じ汽車に乘つた。汽車は彼是三十分ばかりかかる。二人はその汽車の中にグラスゴオのパイプを啣へながら、煙草の話だの學校の話だの幽靈の話だのを交換した。セオソフイストたるタウンゼンド氏はハムレットに興味を持たないにしても、ハムレットの親父の幽靈には興味を持つてゐたからである。しか

し魔術とか錬金術とか、occult sciences の話になると、氏は必ずもの悲しさうに頭とパイプとを一しよに振りながら、「神祕の扉は俗人の思ふ程、開き難いものではない。寧ろその恐しい所以は容易に閉ぢ難いところにある。ああ云ふものには手を觸れぬが好い」と云つた。

もう一人のスタアレット氏はずつと若い洒落者だつた。冬は暗綠色のオオヴア・コオトに赤い襟卷などを卷きつけて來た。この人はタウンゼンド氏に比べると、時時は新刊書も覗いて見るらしい。現に學校の英語會に「最近の亞米利加の小說家」と云ふ大講演をやつたこともある。尤もその講演によれば、最近の亞米利加の大小說家はロバアト・ルイズ・スティヴンソンかオオ・ヘンリイだと云ふことだつた！

スタアレット氏も同じ避暑地ではないが、やはり沿線の或町にゐたから、汽車を共にすることは度たびあつた。保吉は氏とどんな話をしたか、殆ど記憶に殘つてゐない。唯一つ覺えてゐるのは、待合室の煖爐の前に汽車を待つてゐた時のことである。保吉はその時欠伸まじりに、教師と云ふ職業の退屈さを話した。すると緣無しの眼鏡をかけた、男ぶりの好いスタアレット氏はちよいと妙な顏をしながら、「教師になるのは職業ではない。寧ろ天職と呼ぶべきだと思ふ。You

know, Socrates and Plato are two great teachers……Etc.」と云つた。

ロバアト・ルイズ・スティヴンソンはヤンキイでも何でも差支へない。が、ソクラテスとプレトオをも教師だつたなどと云ふのは、――保吉は爾來スタアレット氏に慇懃なる友情を盡すことにした。

午休み

――或空想――

保吉は二階の食堂を出た。文官教官は午飯の後は大抵隣の喫煙室へはひる。彼は今日は其處へ行かずに、庭へ出る階段を降ることにした。すると下から下士が一人、一飛びに階段を三段づつ蝗のやうに登つて來た。それが彼の顏を見ると、突然嚴格に擧手の禮をした。するが早いか一躍りに保吉の頭を躍り越えた。彼は誰もゐない空間へちよいと會釋を返しながら、悠悠と階段を降り續けた。

庭には槇や榧の間に、木蘭が花を開いてゐる。木蘭はなぜか日の當る南へ折角の花を向けない

らしい。が、辛夷は似てゐる癖に、きつと南へ花を向けてゐる。保吉は卷煙草に火をつけながら、木蘭の個性を祝福した。其處へ石を落したやうに、鶺鴒が一羽舞ひ下つて來た。鶺鴒も彼には疎遠ではない。あの小さい尻尾を振るのは彼を案內する信號である。

「こつち！　こつち！　そつちぢやありませんよ。こつち！　こつち！」

彼は鶺鴒の云ふなり次第に、砂利を敷いた小徑を步いて行つた。が、鶺鴒はどう思つたか、突然又空へ躍り上つた。その代り脊の高い機關兵が一人、小徑をこちらへ步いて來た。保吉はこの機關兵の顏に何處か見覺えのある心もちがした。機關兵はやはり敬禮した後、さつさと彼の側を通り拔けた。彼は煙草の煙を吹きながら、誰だつたかしらと考へ續けた。二步、三步、五步、――十步目に保吉は發見した。あれはポオル・ゴオギャンである。或はゴオギャンの轉生である。今にきつとシャヴルの代りに畫筆を握るのに相違ない。その又擧句に氣違ひの友だちに後ろからピストルを射かけられるのである。可哀さうだが、どうも仕方がない。

保吉はとうとう小徑傳ひに玄關の前の廣場へ出た。其處には戰利品の大砲が二門、松や笹の中に竝んでゐる。ちよいと砲身に耳を當てて見たら、何だか息の通る音がした。大砲も欠伸をする

かも知れない。彼は大砲の下に腰を下した。それから二本目の卷煙草へ火をつけた。もう車廻しの砂利の上には蜥蜴が一匹光つてゐる。人間は足を切られたが最後、再び足は製造出來ない。しかし蜥蜴は尻つ尾を切られると、直に又尻つ尾を製造する。保吉は煙草を啣へた儘、蜥蜴はきつとラマルクよりもラマルキアンに違ひないと思つた。が、少時眺めてゐると、蜥蜴は何時か砂利に垂れた一すぢの重油に變つてしまつた。

保吉はやつと立ち上つた。ペンキ塗りの校舍に沿ひながら、もう一度庭を向うへ拔けると、海に面する運動場へ出た。土の赤いテニス・コオトには武官教官が何人か、熱心に勝負を爭つてゐる。コオトの上の空間は絶えず何かを破裂させる。同時にネツトの右や左へ薄白い直線を迸らせる。あれは球の飛ぶのではない。目に見えぬ三鞭酒を拔いてゐるのである。その又三鞭酒をワイシャツの神神が旨さうに飲んでゐるのである。保吉は神神を讃美しながら、今度は校舍の裏庭へまはつた。

裏庭には薔薇が澤山ある。尤も花はまだ一輪もない。彼は其處を歩きながら、徑へさし出た薔薇の枝に毛蟲を一匹發見した。と思ふと又一匹、隣の葉の上にも這つてゐるのがあつた。毛蟲は

互に頷き頷き、彼のことか何か話してゐるらしい。保吉はそつと立ち聞きすることにした。

第一の毛蟲　この教官は何時蝶になるのだらう？　我我の曾曾曾祖父の代から、地面の上ばかり這ひまはつてゐる。

第二の毛蟲　人間は蝶にならないのかも知れない。

第一の毛蟲　いや、なることはなるらしい。あすこにも現在飛んでゐるから。

第二の毛蟲　成程、飛んでゐるのがある。しかし何と云ふ醜さだらう！　美意識さへ人間にはないと見える。

保吉は額に手をかざしながら、頭の上へ來た飛行機を仰いだ。

其處に同僚に化けた惡魔が一人、何か愉快さうに歩いて來た。昔は錬金術を教へた惡魔も今は生徒に應用化學を教へてゐる。それがにやにや笑ひながら、かう保吉に話しかけた。

「おい、今夜つき合はんか？」

保吉は惡魔の微笑の中にありありとファウストの二行を感じた。――「一切の理論は灰色だが、綠なのは黄金なす生活の樹だ！」

彼は悪魔に別れた後、校舎の中へ靴を移した。教室は皆がらんとしてゐる。通りすがりに覗いて見たら、唯或教室の黒板の上に幾何の圖が一つ描き忘れてあつた。幾何の圖は彼が覗いたのを知ると、消されると思つたのに違ひない。忽ち伸びたり縮んだりしながら、「次の時間に入用なのです。」と云つた。

保吉はもと降りた階段を登り、語學と數學との教官室へはひつた。教官室には頭の禿げたタウンゼンド氏の外に誰もゐない。しかもこの老教師は退屈まぎれに口笛を吹き吹き、一人ダンスを試みてゐる。保吉はちよいと苦笑した儘、洗面臺の前へ手を洗ひに行つた。その時ふと鏡を見ると、驚いたことにタウンゼンド氏は何時の間にか美少年に變り、保吉自身は腰の曲つた白頭の老人に變つてゐた。

恥

保吉は教室へ出る前に、必ず教科書の下調べをした。それは月給を貰つてゐるから、出たらめなことは出來ないと云ふ義務心によつたばかりではない。教科書には學校の性質上海上用語が澤

出て來る。それをちゃんと檢べて置かないと、とんでもない誤譯をやりかねない。たとへばCat's paw と云ふから、猫の足かと思つてゐれば、そよ風だつたりするたぐひである。

或時彼は二年級の生徒に、やはり航海のことを書いた、何とか云ふ小品を教へてゐた。それは恐るべき惡文だつた。マストに風が唸つたり、ハッチへ浪が打ちこんだりしても、その浪なり風なりは少しも文字の上へ浮ばなかつた。彼は生徒に譯讀をさせながら、彼自身先に退屈し出した。かう云ふ時程生徒を相手に、思想問題とか時事問題とかを辯じたい興味に驅られることはない。元來教師と云ふものは學科以外の何ものかを教へたがるものである。道德、趣味、人生觀、——何と名づけても差支へない。兎に角教科書や黒板よりも教師自身の心臟に近い何ものかを教へたがるものである。しかし生憎生徒と云ふものは學科以外の何ものをも教はりたがらないものである。いや、教はりたがらないのではない。絕對に教はることを嫌惡するものである。保吉はさう信じてゐたから、この場合も退屈し切つた儘、譯讀を進めるより仕かたなかつた。

しかし生徒の譯讀に一應耳を傾けた上、綿密に誤を直したりするのは退屈しない時でさへ、可也保吉には面倒だつた。彼は一時間の授業時間を三十分ばかり過した後、とうとう譯讀を中止さ

せた。その代りに今度は彼自身一節づつ讀んでは譯し出した。教科書の中の航海は不相變退屈を極めてゐた。同時に又彼の教へぶりも負けずに退屈を極めてゐた。彼は無風帶を横ぎる帆船のやうに、動詞のテンスを見落したり關係代名詞を間違へたり、行き惱み行き惱み進んで行つた。

その中にふと氣がついて見ると、彼の下檢べをして來たところはもうたつた四五行しかなかつた。其處を一つ通り越せば、海上用語の暗礁に滿ちた、油斷のならない荒海だつた。彼は横目で時計を見た。時時は休みの喇叭迄にたつぷり二十分は殘つてゐた。彼は出來るだけ叮嚀に、下檢べの出來てゐる四五行を譯した。が、譯してしまつて見ると、時計の針はその間にまだ三分しか動いてゐなかつた。

保吉は絶體絶命になつた。この場合唯一の血路になるものは生徒の質問に應ずることだつた。それでもまだ時間が餘れば、早じまひを宣してしまふことだつた。彼は教科書を置きながら、「質問は――」と口を切らうとした。と、突然まつ赤になつた。なぜそんなにまつ赤になつたか？――それは彼自身にも説明出來ない。兎に角生徒を護摩かす位は何とも思はぬ筈の彼がその時だけはまつ赤になつたのである。生徒は勿論何も知らずにまじまじ彼の顏を眺めてゐた。彼はもう一

度時計を見た。それから、――教科書を取り上げるが早いか、無茶苦茶に先を讀み始めた。

教科書の中の航海はその後も退屈なものだつたかも知れない。しかし彼の教へぶりは、――保吉は未に確信してゐる。タイフウンと鬪ふ帆船よりも、もつと壯烈を極めたものだつた。

勇ましい守衛

秋の末か冬の初か、その邊の記憶ははつきりしない。兎に角學校へ通ふのにオオヴア・コオトをひつかける時分だつた。午飯のテエブルに就いた時、或若い武官教官が隣に坐つてゐる保吉にかう云ふ最近の椿事を話した。――つい二三日前の深更、鐵盜人が二三人學校の裏手へ舟を着けた。それを發見した夜警中の守衛は單身彼等を逮捕しようとした。ところが烈しい格鬪の末、あべこべに海へ抛りこまれた。守衛は濡れ鼠になりながら、やつと岸へ這ひ上つた。が、勿論盜人の舟はその間にもう沖の闇へ姿を隱してゐたのである。

「大浦と云ふ守衛ですがね。莫迦莫迦しい目に遇つたですよ。」

武官はパンを頬張つたなり、苦しさうに笑つてゐた。

大浦は保吉も知つてゐた。守衞は何人か交替に門側の詰め所に控へてゐる。さうして武官と文官とを問はず、敎官の出入を見る度に、擧手の禮をすることになつてゐる。保吉は敬禮されるのも敬禮に答へるのも好まなかつたから、敬禮する暇を與へぬやうに、詰め所の前を通る時は特に足を早めることにした。が、この大浦と云ふ守衞だけは容易に目つぶしを食はされない。第一詰め所に坐つた儘、門の内外五六間の距離へ絶えず目を注いでゐる。だから保吉の影が見えると、まだその前へ來ない内に、ちやんともう敬禮の姿勢をしてゐる。かうなれば宿命と思ふ外はない。保吉はとうとう觀念した。いや、觀念したばかりではない。この頃は大浦を見つけるが早いか、響尾蛇に狙はれた兎のやうに、こちらから帽さへとつてゐたのである。

それが今聞けば盜人の爲に、海へ投げこまれたと云ふのである。保吉はちよいと同情しながら、やはり笑はずにはゐられなかつた。

すると五六日たつてから、保吉は停車場の待合室に偶然大浦を發見した。大浦は彼の顏を見ると、さう云ふ場所にも關らず、ぴたりと姿勢を正した上、不相變嚴格に擧手の禮をした。保吉ははつきり彼の後ろに詰め所の入口が見えるやうな氣がした。

「君はこの間――」

少時沈默が續いた後、保吉はかう話しかけた。

「ええ、泥坊を摑まへ損じまして、――」

「ひどい目に遇つたですね。」

「幸ひ怪我はせずにすみましたが、――」

大浦は苦笑を浮べた儘、自ら嘲るやうに話し續けた。

「何、無理にも摑まへようと思へば、一人位は摑まへられたのです。しかし摑まへて見たところが、それつきりの話ですし、――」

「それつきりと云ふのは？」

「賞與も何も貰へないのです。さう云ふ場合、どうなると云ふ明文は守衞規則にありませんから、――」

「職に殉じても？」

「職に殉じてもです。」

保吉はちよいと大浦を見た。大浦自身の言葉によれば、彼は必しも勇士のやうに、一死を賭してかかつたのではない。賞與を打算に加へた上、捉ふべき盜人を逸したのである。しかし――保吉は卷煙草をとり出しながら、出來るだけ快活に頷いて見せた。

「成程それぢや莫迦莫迦しい。危險を冒すだけ損の訣ですね。」

大浦は「はあ」とか何とか云つた。その癖變に浮かなさうだつた。

「だが賞與さへ出るとなれば、――」

保吉はやや憂鬱に云つた。

「だが、賞與さへ出るとなれば、誰でも危險を冒すかどうか？――そいつも亦少し疑問ですね。」

大浦は今度は默つてゐた。が、保吉が煙草を啣へると、急に彼自身のマッチを擦り、その火を保吉の前へ出した。保吉は赤あかと靡いた焰を煙草の先に移しながら、思はず口もとに動いた微笑を悟られないやうに嚙み殺した。

「難有う。」

「いや、どうしまして。」

大浦はさりげない言葉と共に、マッチの箱をポケットへ返した。しかし保吉は今日もなほこの勇ましい守衛の祕密を看破したことと信じてゐる。あの一點のマッチの火は保吉の爲にばかり擦られたのではない。實に大浦の武士道を冥冥の裡に照覽し給ふ神神の爲に擦られたのである。

（大正十二年四月）

白

一

或春の午過ぎです。白と云ふ犬は土を嗅ぎ嗅ぎ、靜かな往來を歩いてゐました。狹い往來の兩側にはずつと芽をふいた生垣が續き、その又生垣の間にはちらほら櫻なども咲いてゐます。白は生垣に沿ひながら、ふと或横町へ曲りました。が、そちらへ曲つたと思ふと、さもびつくりしたやうに、突然立ち止つてしまひました。

それも無理はありません。その横町の七八間先には印半纏を着た犬殺しが一人、罠を後に隱したまま、一匹の黑犬を狙つてゐるのです。しかも黑犬は何も知らずに、この犬殺しの投げてくれたパンか何かを食べてゐるのです。けれども白が驚いたのはそのせゐばかりではありません。見知らぬ犬ならばともかくも、今犬殺しに狙はれてゐるのはお隣の飼犬の黑なのです。毎朝顔を合せる度にお互の鼻の匂を嗅ぎ合ふ、大の仲よしの黑なのです。

白は思はず大聲に「黒君！　あぶない！」と叫ばうとしました。が、その拍子に犬殺しはじろりと白へ目をやりました。「教へて見ろ！　貴樣から先へ罠にかけるぞ。」――犬殺しの目にはありありとさう云ふ嚇しが浮んでゐます。白は餘りの恐ろしさに、思はず吠えるのを忘れました。いや、忘れたばかりではありません。一刻もぢつとしてはゐられぬ程、臆病風が立ち出したのです。白は犬殺しに目を配りながら、じりじり後すざりを始めました。さうして又生垣の蔭に犬殺しの姿が隱れるが早いか、可哀さうな黒を殘したまま、一目散に逃げ出しました。

その途端に罠が飛んだのでせう。續けさまにけたたましい黒の鳴き聲が聞えました。しかし白は引き返すどころか、足を止めるけしきもありません。ぬかるみを飛び越え、石ころを蹴散らし、往來どめの繩を擦り拔け、五味ための箱を引つくり返し、振り向きもせずに逃げ續けました。御覽なさい。坂を駈けおりるのを！　そら、自動車に轢かれさうになりました！　白はもう命の助かりたさに夢中になつてゐるのかも知れません。いや、白の耳の底には未に黒の鳴き聲が虻のやうに唸つてゐるのです。

「きやあん。きやあん。助けてくれえ！　きやあん。きやあん。助けてくれえ！」

二

白はやつと喘ぎ喘ぎ、主人の家へ歸つて來ました。黑塀の下の犬くぐりを拔け、物置小屋を廻りさへすれば、犬小屋のある裏庭です。白は殆ど風のやうに、裏庭の芝生へ駈けこみました。もう此處まで逃げて來れば、罠にかかる心配はありません。おまけに青あをした芝生には、幸ひお孃さんや坊ちやんもボオル投げをして遊んでゐます。それを見た白の嬉しさは何と云へば好いのでせう？　白は尻尾を振りながら、一足飛びに其處へ飛んで行きました。

「お孃さん！　坊ちやん！　今日は犬殺しに遇ひましたよ。」

白は二人を見上げると、息もつかずにかう云ひました。（尤もお孃さんや坊ちやんには犬の言葉はわかりませんから、わんわんと聞えるだけなのです。）しかし今日はどうしたのか、お孃さんも坊ちやんも唯呆氣にとられたやうに、頭さへ撫でてはくれません。白は不思議に思ひながらも、もう一度二人に話しかけました。

「お孃さん！　あなたは犬殺しを御存じですか？　それは恐ろしいやつですよ。坊ちやん！　わ

たしは助かりましたが、お隣の黑君は摑まりましたぜ。」

　それでもお孃さんや坊ちやんは顏を見合せてゐるばかりです。おまけに二人は少時すると、こんな妙なことさへ云ひ出すのです。

「何處の犬でせう？　春夫さん。」

「何處の犬だらう？　姉さん。」

　何處の犬？　今度は白の方が呆氣にとられました。（白にはお孃さんや坊ちやんの言葉もちやんと聞きわけることが出來るのです。我我は犬の言葉がわからないものですから、犬もやはり我我の言葉はわからないやうに考へてゐますが、實際はさうではありません。犬が藝を覺えるのは我我の言葉がわかるからです。しかし我我は犬の言葉を聞きわけることが出來ませんから、闇の中を見通すことだの、かすかな匂を嗅ぎ當てることだの、犬の敎へてくれる藝は一つも覺えることが出來ません。）

「何處の犬とはどうしたのです？　わたしですよ！　白ですよ！」

　けれどもお孃さんは不相變氣味惡さうに白を眺めてゐます。

「お隣の黑の兄弟かしら？」

「黑の兄弟かも知れないね。」坊ちやんもバットをおもちやにしながら、考へ深さうに答へました。

「こいつも體中まつ黑だから。」

白は急に背中の毛が逆立つやうに感じました。まつ黑！　そんな筈はありません。白はまだ子犬の時から、牛乳のやうに白かつたのですから。しかし今前足を見ると、いや、——前足ばかりではありません。胸も、腹も、後足も、すらりと上品に延びた尻尾も、みんな鍋底のやうにまつ黑なのです。まつ黑！　まつ黑！　白は氣でも違つたやうに、飛び上つたり、跳ね廻つたりしながら、一生懸命に吠え立てました。

「あら、どうしませう？　春夫さん。この犬はきつと狂犬だわよ。」

お嬢さんは其處に立ちすくんだなり、今にも泣きさうな聲を出しました。しかし坊ちやんは勇敢です。白は忽ち左の肩をぽかりとバットに打たれました。と思ふと二度目のバットも頭の上へ飛んで來ます。白はその下をくぐるが早いか、元來た方へ逃げ出しました。けれども今度はさつきのやうに、一町も二町も逃げ出しはしません。芝生のはづれには棕櫚の木のかげに、クリイム

色に塗つた犬小屋があります。白は犬小屋の前へ來ると、小さい主人たちを振り返りました。

「お孃さん！　坊ちやん！　わたしはあの白なのですよ。いくらまつ黑になつてゐても、やつぱりあの白なのですよ。」

白の聲は何とも云はれぬ悲しさと怒りとに震へてゐました。けれどもお孃さんや坊ちやんにはさう云ふ白の心もちも呑みこめる筈はありません。現にお孃さんは憎らしさうに、「まだあすこに吠えてゐるわ。ほんたうに圖圖しい野良犬ね。」などと、地だんだを踏んでゐるのです。坊ちやんも、——坊ちやんは小徑の砂利を拾ふと、力一ぱい白へ投げつけました。

「畜生！　まだ愚圖愚圖してゐるな。これでもか？　これでもか？」

砂利は續けさまに飛んで來ました。中には白の耳のつけ根へ、血の滲む位當つたのもあります。白はとうとう尻尾を卷き、黑塀の外へぬけ出しました。黑塀の外には春の日の光に銀の粉を浴びた紋白蝶が一羽、氣樂さうにひらひら飛んでゐます。

「ああ、けふから宿無し犬になるのか？」

白はため息を洩らしたまま、少時は唯電柱の下にぼんやり空を眺めてゐました。

三

お孃さんや坊ちやんに逐ひ出された白は東京中をうろうろ歩きました。しかし何處へどうしても、忘れることの出來ないのはまつ黑になつた姿のことです。白は客の顏を映してゐる理髮店の鏡を恐れました。雨上りの空を映してゐる往來の水たまりを恐れました。往來の若葉を映してゐる飾窓の硝子を恐れました。いや、カフエのテエブルに黑ビイルを湛へてゐるコツプさへ、——けれどもそれが何になりませう？　あの自動車を御覽なさい。ええ、あの公園の外にとまつた、大きい黑塗りの自動車です。漆を光らせた自動車の車體は今こちらへ步いて來る白の姿を映しました。——はつきりと、鏡のやうに。白の姿を映すものはあの客待の自動車のやうに、到るところにある訣なのです。もしあれを見たとすれば、どんなに白は恐れるでせう。それ、白の顏を御覽なさい。白は苦しさうに唸つたと思ふと、忽ち公園の中へ駈けこみました。

公園の中には鈴懸の若葉にかすかな風が渡つてゐます。白は頭を垂れたなり、木木の間を步いて行きました。此處には幸ひ池の外には、姿を映すものも見當りません。物音は唯白薔薇に群が

る蜂の聲が聞えるばかりです。白は平和な公園の空氣に、少時は醜い黑犬になつた日ごろの悲しさも忘れてゐました。

しかしさう云ふ幸福さへ五分と續いたかどうかわかりません。白は唯夢のやうに、ベンチの竝んでゐる路ばたへ出ました。するとその路の曲り角の向うにけたたましい犬の聲が起つたのです。

「きやん。きやん。助けてくれえ！ きやあん。きやあん。助けてくれえ！」

白は思はず身震ひをしました。この聲は白の心の中へ、あの恐ろしい黑の最後をもう一度はつきり浮ばせたのです。白は目をつぶつたまま、元來た方へ逃げ出さうとしました。けれどもそれは言葉通り、ほんの一瞬の間のことです。白は凄じい唸り聲を洩らすと、きりりと又振り返りました。

「きやあん。きやあん。助けてくれえ！ きやあん。きやあん。助けてくれえ！」

この聲は又白の耳にはかう云ふ言葉にも聞えるのです。

「きやあん。きやあん。臆病ものになるな！ きやあん。臆病ものになるな！」

白は頭を低めるが早いか、聲のする方へ駈け出しました。

けれども其處へ來て見ると、白の目の前へ現れたのは犬殺しなどではありません。唯學校の歸りらしい、洋服を着た子供が二三人、頸のまはりへ繩をつけた茶色の子犬を引きずりながら、何かわいわい騷いでゐるのです。子犬は一生懸命に引きずられまいともがきもがき、「助けてくれえ。」と繰り返してゐました。しかし子供たちはそんな聲に耳を借すけしきもありません。唯笑つたり、怒鳴つたり、或は又子犬の腹を靴で蹴つたりするばかりです。

白は少しもためらはずに、子供たちを目がけて吠えかかりました。不意を打たれた子供たちは驚いたの驚かないのではありません。又實際白の容子は火のやうに燃えた眼の色と云ひ、刃物のやうにむき出した牙の列と云ひ、今にも嚙みつくかと思ふ位、恐ろしいけんまくを見せてゐるのです。子供たちは四方へ逃げ散りました。中には餘り狼狽したはずみに、路ばたの花壇へ飛びこんだのもあります。白は二三間追ひかけた後、くるりと子犬を振り返ると、叱るやうにかう聲をかけました。

「さあ、おれと一しよに來い。お前の家まで送つてやるから。」

白は元來た木木の間へ、まつしぐらに又駈けこみました。茶色の子犬も嬉しさうに、ベンチを

くぐり、薔薇を蹴散らし、白に負けまいと走つて來ます。まだ頸にぶら下つた、長い繩をひきずりながら。

× × × × × ×

二三時間たつた後、白は貧しいカフェの前に茶色の子犬と佇んでゐました。晝も薄暗いカフェの中にはもう赤あかと電燈がともり、音のかすれた蓄音機は浪花節か何かやつてゐるやうです。子犬は得意さうに尾を振りながら、かう白へ話しかけました。

「僕は此處に住んでゐるのです、この大正軒と云ふカフェの中に。――をぢさんは何處に住んでゐるのです？」

「をぢさんかい？　をぢさんは――ずつと遠い町にゐる。」

白は寂しさうにため息をしました。

「ぢやもうをぢさんは家へ歸らう。」

「まあお待ちなさい。をぢさんの御主人はやかましいのですか？」

「御主人？　なぜ又そんなことを尋ねるのだい？」
「もし御主人がやかましくなければ、今夜は此處に泊つて行つて下さい。それから僕のお母さんにも命拾ひの御禮を云はせて下さい。僕の家には牛乳だの、カレエ・ライスだの、ビフテキだの、いろいろな御馳走があるのです。」
「ありがたう。ありがたう。だがをぢさんは用があるから、御馳走になるのはこの次にしよう。――ぢやお前のお母さんによろしく。」
白はちよいと空を見てから、靜かに敷石の上を歩き出しました。空にはカフェの屋根のはづれに、三日月もそろそろ光り出してゐます。
「をぢさん。をぢさん。をぢさんと云へば！」
子犬は悲しさうに鼻を鳴らしました。
「ぢや名前だけ聞かして下さい。僕の名前はナポレオンと云ふのです。ナポちやんだのナポ公だのとも云はれますけれども。――をぢさんの名前は何と云ふのです？」
「をぢさんの名前は白と云ふのだよ。」

「白――ですか？　白と云ふのは不思議ですね。をぢさんは何處も黑いぢやありませんか？」
白は胸が一ぱいになりました。
「それでも白と云ふのだよ。」
「ぢや白のをぢさんと云ひませう。白のをぢさん。是非又近い内に一度來て下さい。」
「ぢやナポ公、さよなら！」
「御機嫌好う、白のをぢさん！　さやうなら、さやうなら！」

四

その後の白はどうなつたか？――それは一一話さずとも、いろいろの新聞に傳へられてゐます。大かたどなたも御存じでせう。度度危い人命を救つた、勇ましい一匹の黑犬のあるのを。又一時『義犬』と云ふ活動寫眞の流行したことを。あの黑犬こそ白だつたのです。しかしまだ不幸にも御存じのない方があれば、どうか下に引用した新聞の記事を讀んで下さい。

東京日日新聞。昨十八日(五月)午前八時四十分、奧羽線上り急行列車が田端驛附近の踏切を通

過する際、踏切番人の過失に依り、田端一二三會社員柴山鐵太郎の長男實彦(四歳)が列車の通る線路内に立ち入り、危く轢死を遂げようとした。その時逞しい黑犬が一匹、稻妻のやうに踏切へ飛びこみ、目前に迫つた列車の車輪から、見事に實彦を救ひ出した。この勇敢なる黑犬は人人の立騷いでゐる間に何處かへ姿を隱した爲、表彰したいにもすることが出來ず、當局は大いに困つてゐる。

東京朝日新聞。輕井澤に避暑中のアメリカ富豪エドワアド・バアクレエ氏の夫人はペルシア產の猫を寵愛してゐる。すると最近同氏の別莊へ七尺餘りの大蛇が現れ、ヴエランダにゐる猫を呑まうとした。其處へ見慣れぬ黑犬が一匹、突然猫を救ひに駈けつけ、二十分に亙る奮鬪の後、とうとうその大蛇を嚙み殺した。しかしこのけなげな犬は何處かへ姿を隱した爲、夫人は五千弗の賞金を懸け、犬の行方を求めてゐる。

國民新聞。日本アルプス横斷中、一時行方不明になつた第一高等學校の生徒三名は七日(八月)上高地の溫泉へ着した。一行は穗高山と槍ケ嶽との間に途を失ひ、且過日の暴風雨に天幕、糧食等を奪はれた爲、殆ど死を覺悟してゐた。然るに何處からか黑犬が一匹、一行のさまよつてゐた

溪谷に現れ、恰も案内をするやうに、先へ立つて歩き出した。一行はこの犬の後に從ひ、一日餘り歩いた後、やつと上高地へ着することが出來た。しかし犬は目の下に溫泉宿の屋根が見えると、一聲嬉しさうに吠えたきり、もう一度もと來た熊笹の中へ姿を隱してしまつたと云ふ。一行は皆この犬が來たのは神明の加護だと信じてゐる。

時事新報。十三日(九月)　名古屋市の大火は燒死者十餘名に及んだが、橫關名古屋市長なども愛兒を失はうとした一人である。令息武矩(三歳)は如何なる家族の手落からか、猛火の中の二階に殘され、既に灰燼とならうとしたところを、一匹の黑犬の爲に啣へ出された。市長は今後名古屋市に限り、野犬撲殺を禁ずると云つてゐる。

讀賣新聞。小田原町城内公園に連日の人氣を集めてゐた宮城巡囘動物園のシベリヤ產大狼は二十五日(十月)午後二時ごろ、突然巖乘な檻を破り、木戸番二名を負傷させた後、箱根方面へ逸走した。小田原署はその爲に非常動員を行ひ、全町に亙る警戒線を布いた。すると午後四時半ごろ右の狼は十字町に現れ、一匹の黑犬と噛み合ひを初めた。黑犬は惡戰頗る努め、遂に敵を噛み伏せるに至つた。其處へ警戒中の巡査も駈けつけ、直ちに狼を銃殺した。この狼はルプス・ギガ

ンティクスと稱し、最も兇猛な種屬であると云ふ。なほ宮城動物園主は狼の銃殺を不當とし、小田原署長を相手どつた告訴を起すといきまいてゐる。等、等、等。

五

或秋の眞夜中です。體も心も疲れ切つた白は主人の家へ歸つて來ました。勿論お孃さんや坊ちやんはとうに床へはひつてゐます。いや、今は誰一人起きてゐるものもありますまい。ひつそりした裏庭の芝生の上にも、唯高い棕櫚の木の梢に白い月が一輪浮んでゐるだけです。白は昔の犬小屋の前に、露に濡れた體を休めました。それから寂しい月を相手に、かういふ獨語を始めました。

「お月樣！　お月樣！　わたしは黑君を見殺しにしました。わたしの體のまつ黑になつたのも、大かたそのせゐかと思つてゐます。しかしわたしはお孃さんや坊ちやんにお別れ申してから、あらゆる危險と戰つて來ました。それは一つには何かの拍子に煤よりも黑い體を見ると、臆病を恥ぢる氣が起つたからです。けれどもしまひには黑いのがいやさに、――この黑いわたしを殺した

さに、或は火の中へ飛びこんだり、或は又狼と戰つたりしました。が、不思議にもわたしの命はどんな强敵にも奪はれません。死もわたしの顏を見ると、何處かへ逃げ去つてしまふのです。わたしはとうとう苦しさの餘り、自殺をしようと決心しました。唯自殺をするにつけても、唯一目會ひたいのは可愛がつて下すつた御主人です。勿論お孃さんや坊ちやんはあしたにもわたしの姿を見ると、きつと又野良犬と思ふでせう。ことによれば坊ちやんのバットに打ち殺されてしまふかも知れません。しかしそれでも本望です。お月樣！　お月樣！　わたしは御主人の顏を見る外に、何も願ふことはありません。その爲今夜ははるばるともう一度此處へ歸つて來ました。どうか夜の明け次第、お孃さんや坊ちやんに會はして下さい。」

白は獨語を云ひ終ると、芝生に腭をさしのべたなり、何時かぐつすり寢入つてしまひました。

×　　×　　×　　×　　×　　×

「驚いたわねえ、春夫さん。」

「どうしたんだらう？　姉さん。」

白は小さい主人の聲に、はつと目を開きました。見ればお孃さんや坊ちやんは犬小屋の前に佇んだまま、不思議さうに顏を見合せてゐます。白は一度擧げた目を又芝生の上へ伏せてしまひました。お孃さんや坊ちやんは白がまつ黑に變つた時にも、やはり今のやうに驚いたものです。あの時の悲しさを考へると、――白は今では歸つて來たことを後悔する氣さへ起りました。するとその途端です。坊ちやんは突然飛び上ると、大聲にかう叫びました。

「お父さん！　お母さん！　白が又歸つて來ましたよ！」

白が！　白は思はず飛び起きました。すると逃げるとでも思つたのでせう。お孃さんは兩手を延ばしながら、しつかり白の頸を押へました。同時に白はお孃さんの目へ、ぢつと彼の目を移しました。お孃さんの目には黑い瞳にありありと犬小屋が移つてゐます。高い棕櫚の木のかげになつたクリイム色の犬小屋が、――そんなことは當然に違ひありません。しかしその犬小屋の前には米粒程の小ささに、白い犬が一匹坐つてゐるのです。淸らかに、ほつそりと。――白は唯恍惚とこの犬の姿に見入りました。

「あら、白は泣いてゐるわよ。」

お嬢さんは白を抱きしめた儘、坊ちやんの顔を見上げました。坊ちやんは――御覧なさい、坊ちやんの威張つてゐるのを！

「へつ、姉さんだつて泣いてゐる癖に！」

（大正十二年七月）

子供の病氣

――一游亭に――

夏目先生は書の幅を見ると、獨り語のやうに「旭窓だね」と云つた。落款は成程旭窓外史だつた。自分は先生にかう云つた。「旭窓は淡窓の孫でせう。淡窓の子は何と云ひましたかしら？」先生は卽座に「夢窓だらう」と答へた。

――すると急に目がさめた。蚊帳の中には次の間にともした電燈の光がさしこんでゐた。妻は二つになる男の子のおむつを取り換へてゐるらしかつた。子供は勿論泣きつづけてゐた。自分はそちらに背を向けながら、もう一度眠りにはひらうとした。すると妻がかう云つた。「いやよ。多加ちやん。又病氣になつちやあ」自分は妻に聲をかけた。「どうかしたのか？」「ええ、お腹が少し惡いやうなんです」この子供は長男に比べると、何かに病氣をし勝ちだつた。それだけに不安も感じれば、反對に又馴れつこのやうに等閑にする氣味もないではなかつた。「あした、Sさんに見て頂けよ」「ええ、今夜見て頂かうと思つたんですけれども」自分は子供の泣きやんだ後、もと

のやうにぐつすり寢入つてしまつた。

翌朝目をさました時にも、夢のことははつきり覺えてゐた。淡窓は廣瀨淡窓の氣だつた。しかし旭窓だの夢窓だのと云ふのは全然架空の人物らしかつた。さう云へば確か講釋師に南窓と云ふのがあつたなどと思つた。しかし子供の病氣のことは餘り心にもかからなかつた。それが多少氣になり出したのはSさんから歸つて來た妻の言葉を聞いた時だつた。「やつぱり消化不良ですつて。先生も後ほどいらつしやいますつて」妻は子供を橫抱きにしたまま、怒つたやうにものを云つた。「熱は？」「七度六分ばかり、――ゆうべはちつともなかつたんですけれども」自分は二階の書齋へこもり、毎日の仕事にとりかかつた。仕事は不相變捗どらなかつた。が、それは必しも子供の病氣のせゐばかりではなかつた。その中に、庭木を鳴らしながら、蒸暑い雨が降り出した。自分は書きかけの小說を前に、何本も敷島へ火を移した。

Sさんは午前に一度、日の暮に一度診察に見えた。日の暮には多加志の洗腸をした。多加志は洗腸されながら、まじまじ電燈の火を眺めてゐた。洗腸の液は少時すると、淡黑い粘液をさらひ出した。自分は病を見たやうに感じた。「どうでせう？　先生」「何、大したことはありません。

唯氷を絶やさずに十分頭を冷やして下さい。――ああ、それから餘りおあやしにならんやうに」先生はさう云つて歸つて行つた。

自分は夜も仕事をつづけ、一時ごろやつと床へはひつた。その前に後架から出て來ると、誰かまつ暗な臺所に、こつこつ音をさせてゐるものがあつた。「誰？」「わたしだよ」返事をしたのは母の聲だつた。「何をしてゐるんです？」「氷を壞してゐるんだよ」自分は迂濶を恥ぢながら、「電燈をつければ好いのに」と云つた。「大丈夫だよ。手探りでも」自分はかまはずに電燈をつけた。細帶一つになつた母は無器用に金槌を使つてゐた。その姿は何だか家庭に見るには、餘りにみすぼらしい氣のするものだつた。氷も水に洗はれた角には、きらりと電燈の光を反射してゐた。

けれども翌朝の多加志の熱は九度よりも少し高い位だつた。Sさんは又午前中に見え、ゆうべの洗腸を繰り返した。自分はその手傳ひをしながら、けふは粘液の少ないやうにと思つた。しかし便器をぬいて見ると、粘液はゆうべよりもずつと多かつた。それを見た妻は誰にともなしに、「あんなにあります」と聲を擧げた。その聲は年の七つも若い女學生になつたかと思ふ位、はしたない調子を帶びたものだつた。自分は思はずSさんの顏を見た。「疫痢ではないでせうか？」「い

や、疫痢ぢやありません。疫痢は乳離れをしない内には、――」Sさんは案外落ち着いてゐた。

自分はSさんの歸つた後、毎日の仕事にとりかかつた。それは「サンデイ毎日」の特別號に載せる小説だつた。しかも原稿の締切りはあしたの朝に迫つてゐた。自分は氣乘のしないのを、無理にペンだけ動かしつづけた。けれども多加志の泣き聲は兎角神經にさはり勝ちだつた。のみならず多加志が泣きやんだと思ふと、今度は二つ年上の比呂志も思ひ切り、大聲に泣き出したりした。

神經にさはることはそればかりではなかつた。午後には見知らない青年が一人、金の工面を頼みに來た。「僕は筋肉勞働者ですが、C先生から先生に紹介狀を貰ひましたから」青年は無骨さうにかう云つた。自分は現在蟇口に二三圓しかなかつたから、不用の書物を二冊渡し、これを金に換へ給へと云つた。青年は書物を受け取ると、丹念に奧附を檢べ出した。「この本は非賣品と書いてありますね。非賣品でも金になりますか?」自分は情ない心もちになつた。が、兎に角賣れる筈だと答へた。「さうですか? ぢや失敬します。」青年はただ疑はしさうに、難有うとも何とも云はずに歸つて行つた。

Sさんは日の暮にも洗腸をした。今度は粘液もずつと減つてゐた。「ああ、今晩は少なうござ

いますね」手洗ひの湯をすすめに來た母は殆ど手柄顔にかう云つた。自分も安心をしなかつたにしろ、安心に近い寛ぎを感じた。それには粘液の多少の外にも、多加志の顔色や擧動などのふだんに變らないせゐもあつたのだつた。「あしたは多分熱が下るでせう。幸ひ吐き氣も來ないやうですから」Ｓさんは母に答へながら、滿足さうに手を洗つてゐた。

翌朝自分の眼をさました時、伯母はもう次の間に自分の蚊帳を疊んでゐた。それが蚊帳の環を鳴らしながら、「多加ちやんが」何とか云つたらしかつた。まだ頭のぼんやりしてゐた自分は「多加志が？」と好い加減に問ひ返した。「多加ちやんが惡いんだよ。入院させなければならないんだとさ」自分は床の上に起き直つた。きのふのけふだけに意外な氣がした。「Ｓさんは？」「先生ももう來ていらつしやるんだよ、さあさあ、早くお起きなさい」伯母は感情を隱すやうに、妙にかたくなな顔をしてゐた。自分はすぐに顔を洗ひに行つた。不相變雲のかぶさつた、氣色の惡い天氣だつた。風呂場の手桶には山百合が二本、無造作に唯抛りこんであつた。何だかその匂や褐色の花粉がべたべた皮膚にくつつきさうな氣がした。

多加志はたつた一晩のうちに、すつかり眼が窪んでゐた。今朝妻が抱き起さうとすると、頭を

仰向けに垂らしたまま、白い物を吐いたとか云ふことだつた。欠伸ばかりしてゐるのもいけないらしかつた。自分は急にいぢらしい氣がした。同時に又無氣味な心もちもした。Sさんは子供の枕もとに默然と敷島を啣へてゐた。それが自分の顏を見ると、「ちとお話したいことがありますから」と云つた。自分はSさんを二階に招じ、火のない火鉢をさし挾んで坐つた。「生命に危險はないと思ひますが」Sさんはさう口を切つた。多加志はSさんの言葉によれば、すつかり腸胃を壞してゐた。この上は唯二三日の間、斷食をさせる外に仕かたはなかつた。「それには入院おさせになつた方が便利ではないかと思ふんです」自分は多加志の容體はSさんの云つてゐるよりも、ずつと危いのではないかと思つた。或はもう入院させても、手遲れなのではないかとも思つた。しかしもとよりそんなことにこだはつてゐるべき場合ではなかつた。自分は早速Sさんに入院の運びを願ふことにした。「ぢやU病院にしませう。近いだけでも便利ですから」Sさんはすすめられた茶も飮まずに、U病院へ電話をかけに行つた。自分はその間に妻を呼び、伯母にも病院へ行つて貰ふことにした。

その日は客に會ふ日だつた。客は朝から四人ばかりあつた。自分は客と話しながら、入院の支

度を急いでゐる妻や伯母を意識してゐた。すると何か舌の先に、砂粒に似たものを感じ出した。自分はこのごろ齲歯につめたセメントがとれたのではないかと思つた。けれども指先に出して見ると、ほんたうの齒の缺けたのだつた。自分は少し迷信的になつた。しかし客とは煙草をのみのみ、賣り物に出たとか噂のある抱一の三味線の話などをしてゐた。

其處へ又筋肉勞働者と稱する昨日の青年も面會に來た。青年は玄關に立つたまま、昨日貰つた二冊の本は一圓二十錢にしかならなかつたから、もう四五圓くれないかと云ふ掛け合ひをはじめた。のみならず如何に斷つても、容易に歸るけしきを見せなかつた。自分はとうとう落着きを失ひ、「そんなことを聞いてゐる時間はない。歸つて貰はう」と怒鳴りつけた。青年はまだ不服さうに、「ぢや電車賃だけ下さい。五十錢貰へば好いんです」などと、さもしいことを並べてゐた。が、その手も利かないのを見ると、手荒に玄關の格子戸をしめ、やつと門外に退散した。自分はこの時から云ふ寄附には今後斷然應ずまいと思つた。

四人の客は五人になつた。五人目の客は年の若い佛蘭西文學の研究者だつた。自分はこの客と入れ違ひに、茶の間の容子を窺ひに行つた。するともう支度の出來た伯母は着肥つた子供を抱き

ながら、緣側をあちこち步いてゐた。自分は色の惡い多加志の額へ、そつと脣を押しつけて見た。額は可也火照つてゐた。しほむきもぴくぴく動いてゐた。「車は？」自分は小聲に外のことを云つた。「車？　車はもう來てゐます」伯母はなぜか他人のやうに、叮嚀な言葉を使つてゐた。其處へ着物を更めた妻も羽根布團やバスケツトを運んで來た。「では行つて參ります」妻は自分の前へ兩手をつき、妙に眞面目な聲を出した。自分は唯多加志の帽子を新しいやつに換へてやれと云つた。それはつい四五日前、自分の買つて來た夏帽子だつた。「もう新しいのに換へて置きました」妻はさう答へた後、簞笥の上の鏡を覗き、ちよいと襟もとを搔き合せた。自分は彼等を見送らずに、もう一度二階へ引き返した。

自分は新たに來た客とジョルジュ・サンドの話などをしてゐた。その時庭木の若葉の間に二つの車の幌が見えた。幌は垣の上にゆらめきながら、忽ち目の前を通り過ぎた。「一體十九世紀の前半の作家はバルザックにしろサンドにしろ、後半の作家よりは偉いですね」客は——自分ははつきり覺えてゐる。客は熱心にかう云つてゐた。

午後にも客は絕えなかつた。自分はやつと日の暮に病院へ出かける時間を得た。曇天は何時か

雨になつてゐた。自分は着物を着換へながら、女中に足駄を出すやうにと云つた。其處へ大阪のN君が原稿を貰ひに顔を出した。N君は泥まみれの長靴をはき、外套に雨の痕を光らせてゐた。自分は玄關に出迎へたまま、これこれの事情のあつた爲に、何も書けなかつたと云ふ斷りを述べた。N君は自分に同情した。「ぢや今度はあきらめます」とも云つた。自分は何だかN君の同情を強ひたやうな心もちがした。同時に體の好い口實に瀕死の子供を使つたやうな氣がした。

N君の歸つたか歸らないのに、伯母も病院から歸つて來た。多加志は伯母の話によれば、其の後も二度ばかり乳を吐いた。しかし幸ひ腦にだけは異狀も來ずにゐるらしかつた。伯母はまだこの外に看護婦は氣立ての善ささうなこと、今夜は病院へ妻の母が泊りに來てくれることなどを話した。「多加ちやんがあすこへはひると直に、日曜學校の生徒からだつて、花を一束貰つたでせう。さあ、お花だけにいやな氣がしてね」そんなことも話してゐた。自分はけさ話をしてゐる内に、齒の缺けたことを思ひ出した。が、何とも云はなかつた。

家を出た時はまつ暗だつた。その中に細かい雨が降つてゐた。自分は門を出ると同時に、日和下駄をはいてゐるのに心づいた。しかもその日和下駄は左の前鼻緒がゆるんでゐた。自分は何だ

かこの鼻緒が切れると、子供の命も終りさうな氣がした。しかしはき換へに歸るのは到底苛立たしさに堪へなかつた。自分は足駄を出さなかつた女中の愚を怒りながら、うつかり下駄を踏み返さないやうに、氣をつけ氣をつけ歩いて行つた。

病院へ着いたのは九時過ぎだつた。成程多加志の病室の外には姫百合や撫子が五六本、洗面器の水に浸されてゐた。病室の中の電燈の玉に風呂敷か何か懸つてゐたから、顏も見えない程薄暗かつた。其處に妻や妻の母は多加志を中に挾んだまま、帶を解かずに横になつてゐた。多加志は妻の母の腕を枕に、すやすや寢入つてゐるらしかつた。妻は自分の來たのを知ると一人だけ布團の上に坐り、小聲に「どうも御苦勞さま」と云つた。妻の母もやはり同じことを云つた。それは豫期してゐたよりも、氣輕い調子を帶びたものだつた。自分は幾分かほつとした氣になり、彼等の枕もとに腰を下した。妻は乳を飲ませられぬ爲に、多加志は泣くし、乳は張るし、二重に苦しい思ひをすると云つた。「とてもゴムの乳つ首位ぢや駄目なんですもの。しまひには舌を吸はせましたわ」「今はわたしの乳を飲んでゐるんですよ」妻の母は笑ひながら、萎びた乳首を出して見せた。「一生懸命に吸ふんでね、こんなにまつ赤になつてしまつた」自分も何時か笑つてゐた。「し

かし存外好ささうですね。僕はもう今ごろは絶望かと思つた」「多加ちやん？　多加ちやんはもう大丈夫ですとも。なあに、只のお腹下しなんですよ。あしたはきつと熱が下りますよ」「御祖師様の御利益でせう？」妻は母をひやかした。しかし法華經信者の母は妻の言葉も聞えないやうに、悪い熱をさますつもりか、一生懸命に口を尖らせ、ふうふう多加志の頭を吹いた。……

×　×　×　×　×　×

多加志はやつと死なずにすんだ。自分は彼の小康を得た時、入院前後の消息を小品にしたいと思つたことがある。けれどもうつかりさう云ふものを作ると、又病氣がぶり返しさうな、迷信じみた心もちがした。その爲にとうとう書かずにしまつた。今は多加志も庭木に吊つたハムモックの中に眠つてゐる。自分は原稿を頼まれたのを機會に、とりあへずこの話を書いて見ることにした。讀者には寧ろ迷惑かも知れない。

（大正十二年七月）

お時儀

保吉は三十になつたばかりである。その上あらゆる賣文業者のやうに、目まぐるしい生活を營んでゐる。だから「明日」は考へても「昨日」は滅多に考へない。しかし往來を歩いてゐたり、原稿用紙に向つてゐたり、電車に乘つてゐたりする間にふと過去の一情景を鮮かに思ひ浮べることがある。それは從來の經驗によると、大抵嗅覺の刺戟から聯想を生ずる結果らしい。その又嗅覺の刺戟なるものも都會に住んでゐる悲しさには惡臭と呼ばれる匂ばかりである。たとへば汽車の煤煙の匂は何人も嗅ぎたいと思ふ筈はない。けれども或お孃さんの記憶、——五六年前に顏を合せた或お孃さんの記憶などはあの匂を嗅ぎさへすれば、煙突から迸る火花のやうに忽ちよみがへつて來るのである。

このお孃さんに遇つたのは或避暑地の停車場である。或はもつと嚴密に云へば、あの停車場のプラットフォオムである。當時その避暑地に住んでゐた彼は、雨が降つても、風が吹いても、午

前は八時發の下り列車に乘り、午後は四時二十分着の上り列車を降りるのを常としてゐた。なぜ又毎日汽車に乘つたかと云へば、——そんなことは何でも差支へない。しかし毎日汽車になど乘れば、一ダズン位の顔馴染みは忽ちの內に出來てしまふ。お孃さんもその中の一人である。けれども午後には七草から三月の二十何日か迄、一度も遇つたと云ふ記憶はない。午前もお孃さんの乘る汽車は保吉には緣のない上り列車である。

お孃さんは十六か十七であらう。いつも銀鼠の洋服に銀鼠の帽子をかぶつてゐる。脊は寧ろ低い方かも知れない。けれども見たところはすらりとしてゐる。殊に脚は、——やはり銀鼠の靴下に踵の高い靴をはいた脚は鹿の脚のやうにすらりとしてゐる。顔は美人と云ふほどではない。しかし、——保吉はまだ東西を論ぜず、近代の小說の女主人公に無條件の美人を見たことはない。作者は女性の描寫になると、大抵「彼女は美人ではない。しかし……」とか何とか斷つてゐる。按ずるに無條件の美人を認めるのは近代人の面目に關るらしい。だから保吉もこのお孃さんに「しかし」と云ふ條件を加へるのである。——念の爲にもう一度繰り返すと、顔は美人と云ふほどではない。しかしちよいと鼻の先の上つた、愛敬の多い圓顔である。

お孃さんは騷がしい人ごみの中にぼんやり立つてゐることがある。人ごみを離れたベンチの上に雜誌などを讀んでゐることがある。或は又長いプラットフォオムの縁をぶらぶら歩いてゐることもある。

保吉はお孃さんの姿を見ても、戀愛小說に書いてあるやうな動悸などの高ぶつた覺えはない。唯やはり顏馴染みの鎭守府司令長官や賣店の猫を見た時の通り、「ゐるな」と考へるばかりである。しかし兎に角顏馴染みに對する親しみだけは抱いてゐた。だから時たまプラットフォオムにお孃さんの姿を見ないことがあると、何か失望に似たものを感じた。何か失望に似たものを、――それさへ痛切には感じた訣ではない。保吉は現に賣店の猫が二三日行くへを晦ました時にも、全然變りのない寂しさを感じた。もし鎭守府司令長官も頓死か何か遂げたとすれば、――この場合は聊か疑問かも知れない。が、まづ猫ほどではないにもしろ、勝手の違ふ氣だけは起つた筈である。

ところが三月の二十何日か、生暖い曇天の午後のことである。保吉はその日も勤め先から四時二十分着の上り列車に乘つた。何でもかすかな記憶によれば、調べ仕事に疲れてゐたせゐか、汽車の中でもふだんのやうに本を讀みなどはしなかつたらしい。唯窓べりによりかかりながら、春

めいた山だの畠だのを眺めてゐたやうに覺えてゐる。いつか讀んだ横文字の小說に平地を走る汽車の音を「Tratata tratata」と寫し、鐵橋を渡る汽車の音を「Trararach trararach」と寫したのがある。成程ぼんやり耳を貸してゐると、ああ云ふ風にも聞えないことはない。――そんなことを考へたのも覺えてゐる。

保吉は物憂い三十分の後、やつとあの避暑地の停車場へ降りた。プラットフォオムには少し前に着いた下り列車も止まつてゐる。彼は人ごみに交りながら、ふとその汽車を降りる人を眺めた。すると――意外にもお孃さんだつた。保吉は前にも書いたやうに、午後にはまだこのお孃さんと一度も顏を合せたことはない。それが今不意に目の前へ、日の光りを透かした雲のやうな、或は猫柳の花のやうな銀鼠の姿を現したのである。彼は勿論「おや」と思つた。お孃さんも確にその瞬間、保吉の顏を見たらしかつた。と同時に保吉は思はずお孃さんへお時儀をしてしまつた。

お時儀をされたお孃さんはびつくりしたのに相違あるまい。が、どう云ふ顏をしたか、生憎もう今では忘れてゐる。いや、當時もそんなことは見定める餘裕を持たなかつたのであらう。彼は「しまつた」と思ふが早いか、忽ち耳の火照り出すのを感じた。けれどもこれだけは覺えてゐる。

——お孃さんも彼に會釋をした！

やつと停車場の外へ出た彼は彼自身の愚に憤りを感じた。なぜ又お時儀などをしてしまつたのであらう？　あのお時儀は全然反射的である。ぴかりと稻妻の光る途端に瞬きをするのも同じことである。すると意志の自由にはならない。意志の自由にならない行爲は責任を負はずとも好い筈である。けれどもお孃さんは何と思つたであらう？　成程お孃さんも會釋をした。しかしあれは驚いた拍子にやはり反射的にしたのかも知れない。今ごろはずゐぶん保吉を不良少年と思つてゐさうである。一そ「しまつた」と思つた時に無躾を詫びてしまへば好かつた。さう云ふことにも氣づかなかつたと云ふのは……

保吉は下宿へ歸らずに、人影の見えない砂濱へ行つた。これは珍らしいことではない。彼は一月五圓の貸間と一食五十錢の辨當とにしみじみ世の中が厭になると、必ずこの砂の上へ、グラスゴオのパイプをふかしに來る。この日も曇天の海を見ながら、まづパイプへマッチの火を移した。今日のことはもう仕方がない。けれども又明日になれば、必ずお孃さんと顏を合せる。お孃さんはその時どうするであらう？　彼を不良少年と思つてゐれば、一瞥を與へないのは當然である。

しかし不良少年と思つてゐなければ、明日も亦今日のやうに彼のお時儀に答へるかも知れない。彼のお時儀に？　彼は——堀川保吉はもう一度あのお孃さんに恬然とお時儀をする氣であらうか？　いや、お時儀をする氣はない。けれども一度お時儀をした以上、何かの機會にお孃さんも彼も會釋をし合ふことはありさうである。もし會釋をし合ふとすれば、……保吉はふとお孃さんの眉の美しかつたことを思ひ出した。

爾來七八年を經過した今日、その時の海の靜かさだけは妙に鮮かに覺えてゐる。保吉はかう云ふ海を前に、いつまでも唯茫然と火の消えたパイプを啣へてゐた。尤も彼の考へはお孃さんの上にばかりあつた訣ではない。たとへば近近とりかかる筈の小說のことも思ひ浮かべた。その小說の主人公は革命的精神に燃え立つた、或英吉利語の敎師である。鯁骨の名の高い彼の頸は如何なる權威にも屈することを知らない。但し前後にたつた一度、或顏馴染みのお孃さんへうつかりお時儀をしてしまつたことがある。お孃さんは脊は低い方かも知れない。けれども見たところはすらりとしてゐる。殊に銀鼠の靴下の踵の高い靴をはいた脚は——兎に角自然とお孃さんのことを考へ勝ちだつたのは事實かも知れない。……

翌朝の八時五分前である。保吉は人のこみ合つたプラットフォオムを歩いてゐた。彼の心はお孃さんと出會つた時の期待に張りつめてゐる。出會はずにすましたい氣もしないではない。が、出會はずにすませるのは不本意のことも確かである。云はば彼の心もちは强敵との試合を目前に控へた拳闘家の氣組みと變りはない。しかしそれよりも忘れられないのはお孃さんと顏を合せた途端に、何か常識を超越した、莫迦莫迦しいことをしはしないかと云ふ、妙に病的な不安である。昔、ジアン・リシュパンは通りがかりのサラア・ベルナアルへ傍若無人の接吻をした。日本人に生れた保吉はまさか接吻はしないかも知れないけれどもいきなり舌を出すとか、あかんべいをするとかはしさうである。彼は内心冷ひやしながら、捜すやうに捜さないやうにあたりの人人を見まはしてゐた。

すると忽ち彼の目は、悠悠とこちらへ歩いて來るお孃さんの姿を發見した。彼は宿命を迎へるやうに、まつ直に歩みをつづけて行つた。二人は見る見る接近した。十歩、五歩、三歩、――お孃さんは今目の前に立つた。保吉は頭を擡げたまま、まともにお孃さんの顏を眺めた。お孃さんもぢつと彼の顏へ落着いた目を注いでゐる。二人は顏を見合せたなり、何ごともなしに行き違は

うとした。

丁度その刹那だつた。彼は突然お孃さんの目に何か動搖に似たものを感じた。同時に又殆ど體中にお時儀をしたい衝動を感じた。けれどもそれは懸け値なしに、一瞬の間の出來事だつた。お孃さんははつとした彼を後ろにしづしづともう通り過ぎた。日の光りを透かした雲のやうに、或は花をつけた猫柳のやうに。……

二十分ばかりたつた後、保吉は汽車に搖られながら、グラスゴオのパイプを啣へてゐた。お孃さんは何も眉毛ばかり美しかつた訣ではない。目も亦涼しい黒瞳勝ちだつた。心もち上を向いた鼻も、……しかしこんなことを考へるのはやはり戀愛と云ふのであらうか？——彼はその問にどう答へたか、これも亦記憶には殘つてゐない。唯保吉の覺えてゐるのは、いつか彼を襲ひ出した、薄明るい憂鬱ばかりである。彼はパイプから立ち昇る一すぢの煙を見守つたまゝ、少時はこの憂鬱の中にお孃さんのことばかり考へつづけた。汽車は勿論さう云ふ間も半面に朝日の光りを浴びた山山の峽を走つてゐる。

「Tratata tratata tratata trararach」

（大正十二年九月）

あばばばば

保吉はずつと以前からこの店の主人を見知つてゐる。

ずつと以前から、——或はあの海軍の學校へ赴任した當日だつたかも知れない。彼はふとこの店へマッチを一つ買ひにはひつた。店には小さい飾り窓があり、窓の中には大將旗を掲げた軍艦三笠の模型のまはりにキュラソオの壜だのココアの罐だの干し葡萄の箱だのが竝べてある。が、軒先に「たばこ」と抜いた赤塗りの看板が出てゐるから、勿論マッチも賣らない筈はない。彼は店を覗きこみながら、「マッチを一つくれ給へ」と云つた。店先には高い勘定臺の後ろに若い眇の男が一人、つまらなさうに佇んでゐる。それが彼の顏を見ると、算盤を竪に構へたまま、にこりともせずに返事をした。

「これをお持ちなさい。生憎マッチを切らしましたから。」

お持ちなさいと云ふのは煙草に添へる一番小型のマッチである。

「貰ふのは氣の毒だ。ぢや朝日を一つくれ給へ。」
「何、かまひません。お持ちなさい。」
「いや、まあ朝日をくれ給へ。」
「お持ちなさい。これでよろしけりや、――入らぬ物をお買ひになるには及ばないです。」
眇の男の云ふことは親切づくなのには違ひない。が、その聲や顏色は如何にも無愛想を極めてゐる。素直に貰ふのは忌いましい。と云つて店を飛び出すのは多少相手に氣の毒である。保吉はやむを得ず勘定臺の上へ一錢の銅貨を一枚出した。
「ぢやそのマッチを二つくれ給へ。」
「二つでも三つでもお持ちなさい。ですが代は入りません。」
其處へ幸ひ戸口に下げた金線サイダアのポスタアの蔭から、小僧が一人首を出した。これは表情の朦朧とした、面皰だらけの小僧である。
「檀那、マッチは此處にありますぜ。」
保吉は内心凱歌を擧げながら、大型のマッチを一箱買つた。代は勿論一錢である。しかし彼は

この時ほど、マッチの美しさを感じたことはない。殊に三角の波の上に帆前船を浮べた商標は額縁へ入れても好い位である。彼はズボンのポケットの底へちやんとそのマッチを落した後、得得とこの店を後ろにした。……

保吉は爾來半年ばかり、學校へ通ふ往復に度たびこの店へ買ひ物に寄つた。もう今では目をつぶつても、はつきりこの店を思ひ出すことが出來る。天井の梁からぶら下つたのは鎌倉のハムに違ひない。欄間の色硝子は漆喰塗りの壁へ綠色の日の光を映してゐる。板張りの床に散らかつたのはコンデンスド・ミルクの廣告であらう。正面の柱には時計の下に大きい日暦がかかつてゐる。その外飾り窓の中の軍艦三笠も、金線サイダアのポスタアも、椅子も、電話も、自轉車も、スコツトランドのウイスキイも、アメリカの乾し葡萄も、マニラの葉卷も、エヂプトの紙卷も、燻製の鰊も、牛肉の大和煮も、殆ど見覺えのないものはない。殊に高い勘定臺の後ろに佛頂面を曝した主人は飽き飽きするほど見慣れてゐる。いや、見慣れてゐるばかりではない。彼は如何に咳をするか、如何に小僧に命令をするか、ココアを一罐買ふにしても、「Fry よりはこちらになさい。これはオランダの Droste です」などと、如何に客を惱ませるか、——主人の一擧一動さへ悉くと

うに心得てゐる。心得てゐるのは悪いことではない。しかし退屈なことは事實である。保吉は時時この店へ來ると、妙に教師をしてゐるのも久しいものだなと考へたりした。(その癖前にも云つた通り、彼の教師の生活はまだ一年にもならなかつたのである!)

けれども萬法を支配する變化はやはりこの店にも起らずにはすまない。保吉は或初夏の朝、この店へ煙草を買ひにはひつた。店の中はふだんの通りである。水を撒つた床の上にコンデンスド・ミルクの廣告の散らかつてゐることも變りはない。が、あの眇の主人の代りに勘定臺の後ろに坐つてゐるのは西洋髪に結つた女である。年はやつと十九位であらう。En face に見た顏は猫に似てゐる。日の光にずつと目を細めた、一筋もまじり毛のない白猫に似てゐる。保吉はおやと思ひながら、勘定臺の前へ歩み寄つた。

「朝日を二つくれ給へ。」

「はい。」

女の返事は羞かしさうである。のみならず出したのも朝日ではない。二つとも箱の裏側に旭日旗を描いた三笠である。保吉は思はず煙草から女の顏へ目を移した。同時に又女の鼻の下に長い

猫の髭を想像した。

「朝日を、――こりや朝日ぢやない。」

「あら、ほんたうに。――どうもすみません。」

猫――いや、女は赤い顔をした。この瞬間の感情の變化は正眞正銘に娘じみてゐる。それも當世のお孃さんではない。五六年來迹を絶つた硯友社趣味の娘である。保吉はばら錢を探りながら、「たけくらべ」、乙鳥口の風呂敷包み、燕子花、兩國、鏑木清方、――その外いろいろのものを思ひ出した。女は勿論この間も勘定臺の下を覗きこんだなり、一生懸命に朝日を搜してゐる。

すると奥から出て來たのは例の眇の主人である。主人は三笠を一目見ると、大抵容子を察したらしい。けふも不相變苦り切つたまま、勘定臺の下へ手を入れるが早いか、朝日を二つ保吉へ渡した。しかしその目にはかすかにもしろ、頰笑みらしいものが動いてゐる。

「マツチは?」

女の目も亦猫とすれば、喉を鳴らしさうに媚を帶びてゐる。主人は返事をする代りにちよいと唯點頭した。女は咄嗟に(!)勘定臺の上へ小型のマツチを一つ出した。それから――もう一度羞

しさうに笑つた。

「どうもすみません。」

すまないのは何も朝日を出さずに三笠を出したばかりではない。保吉は二人を見比べながら、彼自身もいつか微笑したのを感じた。

女はその後いつ來て見ても、勘定臺の後ろに坐つてゐる。尤も今では最初のやうに西洋髮などには結つてゐない。ちやんと赤い手絡をかけた、大きい圓髷に變つてゐる。しかし客に對する態度は不相變妙にうひうひしい。應對はつかへる。品物は間違へる。おまけに時時は赤い顏をする。――全然お上さんらしい面影は見えない。保吉はだんだんこの女に或好意を感じ出した。と云つても戀愛に落ちた訣ではない。唯如何にも人慣れない所に氣輕い懷しみを感じ出したのである。

或殘暑の嚴しい午後、保吉は學校の歸りがけにこの店へココアを買ひにはひつた。女はけふも勘定臺の後ろに講談倶樂部か何かを讀んでゐる。保吉は面皰の多い小僧に Van Houten はないかと尋ねた。

「唯今あるのはこればかりですが。」

小僧の渡したのは Fry である。保吉は店を見渡した。すると果物の罐詰めの間に西洋の尼さんの商標をつけた Droste も一罐まじつてゐる。

「あすこに Droste もあるぢやないか？」

小僧はちよいとそちらを見たきり、やはり漠然とした顔をしてゐる。

「ええ、あれもココアです。」

「ぢやこればかりぢやないぢやないか？」

「ええ、でもまあこれだけなんです。――お上さん、ココアはこれだけですね？」

保吉は女をふり返つた。心もち目を細めた女は美しい綠色の顏をしてゐる。尤もこれは不思議ではない。全然欄間の色硝子を透かした午後の日の光の作用である。女は雜誌を肘の下にしたまま、例の通りためらひ勝ちな返事をした。

「はあ、それだけだつたと思ふけれども。」

「實は、この Fry のココアの中には時時蟲が湧いてゐるんだが、――」

保吉は眞面目に話しかけた。しかし實際蟲の湧いたココアに出合つた覺えのある訣ではない。

唯何でもかう云ひさへすれば、Van Houten の有無は確かめさせる上に效能のあることを信じたからである。

「それもずゐぶん大きいやつがあるもんだからね。丁度この小指位ある、……」

女は聊か驚いたやうに勘定臺の上へ半身をのばした。

「そつちにもまだありやしないかい？　ああ、その後ろの戸棚の中にも。」

「赤いのばかりです。此處にあるのも。」

「ぢやこつちには？」

女は吾妻下駄を突かけると、心配さうに店へ搜しに來た。ぼんやりした小僧もやむを得ず罐詰めの間などを覗いて見てゐる。保吉は煙草へ火をつけた後、彼等へ拍車を加へるやうに考へ考へしやべりつづけた。

「蟲の湧いたやつを飮ませると、子供などは腹を痛めるしね。（彼は或避暑地の貸し間にたつた一人暮らしてゐる）。いや、子供ばかりぢやない。家内も一度ひどい目に遇つたことがある。（勿論妻などを持つたことはない）。何しろ用心に越したことはないんだから。……」

保吉はふと口をとざした。女は前掛けに手を拭きながら、當惑さうに彼を眺めてゐる。

「どうも見えないやうでございますが。」

女の目はおどおどしてゐる。口もとも無理に微笑してゐる。殊に滑稽に見えたのは鼻も亦つぶつぶ汗をかいてゐる。保吉は女と目を合せた刹那に突然惡魔の乘り移るのを感じた。この女は云はば含羞草である。一定の刺戟を與へさへすれば、必ず彼の思ふ通りの反應を呈するのに違ひない。しかし刺戟は簡單である。ぢつと顏を見つめても好い。或は又指先にさはつても好い。女はきつとその刺戟に保吉の暗示を受けとるであらう。受けとつた暗示をどうするかは勿論未知の問題である。しかし幸ひに反撥しなければ、――いや、猫は飼つても好い。が、猫に似た女の爲に魂を惡魔に賣り渡すのはどうも少し考へものである。保吉は吸ひかけた煙草と一しよに、乘り移つた惡魔を拋り出した。不意を食つた惡魔はとんぼ返る拍子に小僧の鼻の穴へ飛びこんだのであらう。小僧は首を縮めるが早いか、つづけさまに大きい嚏をした。

「ぢや仕かたがない。Droste を一つくれ給へ。」

保吉は苦笑を浮かべたまま、ポケツトのばら錢を探り出した。

その後も彼はこの女と度たび同じやうな交渉を重ねた。が、悪魔に乗り移られた記憶は仕合せと外には持つてゐない。いや、一度などはふとしたはずみに天使の來たのを感じたことさへある。

或秋も深まつた午後、保吉は煙草を買つた次手にこの店の電話を借用した。主人は日の當つた店の前に空氣ポンプを動かしながら、自轉車の修繕に取りかかつてゐる。小僧もけふは使ひに出たらしい。女は不相變勘定臺の前に受取りか何か整理してゐる。かう云ふ店の光景はいつ見ても悪いものではない。何處か阿蘭陀の風俗畫じみた、もの靜かな幸福に溢れてゐる。保吉は女のすぐ後ろに受話器を耳へ當てたまま、彼の愛藏する寫眞版の De Hooghe の一枚を思ひ出した。

しかし電話はいつになつても、容易に先方へ通じないらしい。のみならず交換手もどうしたのか、一二度「何番へ？」を繰り返した後は全然沈默を守つてゐる。保吉は何度もベルを鳴らした。が、受話器は彼の耳へぶつぶつ云ふ音を傳へるだけである。かうなればもう De Hooghe などを思ひ出してゐる場合ではない。保吉はまづポケツトから Spargo の「社會主義早わかり」を出した。幸ひ電話には見臺のやうに蓋のなぞへになつた箱もついてゐる。彼はその箱に本を載せると、目は活字を拾ひながら、手は出來るだけゆつくりと強情にベルを鳴らし出した。これは横着な交換

手に對する彼の戰法の一つである。いつか銀座尾張町の自働電話へはひつた時にはやはりベルを鳴らし鳴らし、とうとう「佐橋甚五郎」を完全に一篇讀んでしまつた。けふも交換手の出ない中は斷じてベルの手をやめないつもりである。

さんざん交換手と喧嘩した擧句、やつと電話をかけ終つたのは二十分ばかりの後である。保吉は禮を云ふ爲に後ろの勘定臺をふり返つた。すると其處には誰もゐない。女はいつか店の戸口に何か主人と話してゐる。主人はまだ秋の日向に自轉車の修繕をつづけてゐるらしい。保吉はそちらへ歩き出さうとした。が、思はず足を止めた。女は彼に背を向けたまま、こんなことを主人に尋ねてゐる。

「さつきね、あなた、ゼンマイ珈琲とかつてお客があつたんですがね、ゼンマイ珈琲つてあるんですか？」

「ゼンマイ珈琲？」

主人の聲は細君にも客に對するやうな無愛想である。

「玄米珈琲の聞き違へだらう。」

「ゲンマイ珈琲？　ああ、玄米から拵へた珈琲。――何だか可笑しいと思つてゐた。ゼンマイつて八百屋にあるものでせう？」

保吉は二人の後ろ姿を眺めた。同時に又天使の來てゐるのを感じた。天使はハムのぶら下つた天井のあたりを飛揚したまま、何にも知らぬ二人の上へ祝福を授けてゐるのに違ひない。尤も燻製の鯡の匂に顏だけはちよいとしかめてゐる。――保吉は突然燻製の鯡を買ひ忘れたことを思ひ出した。鯡は彼の鼻の先に淺ましい形骸を重ねてゐる。

「おい、君、この鯡をくれ給へ。」

女は忽ち振り返つた。振り返つたのは丁度ゼンマイの八百屋にあることを察した時である。女は勿論その話を聞かれたと思つたのに違ひない。猫に似た顏は目を擧げたと思ふと見る見る羞かしさうに染まり出した。保吉は前にも云ふ通り、女が顏を赤めるのには今までにも度たび出合つてゐる。けれどもまだこの時ほど、まつ赤になつたのを見たことはない。

「は、鯡を？」

女は小聲に問ひ返した。

「ええ、鰊を。」

保吉も前後にこの時だけは甚だ殊勝に返事をした。

かう云ふ出來事のあつた後、二月ばかりたつた頃であらう、確か翌年の正月のことである。女は何處へどうしたのか、ぱつたり姿を隱してしまつた。それも三日や五日ではない。いつ買ひ物にはひつて見ても、古いストオヴを据ゑた店には例の眇の主人が一人、退屈さうに坐つてゐるばかりである。保吉はちよいともの足らなさを感じた。又女の見えない理由にいろいろ想像を加へなどもした。が、わざわざ無愛想な主人に「お上さんは？」と尋ねる心もちにもならない。又實際主人は勿論あのはにかみ屋の女にも、「何何をくれ給へ」と云ふ外には挨拶さへ交したことはなかつたのである。

その内に冬ざれた路の上にも、たまに一日か二日づつ暖い日かげがさすやうになつた。けれども女は顏を見せない。店はやはり主人のまはりに荒涼とした空氣を漂はせてゐる。保吉はいつか少しづつ女のゐないことを忘れ出した。……………

すると二月の末の或夜、學校の英吉利語講演會をやつと切り上げた保吉は生暖い南風に吹かれ

ながら、格別買ひ物をする氣もなしにふとこの店の前を通りかかつた。店には電燈のともつた中に西洋酒の罎や罐詰めなどがきらびやかに竝んでゐる。これは勿論不思議ではない。しかしふと氣がついて見ると、店の前には女が一人、兩手に赤子を抱へたまま、多愛もないことをしやべつてゐる。保吉は店から往來へさした、幅の廣い電燈の光りに忽ちその若い母の誰であるかを發見した。

「あばばばばばば、ばあ！」

女は店の前を歩き歩き、面白さうに赤子をあやしてゐる。それが赤子を揺り上げる拍子に偶然保吉と目を合はした。保吉は咄嗟に女の目の逡巡する容子を想像した。それから夜目にも女の顔の赤くなる容子を想像した。しかし女は澄ましてゐる。目も靜かに頰笑んでゐれば、顔も嬌羞などは浮べてゐない。のみならず意外な一瞬間の後、揺り上げた赤子へ目を落すと、人前も羞ぢずに繰り返した。

「あばばばばばば、ばあ！」

保吉は女を後ろにしながら、我知らずにやにや笑ひ出した。女はもう「あの女」ではない。度胸

の好い母の一人である。一たび子の爲になつたが最後、古來如何なる惡事をも犯した、恐ろしい「母」の一人である。この變化は勿論女の爲にはあらゆる祝福を與へても好い。しかし娘じみた細君の代りに圖圖しい母を見出したのは、……保吉は歩みつづけたまま、茫然と家家の空を見上げた。空には南風の渡る中に圓い春の月が一つ、白じろとかすかにかかつてゐる。………

（大正十二年十一月）

一塊の土

お住の倅に死別れたのは茶摘みのはじまる時候だつた。倅の仁太郎は足かけ八年、腰ぬけ同様に床に就いてゐた。かう云ふ倅の死んだことは「後生よし」と云はれるお住にも、悲しいとばかりは限らなかつた。お住は仁太郎の棺の前へ一本線香を手向けた時には、兎に角朝比奈の切通しか何かをやつと通り抜けたやうな氣がしてゐた。

仁太郎の葬式をすました後、まづ問題になつたものは嫁のお民の身の上だつた。お民には男の子が一人あつた。その上寢てゐる仁太郎の代りに野良仕事も大抵は引受けてゐた。それを今出すとすれば、子供の世話に困るのは勿論、暮しさへ到底立ちさうにはなかつた。かたがたお住は四十九日でもすんだら、お民に壻を當がつた上、倅のゐた時と同じやうに働いて貰はうと思つてゐた。壻には仁太郎の從弟に當る與吉を貰へばとも思つてゐた。

それだけに丁度初七日の翌朝、お民の片づけものをし出した時には、お住の驚いたのも格別だ

つた。お住はその時孫の廣次を奥部屋の緣側に遊ばせてゐた。遊ばせる玩具は學校のを盜んだ花盛りの櫻の一枝だつた。

「のう、お民、おらあけふまで默つてゐたのは惡いけんど、お前はよう、この子とおらとを置いたまんま、はえ、出て行つてしまふのかよう？」

お住は詰ると云ふよりは訴へるやうに聲をかけた。が、お民は見向きもせずに、「何を云ふぢやあ、おばあさん」と笑ひ聲を出したばかりだつた。それでもお住はどの位ほつとしたことだか知れなかつた。

「さうずらのう。まさかそんなことをしやあしめえのう。……」

お住はなほくどくどと愚痴まじりの歎願を繰り返した。同時に又彼女自身の言葉にだんだん感傷を催し出した。しまひには涙も幾すぢか皺だらけの頰を傳はりはじめた。

「はいさね。わしもお前さんさへ好けりや、いつまでもこの家にゐる氣だわね。——かう云ふ子供もあるだものう、すき好んで外へ行くもんぢやよう。」

お民もいつか涙ぐみながら、廣次を膝の上へ抱き上げたりした。廣次は妙に羞しさうに、奧部

屋の古疊へ投げ出された櫻の枝ばかり氣にしてゐた。………

お民は仁太郎の在世中と少しも變らずに働きつづけた。しかし壻をとる話は思つたよりも容易に片づかなかつた。お民は全然この話に何の興味もないらしかつた。お住は勿論機會さへあれば、そつとお民の氣を引いて見たり、あらはに相談を持ちかけたりした。けれどもお民はその度ごとに、「はいさね、いづれ來年にでもなつたら」と好い加減な返事をするばかりだつた。これはお住には心配でもあれば、嬉しくもあるのに違ひなかつた。お住は世間に氣を兼ねながら、兎に角嫁の云ふなり次第に年の變るのでも待つことにした。

けれどもお民は翌年になつても、やはり野良へ出かける外には何の考へもないらしかつた。お住はもう一度去年よりは一層願にかけたやうに壻をとる話を勸め出した。それは一つには親戚には叱られ、世間にはかげ口をきかれるのを苦に病んでゐたせゐもあるのだつた。

「だがのう、お民、お前今の若さでさ、男なしにやゐられるもんぢやなえよ。」

「ゐられなえたつて、仕かたがなえぢや。この中へ他人でも入れて見なせえ。廣も可哀さうだし、お前さんも氣兼だし、第一わしの氣骨の折れることせつたら、ちつとやそつとぢやなからうわね。」

「だからよ、與吉を貰ふことにしなよ。あいつもお前この頃ぢや、ぱつたり博奕を打たなえと云ふぢやあ。」

「そりやおばあさんには身内でもよ、わしにはやつぱし他人だわね。何、わしさへ我慢すりや……」

「でもよ、その我慢がさあ、一年や二年ぢやなえからよう。」

「好いわね。廣の爲だものう。わしが今苦しんどきや、此處の家の田地は二つにならずに、そつくり廣の手へ渡るだものう。」

「だがのう、お民、(お仕はいつも此處へ來ると、眞面目に聲を低めるのだつた。)何しろはたの口がうるせえからのう。お前今おらの前で云つたことはそつくり他人にも聞かせてくんなよ。……」

から云ふ問答は二人の間に何度出たことだかわからなかつた。しかしお民の決心はその爲に强

まることはあつても、弱まることはないらしかつた。實際又お民は男手も借りずに、芋を植ゑたり麥を刈つたり、以前よりも仕事に精を出してゐた。のみならず夏には牝牛を飼ひ、雨の日でも草刈りに出かけたりした。この烈しい働きぶりは今更他人を入れることに對する、それ自身力強い抗辯だつた。お住もとうとうしまひには壻を取る話を斷念した。尤も斷念することだけは必しも彼女には不愉快ではなかつた。

お民は女の手一つに一家の暮しを支へつづけた。それには勿論「廣の爲」と云ふ一念もあるのに違ひなかつた。しかし又一つには彼女の心に深い根ざしを下ろしてゐた遺傳の力もあるらしかつた。お民は不毛の山國からこの界隈へ移住して來た所謂「渡りもの」の娘だつた。「お前さんとこのお民さんは顏に似合はなえ力があるねえ。この間も陸稻の大束を四把づつも背負つて通つたちやなえかね。」――お住は隣の婆さんなどからそんなことを聞かされるのも度たびだつた。

お住は又お民に對する感謝を彼女の仕事に表さうとした。孫を遊ばせたり、牛の世話をしたり、

飯を炊いたり、洗濯をしたり、隣へ水を汲みに行つたり、——家の中の仕事も少くはなかつた。しかしお住は腰を曲げたまま、何かと樂しさうに働いてゐた。

　或秋も暮れかかつた夜、お民は松葉束を抱へながら、やつと家へ歸つて來た。お住は廣次をおぶつたなり、丁度狹苦しい土間の隅に据風呂の下を焚きつけてゐた。

「寒かつつらのう。晩かつたぢや？」

「けふはちつといつもよりや、餘計な仕事をしてゐたぢやあ。」

　お民は松葉束を流しもとへ投げ出し、それから泥だらけの草鞋も脱がずに、大きい爐側へ上りこんだ。爐の中には櫟の根つこが一つ、赤あかと炎を動かしてゐた。お住は直に立ち上らうとした。が、廣次をおぶつた腰は風呂桶の縁につかまらない限り、容易に上げることも出來ないのだつた。

「直と風呂へはえんなよ。」

「風呂よりもわしは腹が減つてるよ。どら、さきに諸でも食ふべえ。——煮てあるらあねえ？おばあさん。」

お仕はよちよち流し元へ行き、惣菜に煮た薩摩諸を鍋ごと爐側へぶら下げて來た。
「とうに煮て待つてたせえにの、はえ、冷たくなつてるよう。」
二人は諸を竹串へ突き刺し、一しよに爐の火へかざし出した。
「廣はよく眠つてるぢや。床の中へ轉がして置きや好いに。」
「なあん、けふは莫迦寒いから、下ぢやとても寢つかなえよう。」
お民はかう云ふ間にも煙の出る諸を頰張りはじめた。それは一日の勞働に疲れた農夫だけの知つてゐる食ひかただつた。諸は竹串を抜かれる側から、一口にお民に頰張られて行つた。お仕は小さい鼾を立てる廣次の重みを感じながら、せつせと諸を炙りつづけた。
「何しろお前のやうに働くんぢや、人一倍腹も減るらなあ。」
お仕は時時嫁の顏へ感歎に滿ちた目を注いだ。しかしお民は無言のまま、煤けた榾火の光りの中にがつがつ薩摩諸を頰張つてゐた。

お民は愈骨身を惜しまず、男の仕事を奪ひつづけた。時には夜もカンテラの光りに菜などをうろ抜いて廻ることもあつた。お住はかう云ふ男まさりの嫁にいつも敬意を感じてゐた。いや、敬意と云ふよりも寧ろ畏怖を感じてゐた。お民は野や山の仕事の外は何でもお住に押しつけ切りだつた。この頃ではもう彼女自身の腰巻さへ滅多に洗つたことはなかつた。お住はそれでも苦情を云はずに、曲つた腰を伸ばし伸ばし、一生懸命に働いてゐた。のみならず隣の婆さんにでも遇へば、「何しろお民がああ云ふ風だからね、はえ、わたしはいつ死んでも、家に苦勞は入らなえよう」と、眞顔に嫁のことを褒めちぎつてゐた。

しかしお民の「稼ぎ病」は容易に滿足しないらしかつた。お民は又一つ年を越すと、今度は川向うの桑畑へも手を擴げると云ひはじめた。何でもお民の言葉によれば、あの五段歩に近い畑を十圓ばかりの小作に出してゐるのはどう考へても莫迦莫迦しい。それよりもあすこに桑を作り、養蠶を片手間にやるとすれば、繭相場に變動の起らない限り、きつと年に百五十圓は手取りに出來るとか云ふことだつた。けれども金は欲しいにもしろ、この上忙しい思ひをすることは到底お住には堪へられなかつた。殊に手間のかかる養蠶などは出來ない相談も度を越してゐた。お住はと

うとう愚痴まじりにかうお民に反抗した。

「好いかの、お民。おらだつて逃げる訣ぢやなえ。逃げる訣ぢやなえけども、男手はなえし、泣きつ兒はあるし、今のまんまでせえ荷が過ぎてらあの。それをお前飛んでもなえ、何で養蠶が出來るもんぢや？　ちつとはお前おらのことも考へて見てくんなよう。」

お民も姑に泣かれて見ると、それでもとは云はれた義理ではなかつた。しかし養蠶は斷念したものの、桑畑を作ることだけは强情に我意を張り通した。「好いわね。どうせ畑へはわし一人出りやすむんだから。」――お民は不服さうにお住を見ながら、こんな當つこすりも呟いたりした。

お住は又この時以來、壻を取る話を考へ出した。以前にも暮しを心配したり、世間を兼ねたりした爲に、壻をと思つたことは度たびあつた。しかし今度は片時でも留守居役の苦しみを逃れたさに、壻をと思ひはじめたのだつた。それだけに以前に比べれば、今度の壻を取りたさはどの位痛切だか知れなかつた。

丁度裏の蜜柑畠の一ぱいに花をつける頃、ランプの前に陣取つたお住は大きい夜なべの眼鏡越しに、そろそろこの話を持ち出して見た。しかし爐側に胡坐をかいたお民は鹽豌豆を嚙みながら、

「又皆話かね、わしは知らなえよう」と相手になる氣色も見せなかつた。以前のお住ならばこれだけでも、大抵あきらめてしまふ所だつた。が、今度は今度だけに、お住もねちねち口說き出した。
「でもの、さうばかり云つちやゐられなえぢや。あしたの宮下の葬式にやの、丁度今度はおら等の家もお墓の穴掘り役に當つてるがの。かう云ふ時に男手のなえのは、……」
「好いわね。掘り役にはわしが出るわね。」
「まさか、お前、女の癖に、――」
お住はわざと笑はうとした。が、お民の顏を見ると、うつかり笑ふのも考へものだつた。
「おばあさん、お前さん隱居でもしたくなつたんぢやあるまえね？」
お民は胡坐の膝を抱いたなり、冷かにかう釘を刺した。突然急所を衝かれたお住は思はず大きい眼鏡を外した。しかし何の爲に外したかは彼女自身にもわからなかつた。
「なあん、お前、そんなことを！」
「お前さん廣のお父さんの死んだ時に、自分でも云つたことを忘れやしまえね？　此處の家の田地を二つにしちや、御先祖樣にもすまなえつて、……」

「ああさ。そりやさう云つたぢや。でもの、まあ考へて見ば。時世時節と云ふこともあるら。こりやどうにも仕かたのなえこんだの。……」

お住は一生懸命に男手の入ることを辯じつづけた。が、兎に角お住の意見は彼女自身の耳にさへ尤もらしい響を傳へなかつた。それは第一に彼女の本音、――つまり彼女の樂になりたさを持ち出すことの出來ない爲だつた。お民は又其處を見つけ所に、不相變鹽からい豌豆を嚙み嚙み、ぴしぴし姑をきめつけにかかつた。のみならずこれにはお住の知らない天性の口達者も手傳つてゐた。

「お前さんはそれでも好からうさ。先に死んでつてしまふだから。――だがね、おばあさん、わしの身になりや、さう云つてふて腐つちやゐられなえぢやあ。わしだつて何も晴れや自慢で、後家を通してる訣ぢやなえよ。骨節の痛んで寢られなえ晩なんか、莫迦意地を張つたつて仕かたがなえと、しみじみ思ふこともなえぢやなえ。そりやなえぢやなえけんどね。これもみんな家の爲だ、廣の爲だと考へ直して、やつぱし泣き泣きやつてるだあよ。……」

お住は唯茫然と嫁の顏ばかり眺めてゐた。そのうちにいつか彼女の心ははつきりと或事實を捉

へ出した。それは如何にあがいて見ても、到底目をつぶるまでは樂は出來ないと云ふ事實だつた。お仕は嫁のしやべりやんだ後、もう一度大きい眼鏡をかけた。それから半ば獨語のやうにかう話の結末をつけた。

「だがの、お民、中中お前世の中のことは理窟ばつかしぢや行かなえせえに、とつくりお前も考へて見てくんなよ。おらはもう何とも云はなえからの。」

二十分の後、誰か村の若衆が一人、中音に唄をうたひながら、靜にこの家の前を通りすぎた。

「若い叔母さんけふは草刈りか。草よ靡けよ。鎌切れろ。」――唄の聲の遠のいた時お仕はもう一度眼鏡越しに、ちらりとお民の顏を眺めた。が、お民はランプの向うに長ながと足を伸ばしたまま、生欠伸をしてゐるばかりだつた。

「どら、寢べえ。朝が早えに。」

お民はやつとかう云つたと思ふと、鹽豌豆を一摑みさらつた後、大儀さうに爐側を立ち上つた。

……………

お住はその後三四年の間、默默と苦しみに堪へつづけた。それは云はばはやり切つた馬と同じ軛を背負された老馬の經驗する苦しみだつた。お民は不相變家を外にせつせと野良仕事にかかつてゐた。お住もはた目には不相變小まめに留守居役を勤めてゐた。しかし見えない鞭の影は絶えず彼女を脅やかしてゐた。或時は風呂を焚かなかつた爲に、或時は籾を干し忘れた爲に、或時は牛の放れた爲に、お住はいつも氣の强いお民に當てこすりや小言を云はれ勝ちだつた。が、彼女は言葉も返さず、ぢつと苦しみに堪へつづけた。それは一つには忍從に慣れた精神を持つてゐたからだつた。又二つには孫の廣次が母よりも寧ろ祖母の彼女に餘計なついてゐたからだつた。

お住は實際はた目には殆ど以前に變らなかつた。もし少しでも變つたとすれば、それは唯以前のやうに嫁のことを褒めないばかりだつた。けれどもかう云ふ些細の變化は格別人目を引かなかつた。少くとも隣のばあさんなどにはいつも「後生よし」のお住だつた。

或夏の日の照りつけた眞晝、お住は納屋の前を覆つた葡萄棚の葉の陰に隣のばあさんと話して

ゐた。あたりは牛部屋の蠅の聲の外に何の物音も聞えなかつた。隣のばあさんは話をしながら、短い卷煙草を吸つたりした。それは倅の吸ひ殼を丹念に集めて來たものだつた。

「お民さんはえ？　ふうん、干し草刈りにの？　若えのにまあ、何でもするのう。」

「なあん、女にや外へ出るよか、内の仕事が一番好いだよう。」

「いいや、畠仕事の好きなのは何よりだよう。わしの嫁なんか祝言から、はえ、これもう七年が間、畠へはおろか草むしりせえ、唯の一日も出たことはなえわね。子供の物の洗濯だあの、自分の物の仕直しだあのつて、毎日永の日を暮らしてらあね。」

「そりやその方が好いだよう。子供のなりも見好くしたり、自分も小綺麗になつたりするはやつぱし浮世の飾りだよう。」

「でもさあ、今の若え者は一體に野良仕事が嫌ひだよう。――おや、何ずら、今の音は？」

「今の音はえ？　ありやお前さん、牛の屁だわね。」

「牛の屁かえ？　ふんとうにまあ。――尤も炎天に甲羅を干し干し、粟の草取りをするのなんか、若え時にや辛いからね。」

二人の老婆はかう云ふ風に大抵平和に話し合ふのだつた。

仁太郎の死後八年餘り、お民は女の手一つに一家の暮らしを支へつづけた。同時に又いつかお民の名は一村の外へも弘がり出した。お民はもう「稼ぎ病」に夜も日も明けない若後家ではなかつた。況や村の若衆などの「若い小母さん」ではなほ更なかつた。その代りに嫁の手本だつた。今の世の貞女の鑑だつた。「澤向うのお民さんを見ろ。」――さう云ふ言葉は小言と一しよに誰の口からも出る位だつた。お住は彼女の苦しみを隣の婆さんにさへ訴へなかつた。訴へたいとも亦思はなかつた。しかし彼女の心の底に、はつきり意識しなかつたにしろ、何處か天道を當にしてゐた。その頼みもとうとう水の泡になつた。今はもう孫の廣次より外に頼みになるものは一つもなかつた。お住は十二三になつた孫へ必死の愛を傾けかけた。けれどもこの最後の頼みも途絶えさうになることは度たびだつた。

或秋晴のつづいた午後、本包みを抱へた孫の廣次は、あたふた學校から歸つて來た。お住は丁

度納屋の前に器用に庖丁を動かしながら、蜂屋柿を吊し柿に拵へてゐた。廣次は粟の籾を干した筵を身輕に一枚飛び越えたと思ふと、ちやんと兩足を揃へたまま、ちよつと祖母に擧手の禮をした。それから何の次穗もなしに、から眞面目に尋ねかけた。

「ねえ、おばあさん。おらのお母さんはうんと偉い人かい？」

「なぜや？」

お住は庖丁の手を休めるなり、孫の顏を見つめずにはゐられなかつた。

「だつて先生がの、修身の時間にさう云つたぜ。廣次のお母さんはこの近在に二人とない偉い人だつて。」

「先生がの？」

「うん、先生が。譃だのう？」

お住はまづ狼狽した。孫さへ學校の先生などにそんな大譃を敎へられてゐる、——實際お住にはこの位意外な出來事はないのだつた。が、一瞬の狼狽の後、發作的の怒に襲はれたお住は別人のやうにお民を罵り出した。

「おお、譃だとも、譃の皮だわ。お前のお母さんと云ふ人はな、外でばつか働くせえに、人前は偉く好いけんどな、心はうんと惡な人だわ。おばあさんばつか追ひ廻してな、氣ばつか無暗と强くつてな、……」

廣次は唯驚いたやうに、色を變へた祖母を眺めてゐた。そのうちにお住は反動の來たのか、忽ち又涙をこぼしはじめた。

「だからな、このおばあさんはな、われ一人を賴みに生きてゐるだぞ。わりやそれを忘れるぢやなえぞ。われもやがて十七になつたら、すぐに嫁を貰つてな、おばあさんに息をさせるやうにするんだぞ。お母さんは徵兵がすむまぢやあなんか、氣の長えことを云つてるがな、どうしてどうして待てるもんか！　好いか？　わりやおばあさんにお父さんと二人分孝行するだぞ。さうすりやおばあさんも惡いやうにやしなえ。何でもわれにくれてやるからな。……」

「この柿も熟んだら、おらにくれる？」

廣次はもうもの欲しさうに籠の中の柿をいぢつてゐた。

「おおさえ。くれなえで。わりや年は行かなえでも、何でもよくわかつてる。いつまでもその氣

をなくすぢやなえぞ」

お住は涙を流し流し、吃逆をするやうに笑ひ出した。……

から云ふ小事件のあつた翌晩、お住はとうとうちよつとしたことから、お民とも烈しいいさかひをした。ちよつとしたこととはお民の食ふ藷をお住の食つたとか云ふことだけだつた。しかしだんだん云ひ募るうちに、お民は冷笑を浮べながら、「お前さん働くのが厭になつたら、死ぬより外はなえよ」と云つた。するとお住は日頃に似合はず、氣違ひのやうに吼り出した。丁度この時孫の廣次は祖母の膝を枕にしたまま、とうにすやすや寐入つてゐた。が、お住はその孫さへ「廣、かう、起きろ」と搖すり起した上、いつまでもかう罵りつづけた。

「廣、かう、起きろ。廣、かう、起きて、お母さんの云ひ草を聞いてくよう。お母さんはおらに死ねつて云つてゐるぞ。な、よく聞け。そりやお母さんの代になつて、錢は少しは殖えつらけんど、一町三段の畠はな、ありやみんなおぢいさんとおばあさんとの開墾したもんだぞ。そりようどうだ？　お母さんは樂がしたけりや死ねつて云つてるぞ。――お民、おらは死ぬべえよう。何の死ぬことが怖いもんぢや。いいや、手前の指圖なんか受けなえ。おらは死ぬだ。どうあつても

死ぬだ。死んで手前にとつ着いてやるだ。……」

お住は大聲に罵り罵り、泣き出した孫と抱き合つてゐた。が、お民は不相變ごろりと爐側へ寢ころんだなり、そら耳を走らせてゐるばかりだつた。

けれどもお住は死ななかつた。その代りに翌年の土用明け前、丈夫自慢のお民は腸チブスに罹り、發病後八日目に死んでしまつた。尤も當時腸チブス患者はこの小さい一村の中にも何人出たかわからなかつた。しかもお民は發病する前に、やはりチブスの爲に倒れた鍛冶屋の葬式の穴掘り役に行つた。鍛冶屋にはまだ葬式の日にやつと避病院へ送られる弟子の小僧も殘つてゐた。「あの時にきつと移つたずら」――お住は醫者の歸つた後、顏をまつ赤にした患者のお民にから非難を仄かせたりした。

お民の葬式の日は雨降りだつた。しかし村のものは村長を始め、一人も殘らず會葬した。會葬したものは又一人も殘らず若死したお民を惜しんだり、大事の稼ぎ人を失つた廣次やお住を憐ん

だりした。殊に村の總代役は郡でも近近にお民の勤勞を表彰する筈だつたと云ふことを話した。お住は唯さう云ふ言葉に頭を下げるより外はなかつた。「まあ運だとあきらめるだよ。わし等もお民さんの表彰に就いちや、去年から郡役所へ願ひ狀を出すしさ、村長さんやわしは汽車賃を使つて五度も郡長さんに會ひに行くしさ、やさしい骨を折つたことぢやなえ。だがの、わし等もあきらめるだから、お前さんも一つあきらめるだ。」――人の好い禿げ頭の總代役はかう常談などもつけ加へた。それを又若い小學教員は不快さうにじろじろ眺めたりした。

お民の葬式をすました夜、お住は佛壇のある奧部屋の隅に廣次と一つ蚊帳へはひつてゐた。ふだんは勿論二人ともまつ暗にした中に眠るのだつた。が、今夜は佛壇にはまだ燈明もともつてゐた。その上妙な消毒藥の匂も古疊にしみこんでゐるらしかつた。お住はそんなこんなのせゐか、いつまでも容易に寢つかれなかつた。お民の死は確かに彼女の上へ大きい幸福を齎してゐた。彼女はもう働かずとも好かつた。小言を云はれる心配もなかつた。其處へ貯金は三千圓もあり、畠は一町三段ばかりあつた。これからは毎日孫と一しよに米の飯を食ふのも勝手だつた。日頃好物の鹽鱒を俵で取るのも亦勝手だつた。お住はまだ一生のうちにこの位ほつとした覺えはなかつた。

この位ほつとした？――しかし記憶ははつきりと九年前の或夜を呼び起した。あの夜も一息ついたことを思へば、殆ど今夜に變らなかつた。あれは現在血をわけた倅の葬式のすんだ夜だつた。今夜は？――今夜も一人の孫を産んだ嫁の葬式のすんだばかりだつた。

お住は思はず目を開いた。孫は彼女のすぐ隣に多愛のない寢顏を仰向けてゐた。お住はその寢顏を見てゐるうちにだんだんかう云ふ彼女自身を情ない人間に感じ出した。同時に又彼女と惡緣を結んだ倅の仁太郎や嫁のお民も情ない人間に感じ出した。その變化は見る見る九年間の憎しみや怒りを押し流した。いや、彼女を慰めてゐた將來の幸福さへ押し流した。彼等親子は三人とも悉く情ない人間だつた。が、その中にたつた一人生恥を曝した彼女自身は最も情ない人間だつた。「お民、お前なぜ死んでしまつただ？」――お住は我知らず口のうちにかう新佛へ話しかけた。するど急にとめどもなしにぽたぽた淚がこぼれはじめた。………

お住は四時を聞いた後、やつと疲勞した眠りにはひつた。しかしもうその時にはこの一家の茅屋根の空も冷やかに曉を迎へ出してゐた。………

（大正十二年十二月）

不思議な島

僕は籐の長椅子にぼんやり横になつてゐる。目の前に欄干のあるところをみると、どうも船の甲板らしい。欄干の向うには灰色の浪に飛び魚か何か閃いてゐる。が、何の爲に船へ乘つたか、不思議にもそれは覺えてゐない。つれがあるのか、一人なのか、その邊も同じやうに曖昧である。曖昧と云へば浪の向うも靄のおりてゐるせゐか、甚だ曖昧を極めてゐる。僕は長椅子に寢ころんだまま、その朦朧と煙つた奧に何があるのか見たいと思つた。すると念力の通じたやうに、見る見る島の影が浮び出した。中央に一座の山の聳えた、圓錐に近い島の影である。しかし大體の輪郭の外は生憎何もはつきりとは見えない。僕は前に味をしめてゐたから、もう一度見たいと念じて見た。けれども薄い島の影は依然として薄いばかりである。念力も今度は無效だつたらしい。

この時僕は右隣に忽ち誰かの笑ふのを聞いた。「はははははは、駄目ですね。今度は念力もきかないやうですね。はははははは。」

右隣の籐椅子に坐つてゐるのは英吉利人らしい老人である。顔は皺こそ多いものの、まづ好男子と評しても好い。しかし服裝はホオガスの畫にみた十八世紀の流行である。Cocked hat と云ふのであらう。銀の縁のある帽子をかぶり、刺繍のある胴衣を着、膝ぎりしかないズボンをはいてゐる。おまけに肩へ垂れてゐるのは天然自然の髮の毛ではない。何か妙な粉をふりかけた麻色の縮れ毛の鬘である。僕は呆氣にとられながら、返事をすることも忘れてゐた。

「わたしの望遠鏡をお使ひなさい。これを覗けばはつきり見えます。」

老人は人の惡い笑ひ顔をしたまゝ、僕の手に古い望遠鏡を渡した。いつか何處かの博物館に並んでゐたやうな望遠鏡である。

「オオ、サンクス。」

僕は思はず英吉利語を使つた。しかし老人は無頓着に島の影を指さしながら、巧みに日本語をしやべりつづけた。その指さした袖の先にも泡のやうにレエスがはみ出してゐる。

「あの島はサッサンラップと云ふのですがね。綴りですか？　綴りはSUSSANRAPです。一見の價値のある島ですよ。この船も五六日は碇泊しますから、是非見物にお出かけなさい。大

學もあれば伽藍もあります。殊に市の立つ日は壯觀ですよ。何しろ近海の島島から無數の人人が集まりますからね。……」

僕は老人のしやべつてゐる間に望遠鏡を覗いて見た。丁度鏡面に映つてゐるのはこの島の海岸の市街であらう。小綺麗な家家の竝んだのが見える。並木の梢に風のあるのが見える。伽藍の塔の聳えたのが見える。靄などは少しもかかつてゐない。何も彼も悉くはつきり見える。僕は大いに感心しながら、市街の上へ望遠鏡を移した。と同時に僕の口はあつと云ふ聲を洩らしさうになつた。

鏡面には雲一つ見えない空に不二に似た山が聳えてゐる。それは不思議でも何でもない。けれどもその山は見上げる限り、一面に野菜に蔽はれてゐる。玉菜、赤茄子、葱、玉葱、大根、蕪、人參、牛蒡、南瓜、冬瓜、胡瓜、馬鈴薯、蓮根、慈姑、生姜、三つ葉――あらゆる野菜に蔽はれてゐる。蔽はれてゐる？　蔽は――さうではない。これは野菜を積み上げたのである。驚くべき野菜のピラミッドである。

「あれは――あれはどうしたのです？」

僕は望遠鏡を手にしたまま、右隣の老人をふり返つた。が、老人はもう其處にゐない。唯篠の長椅子の上に新聞が一枚抛り出してある。僕はあつと思つた拍子に腦貧血か何か起したのであらう。いつか又妙に息苦しい無意識の中に沈んでしまつた……

×　×　×　×　×　×

「どうです、見物はすみましたか？」

老人は氣味の惡い微笑をしながら、僕の側へ腰をおろした。

此處はホテルのサロンであらう。セセッション式の家具を竝べた、妙にだだつ廣い西洋室である。が、人影は何處にも見えない。ずつと奥に見えるリフトも昇つたり降つたりしてゐる癖に、一人も客は出て來ないやうである。よくよくははやらないホテルらしい。

僕はこのサロンの隅の長椅子に上等のハヴアナを啣へてゐる。頭の上に蔓を垂らしてゐるのは鉢植ゑの南瓜に違ひない。廣い葉の鉢を隱したかげに黄いろい花の開いたのも見える。

「ええ、ざつと見物しました。——どうです、葉卷は？」

しかし老人は子供のやうにちよいと首を振つたなり、古風な象牙の嗅煙草入れを出した。これも何處かの博物館に竝んでゐたのを見た通りである。かう云ふ老人は日本は勿論、西洋にも今は一人もあるまい。佐藤春夫にでも紹介してやつたら、さぞ珍重することであらう。僕は老人に話しかけた。

「町の外へ一足出ると、見渡す通り野菜畑ですね。」

「サッサンラップ島の住民は大部分野菜を作るのです。男でも女でも野菜を作るのです。」

「そんなに需要があるものでせうか？」

「近海の島島へ賣れるのです。が、勿論賣れ殘らずにはゐません。賣れ殘つたのはやむを得ず積み上げて置くのです。船の上から見えたでせう、ざつと二萬呎も積み上つてゐるのが？」

「あれがみんな賣れ殘つたのですか？　あの野菜のピラミッドが？」

僕は老人の顏を見たり、目ばかりぱちぱちやる外はなかつた。が、老人は不相變面白さうにひとり微笑してゐる。

「ええ、みんな賣れ殘つたのです。しかもたつた三年の間にあれだけの嵩になるのですからね。

古來の賣れ殘りを集めたとしたら、太平洋も野菜に埋まる位ですよ。しかしサッサンラップ島の住民は未だに野菜を作つてゐるのです。晝も夜も作つてゐるのです。はははははは、我我のかうして話してゐる間も一生懸命に作つてゐるのです。はははははは、はははははは。」

老人は苦しさうに笑ひ笑ひ、茉莉花の匂のするハンカチイフを出した。これは唯の笑ひではない。人間の愚を嘲弄する惡魔の笑ひに似たものである。僕は顏をしかめながら、新しい話題を持ち出すことにした。

僕「市はいつ立つのですか？」

老人「毎月必ず月はじめに立ちます。しかしそれは普通の市ですね。臨時の大市は一年に三度、――一月と四月と九月とに立ちます。殊に一月は書入れの市ですよ。」

僕「ぢや大市の前は大騷ぎですね？」

老人「大騷ぎですとも。誰でも大市に間に合ふやうに思ひ思ひの野菜を育てるのですからね。燐酸肥料をやる、油滓をやる、溫室へ入れる、電流を通じる、――とてもお話にはなりません。中には又一刻も早く育てようとあせつた擧句、折角大事にしてゐる野菜を枯らしてしまふものも

ある位です。」

僕「ああ、さう云へば野菜畑にけふも痩せた男が一人、氣違ひのやうな顏をしたまま、『間に合はない、間に合はない』と駈けまはつてゐました。」

老人「それはさもありさうですね。新年の大市も直ですから。——町にゐる商人も一人殘らず血眼になつてゐるでせう。」

僕「町にゐる商人と云ふと？」

老人「野菜の賣買をする商人です。商人は田舍の男女の育てた野菜畑の野菜を買ふ、近海の島から來た男女はその又商人の野菜を買ふ、——と云ふ順序になつてゐるのです。」

僕「成程、その商人でせう、これは肥つた男が一人、黑い鞄をかかへながら、『困る、困る』と云つてゐるのを見ました。——ぢや一番賣れるのはどう云ふ種類の野菜ですか？」

老人「それは神の意志ですね。どう云ふものとも云はれません、年年少しづつ違ふやうですし、又その違ふ訣もわからないやうです。」

僕「しかし善いものならば賣れるでせう？」

老人「さあ、それもどうですかね。一體野菜の善惡は片輪のきめることになつてゐるのですが、……」

僕「どうして又片輪などがきめるのです？」

老人「片輪は野菜畑へ出られないでせう。從つて又野菜も作れない、それだけに野菜の善惡を見る目は自他の別を超越する、公平の態度をとることが出來る、——つまり日本の諺を使へば岡目八目になる訣ですね。」

僕「ああ、その片輪の一人ですね。さつき髯の生えた盲が一人、泥だらけの八つ頭を撫でまはしながら、『この野菜の色は何とも云はれない。薔薇の花の色と大空の色とを一つにしたやうだ』と云つてゐましたよ。」

老人「さうでせう。盲などは勿論立派なものです。が、最も理想的なのはこの上もない片輪ですね。目の見えない、耳の聞えない、鼻の利かない、手足のない、齒や舌のない片輪ですね。さう云ふ片輪さへ出現すれば、一代の Arbiter elegantiarum になります。現在人氣物の片輪などは大抵の資格を具へてゐますがね、唯鼻だけきいてゐるのです。何でもこの間はその鼻の穴へゴ

ムを溶かしたのをつぎこんださうですが、やはり少しは匂がするさうですよ。」
僕「ところでその片輪のきめた野菜の善悪はどうなるのです？」
老人「それがどうにもならないのです。いくら片輪に悪いと云はれても、賣れる野菜はずんずん賣れてしまふのです。」
僕「ぢや商人の好みによるのでせう？」
老人「商人は賣れる見こみのある野菜ばかり買ふのでせう。すると善い野菜が賣れるかどうか……」
僕「お待ちなさいよ。それならばまづ片輪のきめた善悪を疑ふ必要がありますね。」
老人「それは野菜を作る連中は大抵疑つてゐるのですがね。ぢやさう云ふ連中に野菜の善悪を聞いて見ると、やはりはつきりしないのですよ。たとへば或連中によれば『善悪は滋養の有無なり』と云ふのです。が、又ほかの連中によれば『善悪は味に外ならず』と云ふのです。それだけならばまだしも簡單ですが……」
僕「へええ、もつと複雑なのですか？」

老人「その味なり滋養なりにそれぞれ又說が分れるのです。たとへばヴィタミンのないのは滋養がないとか、脂肪のあるのは滋養があるとか、人參の味は駄目だとか、大根の味に限るとか……」

僕「するとまづ標準は滋養と味と二つある、その二つの標準に種種樣樣のヴァリエエションがある、——大體から云ふことになるのですか？」

老人「中中そんなもんぢやありません。たとへばまだから云ふのもあります。或連中に云はせると、色の上に標準もあるのです。あの美學の入門などに云ふ色の上の寒溫ですね。この連中は赤とか黃とか溫い色の野菜ならば、何でも及第させるのです。が、靑とか綠とか寒い色の野菜は見むきもしません。何しろこの連中のモットオは『野菜をして悉く赤茄子たらしめよ。然らずんば我等に死を與へよ』と云ふのですからね。」

僕「成程シャツ一枚の豪傑が一人、自作の野菜を積み上げた前にそんな演說をしてゐましたよ。」

老人「ああ、それがさうですよ。その溫い色をした野菜はプロレタリアの野菜と云ふのです。」

僕「しかし積み上げてあつた野菜は胡瓜や眞桑瓜ばかりでしたが、……」
老人「それはきつと色盲ですよ。自分だけは赤いつもりなのですよ。」
僕「寒い色の野菜はどうなのです？」
老人「これも寒い色の野菜でなければ野菜ではないと云ふ連中がゐます。尤もこの連中は冷笑はしても、演説などはしないやうですがね、肚の中では負けず劣らず溫い色の野菜を嫌つてゐるやうです。」
僕「するとつまり卑怯なのですか？」
老人「何、演説をしたがらないよりも演説をすることが出來ないのです。大抵酒毒か黴毒かの爲に舌が腐つてゐるやうですからね。」
僕「ああ、あれがさうなのでせう。シヤツ一枚の豪傑の向うに細いズボンをはいた才子が一人、せつせ南瓜をもぎりながら、『へん、演說か』と云つてゐましたつけ。」
老人「まだ青い南瓜をでせう。ああ云ふ色の寒いのをブルジョアの野菜と云ふのです。」
僕「すると結局どうなるのです？　野菜を作る連中によれば、……」

老人「野菜を作る連中によれば、自作の野菜に似たものは悉く善い野菜ですが、自作の野菜に似ないものは悉く惡い野菜なのです。これだけは兎に角確かですよ。」

僕「しかし大學もあるのでせう？　大學の教授は野菜學の講義をしてゐるさうですから、野菜の善惡を見分ける位は何でもないと思ひますが、……」

老人「ところが大學の教授などはサッサンラップ島の野菜になると、豌豆と蠶豆も見わけられないのです。尤も一世紀より前の野菜だけは講義の中にもはひりますがね。」

僕「ぢや何處の野菜のことを知つてゐるのです？」

老人「英吉利の野菜、佛蘭西の野菜、獨逸の野菜、伊太利の野菜、露西亞の野菜、一番學生に人氣のあるのは露西亞の野菜學の講義ださうです。是非一度大學を見にお出でなさい。わたしのこの前參觀した時には鼻眼鏡をかけた教授が一人、瓶の中のアルコオルに漬けた露西亞の古胡瓜を見せながら、『サッサンラップ島の胡瓜を見給へ。悉く青い色をしてゐる。しかし偉大なる露西亞の胡瓜はさう云ふ淺薄な色ではない。この通り人生そのものに似た、捕捉すべからざる色をしてゐる。ああ、偉大なる露西亞の胡瓜は……』と懸河の辯を振つてゐました。わたしは當時感動

のあまり、二週間ばかり床に就いたものです。」

僕「すると――するとですね、やはりあなたの云ふやうに野菜の賣れるか賣れないかは神の意志に從ふとでも考へる外はないのですか？」

老人「まあ、その外はありますまい。又實際この島の住民は大抵バッブラッブベエダを信仰してゐますよ。」

僕「何です、そのバッブラッブ何とか云ふのは？」

老人「バッブラッブベエダです。ＢＡＢＲＡＢＢＡＤＡと綴りますがね。まだあなたは見ないのですか？　あの伽藍の中にある……」

僕「ああ、あの豚の頭をした、大きい蜥蜴の偶像ですか？」

老人「あれは蜥蜴ではありません。天地を主宰するカメレオンですよ。けふもあの偶像の前に大勢お時儀をしてゐたでせう。ああ云ふ連中は野菜の賣れる祈禱の言葉を唱へてゐるのです。何しろ最近の新聞によると、紐育あたりのデパアトメント・ストアは悉くあのカメレオンの神託の下るのを待つた後、シイズンの支度にかかるさうですからね。もう世界の信仰はエホバでもな

ければ、アラアでもない。カメレオンに歸したとも云はれる位です。」
僕「あの伽藍の祭壇の前にも野菜が澤山積んでありましたが、……」
老人「あれはみんな牲ですよ。サッサンラップ島のカメレオンには去年實れた野菜を牲にするのですよ。」
僕「しかしまだ日本には……」
老人「おや、誰か呼んでゐますよ。」
僕は耳を澄まして見た。成程僕を呼んでゐるらしい。しかもこの頃蓄膿症の爲に鼻のつまつた甥の聲である。僕はしぶしぶ立ち上りながら、老人の前へ手を伸ばした。
「ぢやけふは失禮します。」
「さうですか。ぢや又話しに來て下さい。わたしはかう云ふものですから。」
老人は僕と握手した後、悠然と一枚の名刺を出した。名刺のまん中には鮮かに Lemuel Gulliver と印刷をしてある！　僕は思はず口をあいたまま、茫然と老人の顔を見つめた。麻色の髮の毛に圍まれた、目鼻だちの正しい老人の顔は永遠の冷笑を浮かべてゐる、――と思つたのはほん

の一瞬間に過ぎない。その顔はいつか惡戲らしい十五歲の甥の顏に變つてゐる。
「原稿ですつてさ。お起きなさいよ。原稿をとりに來たのですつてさ。」
甥は僕を搖すぶつた。僕は置火燵に當つたまま、三十分ばかり晝寢をしたらしい。置火燵の上に載つてゐるのは讀みかけた Gulliver's Travels である。
「原稿をとりに來た？　何處の原稿を？」
「隨筆のをですつてさ。」
「隨筆の？」
僕は我知らず獨言を云つた。
「サッサンラップ島の野菜市には『はこべら』の類も賣れると見える。」

（大正十二年十二月）

糸女覺え書

秀林院様（細川越中守忠興の夫人、秀林院殿華屋宗玉大姉はその法謚なり）のお果てなされ候次第のこと。

一、石田治部少の亂の年、卽ち慶長五年七月十日、わたくし父魚屋淸左衛門、大阪玉造のお屋敷へ參り、「かなりや」十羽、秀林院様へ獻上仕り候。秀林院様はよろづ南蠻渡りをお好み遊ばされ候間、おん悅び斜めならず、わたくしも面目を施し候。尤も御所持の御什器のうちには珍物も數かず有之、この「かなりや」ほど確かなる品は一つも御座なく候。その節父の申し候は、涼風の立ち次第秀林院様へお暇を願ひ、嫁入り致させ候べしとのことに御座候。わたくしもはや三年あまり、御奉公致し居り候へども、秀林院様は少しもお優しきところ無之、賢女ぶらるることを第一となされ候へば、お側に居り候ても、浮きたる話などは相成らず、兎角氣のつまるばかりに候間、父の言葉を聞きし時は天へも昇る心地致し候。この日も秀林院様の仰せられ候は、

日本國の女の智慧淺きは横文字の本を讀まぬゆゑのよし、來世は必ず南蠻國の大名へお輿入れなさるべしと存じ上げ候。

二、十一日、澄見と申す比丘尼、秀林院樣へお目通り致し候。この比丘尼は唯今城内へも取り入り、中中きけ者のよしに候へども、以前は京の糸屋の後家にて、夫を六人も取り換へたるいたづら女とのことに御座候。わたくしは澄見の顏さへ見れば、蟲唾の走るほど厭になり候へども、秀林院樣はさのみお嫌ひも遊ばされず、時には彼是小半日もお話相手になさること有之、その度にわたくしども奥女中はいづれも難澁仕り候。これはまつたく秀林院樣のお世辭を好まるる爲に御座候。たとへば澄見は秀林院樣に「いつもお美しいことでおりやる。一定どこの殿御の目にも二十あまりに見えようず」などと、まことしやかに御器量を褒め上げ候。なれども秀林院樣の御器量はさのみ御美麗と申すほどにても無之、殊におん鼻はちと高すぎ、雀斑も少少お有りなされ候。のみならずお年は三十八ゆゑ、如何に夜目遠目とは申せ、二十あまりにはお見えなさらず候。

三、澄見のこの日參り候は、内内治部少かたより賴まれ候よしにて、秀林院樣のおん住居を城

內へおん移し遊ばされ候やう、お勸め申す爲に御座候。秀林院樣は御勘考の上、御返事なされ候べしと、澄見には御意なされ候へども、中中しかとせる御決心もつきかね候やうに見上げ候。然れば澄見の下がり候後は「まりや」樣の畫像の前に、凡そ一刻に一度づつは「おらつしよ」と申すおん祈りを一心にお捧げ遊ばされ候。何も序ゆゑ申し上げ候へども、秀林院樣の「おらつしよ」は日本國の言葉にては無之、羅甸とやら申す南蠻國の言葉のよし、わたくしどもの耳には唯「のす、のす」と聞え候間、その可笑しさをこらふること、一かたならぬ苦しみに御座候。

四、十二日は別に變りたることも無之、唯朝より秀林院樣の御氣嫌、よろしからざるやうに見上げ候。總じて御氣嫌のよろしからざる時にはわたくしどもへはもとより、與一郎樣（忠興の子、忠隆）の奧樣へもお小言やらお厭味やら仰せられ候間、誰もみな滅多にお側へは近づかぬことと致し居り候。けふも亦與一郎樣の奧樣へはお化粧のあまり濃すぎぬやう、「えそぽ物語」とやらの中の孔雀の話をお引き合ひに出され、長ながと御談義有之候よし、みなみなお氣の毒に存じ上げ候。この奧樣はお隣屋敷浮田中納言樣の奧樣の妹御に當らせられ、御利發とは少少申し兼ね候へども、御器量は如何なる名作の雛にも見劣らぬほどに御座候。

五、十三日、小笠原少齋（秀清）河北石見（一成）の兩人、お臺所まで參られ候。細川家にては男はもとより、子供にても奥へ參ることはかなはざる御家法に候間、表の役人はお臺所へ參られ、何ごとによらずわたくしどもに奥への取次を賴まるること、久しきならはしと相成り居り候。これはみな三齋樣（忠興）秀林院樣、お二かたのおん燒餅より起りしことにて、黑田家の森太兵衞などにも、さてこそ不自由なる御家法も候ものかなと笑はれしよしに御座候。なれども亦裏には裏と申すことも有之、さほど不自由は致し居らず候。

六、少齋石見の兩人、霜と申す女房を召し出され、こまごまと申され候は、この度急に治部少より、東へお立ちなされ候大名衆の人質をとられ候よし、專ら風聞仕り候へども、如何仕るべく候や、秀林院樣のお思召しのほども承りたしとのことに有之候。その節、霜のわたくしに申し候は、「お留守居役の衆も手ぬるいことでおりやる。そのやうなことは澄見からをとつひの內に言上されたものを。やれやれお取次御苦勞な」とのことに御座候。尤もこれは珍しきことにても無之、いつも世上の噂などはお留守居役の耳よりも、わたくしどもの耳へ先に入り候。少齋は唯律義なる老人、石見は武道一偏のわやく人に候間、さもあるべき儀とは存じ候へども、兎角た

び重なり候へば、わたくしどもを始め奥のものは「世上に隠れない」と申す代りに「お留守居役さへ知つておりやる」と申すことに相成り居り候。

七、霜は卽ちその旨を秀林院樣へ申し上げ候ところ、秀林院樣の御意なされ候は、治部少と三齋樣とは兼ねがねおん仲惡しく候まま、定めし人質のとりはじめにはこの方へ參るならん、萬一さもなき節は他家の並もあるべきか、もし又一番に申し來り候はば、御返答如何遊ばされ候べきや。少齋石見の兩人、分別致し候やうにとのことに御座候。少齋石見の兩人も分別致しかね候へばこそ、御意をも伺ひし次第に候へば、秀林院樣のおん言葉は見當違ひには御座候へども霜も御主人の御威光には勝たれず、その通り兩人へ申し渡し候。霜のお臺所へ下がり候後、秀林院樣は又また「まりや」樣の畫像の前に「のす、のす」をお唱へ遊ばされ、梅と申す新參の女房、思はず笑ひ出し候へば、以ての外のことなりとさんざん御折檻を蒙り候。

八、少齋石見の兩人は秀林院樣の御意を伺ひ、いづれも當惑仕り候へども、やがて霜に申され候は、治部少かたより右の次第を申し來り候とも、與一郎樣與五郎樣(忠興の子、興秋)のお二かたは東へお立ちなされたり、内記樣(同上、忠利)も亦唯今は江戸人質に御座候間、人質に出

で候はん人、當お屋敷には一人も無之候へば、所詮は出し申すことなるまじくと返答仕るべし、なほ又是非ともと申し候はば、田邊の城(舞鶴)へ申し遣はし、幽齋様(忠興の父、藤孝)より御指圖を仰ぎ候まま、それ迄待ち候へと挨拶仕るべし、この儀は如何候べきと申され候。秀林院様の仰せには分別致し候やうにと申し渡され候へども、少齋石見兩人の言葉に毛すぢほどの分別も有之候や。まづ老功の侍とは申さず、人並みの分別ある侍ならば、たとひ田邊の城へなりとも秀林院様をお落し申し、その次には又わたくしどもにも思ひ思ひに姿を隱させ、最後に兩人のお留守居役だけ覺悟仕るべき場合に御座候。然るに人質に出で候はん人、一人も無之候へば、出し申すことなるまじくなどとは一も二もなき喧嘩腰にて、側杖を打たるるわたくしどもこそ迷惑千萬に存じ候。

九、霜は又右の次第を秀林院様へ申し上げ候ところ、秀林院様は御返事も遊ばされず、唯お口のうちに「のす、のす」とのみお唱へなされ居り候へども、漸くさりげなきおん氣色に直られ、一段然るべしと御意なされ候。如何さままだお留守居役よりお落し奉らんとも申されぬうちに、落せと仰せられ候訣には參り兼ね候儀ゆゑ、さだめし御心中には少齋石見の無分別なる申し條を

お恨み遊ばされしことと存じ上げ候。且は御氣嫌もこの時より引きつづき甚だよろしからず、ことごとにわたくしどもをお叱りなされ、又お叱りなさるる度に「えそぽ物語」とやらをお讀み聞かせ下され、誰はこの蛙、彼はこの狼などと仰せられ候間、みなみな人質に參るよりも難澁なる思ひを致し候。殊にわたくしは蝸牛にも、鴉にも、豚にも、龜の子にも、棕梠にも、犬にも、蝮にも、野牛にも、病人にも似かよひ候よし、くやしきお小言を蒙り候こと、末代迄も忘れ難く候。

十、十四日には又澄見參り、人質の儀を申し出し候。秀林院様御意なされ候は、三齋様のお許し無之うちは、如何やうのこと候とも、人質に出で候儀には同心仕るまじくと仰せられ候。然れば澄見申し候は、成程三齋様の御意見を重んぜられ候こと、尤も賢女には候べし。なれどもこれは細川家のおん大事につき、たとひ城内へはお出なされずとも、お隣屋敷浮田中納言様迄入らせらるべきか。浮田中納言様の奥様は與一郎様と御姉妹の間がらゆゑ、その分のことは三齋様にもよもやおん咎めなされまじく、左様遊ばされ候へとのことに御座候。澄見はわたくし大嫌ひの狸婆には候へども、澄見の申し候ことは一理ありと存じ候。お隣屋敷浮田中納言様へお移り遊ばされ候はば、第一に世間の名聞もよろしく、第二にわたくしどもの命も無事にて、この上の妙

案は有之まじく候。

十一、然るに秀林院様御意なされ候は、如何にも浮田中納言殿は御一門のうちには候へども、これも治部少と一味のよし、兼ねがね承り及び候間、それ迄參り候ても人質は人質に候まま、同心致し難くと仰せられ候。澄見はなほも押し返し、いろいろ口說き立て候へども、一向に御承引遊ばされず、遂に澄見の妙案も水の泡と消え果て申し候。その節も亦秀林院様は孔子とやら、「えそぽ」とやら、橘姫とやら、「きりすと」とやら、和漢はもとより南蠻國の物語さへも仰せ聞かされ、さすがの澄見も御能辯にはしみじみ恐れ入りしやうに見うけ候。

十二、この日の大凶時、霜は御庭前の松の梢へ金色の十字架の天下るさまを夢のやうに眺め候よし、如何なる凶事の前兆にやと悲しげにわたくしへ話し申し候。尤も霜は近眼の上、日頃みなみなになぶらるる臆病者に御座候間、明星を十字架とも見違へ候や、覺束なき限りと存じ候。

十三、十五日にも亦澄見參り、きのふと同じことを申し上げ候。秀林院様御意なされ候は、たとひ何度申され候とも、覺悟は變るまじ、と仰せられ候。然れば澄見も立腹致し候や、御前を退き候みぎり、「御心痛のほどもさぞかしでおぢやらう。どうやらお顔も四十あまりに見ゆる」と申

し候。秀林院様にも一かたならず御立腹遊ばされ、以後は澄見に目通り無用と達し候へと仰せられ候。なほ又この日も一刻置きに「おらつしよ」をお唱へ遊ばされ候へども、内證にてのお掛合ひも愈手切と相成り候間、みなみな安き心もなく、梅さへ笑はずに控へ居り候。

十四、この日は又河北石見、稻富伊賀(祐直)と口論致され候よし、伊賀は砲術の上手につき、他家にも弟子の衆少からず、何かと評判よろしく候まま、少齋石見などは嫉きことに思はれ、兎角口論も致され勝ちとのことに御座候。

十五、この日の夜半、霜は夢に打手のかかるを見、肝を冷やし候よし、大聲に何か呼ばはりながら、お廊下を四五間走りまはり候。

十六、十六日巳の刻頃、少齋石見の兩人、再び霜に申され候は、唯今治部少かたより表向きの使參り、是非とも秀林院様をおん渡し候へ、もしおん渡し候はずば、押し掛けて取り候はんと申し候間、さりとは我儘なる申し條も候ものかな、この上は我等腹を切り候とも、おん渡し仕るまじくと申し遣はし候。然れば秀林院様にも御覺悟遊ばされたくとのことに有之候。その節、生憎少齋は拔け齒を煩はれ居り候まま、石見に口上を賴まれ候よし、又石見は立腹の餘り、霜をも

打ち果すかと見えられ候よし、いづれも霜の物語に御座候。

十七、秀林院様は霜より仔細を聞こし召され、直ちに與一郎様の奥様とお内談に相成り候。後に承り候へば、與一郎様の奥様にも御生害をお勸めに相成り候よし、何ともお傷しく存じ上げ候。總じてこの度の大變はやむを得ぬ仕儀とは申しながら、第一にはお留守居役の無分別よりことを破り、第二には又秀林院様御自身のお氣性より御最期を早められ候も同然の儀に御座候。然るに與一郎様の奥様にも御生害をお勸め遊ばされ候上は、わたくしどもにさへお伴を仕るやう、御意なされ候やも計り難く、愈迷惑に存じ居り候ところ、みなみな御前へ召され候間、如何なる仰せを蒙ることかと一かたならず案じ申し候。

十八、やがて御前へ參り候へば、秀林院様御意なされ候は、愈「はらいそ」と申す極樂へ參り候はん時節も近づき、一段悦ばしく候と仰せられ候。なれどもおん顔の色は青ざめお聲もやや震へ居られ候間、もとよりこれはおん僞と存じ上げ候。秀林院様又御意なされ候は、唯黄泉路の障りとなるはその方どもの未來なり、その方どもは心得惡しく、切支丹の御宗門にも歸依し奉らず候まま、未來は「いんへるの」と申す地獄に墮ち、惡魔の餌食とも成り果て候べし。就いては今日よ

り心を改め、天主のおん教へを守らせ候へ。もし又さもなく候はば、みなみな生害の伴を仕り、われらと共に穢土を去り候へ。その節はわれらより「あるかんじよ」(大天使)へ頼み、「あるかんじよ」より又おん主「えす・きりすと」へ頼み奉り、一同に「はらいそ」の莊嚴を拜し候べしと仰せられ候。然ればわたくしどもは感涙に咽び、みなみな卽座に切支丹の御宗門に歸依し奉る旨、同音に申し上げ候間、秀林院樣には御機嫌よろしく、これにて黃泉路の障りも無之、安堵いたし候まま、伴は無用と御意なされ候。

十九、なほ又秀林院樣は三齋樣與一郎樣へお書置きをなされ、一通とも霜へお渡し遊ばされ候。その後京の「ぐれごり屋」と申す伴天連へも何やら横文字のお書置きをなされ、これはわたくしへお渡し遊ばされ候。この横文字のお書置きは五六行には候へども、秀林院樣のお書き遊ばされ候には一刻あまりもおかかりなされ候。これも序ゆゑ申し上げ候へども、このお書置きを「ぐれごり屋」へ渡し候節、日本人の「いるまん」(役僧)一人、嚴かに申し候は、總じて自害は切支丹宗門の禁ずるところに御座候間、秀林院樣も「はらいそ」へはお昇り遊ばさるることかなふまじく候、但し「みさ」と申す祈禱を奉られ候はば、その功德廣大にして、悪趣を免れさせ候べし。もし「み

さ」を修せられ候はんには、銀一枚賜り候へとのことに御座候。

二十、打手のかかり候は亥の刻頃と存じ候。お屋敷の表は河北石見預り、裏の御門は稲富伊賀預り、奥は小笠原少齋預りと定まり居り候。敵寄すると承り候へば、秀林院様は梅を遣はされ、與一郎様の奥様をお召し遊ばされ候へども、はやいづこへお落ちなされ候や、お部屋は藻ぬけのからと相成り居り候よし、わたくしどももみなみなおん悦び申し上げ候。なれども秀林院様にはおん憤り少からず、わたくしどもに御意なされ候は、生まれては山崎の合戰に太閤殿下と天下を爭はれし惟任將軍光秀を父とたのみ、死しては「はらいそ」におはします「まりや」様を母とたのまんわれらに、末期の恥辱を與へ候こと、かへすがへすも奇怪なる平大名の娘と仰せられ候。その節のおんありさまのはしたなさ、今も目に見ゆる心地致し候。

二十一、程なく小笠原少齋、紺絲の具足に小薙刀を提げ、お次迄御介錯に參られ候。未だ拔け齒の痛み甚しく候よし、左の頬先腫れ上られ、武者ぶりも聊はかなげに見うけ候。少齋申され候は、お居間の敷居を越え候はんも恐れ多く候間、敷居越しに御介錯仕り、追ひ腹切らんとのことに御座候。御先途見とどけの役は霜とわたくしとに定まり居り候へば、この頃にはみなみない

づこへか落ち失せ、わたくしどもばかり残り居り候。秀林院様は少齋を御覧ぜられ、介錯大儀と仰せられ候。細川家へお輿入れ遊ばされ候以來、御夫婦御親子のかたがたは格別に候へども、男の顔を御覧遊ばされ候は今日この少齋をはじめと致され候よし、後に霜より承り及び候。少齋はお次に兩手をつかれ、御最期の時參り候と申し上げ候。尤も片頰腫れ上られ居り候へば、言舌も甚ださだかならず、秀林院様にも御當惑遊ばされ、大聲に申候へと御意なされ候。

二十二、その時誰やら若き衆一人、萌葱絲の具足に大太刀を提げ、お次へ駈けつけ候や否や、稻富伊賀逆心仕り敵は裏門よりなだれ入り候間、速に御覺悟なされたくと申され候。秀林院様は右のおん手にお髪をきりきりと巻き上げられ、御覺悟の體に見上げ候へども、若き衆の姿を御覧遊ばされ、羞しと思召され候や、忽ちおん顏を耳の根迄赤あかとお染め遊ばされ候。わたくし一生にこの時ほど、秀林院様の御器量をお美しく存じ上げ候こと、一度も覺え申さず候。

二十三、わたくしどもの御門を出で候節はもはやお屋敷に火の手あがり、御門の外にも人人大勢、火の光の中に集まり居り候。尤もこれは敵にては無之、火事を見に集まりたる人人のよし、又敵は伊賀を引きつれ、御最期以前に引きあげ候よし、いづれも後に承り申し候。まづは秀林

院様お果てなされ候次第のこと、あらあら申し上げたる通りに御座候。

（大正十二年十二月）

三右衛門の罪

文政四年の師走である。加賀の宰相治脩の家來に知行六百石の馬廻り役を勤める細井三右衛門と云ふ侍は相役衣笠太兵衛の次男數馬と云ふ若者を打ち果した。それも果し合ひをしたのではない。或夜の戌の上刻頃、數馬は南の馬場の下に、謠の會から歸つて來る三右衛門を闇打ちに打ち果さうとし、反つて三右衛門に斬り伏せられたのである。

この始末を聞いた治脩は三右衛門を目通りへ召すやうに命じた。命じたのは必しも偶然ではない。第一に治脩は聰明の主である。聰明の主だけに何ごとによらず、家來任せと云ふことをしない。みづから或判斷を下し、みづからその實行を命じないうちは心を安んじないと云ふ風である。治脩は或時二人の鷹匠にそれぞれみづから賞罰を與へた。これは治脩の事を處する面目の一端を語つてゐるから、大略を下に抜き書して見よう。

「或時石川郡市川村の青田へ丹頂の鶴群れ下れるよし、御鳥見役より御鷹部屋へ御注進になり、

若年寄より直接言上に及びければ、上樣には御滿悅に思召され、翌朝卯の刻御供揃ひ相濟み、市川村へ御成りあり。鷹には公儀より御拜領の富士司の大逸物を始め、大鷹二基、鶽二基を擎へさせ給ふ。富士司の御鷹匠は相本喜左衞門と云ふものなりしが、其日は上樣御自身に富士司を合さんとし給ふに、雨上りの畦道のことなれば、思はず御足もとの狂ひしとたん、御鷹はそれて空中に飛び揚り、丹頂も俄かに飛び去りぬ。この樣を見たる喜左衞門は一時の怒に我を忘れ、この野郎、何をしやがつたと罵りけるが、忽ち御前なりしに心づき、冷汗背を沾すと共に、蹲踞してお手打ちを待ち居りしに、上樣には大きに笑はせられ、予の誤ぢや、ゆるせと御意あり。猶喜左衞門の忠直なるに感じ給ひ、御歸城の後は新地百石に御召し出しの上、組外れに御差加へに相成り、御鷹部屋御用掛に被成給ひしとぞ。

「其後富士司の御鷹は柳瀬清八の掛りとなりしに、一時病み鳥となりしことあり。或日上樣清八を召され、富士司の病はと被仰し時、既に快癒の後なりしかば、すきと全治、唯今では人をも把り兼ねませぬと申し上げし所、清八の利口をや憎ませ給ひけん、夫は一段、さらば人を把らせて見よと御意あり。清八は爾來やむを得ず、己が息子清太郎の天額にたたき餌小ごめ餌などを載せ

置き、朝夕富士司を合せければ、鷹も次第に人の天額へ舞ひ下る事を覺えこみぬ。清八は取り敢ず御鷹匠小頭より、人を把るよしを言上しけるに、そは面白からん、明日南の馬場へ赴き、茶坊主大場重玄を把らせて見よと御沙汰あり。辰の刻頃より馬場へ出御、大場重玄をまん中に立たせ、清八、鷹をと御意ありしかば、清八は此處ぞと富士司を放つに、鷹は忽ち眞一文字に重玄の天額をかい摑みぬ。清八は得たりと勇みをなしつつ、圓揚げ（圓トハ鳥ノ肝ヲ云）の小刀を隻手に引拔き、重玄を刺さんと飛びかかりしに、上樣には柳瀬、何をすると御意あり。清八はこの御意をも恐れず、御鷹の獲物はかかり次第、圓を揚げねばなりませぬと、猶も重玄を刺さんとせし所へ、上樣には忽ち震怒し給ひ、筒を持てと御意あるや否や、日頃御鍛錬の御手銃にて、即座に清八を射殺し給ふ。」

第二に治修は三右衞門へ、ふだんから特に目をかけてゐる。嘗て亂心者を取り抑へた際に、三右衞門外一人の侍は二人とも額に傷を受けた。しかも一人は眉間のあたりを、三右衞門は左の横鬢を紫色に腫れ上らせたのである。治修はこの二人を召し、神妙の至りと云ふ褒美を與へた。それから「どうぢや、痛むか？」と尋ねた。すると一人は「難有い仕合せ、幸ひ傷は痛みませぬ」と答

へた。が、三右衞門は苦にがしさうに、「かほどの傷も痛まなければ、活きてゐるとは申されませぬ」と答へた。爾來治修は三右衞門を正直者だと思つてゐる。あの男は兎に角巧言は云はぬ、頼もしいやつだと思つてゐる。

から云ふ治修は今度のことも、自身から云ふ三右衞門に仔細を尋ねて見るより外に近途はないと信じてゐた。

仰せを蒙つた三右衞門は恐る恐る御前へ伺候した。しかし悪びれた氣色などは見えない。色の淺黑い、筋肉の引き緊つた、多少瘠癖のあるらしい顏には決心の影さへ仄めいてゐる。治修はまづから尋ねた。

「三右衞門、數馬はそちに闇打ちをしかけたさうぢやな。すると何かそちに對し、意趣を含んで居つたものと見える。何に意趣を含んだのぢや？」

「何に意趣を含みましたか、しかとしたことはわかりませぬ。」

治修はちよいと考へた後、念を押すやうに尋ね直した。

「何もそちには覺えはないか？」

「覺えと申すほどのことはございませぬ。しかし或はあゝ云ふことを怨まれたかと思ふことはございまする。」

「何ぢや、それは？」

「四日ほど前のことでございまする。御指南番山本小左衞門殿の道場に納會の試合がございました。その節わたくしは小左衞門殿の代りに行司の役を勤めました。尤も目錄以下のものの勝負だけを見屆けたのでございまする。數馬の試合を致した時にも、行司はやはりわたくしでございました。」

「數馬の相手には誰がなつたな？」

「御側役平田喜太夫殿の總領、多門と申すものでございました。」

「その試合に數馬は負けたのぢやな？」

「さやうでございまする。多門は小手を一本に面を二本とりました。數馬は一本もとらずにしまひました。つまり三本勝負の上には見苦しい負けかたを致したのでございまする。それゆゑ或は行司のわたくしに意趣を含んだかもわかりませぬ。」

「すると數馬はそちの行司に依怙があると思うたのぢやな？」

「さやうでございまする。わたくしは依怙は致しませぬ。依怙を致す訣もございませぬ。しかし數馬は依怙のあるやうに疑つたかとも思ひまする。」

「日頃はどうぢや？　そちは何か數馬を相手に口論でも致した覺えはないか？」

「口論などを致したことはございませぬ。唯、………」

三右衛門はちよつと云ひ澱んだ。尤も云はうか云ふまいかとためらつてゐる氣色とは見えない。一應云ふことの順序か何か考へてゐるらしい面持ちである。治修は顏色を和げたまま、静かに三右衛門の話し出すのを待つた。三右衛門は間もなく話し出した。

「唯かう云ふことがございました。試合の前日でございまする。數馬は突然わたくしに先刻の無禮を詫びました。しかし先刻の無禮と申すのは一體何のことなのか、とんとわからぬのでございまする。又何かと尋ねて見ても、數馬は苦笑ひを致すより外に返事を致さぬのでございまする。わたくしはやむを得ませぬゆゑ、無禮をされた覺えもなければ詫びられる覺えもなほ更ないと、かう數馬に答へました。すると數馬も得心したやうに、では思違ひだつたかも知れぬ、どうか心

にかけられぬ様にと、今度は素直に申しました。其時はもう苦笑ひよりは北叟笑んでゐたことも覺えて居ります る。」
「何を又數馬は思ひ違へたのぢや？」
「それはわたくしにもわかり兼ねまする。が、いづれ取るにも足らぬ些細のことだつたでございませう。――その外は何もございませぬ。」
其處に又短い沈默があつた。
「ではどうぢやな、數馬の氣質は？　疑ひ深いとでも思つたことはないか？」
「疑ひ深い氣質とは思ひませぬ。どちらかと申せば若者らしい、何ごとも色に露はすのを恥ぢぬ、――その代りに多少激し易い氣質だつたかと思ひまする。」
三右衞門はちよつと言葉を切り、更に言葉をと云ふよりは、吐息をするやうにつけ加へた。
「その上あの多門との試合は大事の試合でございました。」
「大事の試合とはどう云ふ訣ぢや？」
「數馬は切り紙でござりまする。しかしあの試合に勝つて居りましたら、目錄を授つた筈でござ

いまする。尤もこれは多門にもせよ、同じ羽目になつて居りました。數馬と多門とは同門のうちでも、丁度腕前の伯仲した相弟子だつたのでございまする。」

治修は少時默つたなり、何か考へてゐるらしかつた。が、急に氣を變へたやうに、今度は三右衛門の數馬を殺した當夜のことへ問を移した。

「數馬は確かに馬場の下にそちを待つてゐたのぢやな？」

「多分はさやうかと思ひまする。その夜は急に雪になりましたゆゑ、わたくしは傘をかざしながら、御馬場の下を通りかかりました。丁度又作もつれず、雨着もつけずに參つたのでございまする。すると風音の高まるが早いか、左から雪がしまいて參りました。わたくしは咄嗟に半開きの傘を斜めに左へ廻しました。數馬はその途端に斬りこみましたゆゑ、わたくしへは手傷も負はせずに傘ばかり斬つたのでございまする。」

「聲もかけずに斬つて參つたか？」

「かけなかつたやうに思ひまする。」

「その時には相手を何と思つた？」

「何と思ふ餘裕もござりませぬ。わたくしは傘を斬られると同時に、思はず右へ飛びすさりました。足駄ももうその時には脫いで居つたやうでございまする。と、二の太刀が參りました。二の太刀はわたくしの羽織の袖を五寸ばかり斬り裂きました。わたくしは又飛びすさりながら、拔き打ちに相手を拂ひました。數馬の脾腹を斬られたのはこの刹那だつたと思ひまする。相手は何か申しました。………」

「何かとは？」

「何と申したかはわかりませぬ。唯何か烈しい中に聲を出したのでございまする。わたくしはその時にはつきりと數馬だなと思ひました。」

「それは何か申した聲に聞き覺えがあつたと申すのぢやな？」

「いえ、左樣ではございませぬ。」

「ではなぜ數馬と悟つたのぢや？」

治修はぢつと三右衞門を眺めた。三右衞門は何とも答へずにゐる。治修はもう一度促すやうに、同じ言葉を繰り返した。が、今度も三右衞門は袴へ目を落したきり、容易に口を開かうともしな

い。

「三右衞門、なぜぢや？」

治修はいつか別人のやうに、威嚴のある態度に變つてゐた。この態度を急變するのは治修の慣用手段の一つである。三右衞門はやはり目を伏せたまま、やつと噤んでゐた口を開いた。しかしその口を洩れた言葉は「なぜ」に對する答ではない。意外にも甚だ悄然とした、罪を謝する言葉である。

「あたら御役に立つ侍を一人、刀の錆に致したのは三右衞門の罪でございまする。」

治修はちよつと眉をひそめた。が、目は不相變嚴かに三右衞門の顔に注がれてゐる。三右衞門は更に言葉を續けた。

「數馬の意趣を含んだのは尤もの次第でございまする。わたくしは行司を勤めた時に、依怙の振舞ひを致しました。」

治修は愈眉をひそめた。

「そちは最前は依怙は致さぬ、致す訣もないと申したやうぢやが、……」

「そのことは今も變りませぬ。」

三右衛門は一言づつ考へながら、述懷するやうに話し續けた。

「わたくしの依怙と申すのはさう云ふことではございませぬ。ことさらに數馬を負かしたいとか、多門を勝たせたいとかと思はなかつたことは申し上げた通りでございまする。しかし何もそればかりでは、依怙がなかつたとは申されませぬ。わたくしは一體多門よりも數馬に望みを嘱して居りました。多門の藝はこせついて居りまする。如何に卑怯なことをしても、唯勝ちさへ致せば好いと、勝負ばかりを心がける邪道の藝でございまする。數馬の藝はそのやうに卑しいものではございませぬ。どこまでも眞ともに敵を迎へる正道の藝でございまする。わたくしはもう二三年致せば、多門は到底數馬の上達に及ぶまいとさへ思つて居りました。……」

「その數馬をなぜ負かしたのぢや?」

「さあ、其處でございまする。わたくしは確かに多門よりも數馬を勝たしたいと思つて居りました。しかしわたくしは行司でございまする。行司はたとひ如何なる時にも、私曲を抛たねばなりませぬ。一たび二人の竹刀の間へ、扇を持つて立つた上は、天道に從はねばなりませぬ。わたく

しはかう思ひましたゆゑ、多門と數馬との立ち合ふ時にも公平ばかりを心がけました。けれども唯今申し上げた通り、わたくしは數馬に勝たせたいと思つて居るのでございまする。云はばわたくしの心の秤は數馬に傾いて居るのでございまする。わたくしはこの心の秤を平らに致したい一心から、自然と多門の皿の上へ錘を加へることになりました。しかも後に考へれば、加へ過ぎたのでございまする。多門には寛に失した代りに、數馬には嚴に過ぎたのでございまする。」

三右衛門は又言葉を切つた。が、治修は默然と耳を傾けてゐるばかりだつた。

「二人は正眼に構へたまま、どちらからも最初にしかけずに居りました。その内に多門は隙を見たのか、數馬の面を取らうと致しました。しかし數馬は氣合ひをかけながら、鮮かにそれを切り返しました。同時に又多門の小手を打ちました。わたくしの依怙の致しはじめはこの刹那でございまする。わたくしは確かにその一本は數馬の勝だと思ひました。が、勝だと思ふや否や、いや、竹刀の當りかたは弱かつたかも知れぬと思ひました。この二度目の考へはわたくしの決斷を鈍らせました。わたくしはとうとう數馬の上へ、當然擧げる筈の扇を擧げずにしまつたのでございまする。二人は又少時の間、正眼の睨み合ひを續けて居りました。すると今度は數馬から多門の小

手へしかけました。多門はその竹刀を拂ひざまに、數馬の小手へはひりました。この多門の取つた小手は數馬の取つたのに比べますと、弱かつたやうでございまする。少くとも數馬の取つたよりも見事だつたとは申されませぬ。しかしわたくしはその途端に多門へ扇を擧げてしまひました。つまり最初の一本の勝は多門のものになつたのでございまする。わたくしはしまつたと思ひました。が、さう思ふ心の裏には、いや、行司は誤つては居らぬ、誤つて居ると思ふのは數馬に依怙のある爲だぞと囁くものがあるのでございまする。………」

「それから如何致した？」

治修はやや苦にがしげに、不相變ちよつと口を噤んだ三右衛門の話を催促した。

「二人はまたもとのやうに、竹刀の先をすり合せました。一番長い氣合のかけ合ひはこの時だつたかと覺えて居りまする。しかし數馬は相手の竹刀へ竹刀を觸れたと思ふが早いか、いきなり突を入れました。突はしたたかにはひりました。が、同時に多門の竹刀も數馬の面を打つたのでございまする。わたくしは相打ちを傳へる爲に、まつ直に扇を擧げて居りました。しかしその時も相打ちではなかつたのかもわかりませぬ。或は先後を定めるのに迷つて居つたのかもわかりませ

ぬ。いや、突のはひつたのは面に竹刀を受けるよりも先だつたかもわかりませぬ。けれども兎に角相打ちをした二人は四度目の睨み合ひへはひりました。すると今度もしかけたのは數馬からでございました。數馬はもう一度突を入れました。が、この時の數馬の竹刀は心もち先が上つて居りました。多門はその竹刀の下を胴へ打ちこまうと致しました。それから彼是十合ばかりは互に鎬を削りました。しかし最後に入り身になつた多門は數馬の面へ打ちこみました。……」

「その面は？」

「その面は見事にとられました。これだけは誰の目にも疑ひのない多門の勝でございまする。數馬はこの面を取られた後、だんだんあせりはじめました。わたくしはあせるのを見るにつけても、今度こそは是非とも數馬へ扇を擧げたいと思ひました。しかしさう思へば思ふほど、實は扇を擧げることをためらふやうになるのでございまする。二人は今度も少時の後、七八合ばかり打ち合ひました。その內に數馬はどう思つたか、多門へ體當りを試みました。どう思つたかと申しますのは日頃數馬は體當りなどは決して致さぬゆゑでございまする。わたくしははつと思ひました。又はつと思つたのも當然のことでございました。多門は體を開いたと思ふと、見事にもう一度面

を取りました。この最後の勝負ほど、呆氣なかつたものはございませぬ。わたくしはとうとう三度とも多門へ扇を擧げてしまひました。——わたくしの依怙と申すのはかう云ふことでございまする。これは心の秤から見れば、云はば一毫を加へたほどの吊合ひの狂ひかもわかりませぬ。けれども數馬はこの依怙の爲に大事の試合を仕損じました。わたくしは數馬の怨んだのも、今はどうやら不思議のない成行だつたやうに思つて居りまする。」

「ぢやがそちの斬り拂つた時に數馬と申すことを悟つたのは？」

「それはつきりとはわかりませぬ。しかし今考へまするとわたくしは何處か心の底に數馬に濟まぬと申す氣もちを持つて居つたかとも思ひまする。それゆゑ忽ち狼藉者を數馬と悟つたかとも思ひまする。」

「するとそちは數馬の最後を氣の毒に思うて居るのぢやな？」

「さやうでございまする。且は又先刻も申した通り、一かどの御用も勤まる侍にむざと命を殞させたのは、何よりも上へ對し奉り、申し訣のないことと思つて居りまする。」

語り終つた三右衛門は今更のやうに頭を垂れた。額には師走の寒さと云ふのに汗さへかすかに

光つてゐる。いつか機嫌を直した治修は大様に何度も頷いて見せた。

「好い。好い。そちの心底はわかつてゐる。そちのしたことは惡いことかも知れぬ。しかしそれも詮ないことぢや。唯この後は――」

治修は言葉を終らずに、ちらりと三右衛門の顔を眺めた。

「そちは一太刀打つた時に、數馬と申すことを知つたのぢやな。ではなぜ打ち果すのを控へなかつたのぢや？」

三右衛門は治修にかう問はれると、昂然と淺黑い顔を起した。その目には又前にあつた、不敵な赫きも宿つてゐる。

「それは打ち果さずには置かれませぬ。三右衛門は御家來ではございまする。とは云へ又侍でもございまする。數馬を氣の毒に思ひましても、狼藉者は氣の毒には思ひませぬ。」

（大正十二年十二月）

傳吉の敵打ち

これは孝子傳吉の父の仇を打つた話である。

傳吉は信州水内郡笹山村の百姓の一人息子である。傳吉の父は傳三と云ひ、「酒を好み、博奕を好み、喧嘩口論を好」んだと云ふから、まづ一村の人人にはならずもの扱ひをされてゐたらしい。（註一）母は傳吉を產んだ翌年、病死してしまつたと云ふものもある。或は又情夫の出來た爲に出奔してしまつたと云ふものもある。（註二）しかし事實はどちらにしろ、この話の始まる頃にはゐなくなつてゐたのに違ひない。

この話の始まりは傳吉のやつと十二歲になつた（一說によれば十五歲）天保七年の春である。傳吉は或日ふとしたことから、「越後浪人服部平四郞と云へるものの怒を買ひ、あはや斬りも捨てられん」とした。平四郞は當時文藏と云ふ、柏原の博徒のもとに用心棒をしてゐた劍客である。尤もこの「ふとしたこと」には二つ三つ異說のない訣でもない。

まづ田代玄甫の書いた「旅硯」の中の文によれば、傳吉は平四郎の髷ぶしへ凧をひつかけたと云ふことである。

なほ又傳吉の墓のある笹山村の慈照寺(淨土宗)は「孝子傳吉物語」と云ふ木版の小冊子を頒つてゐる。この「傳吉物語」によれば傳吉は何もした訣ではない。唯その釣をしてゐる所へ偶然來かかつた平四郎に釣道具を奪はれようとしただけである。

最後に小泉孤松の書いた「農家義人傳」の中の一篇によれば、平四郎は傳吉の索いてゐた馬に泥田へ蹴落されたと云ふことである。(註三)

兎に角平四郎は腹立ちまぎれに傳吉へ斬りかけたのに違ひない。傳吉は平四郎に追はれながら、父のゐる山畠へ逃げのぼつた。父の傳三はたつた一人山畠の桑の手入れをしてゐた。が、子供の危急を知ると、芋の穴の中へ傳吉を隱した。芋の穴と云ふのは芋を圍ふ一疊敷ばかりの土室である。傳吉はその穴の中に俵の藁をかぶつたまま、ぢつと息をひそめてゐた。

「平四郎忽ち追ひ至り、『老爺、老爺、小僧はどちへ行つたぞ』と尋ねけるに、傳三もとよりしたたかものなりければ、『あの道を走り行き候』とぞ欺きける。平四郎その方へ追ひ行かんとせしが、

ふと傳三の舌を吐きたるを見咎め、「土百姓めが、大膽にも□□□□□□□□□□（蟲食ひの爲に讀み難し）とて傳三を足蹴にかけければ、不敵の傳三腹を据ゑ兼ね、あり合ふ鍬をとるより早く、いざさらば土百姓の腕を見せんとぞ息まきける。

「いづれ劣らぬ曲者ゆゑ、しばく（シの誤か）は必死に打ち合ひけるが、……

「平四郎さすがに手だれなりければ、思ふままに傳三を疲らせつつ、打ちかくる鍬を引きはづすよと見る間に、傳三の肩さきへ一太刀浴びせゝ……

「逃げんとするを逃がしもやらず、拜み打ちに打ち放し、……

「傳吉のありかには氣づかずありけん、悠悠と刀など押し拭ひ、いづこともなく立ち去りけり。」

（旅硯）

腦貧血を起した傳吉のやつと穴の外へ這ひ出した時には、もう唯芽をふいた桑の根がたに傳三の死骸のあるばかりだつた。傳吉は死骸にとりすがつたなり、いつまでも一人ぢつとしてゐたが、涙は不思議にも全然睫毛を沾さなかつた。その代りに或感情の火のやうに心を焦がすのを感じた。それは父を見殺しにした彼自身に對する怒だつた。理が非でも仇を返さなければ消えることを知

らない怒だつた。

その後の傳吉の一生は殆どこの怒の爲に終始したと云つてもよい。傳吉は父を葬つた後、長窪にゐる叔父のもとに下男同様に住みこむことになつた。叔父は枡屋善作（一說によれば善兵衞）と云ふ、才覺の利いた旅籠屋である。（註四）傳吉は下男部屋に起臥しながら仇打ちの工夫を凝らしつづけた。この仇打の工夫に就いても、諸說のいづれが正しいかは少時疑問に附する外はない。

（一）「旅硯」、「農家義人傳」等によれば、傳吉は仇の誰であるかを知つてゐたことになつてゐる。しかし「傳吉物語」によれば、服部平四郎の名を知る迄に「三星霜を閲し」たらしい。なほ又皆川蜩庵の書いた「木の葉」の中の「傳吉がこと」も「數年を經たり」と斷つてゐる。

（二）「農家義人傳」、「本朝姑妄聽」（著者不明）等によれば、傳吉の劍法を學んだ師匠は平井左門と云ふ浪人である。左門は長窪の子供たちに讀書や習字を教へながら、請ふものには北辰夢想流の劍法も教へてゐたらしい。けれども「傳吉物語」「旅硯」「木の葉」等によれば、傳吉は劍法を自得したのである。「或は立ち木を讐と呼び、或は岩を平四郎と名づけ」、一心に練磨を積んだのである。

すると天保十年頃意外にも服部平四郎は突然往くへを晦ましてしまつた。尤もこれは傳吉につけ狙はれてゐることを知つたからではない。唯あらゆる浮浪人のやうに何處かへ姿を隱してしまつたのである。傳吉は勿論落膽した。一時は「神ほとけも讐の上を守らせ給ふか」とさへ歎息した。この上仇を返さうとすればまづ旅に出なければならない。しかし當てもない旅に出るのは現在の傳吉には不可能である。傳吉は烈しい絶望の餘り、だんだん遊蕩に染まり出した。「農家義人傳」はこの變化を「交を博徒に求む、蓋し讐の所在を知らんと欲する也」と說明してゐる。これも亦或は一解釋かも知れない。

傳吉は忽ち枡屋を逐はれ、唐丸の松と稱された博徒松五郎の乾兒になつた。爾來殆ど二十年ばかりは無賴の生活を送つてゐたらしい。(註五)「木の葉」はこの間に傳吉の枡屋の娘を誘拐したり、長窪の本陣何某へ强請に行つたりしたことを傳へてゐる。これも他の諸書に載せてないのを見れば、輕輕に眞僞を決することは出來ない。現に「農家義人傳」は「傳吉、一鄕の惡少と共に、屢、橫逆を行へりと云ふ。妄誕辨ずるに足らざる也。傳吉は父讐を復せんとするの孝子、豈、這般の無狀あらんや」と「木の葉」の記事を否定してゐる。けれども傳吉はこの間も仇打ちの一念は忘れたか

つたのであらう。比較的傳吉に同情を持たない皆川蜩庵さへかう書いてゐる。「傳吉は朋輩どもにも仇あることを云はず、仇あることを知りしものには自らも仇の名など知らざるやうに裝ひしとなり。深志あるものの所作なるべし。」が、歳月は徒らに去り、平四郎の往くへは不相變誰の耳にもはひらなかつた。

すると安政六年の秋、傳吉はふと平四郎の倉井村にゐることを發見した。尤も今度は昔のやうに兩刀を手挾んでゐたのではない。いつか髮を落した後、倉井村の地藏堂の堂守になつてゐたのである。傳吉は「冥助のかたじけなさ」を感じた。倉井村と云へば長窪から五里に足りない山村である。その上笹山村に鄰り合つてゐるから、小徑も知らないのは一つもない。(地圖參照)傳吉は現在平四郎の淨觀と云つてゐるのも確めた上、安政六年九月七日、菅笠をかぶり、旅合羽を着、相州無銘の長脇差をさし、たつた一人仇打ちの途に上つた。父の傳三の打たれた年からやつと二十三年目に本懷を遂げようとするのである。

傳吉の倉井村へはひつたのは戌の刻を少し過ぎた頃だつた。これは邪魔のはひらない爲にわざと夜を選んだからである。傳吉は夜寒の田舍道を山のかげにある地藏堂へ行つた。窓障子の破れ

から覗いて見ると、榾明りに照された壁の上に大きい影が一つ映つてゐた。しかし影の持主は覗いてゐる角度の關係上、どうしても見ることは出來なかつた。唯その大きい目前の影は疑ふ餘地のない坊主頭だつた。のみならず少時聞き澄ましてゐても、この侘しい堂守の外に人のゐるけはひは聞えなかつた。傳吉はまづ雨落ちの石へそつと菅笠を仰向けに載せた。それから靜かに旅合羽を脱ぎ、二つに疊んだのを笠の中に入れた。笠も合羽もいつの間にかしつとりと夜露にしめつてゐた。すると、——急に便通を感じた。傳吉はやむを得ず藪かげへはひり、漆の木の下へ用を足した。この一條を田代玄甫は「膽の太きこそ恐ろしけれ」と稱へ、小泉孤松は「傳吉の沈勇、極まれり矣」と嘆じてゐる。

身仕度を整へた傳吉は長脇差を引き拔いた後、がらりと地藏堂の門障子をあけた。圍爐裡の前には坊主が一人、樂樂と足を投げ出してゐた。坊主はこちらへ背を見せたまま、「誰ぢやい？」と唯聲をかけた。傳吉はちよいと拍子拔けを感じた。第一にかう云ふ坊主の態度は仇を持つ人とも思はれなかつた。第二にその後ろ姿は傳吉の心に描いてゐたよりもずつと憔悴を極めてゐた。傳吉は殆ど一瞬間人違ひではないかと云ふ疑ひさへ抱いた。しかしもう今となつてはためらつてゐる

られないのは勿論だつた。

傳吉は後ろ手に障子をしめ、「服部平四郎」と聲をかけた。坊主はそれでも驚きもせずに、不審さうに客を振り返つた。が、白刃の光りを見ると、咄嗟に法衣の膝を起した。榾火に照らされた坊主の顏は骨と皮ばかりになつた老人だつた。しかし傳吉はその顏の何處かにはつきりと服部平四郎を感じた。

「誰ぢやい、おぬしは？」

「傳三の倅の傳吉だ。怨みはおぬしの身に覺えがあるだらう。」

淨觀は大きい目をしたまま、默然と唯傳吉を見上げた。その顏に現れた感情は何とも云はれない恐怖だつた。傳吉は刀を構へながら、冷やかにこの恐怖を享樂した。

「さあ、その傳三の仇を返しに來たのだ。さつさと立ち上つて勝負をしろ。」

「何、立ち上れぢや？」

淨觀は見る見る微笑を浮べた。傳吉はこの微笑の中に何か妙に凄いものを感じた。

「おぬしは己が昔のやうに立ち上れると思うてゐるのか？　己は居ざりぢや。腰拔けぢや。」

傳吉は思はず一足すさつた。いつか彼の構へた刀はぶるぶる切先を震はしてゐた。淨觀はその容子を見やつたなり、齒の拔けた口をあからさまにもう一度かうつけ加へた。
「立ち居さへ自由にはならぬ體ぢや。」
「嘘をつけ。嘘を……」
傳吉は必死に罵りかけた。が、淨觀は反對に少しづつ冷靜に返り出した。
「何が嘘ぢや？　この村のものにも聞いて見るが好い。己は去年の大患ひから腰ぬけになつてしまうたのぢや。ぢやが、——」
淨觀はちよいと言葉を切ると、まともに傳吉の目の中を見つめた。
「ぢやが己は卑怯なことは云はぬ。如何にもおぬしの云ふ通り、おぬしの父親は己の手にかけた。この腰拔けでも打つと云ふなら、立派に己は打たれてやる。」
傳吉は短い沈默の間にいろいろの感情の群がるのを感じた。嫌惡、憐憫、侮蔑、恐怖、——さう云ふ感情の高低は徒に彼の太刀先を鈍らせる役に立つばかりだつた。傳吉は淨觀を睨んだぎり、打たうか打つまいかと逡巡してゐた。

「さあ、打て。」

淨觀は殆ど傲然と斜に傳吉へ肩を示した。その拍子にふと傳吉は酒臭い淨觀の息を感じた。と同時に昔の怒のむらむらと心に燃え上るのを感じた。それは父を見殺しにした彼自身に對する怒だつた。理が非でも仇を打たなければ消えることを知らない怒だつた。傳吉は武者震ひをするが早いか、いきなり淨觀を袈裟がけに斬つた。……

傳吉の見事に仇を打つた話は忽ち一鄕の評判になつた。公儀も勿論この孝子には格別の咎めを加へなかつたらしい。尤も豫め仇打ちの願書を奉ることを忘れてゐたから、褒美の沙汰だけはなかつたやうである。その後の傳吉を語ることは生憎この話の主題ではない。が、大體を明かにすれば、傳吉は維新後材木商を營み、失敗に失敗を重ねた揚句、とうとう精神に異狀を來した。死んだのは明治十年の秋、行年は丁度五十三である。（註六）しかしかう云ふ最期のことなどは全然諸書に傳はつてゐない。現に「孝子傳吉物語」は下のやうに話を結んでゐる。――

「傳吉はその後家富み榮え、樂しい晩年を送りました。積善の家に餘慶ありとは誠にこの事でありませう。南無阿彌陀佛。南無阿彌陀佛。」

（大正十二年十二月）

金將軍

或夏の日、笠をかぶつた僧が二人、朝鮮平安南道龍岡郡桐隅里の田舍道を歩いてゐた。この二人は唯の雲水ではない。實ははるばる日本から朝鮮の國を探りに來た加藤肥後守清正と小西攝津守行長とである。

二人はあたりを眺めながら、靑田の間を歩いて行つた。すると忽ち道ばたに農夫の子らしい童兒が一人、圓い石を枕にしたまま、すやすや寢てゐるのを發見した。加藤清正は笠の下から、ぢつとその童兒へ目を落した。

「この小倅は異相をしてゐる。」

鬼上官は二言と云はずに枕の石を蹴はづした。が、不思議にもその童兒は頭を土へ落す所か、石のあつた空間を枕にしたなり、不相變靜かに寢入つてゐる！

「愈この小倅は唯者ではない。」

清正は香染めの法衣に隱した戒刀の欛へ手をかけた。倭國の禍になるものは芽生えのうちに除かうと思つたのである。しかし行長は嘲笑ひながら、清正の手を押しとどめた。

「この小倅に何が出來るものか？　無益の殺生をするものではない。」

二人の僧はもう一度青田の間を步き出した。が、虎髯の生えた鬼上官だけはまだ何か不安さうに時時その童兒をふり返つてゐた。……

三十年の後、その時の二人の僧、――加藤清正と小西行長とは八兆八億の兵と共に朝鮮八道へ襲來した。家を燒かれた八道の民は親は子を失ひ、夫は妻を奪はれ、右往左往に逃げ惑つた。京城は既に陷つた。平壤も今は王土ではない。宣祖王はやつと義州へ走り、大明の援軍を待ちわびてゐる。もしこのまま手をつかねて倭軍の蹂躙に任せてゐたとすれば、美しい八道の山川を見る一望の燒野の原と變化する外はなかつたであらう。けれども天は幸にもまだ朝鮮を見捨てなかつた。と云ふのは昔青田の畔に奇蹟を現した一人の童兒、――金應瑞に國を救はせたからである。

金應瑞は義州の統軍亭へ駈けつけ、憔悴した宣祖王の龍顏を拜した。

「わたくしのかうして居りますからは、どうかお心をお休めなさりたうございまする。」

宣祖王は悲しさうに微笑した。

「倭將は鬼神よりも强いと云ふことぢや。もしそちに打てるものなら、まづ倭將の首を斷つてくれい。」

倭將の一人――小西行長はずつと平壤の大同館に妓生桂月香を寵愛してゐた。桂月香は八千の妓生のうちにも竝ぶもののない麗人である。が、國を憂ふる心は髮に插した玫瑰の花と共に、一日も忘れたと云ふことはない。その明眸は笑つてゐる時さへ、いつも長い睫毛のかげにもの悲しい光りをやどしてゐる。

或冬の夜、行長は桂月香に酌をさせながら、彼女の兄と酒盛りをしてゐた。彼女の兄も亦色の白い、風采の立派な男である。桂月香はふだんよりも一層媚を含みながら、絶えず行長に酒を勸めた。その又酒の中にはいつの間にか、ちやんと眠り薬が仕こんであつた。

少時の後、桂月香と彼女の兄とは醉ひ伏した行長を後にしたまま、そつと何處かへ姿を隱した。行長は翠金の帳の外に祕藏の寶劍をかけたなり、前後も知らずに眠つてゐた。尤もこれは必しも

行長の油斷したせゐばかりではない。この帳は又鈴陣である。誰でも帳中に入らうとすれば、帳をめぐつた寶鈴は忽ちけたたましい響と共に、行長の眠を破つてしまふ。唯行長は桂月香のこの寶鈴も鳴らないやうに、いつの間にか鈴の穴へ綿をつめたのを知らなかつたのである。

桂月香と彼女の兄とはもう一度其處へ歸つて來た。彼女は今夜は繡のある裳に竈の灰を包んでゐた。彼女の兄も、――いや彼女の兄でない。王命を奉じた金應瑞は高高と袖をからげた手に、青龍刀を一ふり提げてゐた。彼等は靜かに行長のゐる翠金の帳へ近づかうとした。すると行長の寶劍はおのづから鞘を離れるが早いか、丁度翼の生えたやうに金將軍の方へ飛びかかつて來た。しかし金將軍は少しも騷がず、咄嗟にその寶劍を目がけて一口の唾を吐きかけた。寶劍は唾にまみれると同時に、忽ち神通力を失つたのか、ばたりと床の上へ落ちてしまつた。

金應瑞は大いに吼りながら、青龍刀の一揮ひに行長の首を打ち落した。が、この恐しい倭將の首は口惜しさうに牙を嚙み嚙み、もとの體へ舞ひ戾らうとした。この不思議を見た桂月香は裳の中へ手をやるや否や、行長の首の斬り口へ幾掴みも灰を投げつけた。首は何度飛び上つても、灰だらけになつた斬り口へはとうとう一度も据わらなかつた。

けれども首のない行長の體は手さぐりに寶劍を拾つたと思ふと、金將軍へそれを投げ打ちにした。不意を打たれた金將軍は桂月香を小腋に抱へたまま、高い梁の上へ躍り上つた。が、行長の投げつけた劍は宙に飛んだ金將軍の足の小指を斬り落した。

その夜も明けないうちである。王命を果した金將軍は桂月香を背負ひながら、人氣のない野原を走つてゐた。野原の涯には殘月が一痕、丁度暗い丘のかげに沈まうとしてゐる所だつた。金將軍はふと桂月香の姙娠してゐることを思ひ出した。倭將の子は毒蛇も同じことである。今のうちに殺さなければ、どう云ふ大害を醸すかも知れない。かう考へた金將軍は三十年前の淸正のやうに、桂月香親子を殺すより外に仕かたはないと覺悟した。

英雄は古來センティメンタリズムを脚下に蹂躙する怪物である。金將軍は忽ち桂月香を殺し、腹の中の子供を引ずり出した。殘月の光りに照らされた子供はまだ模糊とした血塊だつた。が、その血塊は身震ひをすると、突然人間のやうに大聲を擧げた。

「おのれ、もう三月待てば、父の讐をとつてやるものを！」

聲は水牛の吼えるやうに薄暗い野原中に響き渡つた。同時に又一痕の殘月も見る見る丘のかげ

に沈んでしまつた。………

これは朝鮮に傳へられる小西行長の最後である。行長は勿論征韓の役の陣中には命を落さなかつた。しかし歷史を粉飾するのは必しも朝鮮ばかりではない。日本も亦小兒に敎へる歷史は、——或は又小兒と大差のない日本男兒に敎へる歷史はかう云ふ傳說に充ち滿ちてゐる。たとへば日本の歷史敎科書は一度もかう云ふ敗戰の記事を揭げたことはないではないか？

「大唐の軍將、戰艦一百七十艘を率ゐて白村江（朝鮮忠淸道舒川縣）に陣列れり。戊申（天智天皇の二年秋八月二十七日）日本の船師、始めて至り、大唐の船師と合戰ふ。日本利あらずして退く。己酉（二十八日）……更に日本の亂伍、中軍の卒を率ゐて進みて大唐の軍を伐つ。大唐、便ち左右より船を夾みて繞り戰ふ。須臾の際に官軍敗績れぬ。水に赴きて溺死る者衆し。艫舳、廻旋することを得ず。」（日本書紀）

如何なる國の歷史もその國民には必ず光榮ある歷史である。何も金將軍の傳說ばかり一粲に價する次第ではない。

（大正十三年一月）

第四の夫から

この手紙は印度のダアヂリンのラアマ・チャブヅン氏へ出す手紙の中に封入し、氏から日本へ送つて貰ふ筈である。無事に君の手へ渡るかどうか、多少の心配もない訣ではない。しかし萬一渡らなかつたにしろ、君は格別僕の手紙を豫想してゐるとも思はれないからその點だけは甚だ安心してゐる。が、もしこの手紙を受け取つたとすれば、君は必ず僕の運命に一驚を喫せずにはゐられないであらう。第一に僕はチベツトに住んでゐる。第二に僕は支那人になつてゐる。第三に僕は三人の夫と一人の妻を共有してゐる。

この前君へ手紙を出したのはダアヂリンに住んでゐた頃である。僕はもうあの頃から支那人にだけはなりすましてゐた。元來天下に國籍位、面倒臭いお荷物はない。唯支那と云ふ國籍だけは殆ど有無を問はれないだけに、頗る好都合に出來上つてゐる。君はまだ高等學校にゐた時、僕に「さまよへる猶太人」と云ふ渾名をつけたのを覺えてゐるであらう。實際僕は君のいつた通り、「さ

まよへる猶太人」に生れついたらしい。が、このチベツトのラツサだけは甚だ僕の氣に入つてゐる。といふのは何も風景だの、氣候だのに愛着のある訣ではない。實は怠惰を惡德としない美風を德としてゐるのである。

博學なる君はパンデン・アアヂシヤのラツサに與へた名を知つてゐるであらう。しかしラツサは必しも食糞餓鬼の都ではない。町は寧ろ東京よりも住み心の好い位である。唯ラツサの市民の怠惰は天國の壯觀といはなければならぬ。けふも妻は不相變麥藁の散らばつた門口にぢつと膝をかかへたまま靜かに午睡を貪つてゐる。これは僕の家ばかりではない。どの家の門口にも二三人づつは必ず又誰か居睡りをしてゐる。かういふ平和に滿ちた景色は世界の何處にも見られないであらう。しかも彼等の頭の上には、――ラマ教の寺院の塔の上にはかすかに蒼ざめた太陽が一つ、ラツサを取り卷いた峯々の雪をぼんやりかがやかせてゐるのである。

僕は少くとも數年はラツサに住まうと思つてゐる。それには怠惰の美風の外にも、多少は妻の容色に心を惹かれてゐるのかも知れない。妻は名はダアワといひ、近隣でも美人と評されてゐる。脊は人並みよりは高い位であらう。顏はダアワといふ名前の通り、(ダアワは月の意味である。)垢

の下にも色の白い、始終糸のやうに目を細めた、妙にもの優しい女である。夫の僕とも四人あることは前にもちよつと書いて置いた。第一の夫は行商人、第二の夫は歩兵の伍長、第三の夫はラマ教の佛畫師、第四の夫は僕である。僕も亦この頃は無職業ではない。兎に角器用を看板とした一かどの理髪師になり了せてゐる。

謹嚴なる君は僕のやうに、一妻多夫に甘んずるものを輕蔑せずにはゐられないであらう。が、僕にいはせれば、あらゆる結婚の形式は唯便宜に據つたものである。一夫一妻の基督教徒は必ずしも異教徒たる僕等よりも道徳の高い人間ではない。のみならず事實上の一妻多夫は事實上の一夫多妻と共に、如何なる國にもある筈である。實際又一夫一妻はチベットにも全然ない訣ではない。唯ルクソオ・ミンヅの名のもとに(ルクソオ・ミンヅは破格の意味である。)輕蔑されてゐるだけである。丁度僕等の一妻多夫も文明國の輕蔑を買つてゐるやうに。

僕は三人の夫と共に、一人の妻を共有することに少しも不便を感じてゐない。他の三人も亦同様であらう。妻はこの四人の夫をいづれも過不足なしに愛してゐる。僕はまだ日本にゐた時、やはり三人の檀那と共に、一人の藝者を共有したことがあつた。その藝者に比べれば、ダアワは何

といふ女菩薩であらう。現に佛畫師はダアワのことを蓮華夫人と渾名してゐる。實際川ばたの枝垂れ柳の下に乳のみ兒を抱いてゐる妻の姿は圓光を負つてゐるといはなければならぬ。子供はもう六歳をかしらに、乳のみ兒とも三人出來てゐる。勿論誰はどの夫を父にするなどといふことはない。第一の夫はお父さんと呼ばれ、僕等三人は同じやうに皆叔父さんと呼ばれてゐる。

しかしダアワも女である。まだ一度も過ちを犯さなかつたといふ訣ではない。もう今では二年ばかり前、珊瑚珠などを賣る商人の手代と僕等を欺いてゐたこともある。それを發見した第一の夫はダアワの耳へはひらないやうに僕等に善後策を相談した。すると一番憤つたのは第二の夫の伍長である。彼は直ちに二人の鼻を削ぎ落してしまへと主張し出した。溫厚なる君はこの言葉の殘酷を咎めるのに違ひない。が、鼻を削ぎ落すのはチベツトの私刑の一つである。(たとへば文明國の新聞攻撃のやうに。)第三の夫の佛畫師は、唯如何にも當惑したやうに涙を流してゐるばかりだつた。僕はその時三人の夫に手代の鼻を削ぎ落した後、ダアワの處置は悔恨の情の如何に任せるといふ提議をした。勿論誰もダアワの鼻を削ぎ落してしまひたいと思ふものはない。第一の夫の行商人は忽ち僕の說に贊成した。佛畫師は不幸なる手代の鼻にも多少の憐憫を感じてゐた

らしい。しかし伍長を怒らせない爲にやはり僕に同意を表した。伍長も——伍長は少時考へた揚げ句、太い息を一つすると、「子供の爲もあるものだから」と、しぶしぶ僕等に從ふことにした。

　僕等四人はその翌日、容易に手代を縛り上げた。それから伍長は僕等の代理に、僕の剃刀を受け取るなり、無造作に彼の鼻を削ぎ落した。手代は勿論惡態をついたり、伍長の手へ噛みついたり、悲鳴を擧げたりしたのに違ひない。しかし鼻を削ぎ落した後、血止めの藥をつけてやつた行商人や僕などには泣いて感謝したことも事實である。

　賢明なる君はその後のこともおのづから推察出來るであらう。ダアワは爾來貞淑に僕等四人を愛してゐる。僕等も、——それは言はないでも好い。現にきのふは伍長さへしみじみと僕にかう言つてゐた。——「今になつて考へて見ると、ダアワの鼻を削ぎ落さなかつたのは實際不幸中の幸福だつたね。」

　丁度今午睡から覺めたダアワは僕を散歩につれ出さうとしてゐる。では萬里の海彼にゐる君の幸福を祈ると共に、一まづこの手紙も終ることにしよう。ラツサは今家々の庭に桃の花のまつ盛りである。けふは幸ひ埃風も吹かない。僕等はこれから監獄の前へ、從兄妹同志結婚した不倫の

男女の曝しものを見物に出かけるつもりである。……

（大正十三年三月）

或戀愛小說

——或は「戀愛は至上なり」——

或婦人雜誌社の面會室。

主筆　でつぷり肥つた四十前後の紳士。

堀川保吉　主筆の肥つてゐるだけに瘦せた上にも瘦せて見える三十前後の、——ちよつと一口には形容出來ない。が、兎に角紳士と呼ぶのに躊躇することだけは事實である。

主筆　今度は一つうちの雜誌に小說を書いては頂けないでせうか？　どうもこの頃は讀者も高級になつてゐますし、在來の戀愛小說には滿足しないやうになつてゐますから、……もつと深い人間性に根ざした、眞面目な戀愛小說を書いて頂きたいのです。

保吉　それは書きますよ。實はこの頃婦人雜誌に書きたいと思つてゐる小說があるのです。

主筆　さうですか？　それは結構です。もし書いて頂ければ、大いに新聞に廣告しますよ。「堀川氏の筆に成れる、哀婉極りなき戀愛小說」とか何とか廣告しますよ。

保吉　「哀婉極りなき」？　しかし僕の小說は「戀愛は至上なり」と云ふのですよ。

主筆　すると戀愛の讃美ですね。それは愈結構です。厨川博士の「近代戀愛論」以來、一般に青年男女の心は戀愛至上主義に傾いてゐますから。……勿論近代的戀愛でせうね？

保吉　さあ、それは疑問ですね。近代的懷疑とか、近代的盜賊とか、近代的白髮染めとか――さう云ふものは確かに存在するでせう。しかしどうも戀愛だけはイザナギイザナミの昔以來餘り變らないやうに思ひますが。

主筆　それは理論の上だけですよ。たとへば三角關係などは近代的戀愛の一例ですからね。少くとも日本の現狀では。

保吉　ああ、三角關係ですか？　それは僕の小說にも三角關係は出て來るのです。……ざつと筋を話して見ませうか？

主筆　さうして頂ければ好都合です。

保吉　女主人公は若い奧さんなのです。外交官の夫人なのです。勿論東京の山の手の邸宅に住んでゐるのですね。脊のすらりとした、ものごしの優しい、いつも髮は――一體讀者の要求する

のはどう云ふ髪に結つた女主人公ですか？

主筆　耳隱しでせう。

保吉　ぢや耳隱しにしませう。いつも髪を耳隱しに結つた、色の白い、目の冴え冴えしたちよつと脣に癖のある、――まあ活動寫眞にすれば栗島澄子の役所なのです。夫の外交官も新時代の法學士ですから、新派悲劇じみたわからずやぢやありません。學生時代にはベエスボオルの選手だつた、その上道樂に小說位は見る、色の淺黑い好男子なのです。新婚の二人は幸福に山の手の邸宅に暮してゐる。一しよに音樂會へ出かけることもある。銀座通りを散歩することもある。……

……

主筆　勿論震災前でせうね？

保吉　ええ、震災のずつと前です。……一しよに音樂會へ出かけることもある。銀座通りを散歩することもある。或は又西洋間の電燈の下に無言の微笑ばかり交はすこともある。女主人公はこの西洋間を「わたしたちの巢」と名づけてゐる。壁にはルノアルやセザンヌの複製などもかかつてゐる。ピアノも黑い胴を光らせてゐる。鉢植ゑの椰子も葉を垂らしてゐる。――と云ふと多少

氣が利いてゐますが、家賃は案外安いのですよ。

主筆　さう云ふ說明は入らないでせう。少くとも小說の本文には。

保吉　いや、必要ですよ。若い外交官の月給などは高の知れたものですからね。

主筆　ぢや華族の息子におしなさい。尤も華族ならば伯爵か子爵ですね。どう云ふものか公爵や侯爵は餘り小說には出て來ないやうです。

保吉　それは伯爵の息子でもかまひません。兎に角西洋間さへあれば好いのです。その西洋間か、銀座通りか、音樂會かを第一回にするのですから。……しかし妙子は――これは女主人公の名前ですよ。――音樂家の達雄と懇意になつた以後、次第に或不安を感じ出すのです。達雄は妙子を愛してゐる、――さう女主人公は直覺するのですね。のみならずこの不安は一日ましにだんだん高まるばかりなのです。

主筆　達雄はどう云ふ男なのですか？

保吉　達雄は音樂の天才です。ロオランの書いたジャン・クリストフとワッセルマンの書いたダニエル・ノオトハフトとを一丸にしたやうな天才です。が、まだ貧乏だつたり何かする爲に誰

にも認められてゐないのですがね。これは僕の友人の音樂家をモデルにするつもりです。尤も僕の友人は美男ですが、達雄は美男ぢやありません。顏は一見ゴリラに似た、東北生れの野蠻人なのです。しかし目だけは天才らしい閃きを持つてゐるのですよ。彼の目は一塊の炭火のやうに不斷の熱を孕んでゐる。――さう云ふ目をしてゐるのですよ。

主筆　天才はきつと受けませう。

保吉　しかし妙子は外交官の夫に不足のある訣ではないのです。いや、寧ろ前よりも熱烈に夫を愛してゐるのです。夫も亦妙子を信じてゐる。これは云ふ迄もないことでせう。その爲に妙子の苦しみは一層つのるばかりなのです。

主筆　つまりわたしの近代的と云ふのはさう云ふ戀愛のことですよ。

保吉　達雄は又毎日電燈さへつけば、必ず西洋間へ顏を出すのです。それも夫のゐる時ならばまだしも苦勞はないのですが、妙子のひとり留守をしてゐる時にもやはり顏を出すのでせう。妙子はやむを得ずさう云ふ時にはピアノばかり彈かせるのです。尤も夫のゐる時でも、達雄は大抵ピアノの前へ坐らないことはないのですが。

主筆　そのうちに戀愛に陷るのですか？

保吉　いや、容易に陷らないのです。しかし或二月の晩、達雄は急にシュウベルトの「シルヴィアに寄する歌」を彈きはじめるのです。あの流れる炎のやうに情熱の籠つた歌ですね。妙子は大きい椰子の葉の下にぢつと耳を傾けてゐる。そのうちにだんだん達雄に對する彼女の愛を感じはじめる。同時に又目の前へ浮かび上つた金色の誘惑を感じはじめる。もう五分、――いや、もう一分たちさへすれば、妙子は達雄の腕の中へ體を投げてゐたかも知れません。其處へ――丁度その曲の終りかかつた處へ幸ひ主人が歸つて來るのです。

主筆　それから？

保吉　それから一週間ばかりたつた後、妙子はとうとう苦しさに堪へ兼ね、自殺をしようと決心するのです。が、丁度妊娠してゐる爲に、それを斷行する勇氣がありません。そこで達雄に愛されてゐることをすつかり夫に打ち明けるのです。尤も夫を苦しめないやうに、彼女も達雄を愛してゐることだけは告白せずにしまふのですが。

主筆　それから決鬪にでもなるのですか？

保吉　いや、唯夫は達雄の來た時に冷かに訪問を謝絶するのです。達雄は默然と脣を嚙んだまま、ピアノばかり見つめてゐる。妙子は戸の外に佇んだなりぢつと忍び泣きをこらへてゐる。――その後二月とたたないうちに、突然官命を受けた夫は支那の漢口の領事館へ赴任することになるのです。

主筆　妙子も一しよに行くのですか？

保吉　勿論一しよに行くのです。しかし妙子は立つ前に達雄へ手紙をやるのです。「あなたの心には同情する。が、わたしにはどうすることも出來ない。お互に運命だとあきらめませう。――大體さう云ふ意味ですがね。それ以來妙子は今日までずつと達雄に會はないのです。

主筆　ぢや小說はそれぎりですね。

保吉　いや、もう少し殘つてゐるのです。妙子は漢口へ行つた後も、時時達雄を思ひ出すのですね。のみならずしまひには夫よりも實は達雄を愛してゐたと考へるやうになるのですね。好いですか？　妙子を圍んでゐるのは寂しい漢口の風景ですよ。あの唐の崔顥の詩に「晴川歷歷漢陽樹　芳草萋萋鸚鵡洲」と歌はれたことのある風景ですよ。妙子はとうとうもう一度、――一年ば

かりたつた後ですが、――達雄へ手紙をやるのです。「わたしはあなたを愛してゐた。今でもあなたを愛してゐる。どうか自ら欺いてゐたわたしを可哀さうに思つて下さい。」――さう云ふ意味の手紙をやるのです。その手紙を受けとつた達雄は……

主筆　早速支那へ出かけるのでせう。

保吉　到底そんなことは出來ません。何しろ達雄は飯を食ふ爲に、淺草の或活動寫眞館のピアノを彈いてゐるのですから。

主筆　それは少し殺風景ですね。

保吉　殺風景でも仕かたはありません。達雄は場末のカフエのテエブルに妙子の手紙の封を切るのです。窓の外の空は雨になつてゐる。達雄は放心したやうにぢつと手紙を見つめてゐる。何だかその行の間に妙子の西洋間が見えるやうな氣がする。ピアノの蓋に電燈の映つた「わたしたちの巣」が見えるやうな氣がする。……

主筆　ちよつともの足りない氣もしますが、兎に角近來の傑作ですよ。是非それを書いて下さい。

保吉　實はもう少しあるのですが。

主筆　おや、まだおしまひぢやないのですか？

保吉　ええ、そのうちに達雄は笑ひ出すのです。と思ふと又忌いましさうに「畜生」などと怒鳴り出すのです。

主筆　ははあ、發狂したのですね。

保吉　何、莫迦莫迦しさに業を煮やしたのです。それは業を煮やす筈でせう。元來達雄は妙子などを少しも愛したことはないのですから。……

主筆　しかしそれぢや。……

保吉　達雄は唯妙子の家へピアノを彈きたさに行つたのですよ。云はばピアノを愛しただけなのですよ。何しろ貧しい達雄にはピアノを買ふ金などはない筈ですからね。

主筆　ですがね、堀川さん。

保吉　しかし活動寫眞館のピアノでも彈いてゐられた頃はまだしも達雄には幸福だつたのです。達雄はこの間の震災以來、巡査になつてゐるのですよ。護憲運動のあつた時などは善良なる東京

市民の爲に袋叩きにされてゐるのですよ。唯山の手の巡回中、稀にピアノの音でもすると、その家の外に佇んだまま、はかない幸福を夢みてゐるのですよ。

主筆　それぢや折角の小說は……

保吉　まあ、お聞きなさい。妙子はその間も漢口の住ひに不相變達雄を思つてゐるのです。いや漢口ばかりぢやありません。外交官の夫の轉任する度に、上海だの北京だの天津だのへ一時の住ひを移しながら、不相變達雄を思つてゐるのです。勿論もう震災の頃には大勢の子もちになつてゐるのですよ。ええと、——年兒に雙兒を生んだものですから、四人の子もちになつてゐるのですよ。おまけに又夫はいつの間にか大酒飮みになつてゐるのですよ。それでも豚のやうに肥つた妙子はほんたうに彼女と愛し合つたものは達雄だけだつたと思つてゐるのですね。戀愛は實際至上なりですね。さもなければ到底妙子のやうに幸福になれる筈はありません。少くとも人生のぬかるみを憎まずにゐることは出來ないでせう。——どうです、かう云ふ小說は？

主筆　堀川さん。あなたは一體眞面目なのですか？

保吉　ええ、勿論眞面目です。世間の戀愛小說を御覽なさい。女主人公はマリアでなければク

レオパトラぢやありませんか？　しかし人生の女主人公は必しも貞女ぢやないと同時に、必しも又姪婦でもないのです。もし人の好い讀者の中に、一人でもああ云ふ小說を眞に受ける男女があつて御覽なさい。尤も戀愛の圓滿に成就した場合は別問題ですが、萬一失戀でもした日には必ず莫迦莫迦しい自己犧牲をするか、さもなければもつと莫迦莫迦しい復讐的精神を發揮しますよ。しかもそれを當事者自身は何か英雄的行爲のやうにうぬ惚れ切つてするのですからね。けれどもわたしの戀愛小說には少しもさう云ふ惡影響を普及する傾向はありません。おまけに結末は女主人公の幸福を讚美してゐるのです。

主筆　常談でせう。……兎に角うちの雜誌には到底それは載せられません。

保吉　さうですか？　ぢや何處か外へ載せて貰ひます。廣い世の中には一つ位、わたしの主張を容れてくれる婦人雜誌もある筈ですから。

保吉の豫想の誤らなかつた證據はこの對話の此處に載つたことである。

（大正十三年三月）

文章

「堀川さん。弔辭を一つ作つてくれませんか？　土曜日に本多少佐の葬式がある、――その時に校長の讀まれるのですが、……」

藤田大佐は食堂を出しなにかう保吉へ話しかけた。堀川保吉はこの學校の生徒に英吉利語の譯讀を教へてゐる。が、授業の合ひ間には弔辭を作つたり、教科書を編んだり、御前講演の添削をしたり、外國の新聞記事を飜譯したり、――さう云ふことも時時はやらなければならぬ。さう云ふことを又云ひつけるのはいつもこの藤田大佐である。大佐はやつと四十位であらう。色の淺黑い、肉の落ちた、神經質らしい顏をしてゐる。保吉は大佐よりも一足あとに薄暗い廊下を歩みながら、思はず「おや」と云ふ聲を出した。

「本多少佐は死なれたんですか？」

大佐も「おや」と云ふやうに保吉の顏をふり返つた。保吉はきのふずる休みをした爲、本多少佐

の頓死を傳へた通告書を見ずにしまつたのである。
「きのふの朝殁くなられたです。腦溢血だと云ふことですが、……ぢや金曜日までに作つて來て下さい。丁度あさつての朝までにですね。」
「ええ、作ることは作りますが、……」
悟りの早い藤田大佐は忽ち保吉の先まはりをした。
「弔辭を作られる參考には、後ほど履歴書をおとどけしませう。」
「しかしどう云ふ人だつたでせう？　僕は唯本多少佐の顏だけ見覺えてゐる位なんですが、……」
「さあ、兄弟思ひの人だつたですね。それからと……それからいつもクラス・ヘッドだつた人です。あとはどうか名筆を揮つて置いて下さい。」
二人はもう黄色に塗つた科長室の扉の前に立つてゐた。藤田大佐は科長と呼ばれる副校長の役をしてゐるのである。保吉はやむを得ず弔辭に關する藝術的良心を抛擲した。
「資性穎悟と兄弟に友にですね。ぢやどうにかこじつけませう。」
「どうかよろしくお願ひします。」

大佐に別れた保吉は喫煙室へ顏を出さずに、誰も人のゐない教官室へ歸つた。十一月の日の光りは丁度窓を右にした保吉の机を照らしてゐる。彼はその前へ腰をおろし、一本のバットへ火を移した。弔辭はもう今日までに二つばかり作つてゐる。最初の弔辭は盲腸炎になつた重野少尉の爲に書いたものだつた。當時學校へ來たばかりの彼は重野少尉とはどう云ふ人か、顏さへはつきりした記憶はなかつた。しかし弔辭の處女作には多少の興味を持つてゐたから、「悠悠たるかな、白雲」などと唐宋八家文じみた文章を草した。その次のは不慮の溺死を遂げた木村大尉の爲に書いたものだつた。これも木村大尉その人とは毎日同じ避暑地からこの學校の所在地へ汽車の往復を共にしてゐた爲、素直に哀悼の情を表することが出來た。が、今度の本多少佐は唯食堂へ出る度に、禿げ鷹に似た顏を見かけただけである。のみならず弔辭を作ることには興味も何も持つてゐない。云はば現在の堀川保吉は註文を受けた葬儀社である。何月何日の何時までに龍燈や造花を持つて來いと云はれた精神生活上の葬儀社である。――保吉はバットを啣へたまま、だんだん憂鬱になりはじめた。……

「堀川教官。」

保吉は夢からさめたやうに、机の側に立つた田中中尉を見上げた。田中中尉は口髭の短い、まろまろと頤の二重になつた、愛敬のある顔の持主である。

「これは本多少佐の履歴書ださうです。科長から今堀川教官へお渡ししてくれと云ふことでしたから。」

田中中尉は机の上へ罫紙を何枚も綴ぢたのを出した。保吉は「はあ」と答へたぎり、茫然と罫紙へ目を落した。罫紙には敍任の年月ばかり細かい楷書を竝べてゐる。これは唯の履歴書ではない。文官と云はず武官と云はず、あらゆる天下の官吏なるものの一生を暗示する象徴である。……

「それから一つ伺ひたい言葉があるのですが、――いや、海上用語ぢやありません。小説の中にあつた言葉なんです。」

中尉の出した紙切れには何か横文字の言葉が一つ、青鉛筆の痕を殘してゐる。Masochism――保吉は思はず紙切れから、いつも頬に赤みのさした中尉の童顔へ目を移した。

「これですか？　このマソヒズムと云ふ……」

「ええ、どうも普通の英和辭書には出て居らんやうに思ひますが。」

保吉は浮かない顏をしたまま、マソヒズムの意味を說明した。

「いやあ、さう云ふことですか！」

田中中尉は不相變晴ればれした微笑を浮かべてゐる。かう云ふ自足した微笑位、苛出たしい氣もちを煽るものはない。殊に現在の保吉は實際この幸福な中尉の顏へクラフト・エビングの全語彙を叩きつけてやりたい誘惑さへ感じた。

「この言葉の起源になつた、――ええと、マゾフと云ひましたな。その人の小說は巧いんですか？」

「まあ、悉く愚作ですね。」

「しかしマゾフと云ふ人は兎に角興味のある人格なんですな？」

「マゾフですか？　マゾフと云ふやつは莫迦ですよ。何しろ政府は國防計畫よりも私娼保護に金を出せと熱心に主張したさうですからね。」

マゾフの愚を知つた田中中尉はやつと保吉を解放した。尤もマゾフは國防計畫よりも私娼保護を重んじたかどうか、その邊は甚だはつきりしない。多分はやはり國防計畫にも相當の敬意を拂

つてゐたであらう。しかしそれをさう云はなければ、この樂天家の中尉の頭に變態性慾の莫迦莫迦しい所以を刻みつけてしまふことは不可能だからである。……

保吉は一人になつた後、もう一本バットに火をつけながら、ぶらぶら室內を歩みはじめた。彼の英吉利語を敎へてゐることは前にも書いた通りである。が、それは本職ではない。少くとも本職とは信じてゐない。彼は兎に角創作を一生の事業と思つてゐる。現に敎師になつてからも、大抵二月に一篇づつは短い小說を發表して來た。その一つ、――サン・クリストフの傳說を慶長版の伊曾保物語風に丁度半分ばかり書き直したものは今月の或雜誌に載せられてゐる。來月は又同じ雜誌に殘りの半分を書かなければならぬ。今月ももう七日とすると、來月號の締切り日は――弔辭などを書いてゐる場合ではない。晝夜兼行に勉强しても、元來仕事に手間のかかる彼には出來上るかどうか疑問である。保吉は愈弔辭に對する忌いましさを感じ出した。

この時大きい柱時計の靜かに十二時半を報じたのは云はばニュウトンの足もとへ林檎の落ちたのも同じことである。保吉の授業の始まるまではもう三十分待たなければならぬ。その間に弔辭を書いてしまへば、何も苦しい仕事の合ひ間に「悲しいかな」を考へずとも好い。尤もたつた三十

分の間に資性穎悟にして兄弟に友なる本多少佐を追悼するのは多少の困難を伴つてゐる。が、そんな困難に辟易するやうでは、上は柿本人麻呂から下は武者小路實篤に至る語彙の豐富を誇つてゐたのも悉く空威張りになつてしまふ。保吉は忽ち机に向ふと、インク壺へペンを突こむが早いか、試驗用紙のフウルス・カツプへ一氣に弔辭を書きはじめた。

× × × × × ×

本多少佐の葬式の日は少しも懸け價のない秋日和だつた。保吉はフロツク・コオトにシルク・ハツトをかぶり、十二三人の文官教官と葬列のあとについて行つた。その中にふと振り返ると、校長の佐佐木中將を始め、武官では藤田大佐だの、文官では粟野教官だのは彼よりも後ろに歩いてゐる。彼は大いに恐縮したから、直後ろにゐた藤田大佐へ「どうかお先へ」と會釋をした。が、大佐は「いや」と云つたぎり、妙ににやにや笑つてゐる。すると校長と話してゐた、口髭の短い粟野教官はやはり微笑を浮かべながら、常談とも眞面目ともつかないやうにかう保吉へ注意をした。

「堀川君。海軍の禮式ぢやね、高位高官のものほどあとに下るんだから、君は到底藤田さんの後

塵などは拜せないですよ。」
保吉はもう一度恐縮した。成程さう云はれて見れば、あの愛敬のある田中中尉などはずつと前の列に加はつてゐる。保吉は匆匆大股に中尉の側へ歩み寄つた。中尉はけふも葬式よりは婚禮の供にでも立つたやうに欣欣と保吉へ話しかけた。
「好い天氣ですなあ。……あなたは今葬列に加はれたんですか？」
「いや、ずつと後ろにゐたんです。」
保吉はさつきの顚末を話した。中尉は勿論葬式の威厳を傷けるかと思ふほど笑ひ出した。
「始めてですか、葬式に來られたのは？」
「いや、重野少尉の時にも、木村大尉の時にも出て來た筈です。」
「さう云ふ時にはどうされたですか？」
「勿論校長や科長よりもずつとあとについてゐたんでせう。」
「そりやどうも、――大將格になつた訣ですな。」
葬列はもう寺に近い場末の町にはひつてゐる。保吉は中尉と話しながら、葬式を見に出た人人

にも目をやることを忘れなかつた。この町の人人は子供の時から無數の葬式を見てゐる爲、葬式の費用を見積ることに異常の才能を生じてゐる。現に夏休みの一日前に數學を教へる桐山教官のお父さんの葬列の通つた時にも、或家の軒下に佇んだ甚平一つの老人などは澁團扇を額へかざしたまま「ははあ、十五圓の葬ひだな」と云つた。けふも、――けふは生憎あの時のやうに誰もその才能を發揮しない。が、大本教の神主が一人、彼自身の子供らしい白つ子を肩車にしてゐたのは今日思ひ出しても奇觀である。保吉はいつかこの町の人人を「葬式」とか何とか云ふ短篇の中に書いて見たいと思つたりした。

「今月は何とかほろゝ上人と云ふ小說をお書きですな。」

愛想の好い田中中尉はしつきりなしに舌をそよがせてゐる。

「あの批評が出てゐましたぜ。けさの時事、――いや、讀賣でした。後ほど御覽に入れませう。外套のポケットにはひつてゐますから。」

「いや、それには及びません。」

「あなたは批評をやられんやうですな。わたしは又批評だけは書いて見たいと思つてゐるんです。

例へばシエクスピイアのハムレットですね。あのハムレットの性格などは……」

保吉は忽ち大悟した。天下に批評家の充滿してゐるのは必しも偶然ではなかつたのである。

葬列はとうとう寺の門へはひつた。寺は後ろの松林の間に凪いだ海を見下してゐる。ふだんは定めし閑靜であらう。が、今は門の中は葬列の先に立つて來た學校の生徒に埋められてゐる。保吉は庫裡の玄關に新しいニナメルの靴を脫ぎ、日當りの好い長廊下を疊ばかり新しい會葬者席へ通つた。

會葬者席の向う側は親族席になつてゐる。其處の上座に坐つてゐるのは本多少佐のお父さんであらう。やはり禿げ鷹に似た顏はすつかり頭の白いだけに、令息よりも一層慓悍である。その次に坐つてゐる大學生は勿論弟に違ひあるまい。三番目のは妹にしては器量の好過ぎる娘さんである。四番目のは――兎に角四番目以後の人にはこれと云ふ特色もなかつたらしい。こちら側の會葬者席にはまづ校長が坐つてゐる。その次には科長が坐つてゐる。保吉は丁度科長のま後ろ、――會葬者席の二列目にズボンの尻を据ゑることにした。と云つても科長や校長のやうにちやんと膝を揃へたのではない。容易に痺れの切れないやうに大胡坐をかいてしまつたのである。

讀經は直にはじまつた。保吉は新內を愛するやうに諸宗の讀經をも愛してゐる。が、東京乃至東京近在の寺は不幸にも讀經の上にさへ大抵は墮落を示してゐるらしい。昔は金峯山の藏王をはじめ、熊野の權現、住吉の明神なども道命阿闍梨の讀經を聽きに法輪寺の庭へ集まつたさうである。しかしさう云ふ微妙音はアメリカ文明の渡來と共に、永久に穢土をあとにしてしまつた。今も四人の所化は勿論、近眼鏡をかけた住職は國定教科書を諳誦するやうに提婆品か何かを讀み上げてゐる。

その中に讀經の切れ目へ來ると、校長の佐佐木中將は徐ろに少佐の寢棺の前へ進んだ。白い綸子に蔽はれた棺は丁度須彌壇を正面にして本堂の入り口に安置してある。その又棺の前の机には造花の蓮の花の仄めいたり、蠟燭の炎の靡いたりする中に勳章の箱なども飾つてある。校長は棺に一禮した後、左の手に携へてゐた大奉書の弔辭を繰りひろげた。弔辭は勿論二三日前に保吉の書いた「名文」である。「名文」は格別恥づる所はない。そんな神經はとうの昔、古い革砥のやうに擦り減らされてゐる。唯この葬式の喜劇の中に彼自身も弔辭の作者と云ふ一役を振られてゐることは、――と云ふよりも寧ろさう云ふ事實をあからさまに見せつけられることは兎に角餘り愉快

ではない。保吉は校長の咳拂ひと同時に、思はず膝の上へ目を伏せてしまつた。

　校長は靜かに讀みはじめた。聲はやや錆びを帶びた底に殆ど筆舌を超越した哀切の情をこもらせてゐる。到底他人の作つた弔辭を讀み上げてゐるなどとは思はれない。保吉はひそかに校長の俳優的才能に敬服した。本堂はもとよりひつそりしてゐる。身動きさへ滅多にするものはない。校長は愈沈痛に「君、資性穎悟兄弟に友に」と讀みつづけた。すると突然親族席に誰かくすくす笑ひ出したものがある。のみならずその笑ひ聲はだんだん聲高になつて來るらしい。保吉は内心ぎよつとしながら、藤田大佐の肩越しに向う側の人人を物色した。と同時に場所柄を失した笑ひ聲だと思つたものは泣き聲だつたことを發見した。

　聲の主は妹である。舊式の束髮を俯向けたかげに絹の手巾を顏に當てた器量好しの娘さんである。そればかりではない、弟も——武骨さうに見えた大學生もやはり涙をすすり上げてゐる。と思ふと老人もしつきりなしに鼻紙を出してはしめやかに鼻をかみつづけてゐる。保吉はかう云ふ光景の前にまづ何よりも驚きを感じた。それからまんまと看客を泣かせた悲劇の作者の滿足を感じた。しかし最後に感じたものはそれらの感情よりも遙かに大きい、何とも云はれぬ氣の毒さで

ある。尊い人間の心の奧へ知らず識らず泥足を踏み入れた、あやまるにもあやまれない氣の毒さである。保吉はこの氣の毒さの前に、一時間に亙る葬式中、始めて悄然と頭を下げた。本多少佐の親族諸君はかう云ふ英吉利語の敎師などの存在も知らなかつたのに違ひない。しかし保吉の心の中には道化の服を着たラスコルニコフが一人、七八年たつた今日もぬかるみの往來へ跪いたまま、平に諸君の高免を請ひたいと思つてゐるのである。……

葬式のあつた日の暮れがたである。汽車を降りた保吉は海岸の下宿へ歸る爲、篠垣ばかり連つた避暑地の裏通りを通りかかつた。狹い往來は靴の底にしつとりと砂をしめらせてゐる。靄もういつか下り出したらしい。垣の中に簇つた松は疎らに空を透かせながら、かすかに脂の香を放つてゐる。保吉は頭を垂れたまま、さう云ふ靜かさにも頓着せず、ぶらぶら海の方へ歩いて行つた。

彼は寺から歸る途中、藤田大佐と一しよになつた。すると大佐は彼の作つた弔辭の出來榮えを賞讚した上、「急焉玉碎す」と云ふ言葉は如何にも本多少佐の死にふさはしいなどと云ふ批評を下

した。それだけでも親族の涙を見た保吉を弱らせるには十分である。其處へ又同じ汽車に乘つた愛敬者の田中中尉は保吉の小説を批評してゐる讀賣新聞の月評を示した。月評を書いたのはまだその頃文名を馳せてゐたN氏である。N氏はさんざん罵倒した後、かう保吉に止めを刺してゐた。――「海軍××學校教官の餘技は全然文壇には不必要である」！

半時間もかからずに書いた弔辭は意外の感銘を與へてゐる。が、幾晩も電燈の光りに推敲を重ねた小説はひそかに豫期した感銘の十分の一も與へてゐない。勿論彼はN氏の言葉を一笑に付する餘裕を持つてゐる。しかし現在の彼自身の位置は容易に一笑に付することは出來ない。彼は弔辭には成功し、小説には見事に失敗した。これは彼自身の身になつて見れば、心細い氣のすることは事實である。一體運命は彼の爲にいつかう云ふ悲しい喜劇の幕を下してくれるであらう？……

……

保吉はふと空を見上げた。空には枝を張つた松の中に全然光りのない月が一つ、赤銅色にはつきりかかつてゐる。彼はその月を眺めてゐるうちに小便をしたい氣がし出した。人通りは幸ひ一人もない。往來の左右は不相變ひつそりした篠垣の一列である。彼は右側の垣の下へ長ながと寂

しい小便をした。

するとまだ小便をしてゐるうちに、保吉の目の前の篠垣はぎいと後ろへ引きあけられた。垣だとばかり思つてゐたものは垣のやうに出來た木戸だつたのであらう。その又木戸から出て來たのを見れば、口髭を蓄へた男である。保吉は途方に暮れたから、小便だけはしつづけたまま、出來るだけゆつくり横向きになつた。

「困りますなあ。」

男はぼんやりかう云つた。何だか當惑そのものの人間になつたやうな聲をしてゐる。保吉はこの聲を耳にした時、急に小便も見えないほど日の暮れてゐるのを發見した。

（大正十三年三月）

寒さ

或る雪上りの午前だつた。保吉は物理の教官室の椅子にストオヴの火を眺めてゐた。ストオヴの火は息をするやうに、とろとろと黃色に燃え上つたり、どす黑い灰燼に沈んだりした。それは室內に漂ふ寒さと戰ひつづけてゐる證據だつた。保吉はふと地球の外の宇宙的寒冷を想像しながら、赤あかと熱した石炭に何か同情に近いものを感じた。

「堀川君。」

保吉はストオヴの前に立つた宮本と云ふ理學士の顏を見上げた。近眼鏡をかけた宮本はズボンのポケツトへ手を入れたまま、口髭の薄い脣に人の好い微笑を浮べてゐた。

「堀川君。君は女も物體だと云ふことを知つてゐるかい？」

「動物だと云ふことは知つてゐるが。」

「動物ぢやない。物體だよ。——こいつは僕も苦心の結果、最近發見した眞理なんだがね。」

「堀川さん、宮本さんの云ふことなどを眞面目に聞いてはいけませんよ。」

これはもう一人の物理の教官、――長谷川と云ふ理學士の言葉だつた。保吉は彼をふり返つた。長谷川は保吉の後ろの机に試驗の答案を調べかけたなり、額の禿げ上つた顔中に當惑さうな薄笑ひを漲らせてゐた。

「こりや怪しからん。僕の發見は長谷川君を大いに幸福にしてゐる筈ぢやないか？――堀川君、君は傳熱作用の法則を知つてゐるかい？」

「デンネツ？　電氣の熱か何かかい？」

「困るなあ、文學者は。」

宮本はさう云ふ間にも、火の氣の映つたストオヴの口へ一杯の石炭を浚ひこんだ。

「溫度の異なる二つの物體を互に接觸せしめるとだね、熱は高溫度の物體から低溫度の物體へ、兩者の溫度の等しくなる迄、ずつと移動をつづけるんだ。」

「當り前ぢやないか、そんなことは？」

「それを傳熱作用の法則と云ふんだよ。扨女を物體とするね。好いかい？　もし女を物體とすれ

ば、男も勿論物體だらう。すると戀愛は熱に當る訣だね。今この男女を接觸せしめると、戀愛の傳はるのも傳熱のやうに、より逆上した男からより逆上してゐない女へ、兩者の戀愛の等しくなる迄、ずつと移動をつづける筈だらう。長谷川君の場合などは正にさうだね。……」

「そおら、はじまつた。」

長谷川は寧ろ嬉しさうに、擽られる時に似た笑ひ聲を出した。

「今Sなる面積を通し、T時間内に移る熱量をEとするね。すると――好いかい？　Hは溫度、Xは熱傳導の方面に計つた距離、Kは物質により一定されたる熱傳導率だよ。すると長谷川君の場合はだね。……」

宮本は小さい黑板へ公式らしいものを書きはじめた。が、突然ふり返ると、さもがつかりしたやうに白墨の缺を拋り出した。

「どうも素人の堀川君を相手ぢや、折角の發見の自慢も出來ない。――兎に角長谷川君の許嫁なる人は公式通りにのぼせ出したやうだ。」

「實際さう云ふ公式がありや、世の中は餘つ程樂になるんだが。」

保吉は長ながと足をのばし、ぼんやり窓の外の雪景色を眺めた。この物理の教官室は二階の隅に當つてゐる爲、體操器械のあるグラウンドや、グラウンドの向うの並松や、その又向うの赤煉瓦の建物を一目に見渡すのも容易だつた。海も――海は建物と建物との間に薄暗い波を煙らせてゐた。

「その代りに文學者は上つたりだぜ。――どうだい、この間出した本の賣れ口は？」

「不相變ちつとも賣れないね。作者と讀者との間には傳熱作用も起らないやうだ。――時に長谷川君の結婚はまだなんですか？」

「ええ、もう一月ばかりになつてゐるんですが、――その用もいろいろあるものですから、勉強の出來ないのに弱つてゐます。」

「勉強も出來ないほど待ち遠しいかね。」

「宮本さんぢやあるまいし、第一家を持つとしても、借家のないのに弱つてゐるんです。現にこの前の日曜などにはあらかた市中を歩いて見ました。けれどもたまに明いてゐたと思ふと、ちやんともう約定濟みになつてゐるんですからね。」

「僕の方ぢやいけないですか？　毎日學校へ通ふのに汽車へ乘るのさへかまはなければ。」

「あなたの方ぢや少し遠すぎるんです。あの邊は借家もあるさうですね、家内はあの邊を希望してゐるんですが――おや、堀川さん。靴が焦げやしませんか？」

保吉の靴はいつの間にかストオヴの胴に觸れてゐたと見え、革の焦げる臭氣と共にもやもや水蒸氣を昇らせてゐた。

「それも君、やつぱり傳熱作用だよ。」

宮本は眼鏡を拭ひながら、覺束ない近眼の額ごしににやりと保吉へ笑ひかけた。

× × × × ×

それから四五日たつた後、――或る霜曇りの朝だつた。保吉は汽車を捉へる爲、或る避暑地の町はづれを一生懸命に急いでゐた。路の右は麥畑、左は汽車の線路のある二間ばかりの堤だつた。人つ子一人ゐない麥畑はかすかな物音に充ち滿ちてゐた。それは誰か麥の間を歩いてゐる音としか思はれなかつた、しかし事實は打ち返された土の下にある霜柱のおのづから崩れる音らしかつ

た。

その内に八時の上り列車は長い汽笛を鳴らしながら、餘り速力を早めずに堤の上を通り越した。保吉の捉へる下り列車はこれよりも半時間遲い筈だつた。彼は時計を出して見た。しかし時計はどうしたのか、八時十五分になりかかつてゐた。彼はこの時刻の相違を時計の罪だと解釋した。「けふは乘り遲れる心配はない。」――そんなことも勿論思つたりした。路に隣つた麥畑はだんだん生垣に變り出した。保吉は「朝日」を一本つけ、前よりも氣樂に歩いて行つた。

石炭殼などを敷いた路は爪先上りに踏切りへ出る、――其處へ何氣なしに來た時だつた。保吉は踏切りの兩側に人だかりのしてゐるのを發見した。轢死だなと忽ち考へもした。幸ひ踏切りの柵の側に、荷をつけた自轉車を止めてゐるのは知り合ひの肉屋の小僧だつた。保吉は卷煙草を持つた手に、後ろから小僧の肩を叩いた。

「おい、どうしたんだい？」

「轢かれたんです。今の上りに轢かれたんです。」

小僧は早口にかう云つた。兎の皮の耳袋をした顏も妙に生き生きと赫いてゐた。

「誰が轢かれたんだい？」

「踏切り番です。學校の生徒の轢かれさうになつたのを助けようと思つて轢かれたんです。ほら、八幡前に永井つて本屋があるでせう？　あすこの女の子が轢かれる所だつたんです。」

「その子供は助かつたんだね？」

「ええ、あすこに泣いてゐるのがさうです。」

「あすこ」といふのは踏切りの向う側にゐる人だかりだつた。成程、其處には女の子が一人、巡査に何か尋ねられてゐた。その側には助役らしい男も時時巡査と話したりしてゐた。踏切り番は――保吉は踏切り番の小屋の前に菰をかけた死骸を發見した。それは嫌惡を感じさせると同時に好奇心を感じさせるのも事實だつた。菰の下からは遠目にも兩足の靴だけ見えるらしかつた。

「死骸はあの人たちが持つて行つたんです。」

こちら側のシグナルの柱の下には鐵道工夫が二三人、小さい焚火を圍んでゐた。黄いろい炎をあげた焚火は光も煙も放たなかつた。それだけに如何にも寒さうだつた。工夫の一人はその焚火に半ズボンの尻を炙つてゐた。

保吉は踏切りを通り越しにかかつた。線路は停車場に近い爲、何本も踏切りを横ぎつてゐた。彼はその線路を越える度に、踏切り番の轢かれたのはどの線路だつたらうと思ひ思ひした。が、どの線路だつたかは直に彼の目にも明らかになつた。血はまだ一條の線路の上に二三分前の悲劇を語つてゐた。彼は殆、反射的に踏切の向う側へ目を移した。しかしそれは無效だつた。冷やかに光つた鐵の面にどろりと赤いもののたまつてゐる光景ははつと思ふ瞬間に、鮮かに心へ燒きついてしまつた。のみならずその血は線路の上から薄うすと水蒸氣さへ昇らせてゐた。……

　十分の後、保吉は停車場のプラットフォオムに落着かない歩みをつづけてゐた。彼の頭は今しがた見た、氣味の惡い光景に一ぱいだつた。殊に血から立ち昇つてゐる水蒸氣ははつきり目についてゐた。彼のこの間話し合つた傳熱作用のことを思ひ出した。血の中に宿つてゐる生命の熱は宮本の教へた法則通り、一分一厘の狂ひもなしに刻薄に線路へ傳はつてゐる。その又生命は誰のでも好い、職に殉じた踏切り番でも重罪犯人でも同じやうにやはり刻薄に傳はつてゐる。――さういふ考への意味のないことは彼にも勿論わかつてゐた。孝子でも水には溺れなければならぬ、節婦でも火には燒かれる筈である。――彼はかう心の中に何度も彼自身を說得しようとした。し

かし目のあたりに見た事實は容易にその論理を許さぬほど、重苦しい感銘を殘してゐた。

けれどもプラットフォオムの人人は彼の氣もちとは沒交渉にいづれも、幸福らしい顏をしてゐた。保吉はそれにも苛立たしさを感じた。就中海軍の將校たちの大聲に何か話してゐるのは肉體的に不快だつた。彼は二本目の「朝日」に火をつけ、プラットフォオムの先へ歩いて行つた。其處は線路の二三町先にあの踏切りの見える場所だつた。踏切りの兩側の人だかりもあらかた今は散じたらしかつた。唯、シグナルの柱の下には鐵道工夫の焚火が一點、黃いろい炎を動かしてゐた。

保吉はその遠い焚火に何か同情に似たものを感じた。が、踏切りの見えることはやはり不安には違ひなかつた。彼はそちらに背中を向けると、もう一度人ごみの中へ歸り出した。しかしまだ十歩と歩かないうちに、ふと赤革の手袋を一つ落してゐることを發見した。手袋は卷煙草に火をつける時、右の手ばかり脫いだのを持つて歩いてゐたのだつた。彼は後ろをふり返つた。すると手袋はプラットフォオムの先に、手のひらを上に轉がつてゐた。それは丁度無言のまま、彼を呼びとめてゐるやうだつた。

保吉は霜曇りの空の下に、たつた一つ取り殘された赤革の手袋の心を感じた。同時に薄ら寒い

世界の中にも、いつか溫い日の光のほそぼそとさして來ることを感じた。

（大正十三年四月）

少年

一　クリスマス

昨年のクリスマスの午後、堀川保吉は須田町の角から新橋行の乘合自働車に乘つた。彼の席だけはあつたものの、自働車の中は不相變身動きさへ出來ぬ滿員である。のみならず震災後の東京の道路は自働車を躍らすことも一通りではない。保吉はけふもふだんの通り、ポケットに入れてある本を出した。が、鍛冶町へも來ないうちにとうとう讀書だけは斷念した。この中でも本を讀まうと云ふのは奇蹟を行ふのと同じことである。奇蹟は彼の職業ではない。美しい圓光を頂いた昔の西洋の聖者なるものの、——いや、彼の隣りにゐるカトリック教の宣教師は目前に奇蹟を行つてゐる。

宣教師は何ごとも忘れたやうに小さい横文字の本を讀みつづけてゐる。年はもう五十を越してゐるのであらう、鐵縁のパンス・ネエをかけた、鷄のやうに顏の赤い、短い頰鬚のある佛蘭西人

である。保吉は横目を使ひながら、ちよつとその本を覗きこんだ、Essai sur les……あとは何だか判然しない。しかし內容は兎も角も、紙の黃ばんだ、活字の細かい、到底新聞を讀むやうには讀めさうもない代物である。

保吉はこの宣敎師に輕い敵意を感じたまま、ぼんやり空想に耽り出した。——大勢の小天使は宣敎師のまはりに讀書の平安を護つてゐる。勿論異敎徒たる乘客の中には一人も小天使の見えるものはゐない。しかし五六人の小天使は鍔の廣い帽子の上に、逆立ちをしたり宙返りをしたり、いろいろの曲藝を演じてゐる。と思ふと肩の上へ目白押しに竝んだ五六人も乘客の顏を見廻しながら、天國の常談を云ひ合つてゐる。おや、一人の小天使は耳の穴の中から顏を出した。さう云へば鼻柱の上にも一人、得意さうにパンス・ネエに跨つてゐる。……

自働車の止まつたのは大傳馬町である。同時に乘客は三四人、一度に自働車を降りはじめた。宣敎師はいつか本を膝に、きよろきよろ窓の外を眺めてゐる。すると乘客の降り終るが早いか、十一二の少女が一人、まつ先に自働車へはひつて來た。褪紅色の洋服に空色の帽子を阿彌陀にかぶつた、妙に生意氣らしい少女である。少女は自働車のまん中にある眞鍮の柱につかまつたまま、

兩側の席を見まはした。が、生憎どちら側にも空いてゐる席は一つもない。

「お嬢さん。此處へおかけなさい。」

宣教師は太い腰を起した。言葉は如何にも手に入つた、心もち鼻へかかる日本語である。

「ありがたう。」

少女は宣教師と入れ違ひに保吉の隣りへ腰をかけた。その又「ありがたう」も顏のやうに小ましやくれた抑揚に富んでゐる。保吉は思はず顏をしかめた。由來子供は——殊に少女は二千年前の今月今日、ベツレヘムに生まれた赤兒のやうに清淨無垢のものと信じられてゐる。しかし彼の經驗によれば、子供でも惡黨のない訣ではない。それを悉く神聖がるのは世界に遍滿したセンティメンタリズムである。

「お嬢さんはおいくつですか?」

宣教師は微笑を含んだ眼に少女の顏を覗きこんだ。少女はもう膝の上に毛絲の玉を轉がしたなり、さも一かど編めるやうに二本の編み棒を動かしてゐる。それが眼は油斷なしに編み棒の先を追ひながら、殆ど媚を帶びた返事をした。

「あたし？　あたしは來年十二。」

「けふはどちらへいらつしやるのですか？」

「けふ？　けふはもう家へ歸る所なの。」

自働車はかう云ふ問答の間に銀座の通りを走つてゐる。走つてゐると云ふよりは跳ねてゐると云ふのかも知れない。丁度昔ガリラヤの湖にあらしを迎へたクリストの船にも伯仲するかと思ふ位である。宣教師は後ろへまはした手に眞鍮の柱をつかんだまま、何度も自働車の天井へ脊の高い頭をぶつけさうになつた。しかし一身の安危などは上帝の意志に任せてあるのか、やはり微笑を浮かべながら、少女との問答をつづけてゐる。

「けふは何日だか御存知ですか？」

「十二月二十五日でせう。」

「ええ、十二月二十五日です。十二月二十五日は何の日ですか？　お孃さん、あなたは御存知ですか？」

保吉はもう一度顏をしかめた。宣教師は巧みにクリスト教の傳道へ移るのに違ひない。コオラ

ンと共に劍を執つたマホメット教の傳道はまだしも劍を執つた所に人間同士の尊敬なり情熱なりを示してゐる。が、クリスト教の傳道は全然相手を尊重しない。恰も隣りに店を出した洋服屋の存在を教へるやうに慇懃に神を教へるのである。或はそれでも知らぬ顏をすると、今度は外國語の授業料の代りに信仰を賣ることを勸めるのである。殊に少年や少女などに畫本や玩具を與へる傍ら、ひそかに彼等の魂を天國へ誘拐しようとするのは當然犯罪と呼ばれなければならぬ。保吉の隣りにゐる少女も、――しかし少女は不相變編みものの手を動かしながら、落ち着き拂つた返事をした。

「ええ、それは知つてゐるわ。」

「ではけふは何の日ですか？　御存知ならば云つて御覽なさい。」

少女はやつと宣教師の顏へみづみづしい黑眼勝ちの眼を注いだ。

「けふはあたしのお誕生日。」

保吉は思はず少女を見つめた。少女はもう大眞面目に編み棒の先へ目をやつてゐた。しかしその顏はどう云ふものか、前に思つたほど生意氣ではない。いや、寧ろ可愛い中にも智慧の光りの

遍照した、幼いマリアにも劣らぬ顏である。保吉はいつか彼自身の微笑してゐるのを發見した。

「けふはあなたのお誕生日！」

宣教師は突然笑ひ出した。この佛蘭西人の笑ふ樣子は丁度人の好いお伽噺の中の大男か何かの笑ふやうである。少女は今度はけげんさうに宣教師の顏へ目を擧げた。これは少女ばかりではない。鼻の先にゐる保吉を始め、兩側の男女の乘客は大抵宣教師へ目をあつめた。唯彼等の目にあるものは疑惑でもなければ好奇心でもない。いづれも宣教師の哄笑の意味をはつきり理解した頰笑みである。

「お孃さん。あなたは好い日にお生まれなさいましたね。けふはこの上もないお誕生日です。世界中のお祝ひするお誕生日です。あなたは今に、――あなたの大人になつた時にはですね、あなたはきつと……」

宣教師は言葉につかへたまま、自働車の中を見廻した。同時に保吉と眼を合はせた。宣教師の眼はパンス・ネエの奧に笑ひ淚をかがやかせてゐる。保吉はその幸福に滿ちた鼠色の眼の中にあらゆるクリスマスの美しさを感じた。少女は――少女もやつと宣教師の笑ひ出した理由に氣のつ

いたのであらう、今は多少拗ねたやうにわざと足などをぶらつかせてゐる。
「あなたはきつと賢い奥さんに――優しいお母さんにおなりなさるでせう。ではお孃さん、さやうなら。わたしの降りる所へ來ましたから。では――」
宣敎師は又前のやうに一同の顏を見渡した。自働車は丁度人通りの烈しい尾張町の辻に止まつてゐる。
「では皆さん、さやうなら。」
數時間の後、保吉はやはり尾張町の或バラックのカフエの隅にこの小事件を思ひ出した。あの肥つた宣敎師はもう電燈もともり出した今頃、何をしてゐることであらう？　クリストと誕生日を共にした少女は夕飯の膳についた父や母にけさの出來事を話してゐるかも知れない。保吉も亦二十年前には娑婆苦を知らぬ少女のやうに、或は罪のない問答の前に娑婆苦を忘却した宣敎師のやうに小さい幸福を所有してゐた。大德院の緣日に葡萄餅を買つたのもその頃である。二州樓の大廣間に活動寫眞を見たのもその頃である。……
「本所深川はまだ灰の山ですな。」

「へええ、さうですかねえ。時に吉原はどうしたんでせう？」
「吉原はどうしましたか、――淺草にはこの頃お姫樣の婬賣が出ると云ふことですな。」
隣りのテエブルには商人が二人、かう云ふ會話をつづけてゐる。が、そんなことはどうでも好い。カフエの中央のクリスマスの木は綿をかけた針葉の枝に玩具のサンタ・クロオスだの銀の星だのをぶら下げてゐる。瓦斯煖爐の炎も赤あかとその木の幹を照らしてゐるらしい。けふはお目出たいクリスマスである。「世界中のお祝するお誕生日」である。保吉は食後の紅茶を前に、ぼんやり卷煙草をふかしながら、大川の向うに人となつた二十年前の幸福を夢みつづけた。……
この數篇の小品は一本の卷煙草の煙となる間に、續續と保吉の心をかすめた追憶の二三を記したものである。

二　道の上の祕密

保吉の四歳の時である。彼は鶴と云ふ女中と一しよに大溝の往來へ通りかかつた。黑ぐろと湛へた大溝の向うは後に兩國の停車場になつた、名高い御竹倉の竹藪である。本所七不思議の一つ

に當る狸の莫迦囃子と云ふものはこの藪の中から聞えるらしい。少くとも保吉は誰に聞いたのか、狸の莫迦囃子の聞えるのは勿論、おいてき堀や片葉の葭も御竹倉にあるものと確信してゐた。が、今はこの氣味の惡い藪も狸などは何處かへ逐ひ拂つたやうに、日の光の澄んだ風の中に黄ばんだ竹の秀をそよがせてゐる。

「坊ちやん、これを御存知ですか？」

つうや（保吉は彼女をかう呼んでゐた）は彼を顧みながら、人通りの少い道の上を指した。土埃の乾いた道の上には可也太い線が一すぢ、薄うすと向うへ走つてゐる。保吉は前にも道の上にかう云ふ線を見たやうな氣がした。しかし今もその時のやうに何かと云ふことはわからなかつた。

「何でせう？　坊ちやん、考へて御覽なさい。」

これはつうやの常套手段である。彼女は何を尋ねても、素直に教へたと云ふことはない。必ず一度は嚴格に「考へて御覽なさい」を繰り返すのである。嚴格に――けれどもつうやは母のやうに年をとつてゐた訣でもなんでもない。やつと十五か十六になつた、小さい泣黒子のある小娘である。もとより彼女のかう云つたのは少しでも保吉の教育に力を添へたいと思つたのであらう。彼は

もつうやの親切には感謝したいと思つてゐる。が、彼女もこの言葉の意味をもつとほんたうに知つてゐたとすれば、きつと昔ほど執拗に何にでも「考へて御覽なさい」を繰り返す愚だけは免れたであらう。保吉は爾來三十年間、いろいろの問題を考へて見た。しかし何もわからないことはあの賢いつうやと一しよに大溝の往來を歩いた時と少しも變つてはゐないのである。……

「ほら、こつちにももう一つあるでせう? ねえ、坊ちやん、考へて御覽なさい。このすぢは一體何でせう?」

つうやは前のやうに道の上を指した。成程同じ位太い線が三尺ばかりの距離を置いたまま、土埃の道を走つてゐる。保吉は嚴肅に考へて見た後、とうとうその答を發明した。

「何處かの子がつけたんだらう、棒か何か持つて來て?」

「それでも二本竝んでゐるでせう?」

「だつて二人でつけりや二本になるもの。」

つうやはにやにや笑ひながら、「いいえ」と云ふ代りに首を振つた。保吉は勿論不平だつた。しかし彼女は全知である。云はば Delphi の巫女である。道の上の祕密もとうの昔に看破してゐる

のに違ひない。保吉はだんだん不平の代りにこの二すぢの線に對する驚異の情を感じ出した。
「ぢや何さ、このすぢは？」
「何でせう？　ほら、ずつと向うまで同じやうに二すぢ竝んでゐるでせう？」
實際つうやの云ふ通り、一すぢの線のうねつてゐる時には、向うに横たはつたもう一すぢの線もちやんと同じやうにうねつてゐる。のみならずこの二すぢの線は薄白い道のつづいた向うへ、永遠そのもののやうに通じてゐる。これは一體何の爲に誰のつけた印であらう？　保吉は幻燈の中に映る蒙古の大沙漠を思ひ出した。二すぢの線はその大沙漠にもやはり細ぼそとつづいてゐる。
……………
「よう、つうや、何だつて云へば？」
「まあ、考へて御覽なさい。何か二つ揃つてゐるものですから。――何でせう、二つ揃つてゐるものは？」
つうやもあらゆる巫女のやうに漠然と暗示を與へるだけである。保吉は愈熱心に箸とか手袋とか太鼓の棒とか二つあるものを竝べ出した。が、彼女はどの答にも容易に滿足を表はさない。

唯妙に微笑したぎり、不相變「いいえ」を繰り返してゐる。

「よう、教へておくれよう。ようつてば。つうや。莫迦つうやめ！」

保吉はとうとう癇癪を起した。父さへ彼の癇癪には滅多に戰を挑んだことはない。それはずつと守りをつづけたつうやも亦重重承知してゐるが、彼女はやつとおごそかに道の上の祕密を說明した。

「これは車の輪の跡です。」

これは車の輪の跡です！　保吉は呆氣にとられたまま、土埃の中に斷續した二すぢの線を見まもつた。同時に大沙漠の空想などは蜃氣樓のやうに消滅した。今は唯泥だらけの荷車が一臺、寂しい彼の心の中におのづから車輪をまはしてゐる。……

保吉は未だにこの時受けた、大きい教訓を服膺してゐる。三十年來考へて見ても、何一つ碌にわからないのは寧ろ一生の幸福かも知れない。

三　死

これもその頃の話である。晩酌の膳に向つた父は六兵衛の盞を手にしたまま、何かの拍子にかう云つた。

「とうとうお目出度なつたさうだな、ほら、あの槇町の二絃琴の師匠も。……」

ランプの光は鮮かに黒塗りの膳の上を照らしてゐる。かう云ふ時の膳の上ほど、美しい色彩に溢れたものはない。保吉は未だに食物の色彩――鯔脯だの焼海苔だの酢蠣だの辣薤だのの色彩を愛してゐる。尤も當時愛したのはそれ程品の好い色彩ではない。寧ろ惡どい刺戟に富んだ、生なましい色彩ばかりである。彼はその晩も膳の前に、一摑みの海髪を枕にしたためじの刺身を見守つてゐた。すると微醺を帶びた父は彼の藝術的感興をも物質的欲望と解釋したのであらう、象牙の箸をとり上げたと思ふと、わざと彼の鼻の上へ醬油の匂のする刺身を出した。彼は勿論一口に食つた。それから感謝の意を表する爲、かう父へ話しかけた。

「さつきはよそのお師匠さん、今度は僕がお目出度なつた！」

父は勿論、母や伯母も一時にどつと笑ひ出した。が、必しもその笑ひは機智に富んだ彼の答を了解した爲ばかりでもないやうである。この疑問は彼の自尊心に多少の不快を感じさせた。けれ

ども父を笑はせたのは兎に角大手柄には違ひない。且又家中を陽氣にしたのもそれ自身甚だ愉快である。保吉は忽ち父と一しよに出來るだけ大聲に笑ひ出した。

すると笑ひ聲の靜まつた後、父はまだ微笑を浮べたまま、大きい手に保吉の頸すぢをたたいた。

「お目出度なると云ふことはね、死んでしまふと云ふことだよ。」

あらゆる答は鋤のやうに問の根を斷つてしまふものではない。寧ろ古い問の代りに新らしい問を芽ぐませる木鋏の役にしか立たぬものである。三十年前の保吉も三十年後の保吉のやうに、やつと答を得たと思ふと、今度はその又答の中に新しい問を發見した。

「死んでしまふつて、どうすること?」

「死んでしまふと云ふことはね、ほら、お前は蟻を殺すだらう。……」

父は氣の毒にも丹念に死と云ふものを說明し出した。が、父の說明も少年の論理を固守する彼には少しも滿足を與へなかつた。成程彼に殺された蟻の走らないことだけは確かである。けれどもあれは死んだのではない。唯彼に殺されたのである。死んだ蟻と云ふ以上は格別彼に殺されずとも、ぢつと走らずにゐる蟻でなければならぬ。さう云ふ蟻には石燈籠の下や冬青の木の根もと

にも出合つた覺えはない。しかし父はどう云ふ訣か、全然この差別を無視してゐる。……

「殺された蟻は死んでしまつたのさ。」

「殺されたのは殺されただけぢやないの？」

「殺されたのも死んだのも同じことさ。」

「だつて殺されたのは殺されたつて云ふもの。」

「云つても何でも同じことなんだよ。」

「違ふ。違ふ。殺されたのと死んだのとは同じぢやない。」

「莫迦、何と云ふわからないやつだ。」

父に叱られた保吉の泣き出してしまつたのは勿論である。が、如何に叱られたにしろ、わからないことのわかる道理はない。彼はその後數箇月の間、丁度ひとかどの哲學者のやうに死と云ふ問題を考へつづけた。死は不可解そのものである。殺された蟻は死んだ蟻ではない。それにも關らず死んだ蟻である。この位祕密の魅力に富んだ、摑へ所のない問題はない。保吉は死を考へる度に、或日回向院の境内に見かけた二匹の犬を思ひ出した。あの犬は入り日の光の中に反對の方

角へ顏を向けたまま、一匹のやうにぢつとしてゐた。のみならず妙に嚴肅だつた。死と云ふものもあの二匹の犬と何か似た所を持つてゐるのかも知れない。……

　すると或火ともし頃である。保吉は役所から歸つた父と、薄暗い風呂にはひつてゐた。はひつてゐたとは云ふものの、體などを洗つてゐたのではない。唯胸ほどある据ゑ風呂の中に恐る恐る立つたなり、白い三角帆を張つた帆前船の處女航海をさせてゐたのである。其處へ客か何か來たのであらう、鶴よりも年上の女中が一人、湯氣の立ちこめた硝子障子をあけると、石鹸だらけになつてゐた父へ旦那樣何とかと聲をかけた。父は海綿を使つたまま、「よし、今行く」と返事をした。それから又保吉へ顏を見せながら、「お前はまだはひつてお出。今お母さんがはひるから」と云つた。勿論父のゐないことは格別帆前船の處女航海に差支へを生ずる次第でもない。保吉はちよつと父を見たぎり、「うん」と素直に返事をした。

　父は體を拭いてしまふと、濡れ手拭を肩にかけながら、「どつこいしよ」と太い腰を起した。保吉はそれでも頓着せずに帆前船の三角帆を直してゐた。が、硝子障子のあいた音にもう一度ふと目を擧げると、父は丁度湯氣の中に裸の背中を見せたまま、風呂場の向うへ出る所だつた。父の

髪はまだ白い訣ではない。腰も若いもののやうにまつ直である。しかしさう云ふ後ろ姿はなぜか四歳の保吉の心にしみじみと寂しさを感じさせた。「お父さん」――一瞬間帆前船を忘れた彼は思はずさう呼びかけようとした。けれども二度目の硝子戸の音は靜かに父の姿を隱してしまつた。あとには唯湯の匂に滿ちた薄明りの廣がつてゐるばかりである。

保吉はひつそりした据ゑ風呂の中に茫然と大きい目を開いた。同時に從來不可解だつた死と云ふものを發見した。――死とはつまり父の姿の永久に消えてしまふことである！

四　海

保吉の海を知つたのは五歳か六歳の頃である。尤も海とは云ふものの、萬里の大洋を知つたのではない。唯大森の海岸に狹苦しい東京灣を知つたのである。しかし狹苦しい東京灣も當時の保吉には驚異だつた。奈良朝の歌人は海に寄せる戀を「大船の香取の海に碇おろし如何なる人かもの思はざらん」と歌つた。保吉は勿論戀も知らず、萬葉集の歌などと云ふものはなほ更一つも知らなかつた。が、日の光りに煙つた海の何か妙にもの悲しい神祕を感じさせたのは事實である。

彼は海へ張り出した葭簾張りの茶屋の手すりにいつまでも海を眺めつづけた。海は白じろと赫いた帆かけ船を何艘も浮かべてゐる。長い煙を空へ引いた二本マストの汽船も浮かべてゐる。翼の長い一群の鷗は丁度猫のやうに啼きかはしながら、海面を斜めに飛んで行つた。あの船や鷗は何處から來、何處へ行つてしまふのであらう？　海は唯幾重かの海苔粗朶の向うに青あをと煙つてゐるばかりである。……

けれども海の不可思議を一層鮮かに感じたのは裸になつた父や叔父と遠淺の渚へ下りた時である。保吉は初め砂の上へ靜かに寄せて來るさざ波を怖れた。が、それは父や叔父と海の中へはひりかけたほんの二三分の感情だつた。その後の彼はさざ波は勿論、あらゆる海の幸を享樂した。茶屋の手すりに眺めてゐた海は何處か見知らぬ顏のやうに、珍らしいと同時に無氣味だつた。――しかし干潟に立つて見る海は大きい玩具箱と同じことである。玩具箱！　彼は實際神のやうに海と云ふ世界を玩具にした。蟹や寄生貝は眩ゆい干潟を右往左往に歩いてゐる。浪は今彼の前へ一ふさの海草を運んで來た。あの喇叭に似てゐるのもやはり法螺貝と云ふのであらうか？　この砂の中に隱れてゐるのは淺蜊と云ふ貝に違ひない。……

保吉の享樂は壯大だつた。けれどもかう云ふ享樂の中にも多少の寂しさのなかつた訣ではない。彼は從來海の色を青いものと信じてゐた。兩國の「大平」に賣つてゐる月耕や年方の錦繪をはじめ、當時流行の石版畫の海はいづれも同じやうにまつ青だつた。殊に緣日の「からくり」の見せる黃海の海戰の光景などは黃海と云ふのにも關らず、毒毒しいほど青い浪に白い浪がしらを躍らせてゐた。しかし目前の海の色は――成程目前の海の色も沖だけは青あをと煙つてゐる。が、渚に近い海は少しも青い色を帶びてゐない。正にぬかるみのたまり水と選ぶ所のない泥色をしてゐる。いや、ぬかるみのたまり水よりも一層鮮かな代赭色をしてゐる。彼はこの代赭色の海に豫期を裏切られた寂しさを感じた。しかし又同時に勇敢にも殘酷な現實を承認した。海を青いと考へるのは沖だけ見た大人の誤りである。これは誰でも彼のやうに海水浴をしさへすれば、異存のない眞理に違ひない。海は實は代赭色をしてゐる。バケツの錆に似た代赭色をしてゐる。

三十年前の保吉の態度は三十年後の保吉にもそのまま當嵌る態度である。代赭色の海を承認するのは一刻も早いのに越したことはない。且又この代赭色の海を青い海に變へようとするのは所詮徒勞に畢るだけである。それよりも代赭色の海の渚に美しい貝を發見しよう。海もそのうちに

は沖のやうに一面に青あをとなるかも知れない。が、將來に憧れるよりも寧ろ現在に安住しよう。――保吉は豫言者的精神に富んだ二三の友人を尊敬しながら、しかもなほ心の一番底には不相變ひとりかう思つてゐる。

大森の海から歸つた後、母は何處かへ行つた歸りに「日本昔噺」の中にある「浦島太郎」を買つて來てくれた。かう云ふお伽噺を讀んで貰ふことの樂しみだつたのは勿論である。が、彼はその外にももう一つ樂しみを持ち合せてゐた。それはあり合せの水繪具に一一插繪を彩ることだつた。彼はこの「浦島太郎」にも早速彩色を加へることにした。「浦島太郎」は一册の中に十ばかりの插繪を含んでゐる。彼はまづ浦島太郎の龍宮を去るの圖を彩りはじめた。龍宮は綠の屋根瓦に赤い柱のある宮殿である。乙姫は――彼はちよつと考へた後、乙姫もやはり衣裳だけは一面に赤い色を塗ることにした。浦島太郎は考へずとも好い。漁夫の着物は濃い藍色、腰蓑は薄い黃色である。唯細い釣竿にずつと黃色をなするのは存外彼にはむづかしかつた。蓑龜も毛だけを綠に塗るのは中中なまやさしい仕事ではない。最後に海は代赭色である。バケツの銹に似た代赭色である。――保吉はかう云ふ色彩の調和に藝術家らしい滿足を感じた。殊に乙姫や浦島太郎の顏へ薄赤い色

を加へたのは頗る生動の趣でも傳へたもののやうに信じてゐた。

保吉は匆匆母のところへ彼の作品を見せに行つた。何か縫ものをしてゐた母は老眼鏡の額越しに插繪の彩色へ目を移した。彼は當然母の口から褒め言葉の出るのを豫期してゐた。しかし母はこの彩色にも彼ほど感心しないらしかつた。

「海の色は可笑しいねえ。なぜ青い色に塗らなかつたの?」

「だつて海はかう云ふ色なんだもの。」

「代赭色の海なんぞあるものかね。」

「大森の海は代赭色ぢやないの?」

「大森の海だつてまつ青だあね。」

「ううん、丁度こんな色をしてゐた。」

母は彼の強情さ加減に驚嘆を交へた微笑を洩らした。が、どんなに說明しても、――いや、癇癪を起して彼の「浦島太郎」を引き裂いた後さへ、この疑ふ餘地のない代赭色の海だけは信じなかつた。……

「海」の話はこれだけである。尤も今日の保吉は話の體裁を整へる爲に、もつと小説の結末らしい結末をつけることも困難ではない。たとへば話を終る前に、かう云ふ數行をつけ加へるのである。――「保吉は母との問答の中にもう一つ重大な發見をした。それは誰も代赭色の海には、――人生に横はる代赭色の海にも目をつぶり易いと云ふことである。」

けれどもこれは事實ではない。のみならず滿潮は大森の海にも青い色の浪を立たせてゐる。すると現實とは代赭色の海か、それとも亦青い色の海か？　所詮は我我のリアリズムも甚だ當にならぬと云ふ外はない。かたがた保吉は前のやうな無技巧に話を終ることにした。が、話の體裁は？――藝術は諸君の云ふやうに何よりもまづ内容である。形容などはどうでも差支へない。

五　幻燈

「このランプへかう火をつけて頂きます。」

玩具屋の主人は金屬製のランプへ黄色いマッチの火をともした。それから幻燈の後ろの戸をあけ、そつとそのランプを器械の中へ移した。七歳の保吉は息もつかずに、テエブルの前へ及び腰

になつた主人の手もとを眺めてゐる。綺麗に髪を左から分けた、妙に色の蒼白い主人の手もとを眺めてゐる。時間はやつと三時頃であらう。玩具屋の外の硝子戸は一ぱいに當つた日の光りの中に絶え間のない人通りを映してゐる。が、玩具屋の店の中は――殊にこの玩具の空箱などを無造作に積み上げた店の隅は日の暮の薄暗さと變りはない。保吉は此處へ來た時に何か氣味惡さに近いものを感じた。しかし今は幻燈に――幻燈を映して見せる主人にあらゆる感情を忘れてゐる。いや、彼の後ろに立つた父の存在さへ忘れてゐる。

「ランプを入れて頂きますと、あちらへああ月が出ますから、――」

やつと腰を起した主人は保吉と云ふよりも寧ろ父へ向うの白壁を指し示した。幻燈はその白壁の上へ丁度差渡し三尺ばかりの光りの圓を描いてゐる。柔かに黄ばんだ光りの圓は成程月に似てゐるかも知れない。が、白壁の蜘蛛の巣や埃も其處だけはありありと目に見えてゐる。

「こちらへかう畫をさすのですな。」

かたりと云ふ音の聞えたと思ふと、光りの圓はいつの間にかぼんやりと何か映してゐる。保吉は金屬の熱する匂に一層好奇心を刺戟されながら、ぢつとその何かへ目を注いだ。何か、――ま

だ其處に映つたものは風景か人物かも判然しない。唯僅かに見分けられるのははかない石鹼玉に似た色彩である。いや、色彩の似たばかりではない。この白壁に映つてゐるのはそれ自身大きい石鹼玉である。夢のやうに何處からか漂つて來た薄明りの中の石鹼玉である。

「あのぼんやりしてゐるのはレンズのピントを合せさへすれば――この前にあるレンズですな。――直に御覽の通りはつきりなります。」

主人はもう一度及び腰になつた。と同時に石鹼玉は見る見る一枚の風景畫に變つた。尤も日本の風景畫ではない。水路の兩側に家家の聳えた何處か西洋の風景畫である。時刻はもう日の暮に近い頃であらう。三日月は右手の家家の空にかすかに光りを放つてゐる。その三日月も、家家も、家家の窓の薔薇の花も、ひつそりと湛へた水の上へ鮮かに影を落してゐる。人影は勿論、見渡したところ鷗一羽浮んでゐない。水は唯突當りの橋の下へまつ直に一すぢつづいてゐる。

「イタリヤのベニスの風景でございます。」

三十年後の保吉にヴェネチアの魅力を敎へたのはダンヌンチオの小說である。けれども當時の保吉はこの家家だの水路だのに唯たよりのない寂しさを感じた。彼の愛する風景は大きい丹塗り

の觀音堂の前に無數の鳩の飛ぶ淺草である。或は又高い時計臺の下に鐵道馬車の通る銀座である。それらの風景に比べると、この家家だの水路だのは何と云ふ寂しさに滿ちてゐるのであらう。鐵道馬車や鳩は見えずとも好い。せめては向うの橋の上に一列の汽車でも通つてゐたら、——丁度かう思つた途端である。大きいリボンをした少女が一人、右手に竝んだ窓の一つから突然小さい顏を出した。どの窓かははつきり覺えてゐない。しかし大體三日月の下の窓だつたことだけは確かである。少女は顏を出したと思ふと、更にその顏をこちらへ向けた。それから——遠目にも愛くるしい顏に疑ふ餘地のない頰笑みを浮かべた? が、それは掛け價のない一二秒の間の出來ごとである。思はず「おや」と目を見はつた時には、少女はもういつの間にか窓の中へ姿を隱したのであらう。窓はどの窓も同じやうに人氣のない窓かけを垂らしてゐる。……

「さあ、もう映しかたはわかつたらう?」

父の言葉は茫然とした彼を現實の世界へ呼び戻した。父は葉卷を啣へたまま、退屈さうに後ろに佇んでゐる。玩具屋の外の往來も不相變人通りを絶たないらしい。主人も——綺麗に髮を分けた主人は小手調べをすませた手品師のやうに、妙な蒼白い頰のあたりへ滿足の微笑を漂はせてゐ

る。保吉は急にこの幻燈を一刻も早く彼の部屋へ持つて歸りたいと思ひ出した。……

保吉はその晩父と一しよに蠟を引いた布の上へ、もう一度ヴェネチアの風景を映した。中空の三日月、兩側の家家、家家の窓の薔薇の花を映した一すぢの水路の水の光り、――それは皆前に見た通りである。が、あの愛くるしい少女だけはどうしたのか今度は顏を出さない。窓と云ふ窓はいつまで待つても、だらりと下つた窓かけの後に家家の祕密を封じてゐる。保吉はとうとう待ち遠しさに堪へかね、ランプの具合などを氣にしてゐた父へ歎願するやうに話しかけた。

「あの女の子はどうして出ないの？」

「女の子？　何處かに女の子がゐるのかい？」

父は保吉の問の意味さへ、はつきりわからない樣子である。

「ううん、ゐはしないけれども、顏だけ窓から出したぢやないの？」

「いつさ？」

「玩具屋の壁へ映した時に。」

「あの時も女の子なんぞは出やしないさ。」

「だつて顔を出したのが見えたんだもの。」
「何を云つてゐる？」
父は何と思つたか保吉の額へ手のひらをやつた。それから急に保吉にもつけ景氣とわかる大聲を出した。
「さあ、今度は何を映さう？」
けれども保吉は耳にもかけず、ヴェネチアの風景を眺めつづけた。窓は薄明るい水路の水に靜かな窓かけを映してゐる。しかしいつかは何處かの窓から、大きいリボンをした少女が一人、突然顔を出さぬものでもない。――彼はかう考へると、名狀の出來ぬ懷しさを感じた。同時に從來知らなかつた或る嬉しい悲しさをも感じた。あの畫の幻燈の中にちらりと顔を出した少女は實際何か超自然の靈が彼の目に姿を現はしたのであらうか？　或は又少年に起り易い幻覺の一種に過ぎなかつたのであらうか？　それは勿論彼自身にも解決出來ないのに違ひない。が、兎に角保吉は三十年後の今日さへ、しみじみ塵勞に疲れた時にはこの永久に歸つて來ないヴェネチアの少女を思ひ出してゐる、丁度何年も顔をみない初戀の女人でも思ひ出すやうに。

六　お母さん

八歳か九歳の時か、兎に角どちらかの秋である。陸軍大將の川島は回向院の濡れ佛の石壇の前に佇みながら、味かたの軍隊を檢閲した。尤も軍隊とは云ふものの、味かたは保吉とも四人しかゐない。それも金釦の制服を着た保吉一人を例外に、あとは悉く紺飛白や目くら縞の筒袖を着てゐるのである。

これは勿論國技館の影の境內に落ちる回向院ではない。まだ野分の朝などには鼠小僧の墓のあたりにも銀杏落葉の山の出來る二昔前の回向院である。妙に鄙びた當時の景色——江戸と云ふよりも江戸のはづれの本所と云ふ當時の景色はとうの昔に消え去つてしまつた。しかし唯鳩だけは同じことである。いや、鳩も違つてゐるかも知れない。その日も濡れ佛の石壇のまはりは殆んど鳩で一ぱいだつた。が、どの鳩も今日のやうに小綺麗に見えはしなかつたらしい。「門前の土鳩を友や樒賣り」——かう云ふ天保の俳人の作は必しも回向院の樒賣りをうたつたものとは限らないであらう。それとも保吉はこの句さへ見れば、いつも濡れ佛の石壇のまはりにごみごみ群がつて

ゐた鳩を、――喉の奥にこもる聲に薄日の光りを震はせてゐた鳩を思ひ出さずにはゐられないのである。

鑢屋の子の川島は悠悠と検閲を終つた後、目くら縞の懐ろからナイフだのパチンコだのゴム鞠だのと一しよに一束の畫札を取り出した。これは駄菓子屋に賣つてゐる行軍將棋の畫札である。川島は彼等に一枚づつその畫札を渡しながら、四人の部下を任命(?)した。此處にその任命を公表すれば、桶屋の子の平松は陸軍少將、巡査の子の田宮は陸軍大尉、小間物屋の子の小栗は唯の工兵、堀川保吉は地雷火である。地雷火は惡い役ではない。唯工兵にさへ出合はなければ、大將をも俘に出來る役である。保吉は勿論得意だつた。が、圓まろと肥つた小栗は任命の終るか終らないのに、工兵になる不平を訴へ出した。

「工兵ぢやつまらないなあ。よう、川島さん。あたいも地雷火にしておくれよ、よう。」

「お前はいつだつて俘になるぢやないか?」

川島は眞顔にたしなめた。けれども小栗はまつ赤になりながら、少しも怯まずに云ひ返した。

「噓をついてゐらあ。この前に大將を俘にしたのだつてあたいぢやないか?」

「さうか？　ぢやこの次には大尉にしてやる。」

川島はにやりと笑つたと思ふと、忽ち小栗を懷柔した。保吉は未にこの少年の惡智慧の鋭さに驚いてゐる。川島は小學校も終らないうちに、熱病の爲に死んでしまつた。が、萬一死なずにゐた上、幸ひにも教育を受けなかつたとすれば、少くとも今は年少氣鋭の市會議員か何かになつてゐた筈である。……

「開戰！」

この時から云ふ聲を擧げたのは表門の前に陣取つた、やはり四五人の敵軍である。敵軍はけふも辯護士の子の松本を大將にしてゐるらしい。紺飛白の胸に赤シャツを出した、髮の毛を分けた松本は開戰の合圖をする爲か、高だかと學校帽をふりまはしてゐる。

「開戰！」

畫札を握つた保吉は川島の號令のかかると共に、誰よりも先へ吶喊した。同時に又靜かに群がつてゐた鳩は夥しい羽音を立てながら、大まはりに中ぞらへ舞ひ上つた。それから――それからは未曾有の激戰である。硝煙は見る見る山をなし、敵の砲彈は雨のやうに彼等のまはりへ爆發し

た。しかし味かたは勇敢にぢりぢり敵陣へ肉薄した。尤も敵の地雷火は凄まじい火柱をあげるが早いか、味かたの少將を粉微塵にした。が、敵軍も大佐を失ひ、その次には又保吉の恐れる唯一の工兵を失つてしまつた。これを見た味かたは今までよりも一層猛烈に攻撃をつづけた。――と云ふのは勿論事實ではない。唯保吉の空想に映じた囘向院の激戰の光景である。けれども彼は落葉だけ明るい、もの寂びた境内を驅けまはりながら、ありありと硝煙の匂を感じ、飛び違ふ砲火の閃きを感じた。いや、或時は大地の底に爆發の機會を待つてゐる地雷火の心さへ感じたものである。かう云ふ潑剌とした空想は中學校へはひつた後、いつの間にか彼を見離してしまつた。今日の彼は戰ごつこの中に旅順港の激戰を見ないばかりではない、寧ろ旅順港の激戰の中にも戰ごつこを見てゐるばかりである。しかし追憶は幸ひにも少年時代へ彼を呼び返した。彼はまづ何を措いても、當時の空想を再びする無上の快樂を捉へなければならぬ。――

硝煙は見る見る山をなし、敵の砲彈は雨のやうに彼等のまはりへ爆發した。保吉はその中を一文字に敵の大將へ飛びかかつた。敵の大將は身を躱すと、一散に陣地へ逃げこまうとした。保吉はそれへ追ひすがつた。と思ふと石に躓いたのか、仰向けに其處へ轉んでしまつた。同時に又勇

ましい空想も石鹸玉のやうに消えてしまつた。もう彼は光榮に滿ちた一瞬間前の地雷火ではない。顏は一面に鼻血にまみれ、ズボンの膝は大穴のあいた、帽子も何もない少年である。彼はやつと立ち上ると、思はず大聲に泣きはじめた。敵味方の少年はこの騷ぎに折角の激戰も中止したまま、保吉のまはりへ集まつたらしい。「やあ、負傷した」と云ふものもある。「仰向けにおなりよ」と云ふものもある。「おいらのせゐぢやなあい」と云ふものもある。が、保吉は痛みよりも名狀の出來ぬ悲しさの爲に、二の腕に顏を隱したなり、愈懸命に泣きつづけた。すると突然耳もとに嘲笑の聲を擧げたのは陸軍大將の川島である。

「やあい、お母さんて泣いてゐやがる！」

川島の言葉は忽ちのうちに敵味方の言葉を笑ひ聲に變じた。殊に大聲に笑ひ出したのは地雷火になり損つた小栗である。

「可笑しいな。お母さんて泣いてゐやがる！」

けれども保吉は泣いたにもせよ、「お母さん」などと云つた覺えはない。それを云つたやうに誣ひるのはいつもの川島の意地惡である。――かう思つた彼は悲しさにも增した口惜しさに一ぱい

になつたまま、更に又震へ泣きに泣きはじめた。しかしもう意氣地のない彼には誰一人好意を示すものはゐない。のみならず彼等は口口に川島の言葉を眞似しながら、ちりぢりに何處かへ駈け出して行つた。

「やあい、お母さんつて泣いてゐやがる！」

保吉は次第に遠ざかる彼等の聲を憎み憎み、いつか又彼の足もとへ下りた無數の鳩にも目をやらずに、永い間啜り泣きをやめなかつた。……

保吉は爾來この「お母さん」を全然川島の發明した譃とばかり信じてゐた。處が丁度三年以前、上海へ上陸すると同時に、東京から持ち越したインフルエンザの爲に或病院へはひることになつた。熱は病院へはひつた後も容易に彼を離れなかつた。彼は白い寢臺の上に朦朧とした目を開いたまま、蒙古の春を運んで來る黃沙の凄じさを眺めたりしてゐた。すると或蒸暑い午後、小說を讀んでゐた看護婦は突然椅子を離れると、寢臺の側へ步み寄りながら、不思議さうに彼の顏を覗きこんだ。

「あら、お目覺になつていらつしやるんですか？」

「どうして?」

「だつて今お母さんつて仰有つたぢやありませんか?」

保吉はこの言葉を聞くが早いか、回向院の境内を思ひ出した。川島も或は意地の悪い譃をついたのではなかつたかも知れない。

(大正十三年四月)

文放古

これは日比谷公園のベンチの下に落ちてゐた西洋紙に何枚かの文放古である。わたしはこの文放古を拾つた時、わたしは自身のポケットから落ちたものとばかり思つてゐた。が、後に出して見ると、誰か若い女へよこした、やはり誰か若い女の手紙だつたことを發見した。わたしのかう云ふ文放古に好奇心を感じたのは勿論である。のみならず偶然目についた箇所は餘人は知らずわたし自身には見逃しのならぬ一行だつた。――「芥川龍之介と來た日には大莫迦だわ。」――!

わたしは或批評家の云つたやうに、わたしの「作家的完成を棒にふるほど懷疑的」である。就中わたし自身の愚には誰よりも一層懷疑的である。「芥川龍之介と來た日には大莫迦だわ!」何と云ふお轉婆らしい放言であらう。わたしは心頭に發した怒火を一生懸命に抑へながら、兎に角一應は彼女の論據に點檢を加へようと決心した。下に揭げるのはこの文放古を一字も改めずに寫したものである。

「……あたしの生活の退屈さ加減はお話にも何にもならない位よ。何しろ九州の片田舍でせう。芝居はなし、展覽會はなし、(あなたは春陽會へいらしつて? 入らしつたら、今度知らせて頂戴。あたしは何だか去年よりもずつと好ささうな氣がしてゐるの) 音樂會はなし、講演會はなし、何處へ行つて見るつて處もない始末なのよ。おまけにこの市の智識階級はやつと德富蘆花程度なのね。きのふも女學校の時のお友達に會つたら、今時分やつと有島武郎を發見した話をするんぢやないの? そりやあなた、情ないものよ。だからあたしも世間並みに、裁縫をしたり、割烹をやつたり、妹の使ふオルガンを彈いたり、一度讀んだ本を讀み返したり、家にばかりぼんやり暮らしてゐるの。まああなたの言葉を借りればアンニュイそれ自身のやうな生活だわね。

「それだけならばまだ好いでせう。其處へ又時時親戚などから結婚問題を持つて來るのよ。やれ縣會議員の長男だとか、やれ鑛山持ちの甥だとか、寫眞ばかりももう十枚ばかり見たわ。さうさう、その中には東京に出てゐる中川の息子の寫眞もあつてよ。いつかあなたに敎へて上げたでせう。あのカフエの女給か何かと大學の中を歩いてゐた、――あいつも秀才で通つてゐるのよ。好

い加減人を莫迦にしてゐるぢやないの？　だからあたしはさう云つてやるのよ。「あたしも結婚しないとは云ひません。けれども結婚する時には誰の評價を信頼するよりも先にあたし自身の評價を信頼します。その代りに將來の幸不幸はあたし一人責任を負ひますから」つて。

「けれどももう來年になれば、弟も商大を卒業するし、妹も女學校の四年になるでせう。それやこれやを考へて見ると、あたし一人結婚しないつてことはどうもちよつとむづかしいらしいの。東京ぢやそんなことは何でもないのね。それをこの市ぢや理解もなしに、さも弟だの妹だのの結婚を邪魔でもする爲に片づかずにゐるやうに考へるんでせう。さう云ふ惡口を云はれるのはずゐぶんあなた、たまらないものよ。

「そりやあたしはあなたのやうにピアノを教へることも出來ないんだし、いづれは結婚する外に仕かたのないことも知つてゐるわ。けれどもどう云ふ男とでも結婚する訣には行かないぢやないの？　それをこの市ぢや何かと云ふと、『理想の高い』せゐにしてしまふのよ。『理想の高い』！　理想つて言葉にさへ氣の毒だわね。この市ぢや夫の候補者の外には理想つて言葉を使はないんですもの。その又候補者の御立派なことつたら！　そりやあなたに見せたい位よ。ちよつと一例を擧

げて見せうか？　縣會議員の長男は銀行か何かへ出てゐるのよ。それが大のピュリタンなの。ピュリタンなのは好いけれども、お屠蘇も碌に飲めない癖に、禁酒會の幹事をしてゐるんですつて。もともと下戸に生まれたんなら、禁酒會へはひるのも可笑しいぢやないの？　それでも御當人は大眞面目に禁酒演說なんぞをやつてゐるんですつて。

「尤も候補者は一人殘らず低能兒ばかりつて訣でもないのよ。兩親の一番氣に入つてゐる電燈會社の技師なんぞは兎に角教育のある青年らしいの。顏もちよつと見た所はクライスラアに似てゐるわね。この山本つて人は感心に社會問題の研究をしてゐるんですつて。けれど藝術だの哲學だのには全然興味のない人なのよ。おまけに道樂は大弓と浪花節とだつて云ふんぢやないの？　それでもさすがに浪花節だけは好い趣味ぢやないと思つてゐたんでせう。あたしの前ぢや浪花節のなの字も云はずにすましてゐたの。處がいつかあたしの蓄音機へガリ・クルチやカルソウをかけて聞かせたら、うつかり『虎丸はないんですか？』つてお里を露はしてしまつたのよ。まだもつと可笑しいのはあたしの家の二階へ上ると、最勝寺の塔が見えるんでせう。その又塔の霞の中に九輪だけ光らせてゐる所は與謝野晶子でも歌ひさうなのよ。それを山本つて人の遊びに來た時に、

『山本さん。塔が見えるでせう?』つて教へてやつたら、『ああ、見えます。何メエトル位ありますかなあ』つて眞面目に首をひねつてゐるの。低能兒ぢやないつて云つたけれども、藝術的にはまあ低能兒だわね。

「さう云ふ點のわかつてゐるのは文雄つてあたしの從兄なのよ。これは永井荷風だの谷崎潤一郎だのを讀んでゐるの。けれども少し話し合つて見ると、やつぱり田舍の文學通だけにどこか見當が違つてゐるのね。たとへば「大菩薩峠」なんぞも一代の傑作だと思つてゐるのよ。そりやまだ好いにしても、評判の遊蕩兒と來てゐるんでせう。その爲に何でも父の話ぢや、禁治産か何かになりさうなんですつて。だから兩親もあたしの從兄には候補者の資格を認めてゐないの。唯從兄の父親だけは——つまりあたしの叔父だわね。叔父だけは嫁に貰ひたいのよ。それも表向きには云はれないものだから、内内あたしへ當つて見るんでせう。その又言ひ草が好いぢやないの? 「お前さんにでも來て貰へりや、あいつの極道もやみさうだから」ですつて。親つてみんなさう云ふものか知ら? それにしてもずゐぶん利己主義者たわね。つまり叔父の考へにすりや、あたしは主婦と云ふよりも、從兄の遊蕩をやめさせる道具に使はれるだけなんですもの。ほんたうに憫れ

返つてものも云はれないわ。

「かう云ふ結婚難の起るにつけても、しみじみあたしの考へることは日本の小說家の無力さ加減だわね。敎育を受けた、向上した、その爲に敎養の乏しい男を夫に選ぶことは困難になつた、——かう云ふ結婚難に遇つてゐるのはきつとあたし一人ぎりぢやないわ。日本中何處にもゐる筈だわ。けれども日本の小說家は誰もかう云ふ結婚難に惱んでゐる女性を書かないぢやないの？　ましてかう云ふ結婚難を解決する道を敎へないぢやないの？　そりや結婚したくなければ、しないのに越したことはない訣だわね。それでも結婚しないとすれば、たとひこの市にゐるやうに莫迦莫迦しい非難は浴びないにしろ、自活だけは必要になつて來るでせう。處があたしたちの受けてゐるのは自活に緣のない敎育ぢやないの？　あたしたちの習つた外國語ぢや家庭敎師も勤まらないし、あたしたちの習つた編物ぢや下宿代も滿足に拂はれはしないわ。するとやつぱり輕蔑する男と結婚する外はないことになるわね。あたしはこれはありふれたやうでも、ずゐぶん大きい悲劇だと思ふの。（實際又ありふれてゐるとすれば、それだけになほ更恐ろしいぢやないの？）名前は結婚つて云ふけれども、ほんたうは賣笑婦に身を賣るのと少しも變つてはゐないと思ふの。

「けれどもあなたはあたしと違つて、立派に自活して行かれるんでせう。その位羨ましいことはありはしないわ。いいえ、實はあなた所ぢやないのよ。きのふ母と買ひものに行つたら、あたしよりも若い女が一人、邦文タイプライタアを叩いてゐたの。あの人さへあたしに比べれば、どの位仕合せだらうと思つたりしたわ。さうさう、あなたは何よりもセンティメンタリズムが嫌ひだつたわね。ぢやもう詠歎はやめにして上げるわ。……

「それでも日本の小説家の無力さ加減だけは攻撃させて頂戴。あたしはかう云ふ結婚難を解決する道を求めながら、一度讀んだ本を讀み返して見たの。けれどもあたしたちの代辯者は譃のやうに一人もゐないぢやないの？　倉田百三、菊池寛、久米正雄、武者小路實篤、里見弴、佐藤春夫、吉田絃二郎、野上彌生、——一人殘らず盲目なのよ。さう云ふ人たちはまだ好いとしても、芥川龍之介と來た日には大莫迦だわ。あなたは『六の宮の姫君』つて短篇を讀んではいらつしやらなくつて？（作者曰く、京傳三馬の傳統に忠實ならんと欲するわたしはこの機會に廣告を加へなければならぬ。『六の宮の姫君』は短篇集『春服』に收められてゐる。發行書肆は東京春陽堂である）作者はその短篇の中に意氣地のないお姫樣を罵つてゐるの。まあ熱烈に意志しないものは罪人より

も卑しいと云ふらしいのね。だつて自活に縁のない教育を受けたあたしたちはどの位熱烈に意志したにしろ、實行する手段はないんでせう。お姫様もきつとさうだつたと思ふわ。それを得意さうに罵つたりするのは作者の不見識を示すものぢやないの？　あたしはその短篇を讀んだ時ほど、芥川龍之介を輕蔑したことはないわ。……」

　この手紙を書いた何處かの女は一知半解のセンティメンタリストである。かう云ふ述懷をしてゐるよりも、タイピストの學校へはひる爲に驅落ちを試みるに越したことはない。わたしは大莫迦と云はれた代りに、勿論彼女を輕蔑した。しかし又何か同情に似た心もちを感じたのも事實である。彼女は不平を重ねながら、しまひにはやはり電燈會社の技師か何かと結婚するであらう。結婚した後はいつの間にか世間並みの細君に變るであらう。浪花節にも耳を傾けるであらう。最勝寺の塔も忘れるであらう。豚のやうに子供を產みつづけ――わたしは机の抽斗の奧へばたりとこの文放古を抛りこんだ。其處にはわたし自身の夢も、古い何本かの手紙と一しよにそろそろもう色を黃ばませてゐる。……

（大正十三年四月）

桃太郎

一

むかし、むかし、大むかし、或深い山の奥に大きい桃の木が一本あつた。大きいとだけではいひ足りないかも知れない。この桃の枝は雲の上にひろがり、この桃の根は大地の底の黄泉の國にさへ及んでゐた。何でも天地開闢の頃ほひ、伊弉諾の尊は黄最津平阪に八つの雷を却ける爲、桃の實を礫に打つたといふ、——その神代の桃の實はこの木の枝になつてゐたのである。

この木は世界の夜明以來、一萬年に一度花を開き、一萬年に一度實をつけてゐた。花は眞紅の衣蓋に黄金の流蘇を垂らしたやうである。實は——實も亦大きいのはいふを待たない。が、それよりも不思議なのはその實は核のある處に美しい赤兒を一人づつ、おのづから孕んでゐたことである。

むかし、むかし、大むかし、この木は山谷を掩つた枝に、累累と實を綴つたまま、靜かに日の

光りに浴してゐた。一萬年に一度結んだ實は一千年の間は地へ落ちない。しかし或寂しい朝、運命は一羽の八咫鴉になり、さつとその枝へおろして來た。と思ふともう赤みのさした、小さい實を一つ啄み落した。實は雲霧の立ち昇る中に遙か下の谷川へ落ちた。谷川は勿論峯々の間に白い水煙をなびかせながら、人間のゐる國へ流れてゐたのである。

この赤兒を孕んだ實は深い山の奥を離れた後、どういふ人の手に拾はれたか？――それは今更話すまでもあるまい。谷川の末にはお婆さんが一人、日本中の子供の知つてゐる通り、柴刈りに行つたお爺さんの着物か何かを洗つてゐたのである。……

二

桃から生れた桃太郎は鬼が島の征伐を思ひ立つた。思ひ立つた訣はなぜかといふと、彼はお爺さんやお婆さんのやうに、山だの川だの畑だのへ仕事に出るのがいやだつたせゐである。その話を聞いた老人夫婦は内心この腕白ものに愛想をつかしてゐた時だつたから、一刻も早く追ひ出したさに旗とか太刀とか陣羽織とか、出陣の支度に入用のものは云ふなり次第に持たせることにし

た。のみならず途中の兵糧には、これも桃太郎の註文通り、黍團子さへこしらへてやつたのである。

桃太郎は意氣揚揚と鬼が島征伐の途に上つた。すると大きい野良犬が一匹、饑ゑた眼を光らせながら、かう桃太郎へ聲をかけた。

「桃太郎さん。桃太郎さん。お腰に下げたのは何でございます?」

「これは日本一の黍團子だ。」

桃太郎は得意さうに返事をした。勿論實際は日本一かどうか、そんなことは彼にも怪しかつたのである。けれども犬は黍團子と聞くと、忽ち彼の側へ歩み寄つた。

「一つ下さい。お伴しませう。」

桃太郎は咄嗟に算盤を取つた。

「一つはやられぬ。半分やらう。」

犬は少時强情に、「一つ下さい」を繰り返した。しかし桃太郎は何といつても「半分やらう」を撤回しない。かうなればあらゆる商賣のやうに、所詮持たぬものは持つたものの意志に服從するば

かりである。犬もとうとう嘆息しながら、黍團子を半分貰ふ代りに、桃太郎の伴をすることになつた。

桃太郎はその後犬の外にも、やはり黍團子の半分を餌食に、猿や雉を家來にした。しかし彼等は殘念ながら、あまり仲の好い間がらではない。丈夫な牙を持つた犬は意氣地のない猿を莫迦にする。黍團子の勘定に素早い猿は尤もらしい雉を莫迦にする。地震學などにも通じた雉は頭の鈍い犬を莫迦にする。——かういふいがみ合ひを續けてゐたから、桃太郎は彼等を家來にした後も、一通り骨の折れることではなかつた。

その上猿は腹が張ると、忽ち不服を唱へ出した。どうも黍團子の半分位では、鬼が島征伐の伴をするのも考へ物だといひ出したのである。すると犬は吠えたけりながら、いきなり猿を嚙み殺さうとした。もし雉がとめなかつたとすれば、猿は蟹の仇打ちを待たず、この時もう死んでゐたかも知れない。しかし雉は犬をなだめながら猿に主從の道德を敎へ、桃太郎の命に從へと云つた。それでも猿は路ばたの木の上に犬の襲擊を避けた後だつたから、容易に雉の言葉を聞き入れなかつた。その猿をとうとう得心させたのは確に桃太郎の手腕である。桃太郎は猿を見上げた儘、日

の丸の扇を使ひ使ひわざと冷かにいひ放した。
「よしよし、では伴をするな。その代り鬼が島を征伐しても、寶物は一つも分けてやらないぞ。」
慾の深い猿は圓い眼をした。
「寶物？　へえ、鬼が島には寶物があるのですか？」
「あるどころではない。何でも好きなものの振り出せる打出の小槌といふ寶物さへある。」
「ではその打出の小槌から、幾つも又打出の小槌を振り出せば、一度に何でも手にはひる訣ですね。それは耳よりな話です。どうかわたしもつれて行つて下さい。」
桃太郎はもう一度彼等を伴に、鬼が島征伐の途を急いだ。

三

鬼が島は絶海の孤島だつた。が、世間の思つてゐるやうに岩山ばかりだつた訣ではない。實は椰子の聳えたり、極樂鳥の囀つたりする、美しい天然の樂土だつた。かういふ樂土に生を享けた鬼は勿論平和を愛してゐた。いや、鬼といふものは元來我我人間よりも享樂的に出來上つた種族

らしい。瘤取りの話に出て來る鬼は一晩中踊りを踊つてゐる。一寸法師の話に出て來る鬼も一身の危險を顧みず、物詣での姫君に見とれてゐたらしい。成程大江山の酒顚童子や羅生門の茨木童子は稀代の惡人のやうに思はれてゐる。しかし茨木童子などは我我の銀座を愛するやうに朱雀大路を愛する餘り、時時そつと羅生門へ姿を露はしたのではないであらうか？、酒顚童子も大江山の岩屋に酒ばかり飲んでゐたのは確である。その女人を奪つて行つたといふのは――眞僞は少時問はないにもしろ、女人自身のいふ所に過ぎない。女人自身のいふ所を悉く眞實と認めるのは、――わたしはこの二十年來、かういふ疑問を抱いてゐる。あの賴光や四天王はいづれも多少氣違ひじみた女性崇拜家ではなかつたであらうか？

　鬼は熱帶的風景の中に琴を彈いたり踊りを踊つたり、古代の詩人の詩を歌つたり、頗る安穩に暮らしてゐた。その又鬼の妻や娘も機を織つたり、酒を釀したり、蘭の花束を拵へたり、我我人間の妻や娘と少しも變らずに暮らしてゐた。殊にもう髮の白い、牙の脫けた鬼の母はいつも孫の守りをしながら、我我人間の恐ろしさを話して聞かせなどしてゐたものである。――

「お前たちも惡戲をすると、人間の島へやつてしまふよ。人間の島へやられた鬼はあの昔の酒顚

童子のやうに、きつと殺されてしまふのだからね。え、人間といふものかい？　人間といふものは角の生えない、生白い顏や手足をした、何ともいはれず氣味の惡いものだよ。おまけに又人間の女と來た日には、その生白い顏や手足へ一面に鉛の粉をなすつてゐるのだよ。それだけならばまだ好いのだがね。男でも女でも同じやうに、譃はいふし、慾は深いし、燒餠は燒くし、己惚は強いし、仲間同志殺し合ふし、火はつけるし、泥棒はするし、手のつけやうのない毛だものなのだよ……」

四

桃太郎はかういふ罪のない鬼に建國以來の恐ろしさを與へた。鬼は金棒を忘れたなり、「人間が來たぞ」と叫びながら、亭々と聳えた椰子の間を右往左往に逃げ惑つた。

「進め！　進め！　鬼といふ鬼は見つけ次第、一匹も殘らず殺してしまへ！」

桃太郎は桃の旗を片手に、日の丸の扇を打ち振り打ち振り、犬猿雉の三匹に號令した。犬猿雉の三匹は仲の好い家來ではなかつたかも知れない。が、饑ゑた動物ほど、忠勇無雙の兵卒の資格

を具へてゐるものはない筈である。彼等は皆あらしのやうに、逃げまはる鬼を追ひまはした。犬は唯一嚙みに鬼の若者を嚙み殺した。雉も鋭い嘴に鬼の子供を突き殺した。猿も——猿は我我人間と親類同志の間がらだけに、鬼の娘を絞殺す前に、必ず凌辱を恣にした。……

あらゆる罪悪の行はれた後、とうとう鬼の酋長は、命をとりとめた數人の鬼と、桃太郎の前に降參した。桃太郎の得意は思ふべしである。鬼が島はもう昨日のやうに、極樂鳥の囀る樂土ではない。椰子の林は至る處に鬼の死骸を撒き散らしてゐる。桃太郎はやはり旗を片手に、三匹の家來を從へたまま、平蜘蛛のやうになつた鬼の酋長へ嚴かにかういひ渡した。

「では格別の憐愍により、貴樣たちの命は赦してやる。その代りに鬼が島の寶物は一つも殘らず獻上するのだぞ。」

「はい、獻上致します。」

「なほその外に貴樣の子供を人質の爲にさし出すのだぞ。」

「それも承知致しました。」

鬼の酋長はもう一度額を土へすりつけた後、恐る恐る桃太郎へ質問した。

「わたくしどもはあなた樣に何か無禮でも致した爲、御征伐を受けたことと存じて居ります。しかし實はわたくしを始め、鬼が島の鬼はあなた樣にどういふ無禮を致したのやら、とんと合點が參りませぬ。就いてはその無禮の次第をお明し下さる訣には參りますまいか？」

桃太郎は悠然と頷いた。

「日本一の桃太郎は犬猿雉の三匹の忠義者を召し抱へた故、鬼が島へ征伐に來たのだ。」

「ではそのお三かたをお召し抱へなすつたのはどういふ訣でございますか？」

「それはもとより鬼が島を征伐したいと志した故、黍團子をやつても召し抱へたのだ。――どうだ？　これでもまだわからないといへば、貴樣たちも皆殺してしまふぞ。」

鬼の酋長は驚いたやうに、三尺ほど後へ飛び下ると、愈〻又丁寧にお時儀をした。

五

日本一の桃太郎は犬猿雉の三匹と、人質に取つた鬼の子供に寶物の車を引かせながら、得得と故郷へ凱旋した。――これだけはもう日本中の子供のとうに知つてゐる話である。しかし桃太郎

は必ずしも幸福に一生を送つた訣ではない。鬼の子供は一人前になると番人の雉を嚙み殺した上、忽ち鬼が島へ逐電した。のみならず鬼が島に生き殘つた鬼は時時海を渡つて來ては、桃太郎の屋形へ火をつけたり、桃太郎の寢首をかかうとした。何でも猿の殺されたのは人違ひだつたらしいといふ噂である。桃太郎はかういふ重ね重ねの不幸に嘆息を洩らさずにはゐられなかつた。

「どうも鬼といふものの執念の深いのには困つたものだ。」

「やつと命を助けて頂いた御主人の大恩さへ忘れるとは怪しからぬ奴等でございます。」

犬も桃太郎の澁面を見ると、口惜しさうにいつも唸つたものである。

その間も寂しい鬼が島の磯には、美しい熱帶の月明りを浴びた鬼の若者が五六人、鬼が島の獨立を計畫する爲、椰子の實に爆彈を仕こんでゐた。優しい鬼の娘たちに戀をすることさへ忘れたのか、默默と、しかし嬉しさうに茶碗ほどの目の玉を赫かせながら。……

六

人間の知らない山の奧に雲霧を破つた桃の木は今日もなほ昔のやうに、累累と無數の實をつけ

てゐる。勿論桃太郎を孕んでゐた實だけはとうに谷川を流れ去つてしまつた。しかし未來の天才はまだそれらの實の中に何人とも知らず眠つてゐる。あの大きい八咫鴉は今度は何時この木の梢へもう一度姿を露はすであらう？　ああ、未來の天才はまだそれらの實の中に何人とも知らず眠つてゐる。……

（大正十三年六月）

十圓札

或曇つた初夏の朝、堀川保吉は悄然とプラットフォオムの石段を登つて行つた。と云つても格別大したことではない。彼は唯ズボンのポケットの底に六十何錢しか金のないことを不愉快に思つてゐたのである。

當時の堀川保吉はいつも金に困つてゐた。英吉利語を教へる報酬は僅かに月額六十圓である。片手間に書いてゐる小說は「中央公論」に載つた時さへ、九十錢以上になつたことはない。尤も一月五圓の間代に一食五十錢の食料の拂ひはそれだけでも確かに間に合つて行つた。のみならず彼の洒落れるよりも寧ろ己惚れるのを愛してゐたことは、——少くともその經濟的意味を重んじてゐたことは事實である。しかし本を讀まなければならぬ。埃及の煙草も吸はなければならぬ。音樂會の椅子にも坐らなければならぬ。友だちの顏も見なければならぬ。友だち以外の女人の顏も、——兎に角一週に一度づつは必ず東京へ行かなければならぬ。かう云ふ生活慾に驅られてゐた彼

は勿論原稿料の前借をしたり、父母兄弟に世話を焼かせたりした。それでもまだ金の足りない時には赤い色硝子の軒燈を出した、人出入の少い土藏造りの家へ大きい畫集などを預けることにした。が、前借の見込みも絶え、父母兄弟とも喧嘩をした今は、――いや、今はそれ所ではない。この紀元節に新調した十八圓五十錢のシルク・ハットさへとうにもう彼の手を離れてゐる。……

……

保吉は人のこみ合つたプラットフォオムを歩きながら、光澤の美しいシルク・ハットをありありと目の前に髣髴した。シルク・ハットは圓筒の胴に土藏の窓明りを仄めかせてゐる。その又胴は窓の外に咲いた泰山木の花を映してゐる。……しかしふと指に觸れたズボンの底の六十何錢かは忽ちその夢を打ち壞した。今日はまだやつと十何日かである。二十八日の月給日に堀川教官殿と書いた西洋封筒を受け取るのには彼是二週間も待たなければならぬ。が、彼の樂しみにしてゐた東京へ出かける日曜日はもうあしたに迫つてゐる。彼はあしたは長谷や大友と晩飯を共にするつもりだつた。こちらにないスコットの油畫具やカンヴァスも仕入れるつもりだつた。フロイライン・メルレンドルフの演奏會へも顏を出すつもりだつた。けれども六十何錢かの前には東京行

それ自身さへあきらめなければならぬ。「明日よ、ではさやうなら」である。……
保吉は憂鬱を紛らせる爲に卷煙草を一本啣へようとした。が、手をやつたポケットの中には生憎一本も殘つてゐない。彼は愈惡意のある運命の微笑を感じながら、待合室の外に足を止めた物賣りの前へ歩み寄つた。綠いろの鳥打帽をかぶつた、薄い痘痕のある物賣りはいつも唯つまらなさうに、頸へ吊つた箱の中の新聞だのキャラメルだのを眺めてゐる。これは一介の商人ではない。我々の生命を阻害する否定的精神の象徵である。保吉はこの物賣りの態度に、今日も――と言ふよりも寧ろ今日はぢつとしてはゐられぬ苛立たしさを感じた。
「朝日をくれ給へ。」
「朝日？」
物賣りは不相變目を伏せたまま、非難するやうに問ひ返した。
「新聞ですか？　煙草ですか？」
保吉は眉間の震へるのを感じた。
「ビイル！」

物賣りはさすがに驚いたやうに保吉の顏へ目を注いだ。

「朝日ビイルはありません。」

保吉は溜飮を下げながら、物賣りを後ろに歩き出した。しかし其處へ買ひに來た朝日は、——朝日などはもう吸はずとも好い。忌いましい物賣りを一蹴したのはハヴアナを吸つたのよりも愉快である。彼はズボンのポケットの底の六十何錢かも忘れたまま、プラットフォオムの先へ歩いて行つた。丁度ワグラムの一戰に大勝を博したナポレオンのやうに。……

岩とも泥とも見當のつかぬ、灰色をなすつた斷崖は高だかと曇天に聳えてゐる。その又斷崖のてつぺんは草とも木とも見當のつかぬ、白茶けた綠を煙らせてゐる。保吉はこの斷崖の下をぼんやり一人歩いて行つた。三十分汽車に搖られた後、更に又三十分足らず砂埃りの道を歩かせられるのは勿論永久の苦痛である。苦痛？——いや、苦痛ではない。惰力の法則はいつの間にか苦痛といふ意識さへ奪つてしまつた。彼は毎日無感激にこの退屈そのものに似た斷崖の下を歩いてゐ

る。地獄の業苦を受くることは必しも我々の悲劇ではない。我々の悲劇は地獄の業苦を業苦と感ぜずにゐることである。彼はかう云ふ悲劇の外へ一週に一度づつ躍り出してゐた。が、ズボンのポケットの底に六十何錢しか殘つてゐない今は、……

「お早う。」

突然聲をかけたのは首席教官の粟野さんである。粟野さんは五十を越してゐるであらう。色の黒い、近眼鏡をかけた、幾分か猫背の紳士である。由來保吉の勤めてゐる海軍の學校の教官は時代を超越した紺サアヂ以外に、如何なる背廣をも着たことはない。粟野さんもやはり紺サアヂの背廣に新らしい麥藁帽をかぶつてゐる。保吉は丁寧にお時儀をした。

「お早うございます。」

「大分蒸すやうになりましたね。」

「お孃さんは如何ですか？　御病氣のやうに聞きましたが、……」

「難有う。やつと昨日退院しました。」

粟野さんの前に出た保吉は別人のやうに慇懃である。これは少しも虚禮ではない。彼は粟野さ

んの語學的天才に頗る敬意を抱いてゐる。行年十六の粟野さんは羅甸語のシイザアを敎へてゐた。今も勿論英吉利語を始め、いろいろの近代語に通じてゐる。保吉はいつか粟野さんのAsino――ではなかつたかも知れない、が、兎に角そんな名前の伊太利語の本を讀んでゐるのに少からず驚嘆した。しかし敬意を抱いてゐるのは語學的天才の爲ばかりではない。粟野さんは如何にも長者らしい寛厚の風を具へてゐる。保吉は英吉利語の敎科書の中に難解の個所を發見すると、必ず粟野さんに敎はりに出かけた。難解の、――尤も時間を節約する爲に、時には辭書を引いて見ずに敎はりに出かけたこともない訣ではない。が、かう云ふ場合には粟野さんに對する禮儀上、當惑の風を裝ふことに全力を盡したのも事實である。粟野さんはいつも易やすと彼の疑問を解決した。しかし餘り無造作に解決出來る場合だけは、――保吉は未だにはつきりと一思案を裝つた粟野さんの僞善的態度を覺えてゐる。粟野さんは保吉の敎科書を前に、火の消えたパイプを啣へたまま、いつもちよつと沈吟した。それから恰も卒然と天上の默示でも下つたやうに、「これはかうでせう」と呼びかけながら、一氣にその個所を解決した。保吉はこの芝居の爲に、――この語學的天才よりも寧ろ僞善者たる敎へぶりの爲に、どの位粟野さんを尊敬したであらう。……

「あしたはもう日曜ですね。この頃もやつぱり日曜にや必ず東京へお出かけですか？」

「ええ、――いいえ、明日は行かないことにしました。」

「どうして？」

「實はその――貧乏なんです。」

「常談でせう。」

栗野さんはかすかに笑ひ聲を洩らした。やや鳶色の口髭のかげにやつと犬齒の見える位、遠慮深さうに笑つたのである。

「君は何しろ月給の外に原稿料もはひるんだから、莫大の收入を占めてゐるんでせう。」

「常談でせう」と言つたのは今度は相手の保吉である。それも栗野さんの言葉よりは遙かに眞劍に言つたつもりだつた。

「月給は御承知の通り六十圓ですが、原稿料は一枚九十錢なんです。假に一月に五十枚書いても、僅かに五九四十五圓ですね。其處へ小雜誌の原稿料は六十錢を上下してゐるんですから……」

保吉は忽ち熱心に如何に賣文に糊口することの困難であるかを辯じ出した。辯じ出したばかり

ではない。彼の生來の詩的情熱は見る見る又それを誇張し出した。日本の戲曲家や小說家は、――殊に彼の友だちは慘憺たる窮乏に安んじなければならぬ。長谷正雄は酒の代りに電氣ブランを飲んでゐる。大友雄吉も妻子と一しよに三疊の二階を借りてゐる。松本法城も、――松本法城は結婚以來、少し樂に暮らしてゐるかも知れない。しかしついこの間迄はやはり燒鳥屋へ出入してゐた。……

「Appearances are deceitful ですかね。」

粟野さんは常談とも眞面目ともつかずに、かう煮え切らない相槌を打つた。

道の兩側はいつの間にか、ごみごみした町家に變つてゐる。塵埃りにまみれた飾り窓と廣告の剝げた電柱と、――市と云ふ名前はついてゐても、都會らしい色彩は何處にも見えない。殊に大きいギャントリイ・クレエンの瓦屋根の空に横はつてゐたり、その又空に黑い煙や白い蒸氣の立つてゐたりするのは戰慄に價する凄じさである。保吉は麥藁帽の庇の下にかう云ふ景色を眺めながら、彼自身意識して誇張した賣文の悲劇に感激した。同時に平生尊重する痩せ我慢も何も忘れたやうに、今も片手を突こんでゐたズボンの中味を吹聽した。

「實は東京へ行きたいんですが六十何錢しかない始末なんです。」

保吉は教官室の机の前に教科書の下調べにとりかかつた。が、ジャットランドの海戰記事などはふだんでも愉快に讀めるものではない。殊に今日は東京へ行きたさに業を煮やしてゐる時である。彼は英語の海語辭典を片手に一頁ばかり目を通した後、憂鬱に又ポケットの底の六十何錢かを考へはじめた。……

十一時半の教官室はひつそりと人音を絶やしてゐる。十人ばかりの教官も粟野さん一人を殘したまま、悉授業に出て行つてしまつた。粟野さんは彼の机の向うに、――と云つても二人の机を隔てた、殺風景な書棚の向うに全然姿を隠してゐる。しかし薄蒼いパイプの煙は粟野さんの存在を證明するやうに、白壁を背にした空間の中へ時々かすかに立ち昇つてゐる。窓の外の風景もやはり靜かさには變りはない。曇天にこぞつた若葉の梢、その向うに續いた鼠色の校舍、その又向うに薄光つた入江、――何も彼も何處か汗ばんだ、もの憂い靜かさに沈んでゐる。

保吉は巻煙草を思ひ出した。が、忽ち物賣りに竹篦返しを食はせた後、すつかり巻煙草を貰ふことを忘れてゐたのを發見した。巻煙草も吸はれないのは悲慘である。悲慘？——或は悲慘ではないかも知れない。衣食の計に追はれてゐる窮民の苦痛に比べれば、六十何錢かを歎ずるのは勿論贅澤の沙汰であらう。けれども苦痛そのものは窮民も彼も同じことである。いや、寧ろ窮民よりも鋭い神經を持つてゐる彼は一層の苦痛を嘗めなければならぬ。窮民は、——必しも窮民と言はずとも好い。語學的天才たる粟野さんはゴッホの向日葵にも、ウォルフのリイドにも、乃至はヴェルアアランの都會の詩にも頗る冷淡に出來上つてゐる。かう云ふ粟野さんに藝術のないのは犬に草のないのも同然であらう。しかし保吉に藝術のないのは驢馬に草のないのも同然である。六十何錢かは堀川保吉に精神的饑渴の苦痛を與へた。けれども粟野廉太郎には何の痛痒をも與へないであらう。

「堀川君。」

パイプを啣へた粟野さんはいつの間にか保吉の目の前へ來てゐる。來てゐるのは格別不思議ではない。が、禿げ上つた額にも、近眼鏡を透かした目にも、短かに刈り込んだ口髭にも、……多

少の誇張を敢てすれば、脂光りに光つたパイプにも、殆ど女人の嬌羞に近い間の悪さの見えるのは不思議である。保吉は呆氣にとられたなり、少時は「御用ですか？」とも何とも言はずに、この處子の態を帶びた老教官の顏を見守つてゐた。

「堀川君、これは少しですが、……」

粟野さんはてれ隱しに微笑しながら、四つ折に折つた十圓札を出した。

「これはほんの少しですが、東京行の汽車賃に使つて下さい。」

保吉は大いに狼狽した。ロックフェラアに金を借りることは一再ならず空想してゐる。しかし粟野さんに金を借りることはまだ夢にも見た覺えはない。のみならず咄嗟に思ひ出したのは今朝滔々と粟野さんに賣文の悲劇を辯じたことである。彼はまつ赤になつたまま、しどろもどろに言ひ訣をした。

「いや、實は小遣ひは、――小遣ひはないのに違ひないんですが、――東京へ行けばどうかなりますし、――第一もう東京へは行かないことにしてゐるんですから。……」

「まあ、取つてお置きなさい。これでも無いよりはましですから。」

「實際必要はないんです。難有うございますが、……」

栗野さんはちよつと當惑さうに啣へてゐたパイプを離しながら、四つ折の十圓札へ目を落した。が、忽ち目を擧げると、もう一度金緣の近眼鏡の奧に嬌羞に近い微笑を示した。

「さうですか？　ぢや又、――御勉强中失禮でした。」

栗野さんはどちらかと言へば借金を斷られた人のやうに、十圓札をポケットへ收めるが早いか、そこそこ辭書や參考書の竝んだ書棚の向うへ退却した。あとには又力のない、何處かかすかに汗ばんだ沈默ばかり殘つてゐる。保吉はニッケルの時計を出し、そのニッケルの蓋の上に映つた彼自身の顏へ目を注いだ。いつも平常心を失つたなと思ふと、厭でも鏡中の彼自身を見るのは十年來の彼の習慣である。尤もニッケルの時計の蓋は正確に顏を映す筈はない。小さい圓の中の彼の顏は全體に頗る朦朧とした上、鼻ばかり非常にひろがつてゐる。幸ひにそれでも彼の心は次第に落着きを取り戾しはじめた。同時に又次第に栗野さんの好意を無にした氣の毒さを感じはじめた。栗野さんは十圓札を返されるよりも、寧ろ欣然と受け取られることを滿足に思つたのに違ひない。それを突き返したのは失禮である。のみならず、――

保吉はこの「のみならず」の前につむじ風に面するたじろぎを感じた。のみならず窮状を訴へた後、恩惠を斷るのは卑怯である。義理人情は蹂躙しても好い。卑怯者になるだけは避けなければならぬ。しかし金を借りることは、――少くとも金を借りたが最後、二十八日の月給日迄返されないことは確かである。彼は原稿料の前借などはいくらたまつても平氣だつた。けれども粟野さんに借りた金を二週間以上返さずにゐるのは乞食になるよりも不愉快である。……

十分ばかり逡巡した後、彼は時計をポケットへ收め、殆ど喧嘩を吹つかけるやうに昂然と粟野さんの机の側へ行つた。粟野さんは今日も煙草の罐、灰皿、出席簿、萬年糊などの整然と竝んだ机の前に、パイプの煙を靡かせたまま、悠々とモリス・ルブランの探偵小説を讀み耽つてゐる。が、保吉の來たのを見ると、教科書の質問とでも思つたのか、探偵小説をとざした後、靜かに彼の顏へ目を擡げた。

「粟野さん。さつきのお金を拜借させて下さい。どうもいろいろ考へて見ると、拜借した方が好いやうですから。」

保吉は一息にかう言つた。粟野さんは何とも返事をせずに立ち上つたやうに覺えてゐる。しか

しどう云ふ顔をしたか、それは目にもはひらなかつたらしい。爾來七八年を閲した今日、保吉の僅かに覺えてゐるのは大きい粟野さんの右の手の彼の目の前へ出たことだけである。或はその手の指の先に（ニコテインは太い第二指の爪を何と云ふ黄色に染めてゐたであらう！）四つ折に折られた十圓札が一枚、それ自身嬌羞を帶びたやうに怯づ怯づ差し出されてゐたことだけである。……

……

保吉は明後日の月曜日に必ずこの十圓札を粟野さんに返さうと決心した。もう一度念の爲に繰り返せば、正にこの一枚の十圓札である。と言ふのは他意のある訣ではない。前借の見込みも全然絶え、父母兄弟とも喧嘩をした今、たとへ東京へ出かけたにもせよ、金の出來ないことは明らかである。すると十圓を返す爲にはこの十圓札を保存しなければならぬ。この十圓札を保存する爲には、――保吉は薄暗い二等客車の隅に發車の笛を待ちながら、今朝よりも一層痛切に六十何錢かのばら錢に交つた一枚の十圓札を考へつづけた。

今朝よりも一層痛切に、——しかし今朝よりも憂鬱にではない。今日は唯金のないことを不愉快に思ふばかりだつた。けれども今はその外にもこの一枚の十圓札を返さなければならぬと云ふ道德的興奮を感じてゐる。道德的？——保吉は思はず顏をしかめた。いや、斷じて道德的ではない。彼は唯粟野さんの前に彼自身の威嚴を保ちたいのである。尤も威嚴を保つ所以は借りた金を返すより外に存在しないと云ふ訣ではない。もし粟野さんも藝術を、——少くとも文藝を愛したとすれば、作家堀川保吉は一篇の傑作を著はすことに威嚴を保たうと試みたであらう。もし又粟野さんも我々のやうに一介の語學者に外ならなかつたとすれば、敎師堀川保吉は語學的素養を示すことに威嚴を保つことも出來た筈である。が、藝術に興味のない、語學的天才たる粟野さんの前にはどちらも通用する筈はない。すると保吉は厭でも應でも社會人たる威嚴を保たなければならぬ。即ち借りた金を返さなければならぬ。かう云ふ手數をかけてまでも、無理に威嚴を保たうとするのは或は滑稽に聞えるかも知れない。しかし彼はどう云ふ訣か、誰よりも特に粟野さんの前に、——あの金緣の近眼鏡をかけた、幾分か猫背の老紳士の前に彼自身の威嚴を保ちたいのである。……

その内に汽車は動き出した。いつか曇天を崩した雨はかすかに青んだ海の上に何隻も軍艦を煙らせてゐる。保吉は何かほつとしながら、二三人しか乘客のゐないのを幸ひ、長ながとクッションの上に仰向けになつた。すると忽ち思ひ出したのは本郷の或雜誌社である。この雜誌社は一月ばかり前に寄稿を依頼する長手紙をよこした。しかしこの雜誌社から發行する雜誌に憎惡と侮蔑とを感じてゐた彼は未だにその依頼に取り合はずにゐる。ああ云ふ雜誌社に作品を賣るのは娘を賣笑婦にするのと選ぶ所はない。けれども今になつて見ると、多少の前借の出來さうなのは僅かにこの雜誌社一軒である。もし多少の前借でも出來れば、——

彼はトンネルからトンネルへはひる車中の明暗を見上げたなり、如何に多少の前借の享樂を與へるかを想像した。あらゆる藝術家の享樂は自己發展の機會である。自己發展の機會を捉へることは人天に恥づる振舞ではない。これは二時三十分には東京へはひる急行車である。多少の前借を得る爲にはこのまま東京迄乘り越せば好い。五十圓の、——少くとも三十圓の金さへあれば、久しぶりに長谷や大友と晩飯を共にも出來る筈である。フロイライン・メルレンドルフの音樂會へも行かれる筈である。カンヴァスや畫の具も買はれる筈である。いや、それ所ではない。たつ

た一枚の十圓札を必死に保存せずとも好い筈である。が、萬一前借の出來なかつた時には、――その時はその時と思はなければならぬ。元來彼は何の爲に一粟野廉太郎の前に威嚴を保ちたいと思ふのであらう？　粟野さんは成程君子人かも知れない。けれども保吉の內生命には、――彼の藝術的情熱には畢に路傍の行人である。その路傍の行人の爲に自己發展の機會を失ふのは、――畜生、この論理は危險である！

保吉は突然身震ひをしながら、クッションの上に身を起した。今も亦トンネルを通り拔けた汽車は苦しさうに煙を吹きかけ吹きかけ、雨交りの風に戰ぎ渡つた靑芒の山峽を走つてゐる。……

翌日の日曜日の日暮れである。保吉は下宿の古籐椅子の上に悠々と卷煙草へ火を移した。彼の心は近頃にない滿足の情に溢れてゐる。溢れてゐるのは偶然ではない。第一に彼は十圓札を保存することに成功した。第二に或出版書肆は今しがた受取つた手紙の中に一冊五十錢の彼の著書の五百部の印稅を封入してよこした。第三に――最も意外だつたのはこの事件である。第三に下宿

は晩飯の膳に鹽燒の鮎を一尾つけた！
初夏の夕明りは軒先に垂れた葉櫻の枝に漂つてゐる。點々と櫻の實をこぼした庭の砂地にも漂つてゐる。保吉のセルの膝の上に載つた一枚の十圓札にも漂つてゐる。彼はその夕明りの中にしみじみこの折目のついた十圓札へ目を落した。鼠色の唐艸や十六菊の中に朱の印を押した十圓札は不思議にも美しい紙幣である。楕圓形の中の肖像も愚鈍の相は帶びてゐるにもせよ、ふだん思つてゐたほど俗惡ではない。裏も、――品の好い綠に茶を配した裏は表よりも一層見事である。これほど手垢さへつかずにゐたらば、このまま額緣の中へ入れても――いや、手垢ばかりではない。何か大きい10の上に細かいインクの樂書もある。彼は靜かに十圓札を取り上げ、口の中にその文字を讀み下した。
「ヤスケニシヨウカ」
保吉は十圓札を膝の上へ返した。それから庭先の夕明りの中へ長ながと卷煙草の煙を出した。この一枚の十圓札もかう云ふ樂書の作者には唯酢にでもするかどうかを迷はせただけに過ぎたかつたのであらう。が、廣い世の中にはこの一枚の十圓札の爲に悲劇の起つたこともあるかも知れ

ない。現に彼も昨日の午後はこの一枚の十圓札の上に彼の魂を賭けてゐたのである。しかしもうそれはどうでも好い。彼は兎に角粟野さんの前に彼自身の威嚴を全うした。五百部の印税も月給日迄の小遣ひに當てるのには十分である。

「ヤスケニシヨウカ」

保吉はかう呟いたまま、もう一度しみじみ十圓札を眺めた。丁度昨日踏破したアルプスを見返へるナポレオンのやうに。

（大正十三年八月）

昭和十年六月一日印刷
昭和十年六月五日發行

芥川龍之介全集第四卷

著作者　芥川龍之介

發行者　岩波茂雄
東京市神田區一ツ橋二丁目三番地

印刷者　白井赫太郎
東京市神田區錦町三丁目十一番地

印刷所　精興社
東京市神田區錦町三丁目十一番地

發行所　岩波書店
東京市神田區一ツ橋二丁目三番地
電話九段(33)一八七・一八八番
一八九・一八〇番
振替口座東京七四四一六番

(大森製本)